

鹿児島県史料集(4)

薩藩名勝志（その三）

刊行のことば

県史料集の刊行は、郷土資料の保存を図るとともに、地方史の研究や県民の文化向上に役立てる
ことを目的としております。

今回は、鹿児島県史料集第四十四集として「薩藩名勝志（その二）」を刊行することになります
た。

本書は、平成十四年度から刊行している「薩藩名勝志」の最終号であり、薩藩名勝志のうち巻之十
(薩摩郡)から巻之十九(諸縣郡)までを掲載した史料集です。現在の曾於、肝属、姶良・伊佐地区、
高崎郡都城市・小林市等の名勝地や寺社などを、豊富な絵図を添えて紹介した史料となっています。
この史料集を一昨年度から引き続き御執筆くださいました前鹿児島県立加治木高等学校校長の古元
正幸氏が原稿完成半ばにして他界されましたが、残りの部分の執筆や校正を、姶良町歴史民俗資
料館長の塩満郁夫氏にお願いいたしました。

古元正幸氏の御冥福を心からお祈りいたしますとともに、この資料が郷土史の研究に大いに役立
てられるよう期待いたします。

平成十七年二月

鹿児島県立図書館長

田中昌平

例 (二)

- 本文科集には、鹿児島県立図書館所蔵の薩摩名勝志のうち卷之十一から卷之十九を収載した。
- 一 県立図書館本で省略されている絵図部分については、鹿児島大学附属図書館所蔵の玉里文庫本により補充収載した。収載の便宜を与えて下さった鹿児島大学に謝意を表する。
- 二 漢字については常用漢字に改めたものも少なくない。また、変体仮名はすべて通用体の平仮名に改めた。
- 三 諸字、脱字、脱文等については、玉里文庫本により適宜修正・補充した。
- 五 難読の漢字について一部玉里文庫本の読みにならいこみ仮名を付した。
- 六 本文には讀音、讀古等を付した。

薩藩名勝志

卷之十一

薩藩名勝志卷之十一 目録

嶋嶼郡

氣色森
石休宮
弥勒堂
正國寺
大己貴神社
高塚山神
稻荷神社
奈木森
守君神
伊勢人神社
旧庭の藤
國分寺
新城
霧島權現

正八幡宮

弥勒院

王興寺

正高寺

拍子川

早鐘神社

住吉崎

枝之宮

久満崎神社

韓岡神社

奈木森

守君神

伊勢人神社

旧庭の藤

鉢の峰
税所社
多宝塔
龜石坂
御手洗川
鎮守堂
華林寺
止上権現
念仏寺
洞瀬山
古祥院

御仮殿
本應堂
風穴
香堂
而度川
小鹿野瀧
夕暮の閑

人波池
御佛殿
本應堂
風穴
香堂
而度川
小鹿野瀧
夕暮の閑

大隅国

大隅ハ古昔日向國の郡名と見えたり、統日本紀云、人皇四十三代元明帝和銅六年癸丑四月乙未日向國肝坏贈於大隅始禪四郡を割て大隅國を置モゾクシノオサホスミアヒラ（本林今子原、弊後今那岐作）ミツナシ十六代孝謙帝天平勝宝七年五月丁丑大隅麥刈村をもて一郡となし、また桑原郡を置年曆行か五十二代淳和帝天長元年九月熊毛馭謀二郡を加へ八郡となす松波郡等八人領
内海にある島にて益多毛もて而麻等となりしを此時島を有して大隅國の郡とせられしと見へり、周廻凡壹百拾五里拾它町四拾間余、正保中究る所ハ壹百里式拾七町なり

贈縣郡坂口奈名及の近頃武等既於之作る、安名多事跡に有る、今僕名跡に餘る國分

氣色森 府中村にあり府中村ハ舊小川村の枝村也、上古太宰の府を迷われしゆへ府中といふをつた

地頭仮屋小川才を距ること巾方凡拾五町、和歌名所集にのせて古歌多し、氣色と名付し由詳かならず、松杉楠櫟森々たる中に社

あり葛津一郎又初め此森ハ岸面川の隈にあり寛永二年之初夏岸崩れ流れしゆへ今の地に社

を遷し森をも栽たりといひたふ、地頭喜入大炊久加社頭を造立し木像を安置し家久

公歌道御増進之為也と書置けり久加ハ御茶名難を手なり、外西川ハ享保年中に川第をなをして当姓と名す、森の近源今之佐庭口若町奈ト之に號といふ所不取とてあり」といへり

文中前大史河野通古奈毛木の杜見んとてゆきたりし時齡八旬はかりなる翁のいひしハ、けしきのもりは奈毛木の森の枝と伝へたりをほちか童なりし比、洪水になかれしを名木の跡絶さしと里人栽置こわつかなる森此川のむかへ杉村のうちに見えたりと語りし

よし嶋原紀行に記す、即今の所なるへし、
又一説にこの森ハ天神七代の神にて大満宮
にハあらすといへり、是によれハさきにや
翁の語りし奈木の森の枝といひしもよし
なき伝へにもあらす、按するに天神社とて
占き叢祠のありしを今地に遷されし比誤
りて天満白在天神の木像を安置せしも知ら
れす

千載秋上

侍賢門院堀川

秋の来る氣色の杜のした風に立そふもの
ハあはれ成けり

新古今夏

後京極攝政大政大臣

秋ちかき氣色の杜になく蟬のなみたの露
や下葉そむらん

続古今夏

従二位成實

同十

後京極

夕す、み身にしむばかり成にけり秋の氣
色のもりの下風

同秋下

左近中将教長

みるまゝに移ろひにけり時雨行氣色のも
りの秋のもみち葉

玉葉秋

兵部卿有教

うつりゆく氣色の森の下紅葉秋きにけり
とみゆる色かな

新続古今春上

前大納言重資

稍にはをそきみとりを先ミせて春のけし
きの森の下くさ

夫木三

小弁

春のくるけしきの森の下蕨をりしれると
やもじ渡るらん

下くさに露おき初て秋のくるけゝきのも
りに蟬の啼こゑ

にしむ山おろしのかせ

同

同

三品

同廿二

願徳院

明わたる氣色の森に立鷺の上けもふかく
雪はふりつゝ

冬きぬる氣色の杜の村しぐれ染し木の葉
をまたきそひけり

同

公縕

新葉 妙法院内大臣

鳴ぬへき氣色の杜の村雨に忍ひもあへぬ

ほとゝきす哉

方与集

中務

名所方角抄 我為はつらき心も大隅のけゝきの杜のさ
もしるき哉

千首

為尹

此歌名所松葉集に誰為につらき心は大
隅のとあり、下に入丸とするす

月にはふ氣色の杜のほとゝきすいかにつ
れなき音をもをしまし

十五百番調合

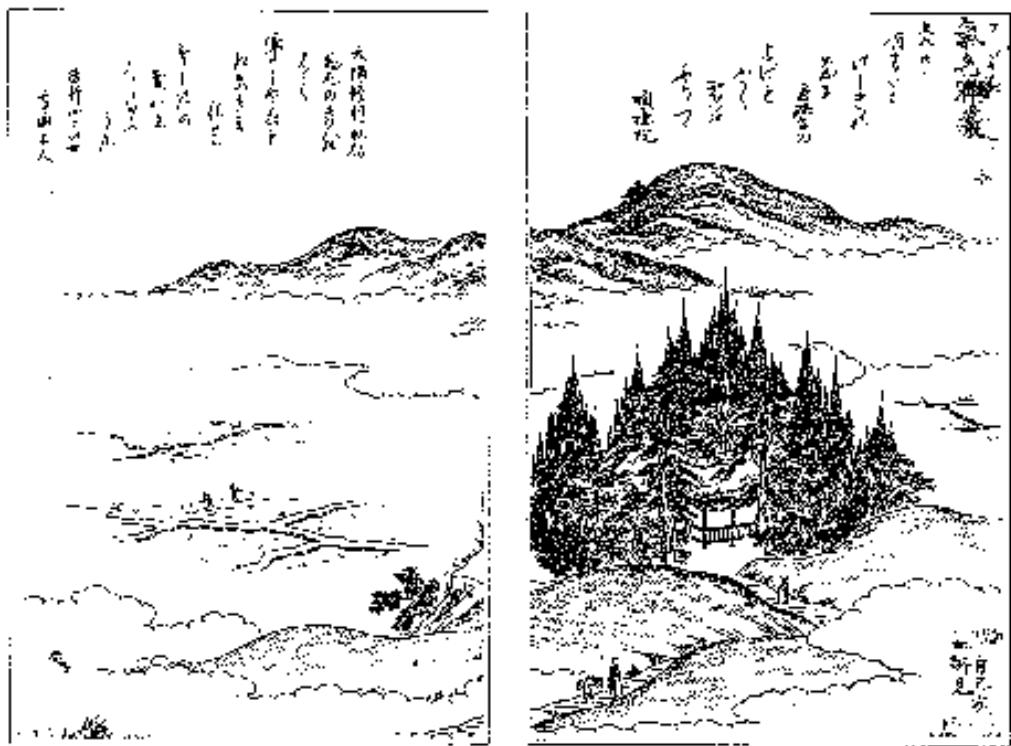
良平

百首讀譯

清水谷前中納言賞業

けふよりハ秋の氣色の杜なれハややかて身

露もさそ置きさるらし口にそひて染るけ



しきの杜の木木は

新題林新上

素然

おりくのこ、ろうつしてなかむるやか
はるけしきのもりの春秋

同

夕つく日なきてりそふや秋ふかき氣色の

杜の木々の紅葉は

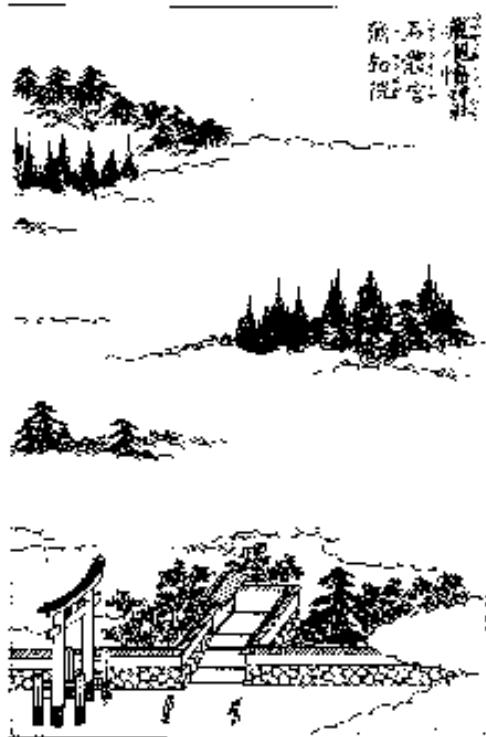
大飴修行の砌氣色の杜を見て

遊行四十四世尊通上人

詠めはや花も紅葉も春秋のけしきの森の
名にしおふらん

正八幡宮 内村に鎮座内村ハ桑原郡ニ有テ 地頭板屋
を距ること成方凡壱半、祭神四座喜火々出見尊也
神乃主、祭半日、一月三日元日同百日御祖耶二月上旬月下旬月古
六日六月廿九日七月廿九日十月九月廿九日十一月十二日十二月
十八日 延喜式神名帳に桑原郡一座大庭鬼島神
社と載れしハ当社のことなり、初め彦火々
出見尊彦火々出見主 を祭りて神武帝の勧請のよし社伝あり、人皇三十代欽明帝五年鹿児島神社の宝殿に八流の幡顯座ましく、けるより八幡宮と崇め応神仲哀神功の三神会祭す、其根元ハ石体宮なり是神主位ハ欽明
帝二年御座云 八幡垂跡の最初にして大隅州、宮なり、往古勅使奉幣ありて放生大会を行れしことみえたり今正祭の時ベにて白の形を満り彩色を加へて風ものとす、參詣の人皆是を買ふこれ放生会の風氣なりといひつたる 百五代後柏原院大永年中筑紫五所の八幡を山城国北山庄に遷し祭り給ひし其一なり是を五所八幡
の別ニシテ有ス

頭造營の後火災七ヶ度に及び就中大永七年
丁亥十一月廿八日兵火の為に炎上し宝器尽
く灰燼となる、故に邦君ノゾミコ・日秀上人に
命して邦内に勸化をなし古のことく再興し
知定坊の住僧を京都に遣し神体を彫刻し百
七代止親町院の叡覽に備へ繪白をうけて当
国に下着し永禄二年庚申十二月十三日遷宮
の規式を行い給ふ、且種々の神具及び獅子
駒等の文飾をも改め金襴の幡二十五流白銀
の幣一本を寄進し給ひ神威ますます新たな
り、時に梅岳公南無八幡大菩薩の七字を冠
りにして十一首を詠し奉納し給ふ





大鐘の鐘樓の大鐘ハ文和四年乙未孟夏掛る所の銘あり

石体宮 本宮の廿寅方數町樹林中にあり、

この石八幡の正体なりといひ伝ふ、往古豊前州宇佐の宮の神官等此事を信せず三使を遣して是を焼かしむ、何れの歳を詳かにせず四月三日米りてこれを焼石体たちまち訛裂して中ニ正八幡の文字あらハれたり。一説曰是を燒けるにさる姫をさむだ言ひて正八幡の文字の形をなし發口をへて語りきといふ、またの二説考に則る云々ハ芋芋をきふことをふむ。是の二使おほきに恐怖して逃帰る、一人ハ立ところに死し一人ハ途中に死し一人ハ宇佐に至りて死す、ミナ神罰を蒙れりとそ今に至りて其顕ハれたる文字昭然として石面に存在せりといひ伝ふれとも深く是を秘して漫りに押することを得ず、世はるかに

くたりて介口光僧の徒出てその好む所に隨ひみたりに説を作るにて邪誕妖妄の言口にさかむに月にはひこりいはれなき浮屠氏の説など附会し愚民をたらすもの多し、いと淺まし

鷲峰山靈鷲山寺弥勒院

正八幡宮の内にあり、

天台宗武州東觀山の末にして正八幡宮別當寺なり、初め寂性空開基なりといへども廢に及びて由来伝ハラス、邦君淨國公致仕の後享保八年の歲再興し給ひ田を寄附し給ふ

弥勒堂 弥勒院のならひにあり弥勒仏を安置す、弥勒院格護なり、

雲鷲山正興寺 内村にあり地頭板屋の戊方凡三拾壹町、臨濟宗五山派京都建仁寺の末にして開山仏智円応禪師^{正徳三年七月廿四日歿}本尊釈迦如來坐像是六尺九寸赤磨石、^{坐高一尺八寸五分}作當寺ハ正八幡宮本地所なり、^{坐高一尺八寸五分}一世坦然和尚^{嘉和四年歲子}開基にて円応は勸請開山なり

梅靈山無量壽院正國寺

内山町村にあり地頭坂屋の中西方を里会、律宗南都西大寺の末

にして開山円秀和尚^{西人吉道上人也}本尊阿彌陀如來

當寺は正八幡宮本地所なり、山緒書を記るに八十九代龜山荒勅官によて異城襲来逆徒追伐を祈り天下泰平国家安全の為に南

都西大寺興正菩薩に命ぜられ一国に一寺を建立あり隅州の其一寺なるよしいひ伝ふと記せり、中古までハ当村の原口といへる所



にありて其所を止宮の戒壇所となつて八月十五日演説くたりの時神輿を爰に安鎮し放生会のことありしとなり。當き昔よりの本所御戒壇事に尼姑凡てされどこととゞたり。今去神事施行年式はありある。しりて今に旧寺地に四天王多門天持四天の石像及び五重の塔二基残れり。寺の由緒は鳥山院御頃にて正徳一年創建と記せり。止院にて八十九年行成修驗帝のそとにして尊止命廟を造り奉じて後より、又興止菩薩の元御の印止院二年に承し正徳十一年にハアリナハ正徳三十一年もへ詔せるべし。又嘉定七年六月四時の住持当寺の米山を會して奉行所に進上せし米山ヒタ笠年中身削也と記し。眞言・諸宗伝承といふべし。今承するに尊止命之水中央州瀬戸の水原村馬に來りて度牒より我三不老尊こととぞりをを從子後寺に願うてひし縁をもがく。故中興古相四一歳の心力縫ひ坐りし。と見えたるゝ。されば尊止命が坐する所たてて。後昇殿次第の如く御座を賜り。因々に寺を建たまひしものなるにや。しがれとも高祖に尊止命二年。寺の創建であることをあらかじめうたひなきにあらず。寺をなすべし。

又貞応四年当寺をもて本所御祈願寺となし給ふ御教書を藏む

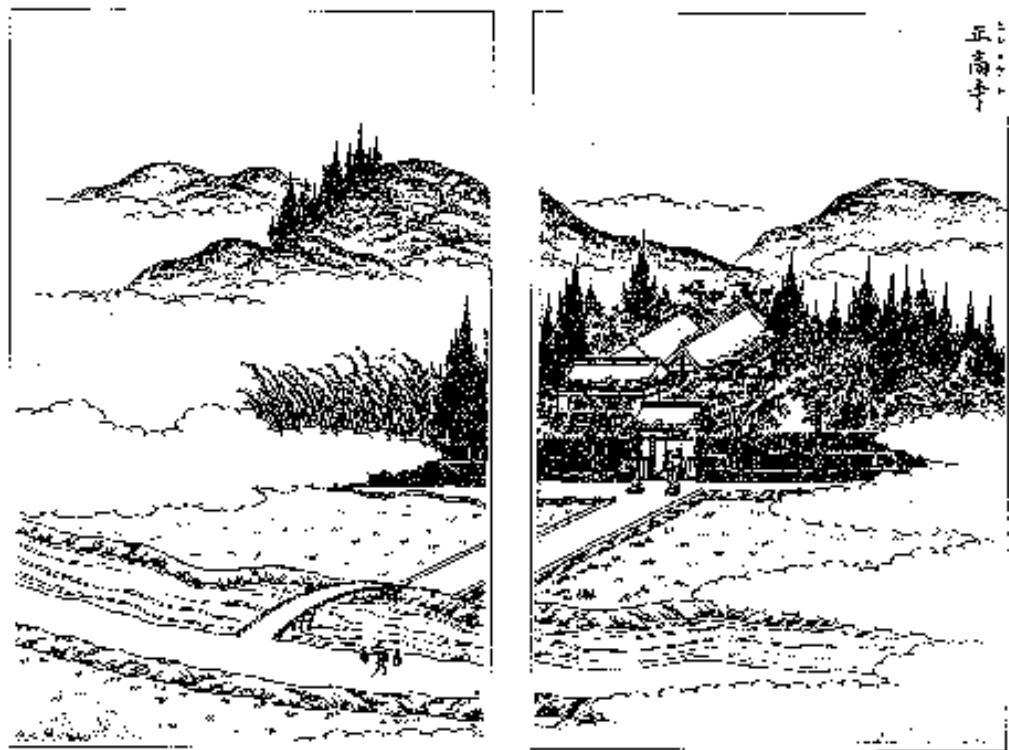


宝來山成菩提院正高寺 ホウライサンジョウボダイインショウコウジ

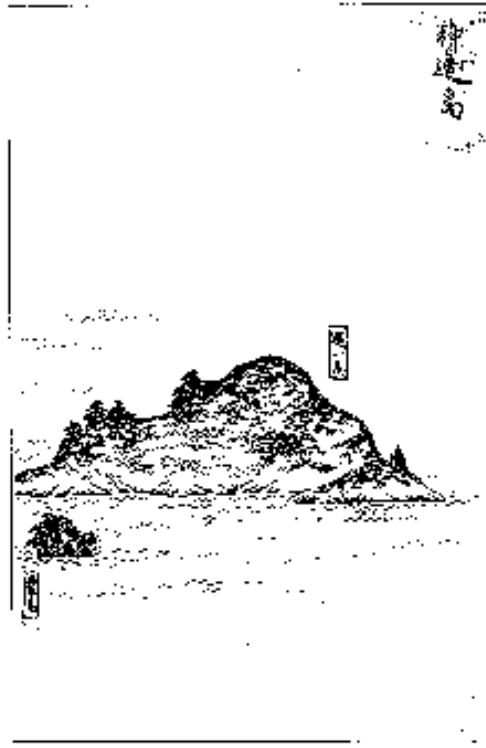
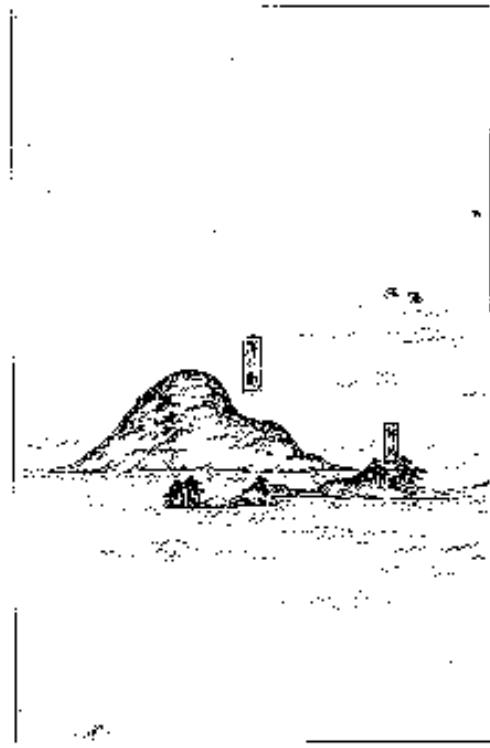
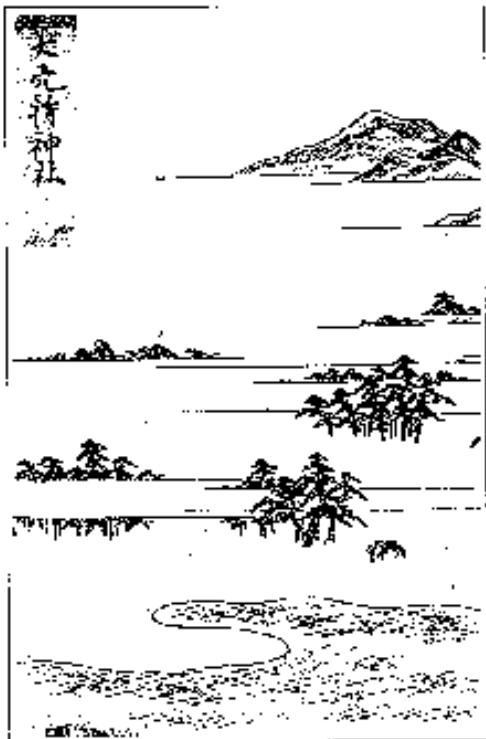
仮屋の戌方凡毫里、真言宗大乘院の末にして開山 カクジン 慶上人、本尊准泥觀音、当寺は貞和四年の開基にて正八幡本地堂を支配す。初め山号院号なく寺号はかりありしを慶長八年准三后の免許ありて宝來山成菩提院となる、いつの時大乘院末となること詳かならず。

大己貴神社 オホアナカミノヤシロ

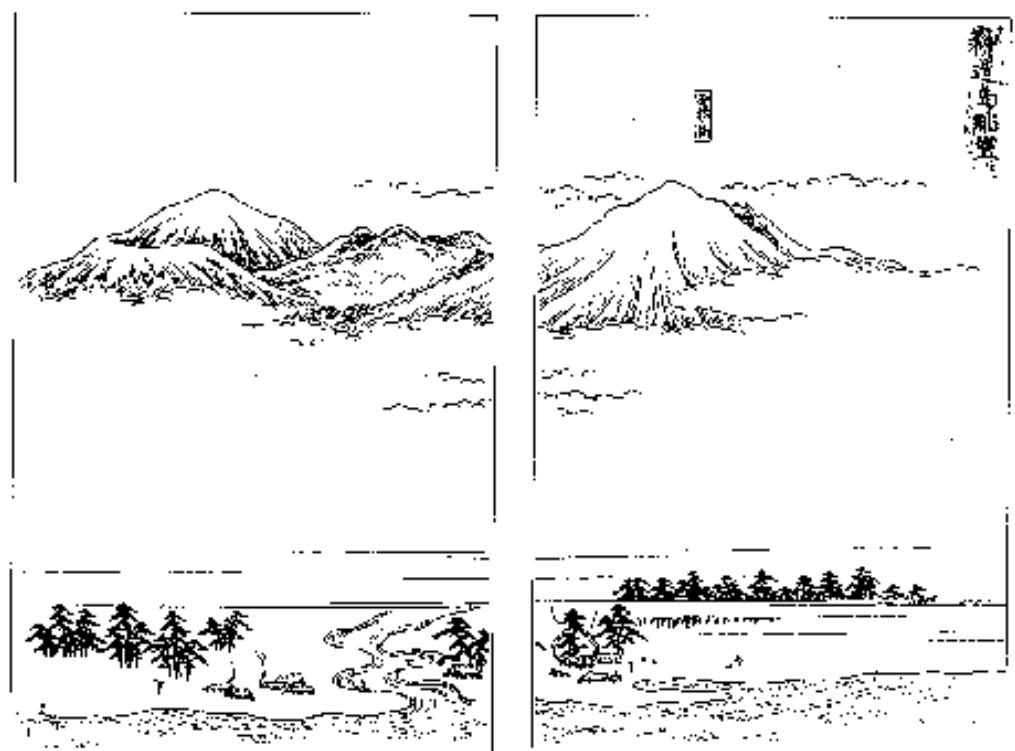
小村の海辺に鎮座、地頭仮屋を距ること未方毫里許り、祭神三座 大己貴命・火薙命・豊受命 大己貴神社と號し守護し延喜式神名帳贋岐郡大穴持神社と載る所なり、往昔官灘に鎮座ありしといへり官灘は今の社地を距ること半方八町許り海中にあり今ハ瀬となりて常に見えず、接するに統日本紀四十七代廢帝天平宝字八年



十一月の記西方有声似雷非雷、時當大隅薩摩西國之堺煙雲海冥奔走去來七日之後乃天晴於鹿兒島信爾村之海沙石自聚化成三島、炎氣露見有如冶鑄之為形勢相連望似四阿之屋為島被埋者民家六十二区、口八十余人云、同紀四十八代稱德帝天平神護二年六月の記大隅國神造新島震動不息以故民多流亡、仍加賑恤云 同紀四十九代光仁帝寶龜九年十二月の記、去神護中大隅國海中有神造島、其名曰大穴持神至是為社云、當社は即宝龟九年社を作る大穴持の神なり字
八年より垂慶二年八四年日本ノミツ、神護二年より宝龟九年八十四年日本ノミツ 宝字八年涌出する三島は桑原郡アハラノサヘ 今的小島なるへし、小島は一島連なりて二島なし、沖なるを沖小島といひ、辺なるを辺の小島といふ、小村の渚を距る



こと海上七里、初め三島ありしに何れの年
月にか一島は海底に没し瀬となり。そや、
即ち其瀬宮瀬なるへし、近比安永乙亥の年
桜島火を發し大隅の海中に七島を涌出す、
其後二島ハ海底に没して瀬となりぬ、宮瀬
もまた此類なるへし、又國分正八幡宮のこ
とを延喜式にハ鹿児島神社と載られたり、
されハ往古ハ正宮の辺を鹿児嶋といひしと
見へたり、今も正宮の未方八町許りに鹿児
の山といふ所あり鹿兒ハ城神の代、火々出見事を無日の傍に
入奉り寺に於め春神の宮に奉り着け其止様
あると宝字八年鹿児島信爾村と記せるは大隅
の鹿児嶋にして薩摩の鹿児嶋にハあらず、
信爾ハ今の真幸村のことをいへるか、眞は
信と同音なり、尔ハ箇字ケに作りしを伝写
の誤まりなるにや、宮瀬没して瀬となるに



及びて神ハ上天の理にましますゆへ今地
に社を造立し祭るなるへし延享五年
戊辰正月社司谷口某の書にも初め宮瀬に鎮
座神体は石体と見えたり今ハ仏像を安置す
本地といふへし、延享以来浮屠の説に迷ひ
神体を改め造るにや、甚たいふかし、小村
邑中麻を栽ることを禁す、又蛇生せず故あ
るにや、いにしへより蠍蛇アシノカツオを除守を出す奇
験ありといふ、社司谷口志津摩

拍子川 上小川村にあり地頭板屋より辰巳方
凡六町、其源ハ新城旧名年の岩間より流れ出
て福島村を流れ敷根の湊村に出るなり、村
民伝へいふ、古ヘ景行天皇の御宇大人の隼
人といへるもの其容貌鬼神のことく大逆無
道にして一族数千人を集め今的新城と上升

城に拠て更に王命に隨ハす、天皇行幸まし
くて御子口木武尊ヤマトタケミコトを副将とし屢攻め給へ
とも官軍戦ふ毎に利を失ひしかハ天皇これ
を患ひ諸神に祈り此川原にて神樂を奏し給
ふ、其拍子の面白きに乘し隼人居城を出て
來りしを日本武尊終に足を討給ふ、此故事
によて拍子川と名付橋の名を拍子橋といふ
といへり、其靈魂崇をなすこと甚たしく種々
の祭をもて靈氣を宥めらる、毎歳八月十五
日正八幡宮にて放生会の祭ハ其一なるよ
つかれり、拍子橋は今石橋にて庚申橋カミジンボウとよ
へり、川は田地に注く用水にして古への形
勢跡形もなくなりぬ、新城ハ庚申橋の寅卯
方拾町許りにあり、かの城跡の岩根に洞穴
あり隼人穴といふ、其洞穴高七八尺隼人の

住し所と伝へたり、洞中に水あり、上井城跡ハ新城の山統にて拾町許りにあり、按するに日本紀十二代景行帝十一年秋七月熊襲反之朝貢せす八月筑紫に行幸し給ひ十一月日向國に到り行宮を立ておハします、是を高屋宮タカツチノミコトといふ、十二月熊襲を討給ふ事を議せられて熊襲の梶原タケハラ厚鹿文アツカワ追鹿文アツカワの二人を殺し給ひ十三年夏五月製國半給ひ高屋の宮に六年を送り十九年九月に日向より還幸し給ふ豈てのコ支の日名なり古風には斯御内ノ浦にあり同、一十七年秋八月熊襲亦反之邊境を侵すこと止す、冬十月日本武尊を遣して熊襲を撃しめんとす、時に尊年十六、十二月熊襲の國に至り給ひて童女の姿となり飲宴の時を伺い川上梶原カムイタケハラに酒をす、めて殺し給ふ、又統日本紀四十四代元正帝

養老四年二月隼人反て大隅国守陽侯史麻呂サマノアリトヲを殺す、三月丙辰中納言正四位下人作宿アシタスル旅人を以隼人を征する特節大將軍となし、授刀助徒五位下笠朝臣御室等を副將軍となす事みえたり、又同六年四月大隅薩摩隼人等を征討する將軍以下に勲位を授られ又同七年四月口向大隅薩摩三国の士卒隼人の賊を征討し頻に軍役に遭年数登らす飢寒に迫ること見えたり、石清水八幡宮放生会の權輿を尋るに養老四年九月に征夷の事ありて大隅口向の両國大に逆乱す、故に内裏より筑紫宇佐八幡宮に御祈誓ありて其宮の称宜辛島勝波豆米神軍を引率して彼國を征しことゆへなく敵を亡しけり、其後八幡の御託宣に此度の合戦に多くの殺生をなす間、放

生会をなすへきよし神勅ましく、けれハ諸國に至るまでも此時より放生会始ると扶桑記に見えたり、されハ村民口碑に伝ふこと所謂なきにもあらず、此拍子川原にて隼人を殺し給ひしといふハ日本武尊川上梶師を殺し給ひことなるへし、又諸国に放生会の始まりしハ養老四年なり、隼人三度反ひて逆乱せしを一度のことについ附会して爰に伝ふとみえたり

日本書記卷七

景行帝二十七年秋八月熊襲亦反之侵邊境不止、冬十月丁酉朔乙酉遣日本武尊令擊熊襲、時年十六於是日本武尊曰、吾得善射者欲與行、其何處有善射者焉、或者啓之曰、美濃國有善射者、曰弟彦公、於是日本武尊造葛城

人宮戸彦喚弟彦公、故弟彦公便率石占横立及尾張田子之稻置乳近之稻置而來、則從日本武尊而行之十二月到於熊襲國、因以伺其消息及地形之峻易、時熊襲有魁師者名取石鹿文亦曰川上梶師、悉集親族而欲宴、於是日本武尊解髮作童女姿、以密伺川上梶師之宴時仍劍佩纏裏入於川上梶師之宴室居女人之中、川上梶師感其童女容姿則携手同席舉杯令飲而戲弄于時也、更深入閨川上梶師且被酒於是日本武尊抽纏中之劍、剝川上梶師之胸、未及之死川上梶師叩頭曰、且待之、吾有所言、時日本武尊留劍待之、川上梶師啓之曰、汝尊誰人也、對曰、吾是大足彦天皇之子也、名日本童男也、川上梶師而啓之曰、吾是國中強力者也、是以當時諸人不勝

我之威力、而無不從者吾多遇武力矣、未有

二詠あり

若皇子者、是以賤賤陋口以奉尊号若聽乎、

山口

曰聽之即啓口、自今以後号皇子應稱日本武
皇子言訖乃通胸而殺之、故至于今称曰日本

武尊是其緣也、然後遣弟彥等悉斬其党類無

餘唯一、既而從海路還倭到吉備以渡穴海、
其撫有惡神則殺之、亦比至難波殺柏濟之惡

神、二十八年春二月乙丑朔日日本武尊奏平

しら雪のふりつもりたる中山にわけつ
は匂ふ梅か香

中山

熊襲之狀曰、臣賴天皇之神靈以兵一舉頓誅
熊襲之魁師者悉平其國、是以西洲既證百姓

奥山

おく山にあとたれてます神垣も心やなひ
くやまとこの葉

早鈴神社 小濱村に鎮座小濱村八幡宮
西田分郷など 地頭仮屋を

高塚山神 川内村に鎮座川内村八幡宮
村の根なり 地頭仮屋を
さること辰巳方式鬼余、祭神石休、例祭十

さること申方武里許り、祭神詳かならず本
多氏を家業す、伊勢大名古の
よきひゆめ、創祭下三切西 当社上棟銘に嘉吉二年甲

一月中申、貫明公貫明公限城におはしますとき
崇敬尤厚く法樂の連歌及び山口中山奥山の

主藤原次平主藤原次平とあり、次平はいかなる人にや

考ふへからず、慶長九年の夏旱天して田地荒る、にて貢明公此社に詣て給ひ雨を持り和歌を奉納し給ふ、五月雨は雲垂りてつねにふれなへて田畠のうるふばかりにと詠し給ひて奉納ありしに忽然として雲起り雨降りけり、其應驗新たにして貢明公崇敬いよく厚くし給ふといへり、今に到りて旱天にハ村民当社に祈りて雨乞をなして公の詠歌を短冊に写し籠のさきにつけ金破をならしてをとりを興行するに果して雨あらざる事なし、よりて人々な尊信すといふ

稻荷神社 真幸村富隈に鎮座真幸村が西國分郷島中村
を日暮に替へて居る
地頭仮屋の申方壱里餘、祭神三座住吉大明神・大財神・稻荷大明神
神祭十
二月廿日当社は往古住吉にて地名も住吉崎といひしに永和元年齡岳公一宮大明神舊久公義を
大人の事を

を会祭し大隅國守護神となし給ひ一宮大明神と号す、慶長二年貢明公社内に稻荷を勧請し給ひしより遂に稻荷社と呼ぶといひ伝ふ、社司中馬典膳

住吉崎

真幸村にあり今此辺を濱市といふ、往古は氣色の濱或ハ姫城か浦といひしなと古老のもの傳へたり、貢明公文祿四年鹿児島の屋形を去りて富隈に移り給ひしより濱市の名ハ呼び伝へたりといふ、按するに此浦ハ大隅の名所氣色の森を相距こと繼に式拾余町、其間さしたる岡縁もなく遙に見へたる海濱なれハむかしの人彼の森に対して氣色の濱とも名付しにや、姫城か浦は近邑清水姫城村によれるなるへし、松葉名所和歌集に氣色の濱を載て何州の名所なるを詳

かにす、此名所ハ今之濱の市のことなると
も云へし

大木

後九條

۶۲

かはり行けしきの濱の夕烟たか深きえに

又霞むらん

禪枝

月やよしうみよし崎の松を友

守君神
府中村にあり地頭仮屋より西方拾一

町、祭神、一麻伊弉諾尊、御靈廟、御靈祭、一月卯卯日方
ノニテ、元日十九日十日中卯日建立の

なるよしいひ伝ふ、社司谷口鞆負

久満崎神社
上小川村に鎮座、地頭板屋の辰

巳方武拾弐町、祭神一座大山祇命 鮑公元
月九日一月廿中當社は

往古国分の崇廟にして今の社山の巔にあり

しを友に遇したりといひ伝ふ、慶長中貫明

公伊勢太神宮を新城の麓に建られ崇鎮守に
定め給ひしより上小川村の生土神となると
いへり

ケキノモリ
奈毛木森 内村にあり内村は義理地にして同
姓と稱す此田名といふ 地頭仮屋
を距ること成方壱里許り一之宮大明神を安置す、祭神一座百尺、御坐一月 是を隅州の二之宮といふ、歌林名所考等に載て此森を讀む歌多し、むかし伊弉諾尊の御子蛭兒神三歳になり給へとも脚立給ハス、ゆへに天盤櫓樟アマカツチノク 船に乗せて棄給ひしか爰に漂到し其船枝葉生し大樹となれりと、奈毛木とハ父母の御神脚立給ハぬことをなげきて放棄給ふに因て森の名となるといひつたふ上本正記註解 奈之森大盤櫻樟前大史河野通古贈喫紀行云、實文七年十一月国命を奉り霧島権現等に行し

とき奈毛木の森見んとてたちよりレニ之宮
の社みきりの方に其まはり十尋ハかりもあ
らん大柄のうつほあり、中に八牛ヤシノクをもかく
しつへし、これなん名たかき森なんめり
〔端八旬ヤツヒはかりなる翁す、けさに下はか
り着し鳩の杖にすかり声守なりとて来れり、
奈毛木の森ハ是そと尋ぬれハ足なり、秋津
洲に草木のなきはしめ高天の原よりなけ給
ひし木なれば奈毛木と名つけしと中伝へた
り。今其うつほの楠ハ枯て高さ三間計り
なる朽木のうつほあり廻り拾玉間廿疊り拾五間
（員一）の記曰古奈毛木の森一ヶ枝落て二十六打トドカトタリ、其の直前大根立木アシキあたしてみえたり、この時此木ハ枯ざるとかゆこれまことに蛭兒の神車跡の地にして神代の
古跡なり、貫明公国分城におはしますとき
崇敬し給ひしと見えたり、寛延三年一之宮

神社を今の地に移し奈毛木の森の古跡を伝
ふといふ日記には今之社東方三間拾回り、神木北の方九間持なり
舟塚に今存。參拝中又大は新山を過ぐるにて承辭を示
ひむ事多うづき見る所へなり或入奈毛木の森ハ海を相去ること
なると見えたり或入奈毛木の森ハ海を相去ること
毫里余、神代といへとも盤龍樟船の漂到す
ることを疑ふ、按するに、しからず、
国分の近邑姫木城址の岸壁たかき事數十丈
の所波濤の洗ひし跡おほし、是によりてこ
れを見れハ神代のいにしへハ奈毛木の森の
辺り今の大津川筋に至りて入海なることし
るへし、又、灘つゝき始羅那加治木は天櫂
櫓樟船の柁漂着して忽に根蘖を生したり、
よてからきとハいふ、麓楠木馬場の大樹是
なりと古き人の物語せしを聞けり、一説に
唐土の船柁ともいへり、近世柁城とも書け
り、今奈毛木の森神木枯しこと尋るに享



保十三年八月國分寺頭樺山主計久初老木の
楠うつぼになりしゆへ岳長に命して楠を栽
継せしに程なく其木は枯て老木の側ハらに
楠二本を生す、久初是を聞て大ひによろこ
ひこの木長盛なすへきよしを書つらねて社
司に与へたり、されば此年に神木枯たるに
似たり、然れども枯たるといふことハシる



さゝりき、今ハ其捕長して竹敷の中に廻り

歌枕

久我大政大臣通光

四尺余の樹となれり、即神木の種苗疑ひを

神さぶるなけきの森の郭公ひくしめ縄も

始すものなし

なくくやこし

古今

讀岐

大木

後鳥羽院

ねきことをさのみ聞けん社こそはてハな
けきの森となるらめ

金葉戀下

橘俊宗女

同

信實

いかにせんなけきの杜ハしけれとも木の
まの月のかくれなき世セイに

詞花雜下

清原元軸

同

顯季

おひたへて枯ぬと聞し木の木のいかてな
けきの杜となるらめ

新続古今

藤原秀茂

同

俊賴

枯にけり人の心のあき風にはてはなけき
の森のことの葉

ほとゝきすあかぬなけきの杜に来ていと、
も声ををしミつる哉

名寄

二品親王

若山

よのつねの秋のものかは佗人のなけきの
森のミやのふかさハ

年くる、旅宿に入るや森の音

人艾

遊行二十五世持陶上人この森を見て

春ハ花あきハ紅葉のあかなくにちるやな

けきの森といふらん

琴月公此神に詣て給ひ社によそへて
古を思いさらめや今とてもみちをなけき
の森のことの葉

木兎のなくやなけきの森遠き

枝之宮社

野口村に鎮座、地頭飯屋より西方

凡拾八町、祭神詳かならず、例祭十一月初

酉、社司斜木直記なるもの語りて曰、古ヘ

拍子橋にて日本武命の討給ひし大隅隼人の
四肢を爰に埋め祭るゆへ枝之宮と号するよ

しいひ伝ふと、本地弥陀藥師觀音を安置し

其裏に寛永十一年一月吉日仏師端田井重利

と記せり

太平山國分寺

上小川村にあり地頭飯屋を距

ること申方四拾間余、当寺は四十五代聖武

帝勅願に依て天平十一年同々に國分寺を建

俳諧名所小鏡

幽齋

山かせをなけきの森の落葉哉

貞室

そちは何をなけきの森の蟬の声

可笛

同

給ひ行基僧止を以て開基とす、行基自作の正觀音木像^{カツイニシマ}を安置し国土安隱の為に法華最勝両部の經を講せらる。

法華本紀此事のみえず、神皇止新羅へ比附の大記じる法をあかめ給ふこと先年、にこえたる、末太子を建立し金網十六丈の柱をつくる、又群國三國分寺及び同分七寺を立て國土安寧の為に菩薩般若部の經を誦むるといふ々、本初元紀太平元年無効に同分寺を建と記す、在船遣へり、九年より一一年に至りて船をさわれしや耳者すべし。

往古天台宗の伽藍なりしに數百の星宿を経ていつれの時災に罹りしや荒廃に及へり、爰におひて天文年中清水楞嚴寺八世代春和尚再興して中興となり楞嚴寺の末寺とす。

楞嚴寺は越前國慈眼寺末へ裏家、伏見ハ天文二十二年十月六日遷化。白六代後奈良帝の時天下安寧の為とて金泥の心經を国々の國分寺に納め給ふ、勅使四辻參議中將季遠天文十

一年壬寅六月下旬日州山東に下向す。

公付精毛入
癸未二年の
月五日當に下向十月上清石々

路塞りけるにより心經をハ伊東大膳太夫義

祐に屬す、義祐使僧をして当國の守護代本

田紀伊守董親に致す、董親伝へて吉日良辰

を撰ひ是年十一月四日当寺に納む。

有ハ義祐七十四歳の時、慈眼親王の御靈廟に見えたり、心齋ハ神妙な況をもて白木の五

世大

雲和尚寛永十六年九月十四日遷化。又廢に及ひしこと数十年元禄四年州安といふ僧重興して爰に居住す、今に至り退転なし。

寛永十
八年

國今寺



聖光寺
本堂
寺は主僧一曰の草庵なりとい
へとも廻國修行納経所となりて參詣するも

の絶す、觀音堂左に大なる五重の塔あり康
治元年壬戌十一月六日と銘す、宅地中に破
瓦多し「日落影をより曉松にて葉ひあるもの、大半
一千石印、うきま十石、中身に至り十六石也」古ヘ
叢林の遺趾疑ひを容るべきなし

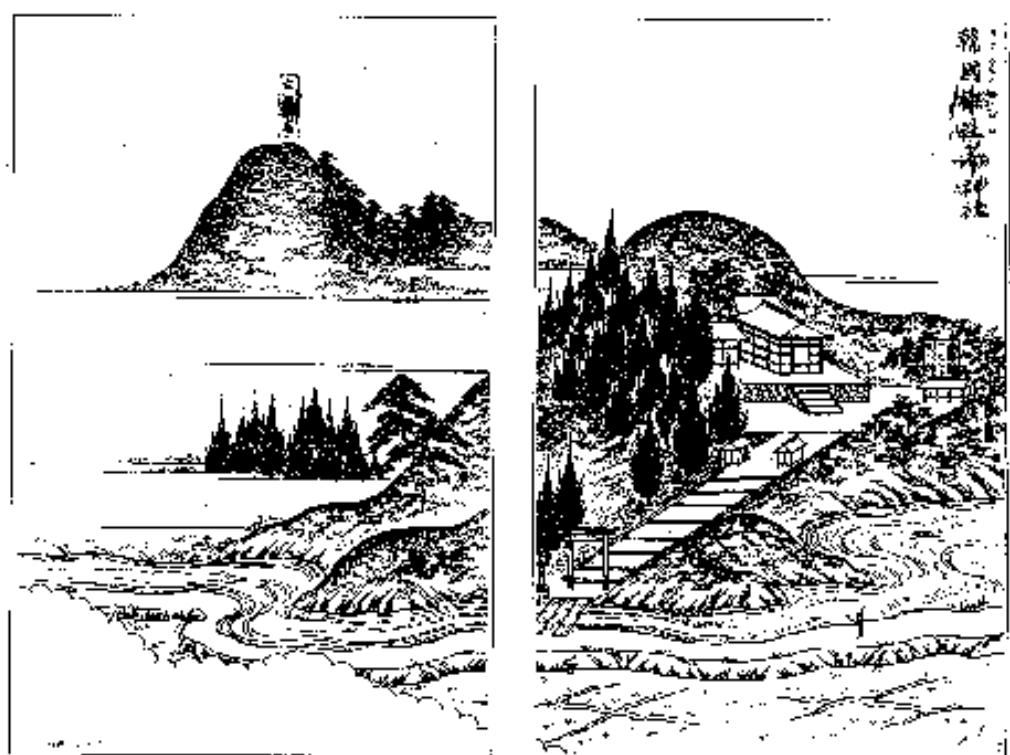
韓國神社
上丸村宇津峯の壇に鎮座、地頭板
屋をさること辰方七里二百余、祭神一座

「先祖板を相殿に供養、縣を委、近比諸於都止ト社社當寺故に爲
遷居の所にして本地なり。祭西辰正月九日二月九日」

勅請年曆詳かならず、永正元年甲子十二月

以来再興の棟札を納む、当社ハ大隅五社の一員にして延喜式神名帳にも曉喰郡韓國宇
豆峯神社「小」と載たり、初め宇津峯の頂上に
安置ありしを爰に遷したるといふ、宇津峯
は今之社頭申方五町許りの野岡なり、韓國

韓國神社



と称すること出緒詳かならず、霧島山の西
嶽を此に韓國とよへり高山のことと韓國と
いひしものにや、社司斜木丹治

イセタライシングワ

ナナメキタジ

伊勢大神宮 上小川村に鎮座、地頭坂屋

坂屋
四村

を距ること卯方三町、祭神二座

大照大神奉書御事
下力延命御事九月

十九日 慶長中貫明公瀬之市を去て新城の麓
に移り給ひし比志願によて爰に移し本邑の
崇鎮守となし給ふ、初め今の社より酉方三
町許り大森の下に安鎮ありしといふ、社司

斜木直記

新城 シンザウ 上小川村にあり地頭坂屋の卯方凡七町

余旧名隼人城といふ、往古大隅の隼人居城

なるよしいひ伝ふ、鶴丸ヶ城ともいふ四方
岩壁にして要害の地なり、貫明公慶長九年
扁限を去て此城の山下に屋敷を構へ移給ふ

其時名を新城と改め給ふ、御屋地跡今にあ

り、城中に五社大明神を安鎮す祭神五座

上格須天官真理天官 天文四年本田紀伊守重親勧請す、

隼人の靈を鎮めむか為也といへり

旧庭の藤 キュウテイフジ 新城の麓宅地の跡にあり貫明公京
都建仁寺の藤を移して栽給ひしといひ伝ふ、
三抱余りの古松にまとひて蔓延せり、里俗



御屋地の藤ともいへり

龍

植そへし松にかゝれる藤かつら花もちと
せのかけや見るへき

全

色かへぬ松のみとりもかくろひてそらに
波たつ藤の花かな

曾於都

霧島六所權現

頭仮屋を距ること止方凡三里武拾四町五拾

間はかり、祭神六座大津彦々火主等を祀るを中忌御法度敵武鷦鷯不^レ不^レ尊木花開耶須玉使能

鳥居正城の勝負体にて、祭事年中祭式拾五度（一月月初酉年十一月
改の七神を会す祭れり）といふ。年中祭式拾五度（初酉日より終之祭迄）
いふ、上口正（同七月五日より五月二十九日同廿九日同廿九日同十一月亥）
以上七度大祭に次の祭にして「祭」といひ式小祭といふ、その余十六度の祭

き」と測るべからず、根幹數十里山東ハ日
州諸縣郡山西ハ隅州曉於郡五に號を有せり。すすの
郡也。郡をいふなり。吾に悉山等悉山等とある敷原山にして山上ニ峯高く秀て衆峯
に超たり、今俗に東嶽峰の名也。西嶽御園也。と呼
ふ所謂フタモソノヲケ一上峯是なり、日本紀云、既而皇孫
遊行之状也者則旨穗クシト日一上天浮橋云々、同
紀一書ニ又云、降來到於口向襲之高千穗穗
日一上峯天浮橋云々、旧事本紀云、天津彦々

は天の御座を奉
て祭る下祭と叫ぶ

當山ハ地神第三代瓊々杵尊初め
て天降ます所の靈地にして日本最初の靈峰
高千穂峯又撫觸峰といふ是なり、日本紀云、
皇孫乃離天磐座且併分天八重雲棲威道別道
別而天降於日向製之高千穂峯一云、同紀、書云、果如先期皇孫則到筑紫日向高千穂總

火瓊々杵尊大降坐于筑紫日向襲之總觸一上

峯矣、今この山日隅に跨かり又神社も一所

にはあらざれとも割国和紙余し向國也那
前朝天明國を置以前ハ

すべて日向の國にて侍れハ口向高千穂とハ

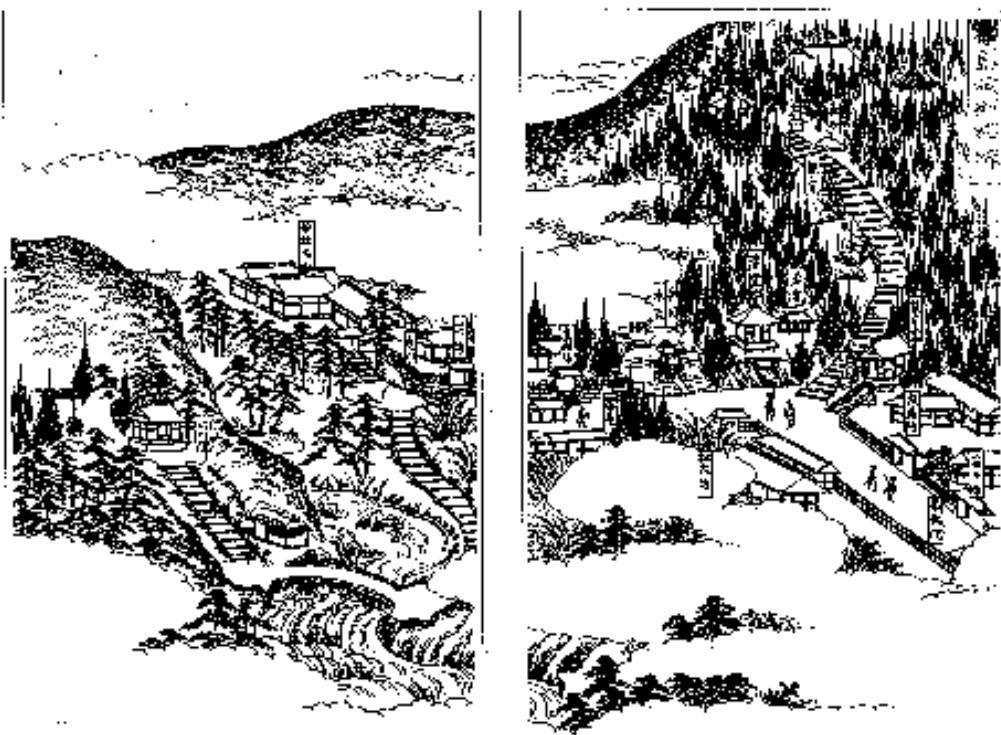
いひしなるへし

筑紫に高千穂と云ふ事ニハ直隸等乎
幕に天孫のまゝの事也蓋古時にてて物のあや
めわざなむ事也」と、尊友人のわしへてて一體の稻毛坂明月に就し船へハ

御事也即ち。因て高千穂と名づといふ。日本紀を極するに早雲大連
さすとき路の脇に神ありて此氣を上へ来る者名を後田高千穂といふ。時に
天孫女前附て云、尊孫何れの處に到りまさんや、波へいつくにか振りねら
むきといふ。れて云々、天孫の御子ハ筑紫口高千穂御子乎に至り給ふべ
し。昔ハ伊勢の慈雲院子乎義見上に生うるをいひして此見を傳へ。當時す
てて高千穂御子乎といふ名がわからんと見えども、尊者義見也と云ひ。ひ
いづるといふをひきを用意しておひづるといひ。また下略してほよいふ。
又云いづるを中下野して住むと聞たることあり。機船上御高千穂とハ口向の
慈子にして吉國の點附と考るをもて。口向御子の名づけ給ひたりと「本紀
に見る。されば此子の手に採て高千穂をしておののむを高千穂と呼
ひけるをもん。本古のことハ隨身御伴通く并、かたきものもあれとも正種
千穂の稱を取しまるにて外づりといふいとあや。又曰其弟の内
高千穂をもて。是孫天降翁。高千穂。上云云はれどもといふ事あり。是々
な後人永合能余の説也」
て曰を取じ足らぬなし

霧島ハ高山深谷にして常に霞霧冥暎たり、

因て名つけしならん、また、速日の峰とも



呼へり

続千載和歌集

かたふかぬ速日の率にあま降る天の御ま
このくにそ我國

社記を按するに当山ハ往古より数多の名ありて霧島山十号と呼び伝ふなどいへとも浮たることのミおほし、其余社記に載るところ諸説紛々頗る仏説を用ひ怪異を語るもの少からず、ことく信するにたらされはいま是をとらす

凡霧島山中神社のますところ一所ならず、
西御在所權現當社東霧島權現内東御在所權
現狭野權現共に瀬戸尾權現内難守權現共に小六
社共に霧島權現といふ、由縁各社の下に詳
かなれハこゝに略しぬ



鉢の峯 東嶽をいふなり、峯上一奇鉢あり

俗に御鉢と呼ぶ、上古より峯の巔に立て其

権輿を知るものなし、高さ六尺、許り四ミー

尺許り、鉢の形打たるに三疊あり、いつれの時に作たることとは
へらず、在土に五箇所の如きものあり、大略半分なるも、鐵に

あらす銅にあらす沙中に卓立して千古青鏽

を生せず尋常難鑄の所為にあらす實に神代

の旧物と謂つへし、或人云神代卷曰、大己

貴神以平國時所杖之広矛授二神御代命曰、

吾以此矛卒有治功天孫若用此矛治國者必當

平安六々この峯是孫最初降臨の地なりゆへ

後代の漂柱に立晉給ふならむといふ所見あ

るに似たり

大波池 西嶽の半腹にあり、東北百間余靈水湛々

として常に増減なく深山幽谷の間一塵の水

面に點するなし、見るもの皆以て神池とす

諸島山中渟水はし其名を聞ぶるもの十九八處な善吉捨現眞手先の地といふ、今ハ水淺て其形のえ残れるもあり」と、よくにこれをしるさず、其者のさうの「因を以て」抑当山神社の初めを尋ねるにれをあらへよ」といふ

三十代欽明帝の時慶胤ケイイン上人といへるありて

此山を開基し神殿を創建せりといふ年月を

伝へす、其後山上地大ひに震ひ忽ち火を発し木石ともに焼失して既に幾星霜をかへた

るや詳かならず、六十二代村上帝の御宇應

和年中性空シカク上人当山に登り廬を結ひ居ること

と數歲神社及び僧坊を再造してより長空寺に是後は延

日書寺山に至て刀敷寺をこれに數百年その間山上火

を發することしハくにして文政元年壬午正月廿

ハヨ禁火はる神殿及び寺家ことく災に罹れ

り、此時に當りて神代の靈宝縁起宣命等も告焼失せりとぞ、性空よりここに至りて天

台宗の僧當社の別当職を勤むること三十

世道忠といへる僧勤職の時に至るといふ、
是より社殿再び喚らす靈神血食せざること
凡二百余歲文明十六年甲辰の歳に至り
邦君円室公眞言密宗の徒兼慶法印に命して
当社を中興せしめらる、兼慶殿を踏み葛を
攀て山上に陟り往古の社跡を探り更に良材
をあつめて是を再營す、こゝにおひて神殿
諸堂甍をならへ五彩色をましへて魏々然た
る神のみおも諸人掲仰深信の靈場いにしへ
に復したりしに宝永二年乙酉十二月十五日
また山上に火を發して神社堂塔寺家皆焦土
となりぬ、爰に於て正徳五年邦君淨國公命
して再興し給ひしより社殿に倍し今に
至りて歩み絶せぬ繁昌の地なり、社司橋本
氏別當寺を華林寺といふ

税所社サシヨウジ 本社の右にあり往古より税所氏の
人を祭れりといふ上九代主多大内第四の主、延暦三十五年の秋を尊如といふ。貞安元年辛酉四月十日
日輪崇神天皇下八幡宮より移居する等島守社の不吉可祓に補任しも鎮の聖を多
可と申す者を詔て神事を供し祈嘆の祭をててなる。よりて税所守有也氏と
す。

御坂殿オカツリテン 本社の右にあり天満天神及び荒神
を祭る

多宝塔タバタ 本社の前左の方にあり金色不智如
來の像を安置す、慶長十九年甲寅十一月松
齋公の志願によて創建し給ふといふ

本地堂ホンジヤマ 本社の末方七町余にあり丈余の十
一面觀音一本中興節山並鑿法印付、奥子、上人師父本篤院 を安置す

龜石坂カメイシザカ 本地堂の前より数町の坂を下る傍
ハらに一奇石あり形ち龜のことし俗龜石と
呼ぶ、よりて坂に名つくるといふ

風穴カクダ 龜石坂の右側にあり岩上に觀音の石

像を安置す

鎮守堂 本社を距ること南方四町余龟石坂

の下左にあり両部大日如来を安す

香堂 龟石坂の下右にあり本社より未方四

町余八曼荼羅堂と称す不斷香を焚ところなり
御手洗川 香堂の西北に隣れる池をいふ、
地頭仮屋より丑方三里武拾町池中に水大社
を建立す

兩度川 御手洗川の西南壹町余華林寺の東
に流る、水源は華林寺の東北胡桃坂より出
五月初め比より流れて小川となり旬日を過
て忽然として流れ絶、また数口を経て遽然
として流れ出甚た清冷なり、八九月に至り
て卒然として水涸てなけれす毎歳斯のこと

く其時節を違へず、よて俗これを伝へて靈水といふ

霧島山錫杖院華林寺

本社の未方五町許りに
あり地頭仮屋をさること丑方三里武拾町許
り真言宗大乘院の末にして霧島神社西神社の
別当職なり、開山性空上人中興開山兼慶法

印本尊、一面觀音、白緒を按するに応和年
中性空上人錫杖を此地に立て居こと数歳神

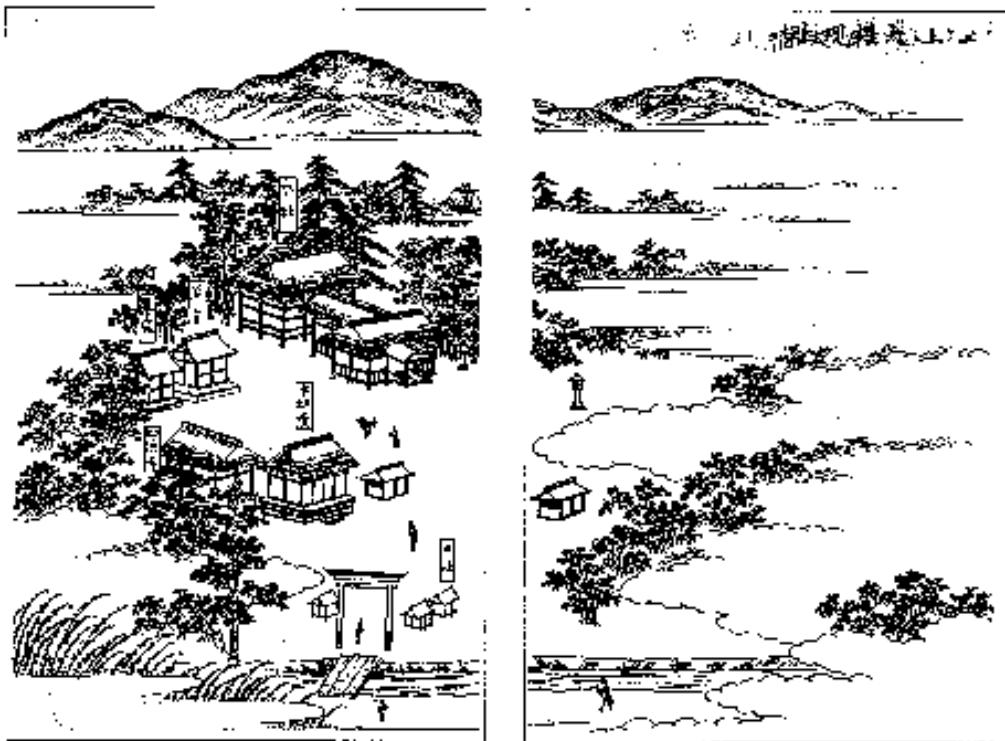
社堂塔を創建し當寺を造立して院を錫杖と
号し寺を華林と称す、性空以來住僧二十一

世多事道惠に至り凡二百年許り天台宗なり
しといふ、しかるに文暦元年の冬火災に罹
りて寺宇尽く焼亡し交割常住の物も皆失な
ひしによてその詳かなること伝ハラス、寺
家荒廃に及ぶこと二百數十年、文明年中に

至りて邦君田室公兼慶法印に命して再興な
さしめ給ひ兼慶をもて中興開山とせしより
真言宗となり遂に大乗院の末寺となる、本
地院山下坊主林寺の南面知足院集福坊山下坂の宝
泉院林泉坊前にある正福院泉藏坊奥下之谷口谷口
坊瓦成坊の左に海老谷寺延命寺花感院谷口坊の内に隣る、
の天にして本堂は絶え
一而新堂を安置す二王門華林寺より三町余未方
にあり地頭仮屋を距ること丑方二里十七町
許り、金剛力士兼慶法印の作といふ

正上六社大權現 重久村に鎮座地頭仮屋の卯
方拾式町ハかり、祭神六座中尊是坐主日月星主正社、
左正八靈等坐副社、右主、六基
神主天合
尊長集並 年中祭六度十月元日同七日同二十一日同廿四日九月九日十一月二十八日 創建の
年曆詳かならず、社説に云、いにしへ景行
天皇の御宇日向の隼人といふもの玉命に坂
きけるを天皇行幸ましくてみつから是を

擁護を加へ給ひしゆへ容易く朝敵をほろほろし給ひしにより其神靈を崇め祭れるといふ、往古ハ今之社頭より東尾牟礼といへる山の絶頂に鎮座なり、其折には社壇とてもなくたゞに山上を拝せしにその後今之地に社壇造立して神靈を安鎮セイジンセイジンせしより既に一千有余の星霜をふるといひ伝ふ、又当社に中古までハ王の御幸ミサカといふ祭りあり、毎歳正月七日神輿を守り下し同廿二日迄御旅所にして種々の神供をそなへ祭りをなす、是いにしへ隼人の靈魂祟りをなし人民を惱ませしゆへそのかミ御幸の式を設け彼が悪靈を鎮めし大祭なりとて慶長の中比までハ毎歳絶す執行なひしか今ハその式なしとい



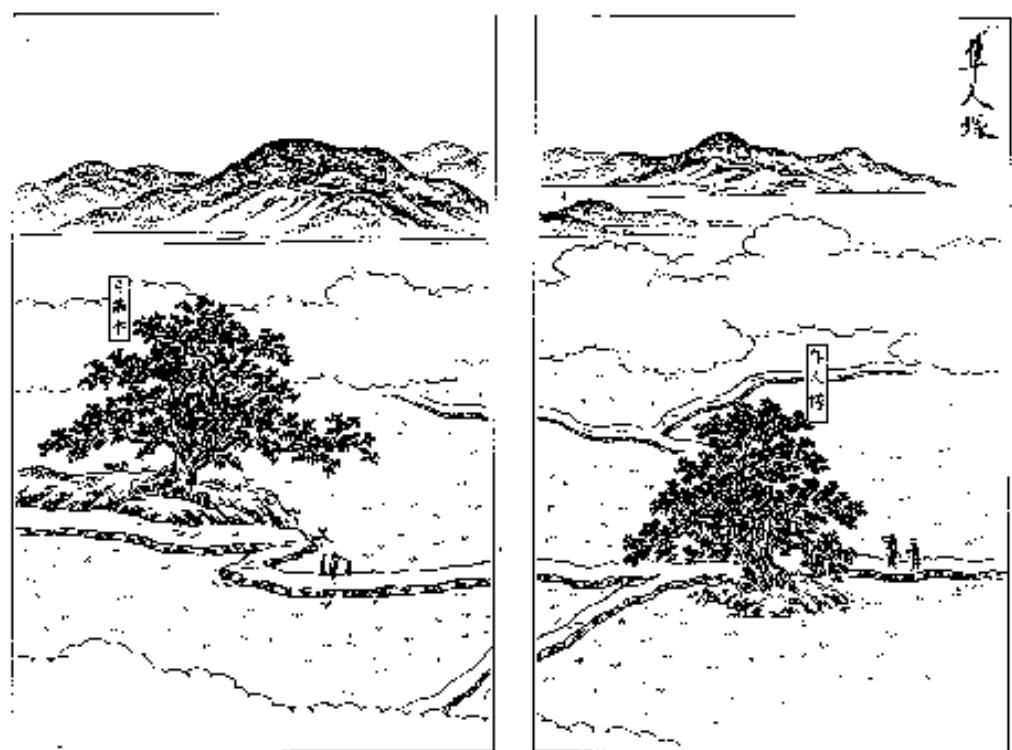
ふ、眞久村の田に補の森二ヶ所ある。一ハ弓張木森といふ。二ハ木桔梗で、今田池となる清水清水寺の下小川上神社田分新町村の平田の森。この四ヶ所を石原山といひ、往カマリトて其日毎カラリトに祭り行なう。

神の唐櫃カミノタケツ

本社内陣の西脇にあり鷹御魂を崇む。人延生の時舞御應と現し拝顕し、又神面麻布の神服大冠太刀など同じ櫃に納む。是工の御幸の祭具なりといふ。また賛祭の神事とて今にあり、本社の中西方数百歩田間眞那坂田に小さき森あり年入塚ハヤシトヅカと呼ぶ。いにしへは人かこの所にして正月十四日の夜邑人初狩に獲もの、猪肉を切て森に生たる竹にて三十二本の串を作り切たる肉を焼き地に立て祭る、いにしへ隼人を誅戮せし遺事をまねひて行なへる神事なりといふ。

若宮社 本社の西にあり、土蔵裏の岩となり、又早鳳ハヤヒコ神社同所にあり、日本古事記本城堂ハ社庭鳥居の

草人塚



右脇にあり、法師如来日光月光十二神靈應處を祀り、（云々）
さる年中當寺を往來する者多き。各右脇に立る石は
もとに施刻して安置せりといふ。

西隨神社本社の南なり

左脇に金二之社ハ島居の脇にあり大隅の地
主神にして大隅神社ともいふ、火門降尊を

祭れりといひ伝ふ、社司上原氏、別當寺を

尾牟礼山錫杖院乗林寺といふ、真言宗大乘

院の末寺なり、本尊藥師如來開基の年曆伝

ハらず、開山を竹林坊とて清水台明寺二世
の住僧なりけるよしいひ伝ふれとも星霜無
数の古刹しハく、荒廃に及びぬれハその來
歴詳かにしかたし

吉水山光明院念佛寺

重久村にあり地頭仮屋

の止方武町許り、時衆宗札州藤沢山清淨光
寺の末にして開山師阿智通和尚

俗傳號文兵基也

本尊阿弥陀如來

正徳元年金慶十鉢

弘安三年

邦

君道忍公の命ありて創建す、嘉曆中遊行六
世一鎮上人廻國の時当寺をもて大隅一国の
本寺と定めらる、本堂に掲る吉水山三字の
扁額ハ邦君寛陽公の真筆なり

大隅念佛寺にて越年し侍りける

他阿尊通著行四
十四世

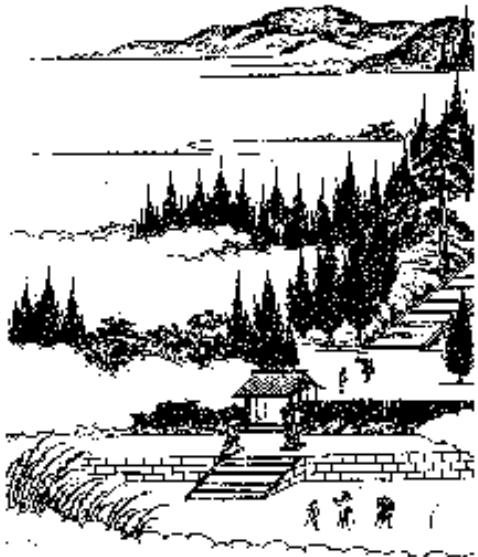
めくミ広ぐ隔てぬ春に大隅の国もゆたか
に明わたる空

全

立春のけしきや森の朝霞

全

むすひつるけさそのこほりとけ初でくむ
にさわりのあらぬわか水



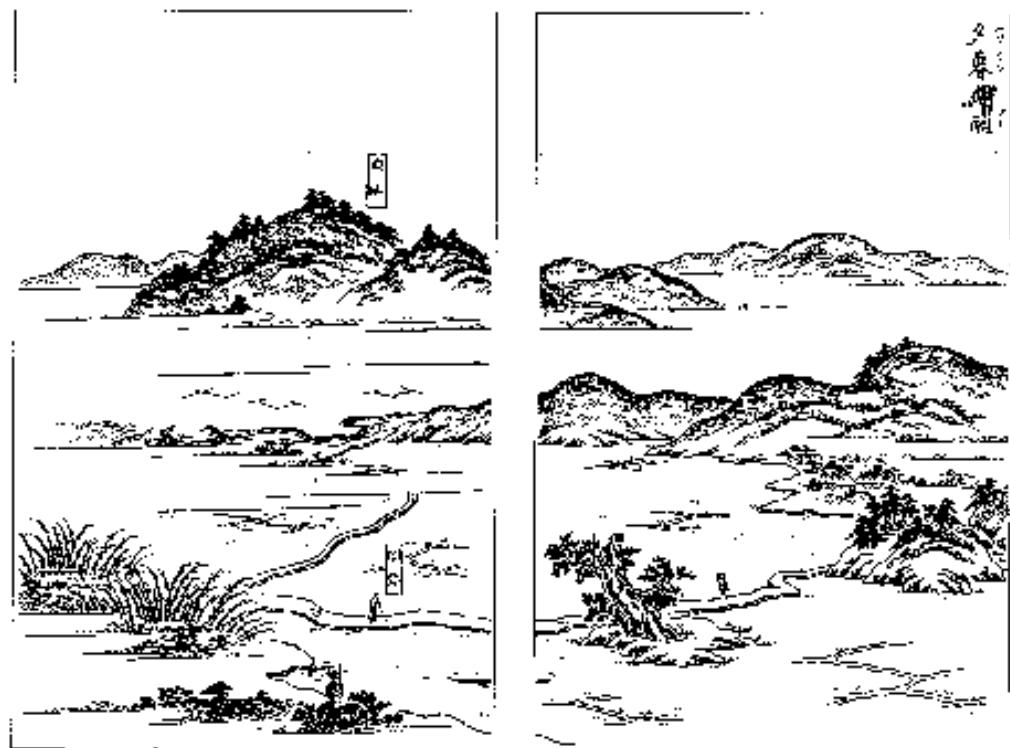
夕暮イマヅ

松水村マツミナシ

夕暮イマヅ

朝霞アサヒ

夕暮の関 松水村に旧趾あり地頭仮屋を距る
こと西方武拾町許り、日本地名便覽に載る
所の大隅國の名所にしていつれの時何人の
建たる関なることを詳かにせず、曾於郡本
城の酉戌の方なり、按するに本城はむかし
税所氏霧島社税所職となり代々爰に住居せ
しこと久し、故に税所氏居城の為に設けし
関ならん、前に松水川流れ今ハ同流成
まつの方に通る楠杉など多く茂りて森山なりしに今四十年前に伐
除き田畠となし田地の字を暮門クシカといふ、傍
に地蔵堂ありしとて其旧跡あり地蔵堂ハ今之山跡
をさる。と云ひ上古霧島山六社權現の花園な
りしに窓下りの時日のがれし所ゆへ夕暮の
関と名づけけるを今は略して暮といふとい
ひ伝ふ



辰天

夕暮の閑は卯木の柴折哉

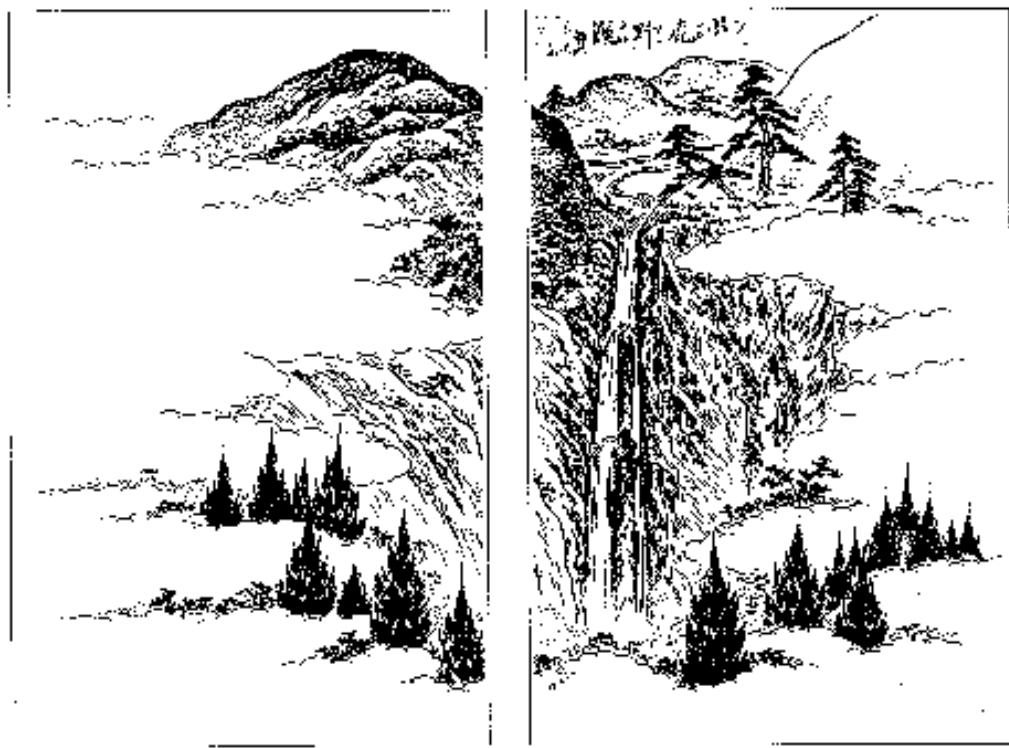
和水

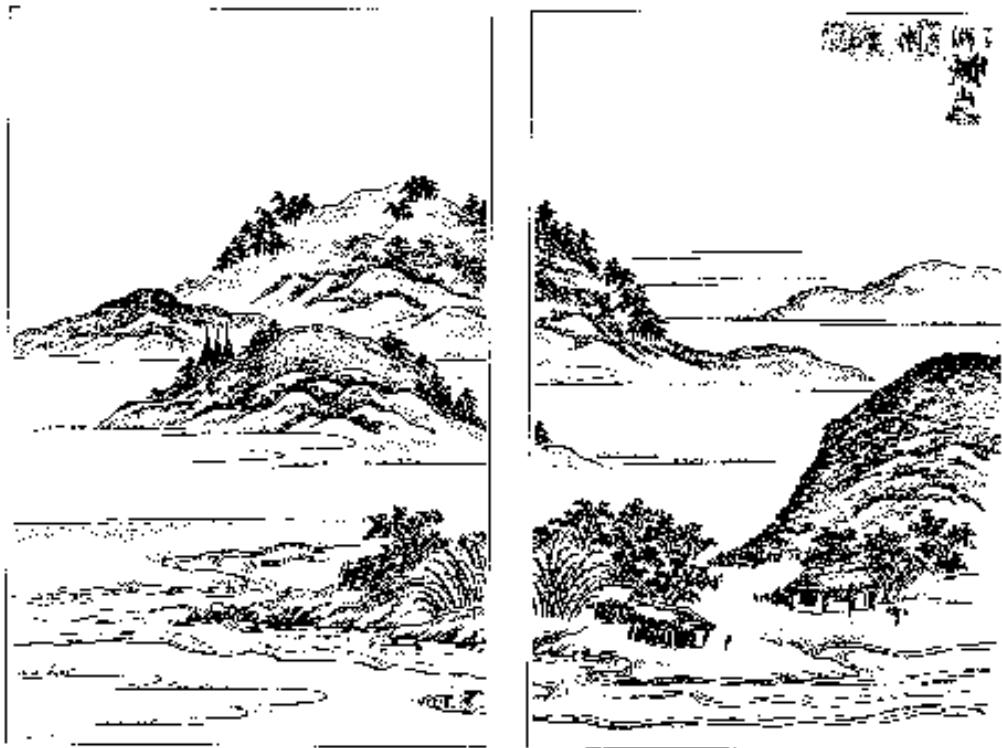
夕暮のせきもゆるすか行時雨

金峯山橋本寺吉祥院 重久村にあり城趾の下
なり、真言宗大乗院の末にして開山信遍法
印、本尊阿弥陀^{アハ}初め城中にありて橋
本寺といひこといへり

小鹿野瀧 松永村小鹿野といふ所にあり踊郷^{ヲヨウク}

持松村の境也、高ことをよそ拾六七間横七
尺計にして三段に落て松永川に流れ在里拾
武町余を過て夕暮の閑の前に至る故に或ハ
夕暮の瀧ともいふ、また松永川の水上に瀧
あり品三間許り横凡武間瀧淵武畦余、邑人
大瀧といふ、奥山にして見るもの甚たおそ





淵瀬山 ミツセヤマ
松永村にあり夕暮の間より戌亥方拾
る。松永川と合流す。

町許り松永川と踊郷安樂川と流合の上の山
なり、樹木森々としてその景氣殊に勝れて
見ところ多し、接するに松永安樂両川の流
れ合にして渦渦の多かりけるゆへをのつか
らその地に呼び伝へたりしに今ハ山にのみ
其名の残りたるにや、山縁詳かならず、日
本地名便覽に載て大隅國の名所とす

薩藩名勝志

卷之十二

薩藩名勝志卷之十一目録

鳴鶴
郡

清水
寺

風之
森

日吉
山王

諏方
神社

光福
寺

西徳
寺

国合原戰
場

樟ヶ原

小戸池

佐久良谷

中津瀬

柄基

興山寺

不動寺

大安寺

馬立陣

楞嚴寺

片岳寺

光明寺

持空院

景清墓

住吉神社

榎神社

上津瀬

橘嶺

磐根樹

下津瀬

宮浦神社

小松神社

惣神

剣人明神

端慶寺

日光神社

沢田神社

興禪寺

両足寺

瑞慶庵

官ケ原

古祥院

亘古古城

投谷人幡宮

徳泉寺

太玉神社

清水

菊銘山真珠院清水寺 キクメイサンシンシユキンヤイスイジ 弟子丸村にあり真三宗

大乘院の末にして開基作月詳かならず、中興開山賴誉法印承化年月
本ハラサ 本尊千手觀音寺中南の岳に安置す、寺伝云、坂上田村麿勢州鈴鹿の朝敵を退治せ、時觀音大士擁護靈驗あるにて大同二年洛陽に清水寺を建立し千

手觀音の像を安置あり、日本六十余州の貴賤男女大悲の靈徳を尊信せざるものなし、其時清水の城中に安置し清水仏閣と号しけるといへり感化に清水の名は出
新昌寺あるべく云々 いにしへの像ハ日野深賢作にして秘仏なり、今之像ハ止上神社の別当深亮房覚遍作るところなりといふ

仏頂山楞嚴寺

弟子丸村にあり地頭板屋より

中西方凡四町許り、曹洞宗通幻派下大真派

越前国宅良慈眼寺の末にして開山天眞白性禪師ゆゑに十三年癸酉九月丁巳夢現寺にて承化 本尊觀迦如來色 清水領主本田因幡守親治天貞トモヒロ を招請して開基す惣勝寺と云、二世機堂和尚今之寺号に改む、親治六世の孫本田紀伊守董親天文十七年落城の後荒廃せしを永祿四年右馬頭忠将の死骸



風の森 姫城村にあり名所方角抄に載て大隅の名所なり、年久しき楠なり、邑人是をこかの杜といふ久我大臣コガノイシジンてふ人の塚といひ伝ふ、又古歌あるゆへ古歌の森とも呼といへり、いつれとさして是非をなしかたし、隣邑国分の人は是を風の杜といふ、清水にて

風の森と尋るにしれる人少し、大和国にある人丸の墓を人丸のはかといひてたづねるにしる人もなし、かの所にハうたつかといふなるよし無名抄にしるし置ぬ、風の杜をこかのもりといふも此類ひならんか、三才圖会に風の森ハ大隅郡と記す、又或説に國分松木村こからすの森小島玄蕃大隅宿社あり奈良市からすのことなりといふ、皆誤れるなり、大原貞以名所跡をしるしたる書に風の森とて氣色の森

近辺にあるよし見へたり、今其社を見るに姫城村ハ清水の飛地にて国分に隣れり、久我のもりハ氣色の森の東北方拾町許り、貞以けしきの杜近辺と書しに符号せり、一樹にて両名のあること明白なり

名所方角抄

恨みしなかせの森なる桜花さこそあたなる色に咲らめ

此歌松葉名所集にハ大木にあり按察アゼナとはかり書たり、かせの杜ハ伊賀国にもあるよし記せり

仁壽春渚

風の森とてたゞおらぬけしきかな

進先鳥和水

根は苔の花所なりこかのもり



菊林山片岡寺

キクリンサンヘンカニ

弟子丸村にあり地頭仮屋を距ること牛方拾町許り、曹洞宗楞嚴寺の末なり、はじめ一人の老僧名をな岡の傍に草庵をむすひ片岡寺と号し常に庭座を拵ひ清景にして菊花愛す、慶長十年乙巳九月廿七日龍伯公菊花の為に高齋をよせ給ひ一首の歌を詠し給ふ花は公園分苑境にあひござく其後御掌す一此世松草利通等を詠し給ふを申表して菊林山片岡寺こそうに應物院とぞうといへる

龍伯

片岡をかこひて寺に住人ハうき世中やし

ら菊の花

ヒヨシサンノウ

日吉山王

ヤマノミコト

山之路村に鎮座地頭仮屋を距ること

と賣方毫里五町、祭神大日貴命

「井田古ニヒリ
二社の因ニ四社

安樂二社は日山西光院に接する

西光院

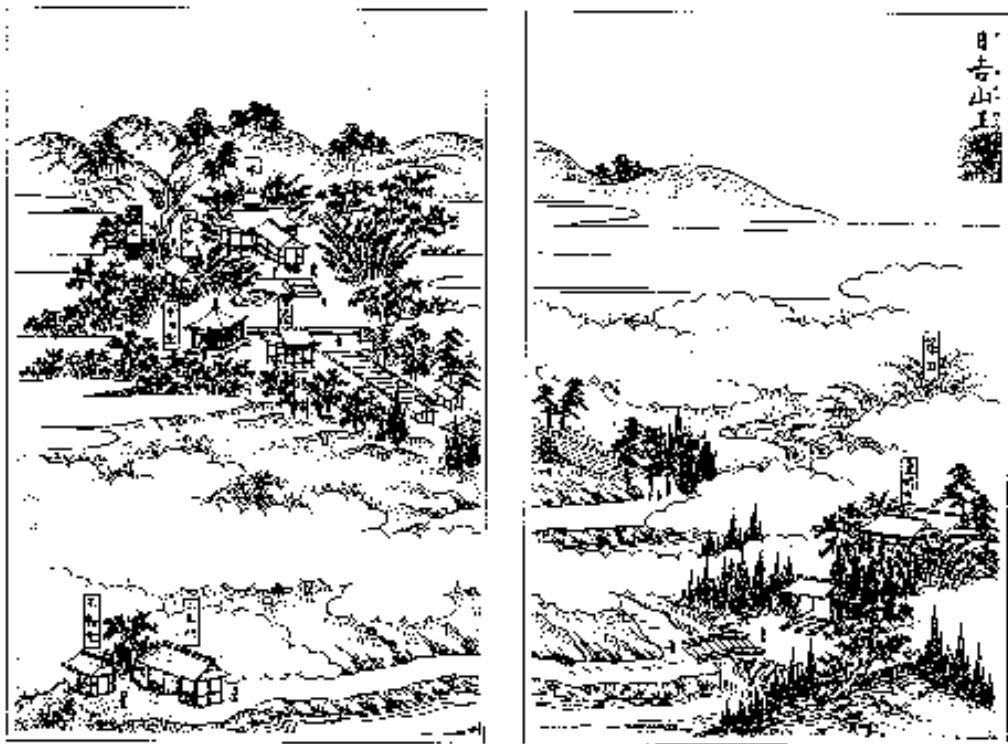
一丁未内下

当社ハ古明寺一山の

守護神にて上古地主權境といひ伝ふ

眞生院は古明寺の西面
古希門前より、森山あつ大樹の上に石の小祠
ある所地に肇るの曰號を伝ふといへり

一正門を過て二町



許り右に台明寺門あり、前に川あり流れに
通り五町許り至れハ石の華表立石階數十を
登れば左に本地堂あり本尊阿弥陀如來を安
す（後三尺六寸大木也大師作、時立候子第第三殿也曰天王寺也。世ハ二
年間御在候在三年十二月十九日御靈によりて建立し者也生前
に鐘樓あり
（鉢は廿五年十二月十日
九「塔の腰なり鉢等に載す）本社前後青葉竹
多くて、青葉の筍竹は此林より出たるといへ
り、世にたいミやう竹といふ、日本地名便



覽大隅名所青葉山と記したる即ち是なり、
社の西に高式間許りの瀧あり名付て淨水瀧
といふ社前の池に流て御手洗の水といひ祭
祀に供物を淨むる所なり、今の社司を
渡辺右京武敏といふ

竹林山衆集院台明寺 山路村にあり

古木の森の反
側八里許りにあ
り

天台宗隅州国分弥勒院の末にして本尊阿
弥陀如來

坐標度二尺六寸高也。額額四尺五寸、三
間の草に在す。伊豆久能建仁五年十二月造立し神
り

當寺創建年月及び開山僧伝ハラス、三

十九代天智帝勅願所青葉笛竹貢御所の地と

定め給ふ、往古ハ法相宗なりしといひ伝ふ、

笛竹の勅使來りて在聴官人住僧等に下知し
笛竹を掃除せしむべきの沙汰ありしと諭旨

及び將軍家執權の文書今に伝へて若許卷顯
然として寺に藏む、白鳳より四百年余を経

て寺廢するか大僧正行玄上人

日本第一大僧正玄上人
公七男及第四年及第
正徳元年及第

再興して大台宗に改たむ、また邦君節山

公の時命ありて真言宗に改め榮賢阿闍梨を
以中興開山とす

今此量の事にて兼修本尊を安置す、行
玄より榮賢の開山者世代詳かならず。

享保

十一年丙午八月邦君看邦公命し給ひて天台

宗に復し惠英和尚をして中興開山とし隅州

國分弥勒院末寺とす、持仏堂本尊不動明王

立像高五尺六寸四寸八分八厘八毫
額額五寸六分八厘八毫八毫八毫八毫八毫
初め本社の亥子方凡五六町

山手に安置しけるを堂宇廢してこゝに遷し

たりといひ伝ふ

篠田 鳥居の向ふ川越にある數なり、むかし

神武帝日向の國におはしまし東征し給ふ時
御矢の龜出し所といひ伝ふ、今篠竹おほし

隅州台明寺是青葉鳳笛之貢御所、白馬龍
蹄之清躅也、巖石廻外澗川横中遠近仰於

靈験、縚素致於帰依、爰古鐘銘云、天慶

九年之比鑄改昔日之小鐘云々、此鐘在寺

具如本銘、然今其勢卑少、其音不遍、適

送歲霜拙及穿闕、仍衆徒合力万人在勤改

彼古鐘、遂此大望上通有頂下度无間

于時正嘉元年丁巳冬十一月十九日庚午作

銘曰

梵鐘高掛 韻氣无疆 夕声伝風

曉響發箱 心池澄水 覺花園香

邪虎收晉 法鳥刷翔 聞堆尖峯

眼醒家鄉 感仏因緣 勸僧苦行

逸音遠至 諸天降望 三明開悟

六道閻傷

大檀那當國守護代左衛門

尉藤原朝臣兼頼

勧進者當山住僧阿闍梨亮十

銘彌者 藤原重房

大工 高麗行則 同助行

末吉

諏方神社

諏訪方村にあり 諏訪方村ハ上原郡御井村來吉
森林追跡町村を合せて曰俗諏

諏訪方村云
といへり 地頭仮屋を距ること成方式拾五町許
り、祭神二座 創建五月
三八〇 末吉の崇廟にして鹿児

農福ケ迫取訪の下宮なり、天文五年七月廿
一日邦君大翁公信仰して給ひてこ、に遷し給

創建の時姓名西根未上
ふいへり今は村名なし 社司安田左膳別当寺ハ和光
サシブンシキヤシシクシ 山慈心院千眼寺といふ、深川村にあり

無量壽山深川院光明寺 深川村にあり 深川村ハ末
吉村御井田

町木古の祈願所にして開基年燃詳かならず、
本尊阿弥陀立像鎮守熊野三所権現、当守は上

世黒七兵衛景清日州富崎を没落して中之内村柳井谷門出凡といへる所に來り建しと伝

比破城に及ひけるを寛保中本寺の円秀再興す

ふ 英著の傳業をもと承へて
柳井谷門出凡給者あり 中興開山山明法印といふ、

昔日福寿院橋本坊竹之内功木之下坊松本坊宝光坊南之坊七ヶ寺の塔司ありし皆廃壊して今存するものなし

弥勒山宝泉院光福寺 諏訪方村にあり地頭仮屋の申酉方八町相州藤沢山の末にして開山

遊行七世託阿上人文第二年正月十五日生 本尊阿弥陀如来、文和二年足利義持の文正親あり文和二年癸未十二月廿二日生 中興せしよしなれども一世より十三世に至り住持の名伝失す

景清墓 中之内村にあり中之内村ハ本吉野谷ノ村中也 田尻村を坐令中之内村といふ

り地頭仮屋の末申方宅里許り柳井谷門村落のうしる山中にあり、伝へいふ上総黒七兵衛景清日向の宮崎より來りて住居し終にこ、に死す、石塔ハ大五輪にして又小五輪石塔

捨四うしろに列す、同じ時世のものと見ゆ、左の岡上に火葬せし場あり平地一畝ハかりもあるへし、其岡のまハリ塚のことくこしらへたり、此所の農夫龜次郎は其裔にして徳、本尊如意輪觀音後後 上古大地にして中

西徳寺 深川村にあり地頭仮屋を距ること西

戌方武甲黄檗派鹿児島寿國寺の末にして開山玄默和尚、本尊阿弥陀寛延三年造営す といふ

連続し家に景清の位牌系岡太刀鎧等を藏めたりしを、七八代の前位牌系岡は失火に焼亡し太刀は大崎の士関武兵衛ヒヨウブヤウこれを藏め鎧は志布志の土某の所に藏むとなり志布志上某に嫁。今に二季彼岸武兵衛ならひに某景清の真参解ることなく常に龜次郎を問て投宿す、又護身の本尊なりとして塔のもとに弥陀観音を一宇に置て六月十七日をもて祭る、是等の事景清の事蹟と指して摭とすへきハ見へされとも其古墳尋常のものにハあらず、景清の末期諸説紛々或は宮崎に来りしといひ或は鎌倉に死せしといふ、藩居の地今に至りて考かへかたし

國合原戰場 末吉より志布志へ通る街道の左右広野をいふ地頭仮屋の辰巳方凡宅里、そ

れより遙北に下たれハ民居田島あり、すなハ此所より檍原に続く南は岡谷連綿たり、延文四年己亥十月五日邦君齋岳公求摩の相良貞幸の北原等と鬪戦し縊ふ所といへり

住吉神社 二之方村に鎮座、憶神社の西方凡拾五六町、祭神二座安田伊勢守・伊弉諾命・伊弉册命、例祭五月廿四日

当社は神代垂跡の地にして社山の廻り凡七里住吉山といふ大字で然と云ひ、大字あらじやと云つて日隅二州の

界なり、今生古社は隅州幡多郡二之方村に屬す日向郡西之郷村に附れる。相馬・日向・日向郡を領山中松七本楠七本椎七木合せて廿一本の神木ありといへとも今詳かならずして社の左に其神木を祭る所あり、寛陽公の時天和三年古田兼連卿に請て当社の縁記を書し神号五字の額を華表に掲給ふ皆兼連卿白筆也、慶長五年三月廿九日

貢明公四月十一日又貢明公慈眼公を伴ひ參
詣し給ひ和款を奉納し給ふ、或記曰、神功

皇后十一年長門国豊浦に住吉垂跡あり又三
韓を征し給ふ時攝州にあらはれ給ふ、よて
共に皇后の御勅請なり、皆住吉の和魂にして
荒魂は筑紫の小戸にます住吉大神と云々、

社司高橋伊膳

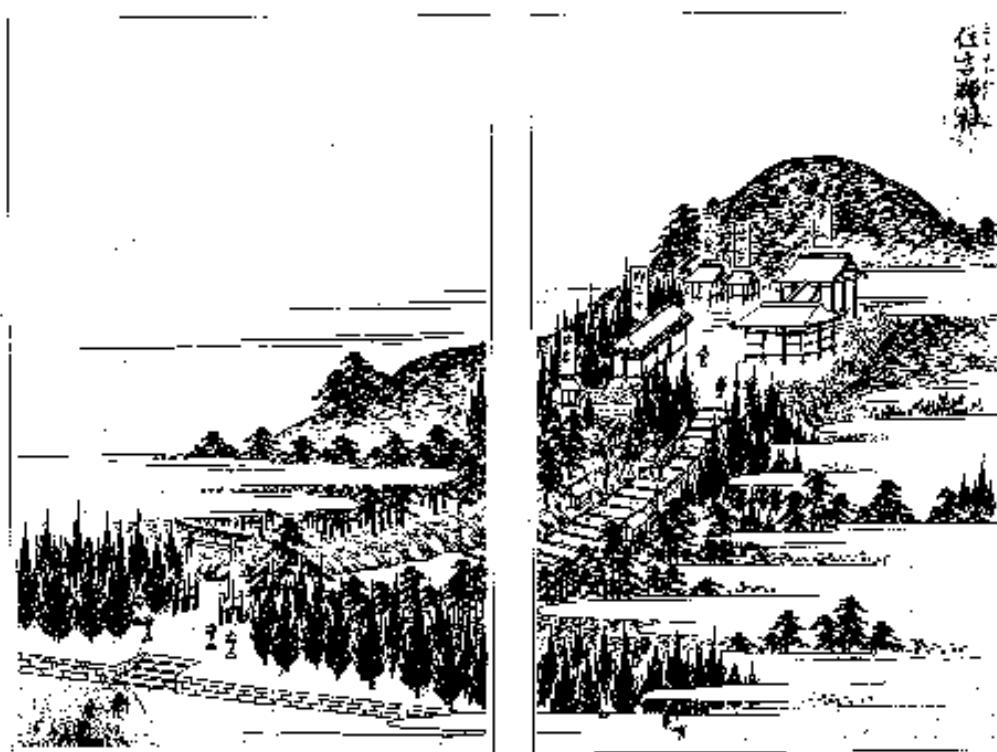
末吉修行の時住吉大明神に參詣し侍り
ける折よミて奉りぬ 遊行上人

一言の葉の道こそたへね世々の末

よしずミ吉のひかりくもられて

櫛ヶ原 南之郷村にあり本古は日蓮所居の地なり、古之郷
村は日蓮所居に屬す、庄内南郷

中森半太郎村を合て里俗南之郷村といふ 櫛嶽の南の広地中津瀬川のあ
たりをいふ、今田地となる、按するに櫛神
社より見へ渡りし岡陵は皆櫛ヶ原とおもは



れける、其山色の清氣^{きよけい}いふへからす

続古今神祇

ト部兼直

西の海やあはきか原の潮路よりあらはれ

出し住吉の神

名所小鏡

山右

櫛か原霧のうき橋かゝる也

同

大垂

朝きりやあらハれ出一日のすかた

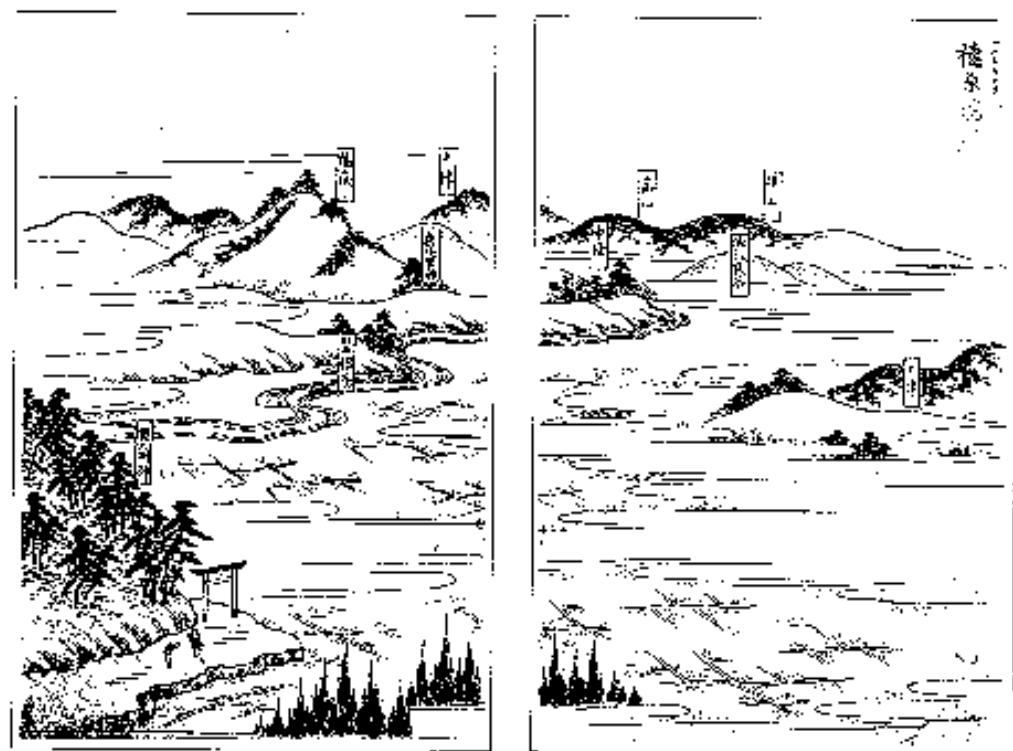
宇橘

涼しさや櫛か原の白幣

櫛神社

櫛ヶ原に鎮座地頭仮屋を距ること凡

壹里余、祭神一座御社諸尊神作母靈当社は伊弉諾尊櫛か原中瀬にて身首貴祓の遺跡によて勅請あり其年月詳かならず、初め小社なりしを有邦公の時寛保二年癸亥四月再興し



給ふ、神山にハ松林鬱々として清淨の靈地也、宝殿ハ山の傍に一段高く構へて數階を登る橋嶽高山短山其外名たる神跡ともミ

ゆ

小戸池 ヲトノイケ 榛神社の右脇にあり今ハ荒廢して廻り僅に三拾三間池中に石菖蒲多し、常に清水涌出して四時増減なく水勢強く神水といふ、婦人この水を腹すれハ安産なりといひ遠近貴賤となく産月にハ必らず神に捧り神水を受るものおほし、名所集日向に橋の小戸と載たり

新後拾遺神祇

津守國量

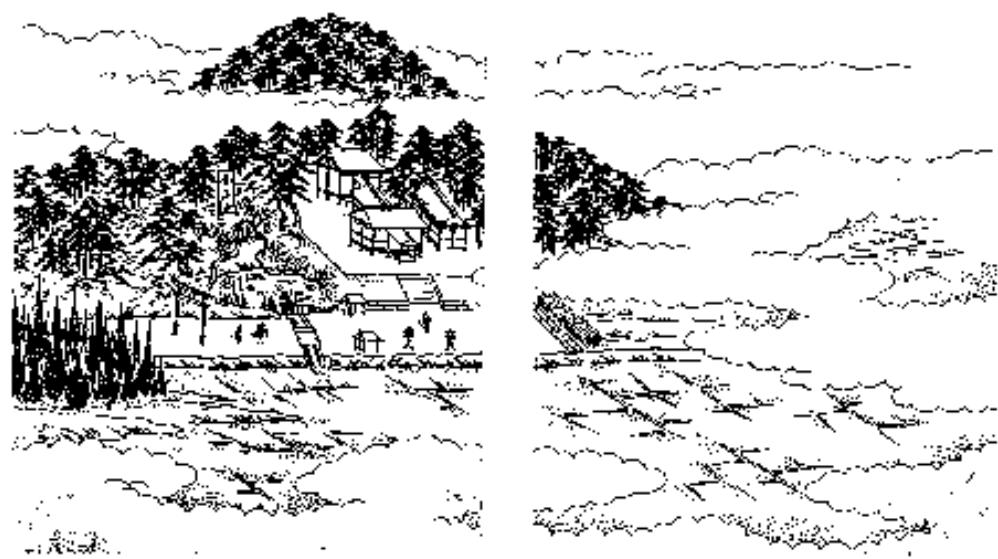
橋の小戸の塩せにあらはれて甘よりにし

神そこのかみ

神道白首

ト部兼邦

榛
神
社



橋の小戸の御祓を初にていまも清むる我
身なりけり

誹諧名所小鏡

口向我樂

小戸の瀬や神代の御祓ふく風

同

秋もこの浪間より来ぬ朝のかせ

日州憶原記

日州橋之憶原者上古之神跡也、載于国史
在于人口炳炳焉、神代卷曰、伊弉諾尊當
滌去吾身之濁穢、則往至筑紫口向小戸橋
之穢原而祓除焉、遂將瀨滌身之所汚、乃
興言曰、上瀨是太疾、下瀨是太弱、便濯
之中瀨也、因以生神号曰八十杠津日神、
次將矯其杠而生神号曰神直日神、次大直
日、又沉濯於海底因以生神号曰底津少童

命、次底筒男命又潛濯於潮中因以生神号
曰中津少童命次中筒男命又浮濯於潮上因
以生神号曰表津少童命、次表筒男命凡有
九神矣、其底筒男命中筒男命表筒男命是
即住古大神矣、底津少童命中津少童命表
津少童命是阿彌連等所祭神矣、今郡吏牒
久行語鹿兒島諱方神主牒信秋口、我生神
國尊崇神明且更此郡也、幸中之至幸乎、
願增其旧制以擴我喜、信秋感其志願之至
共以告太守羽林源光久朝臣、朝臣載喜載
命令信秋圖其地、予閱地圖、河水映帶山
巒逶迤、宛如展綺川圖矣、崛起乎中央龍
崖撐天者橋嶽也、麓有真津男神社而面中
瀨、巽方有下津方男神社而並下瀨、艮方
有上津方男神社而對上瀨瀑布噴激濺成三

瀬者桜谷也、望之林壑鬱紳者住吉社也、前太守常詣此社詠和歌以翼神庭、其下有小戸池今則稍荒廢猶雲土夢作父坎、檍原以南則大洋也、曩往兼直歌曰西海在東の御路を
とおらむれいこの蓋詠此耶、於是嘆曰、物有理則必有

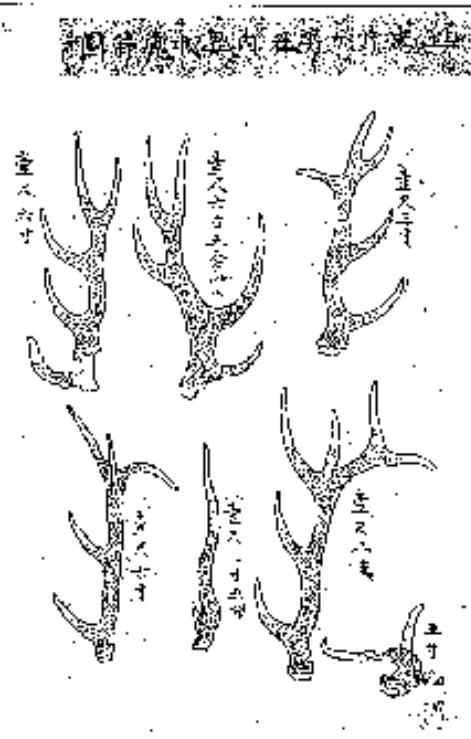
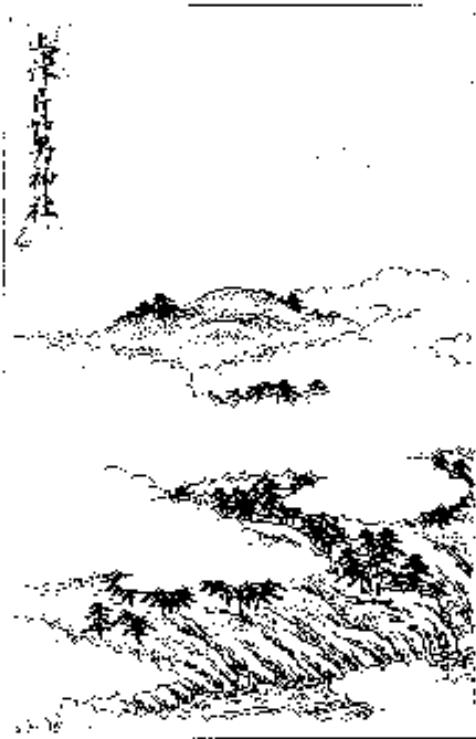
司又令寮采修焉、凡以六月十一月為式詔
之神事也、亦宜謂之政事也、亦宜豈小々
故事哉、今太守拔除于茲諷詠于茲固向淳
素民游清淨、他日致君堯舜繼職禹稷其亦
庶幾乎、屬予作其記故不能固辭聊述旧史
之旨以爲記詩

天和二癸亥年閏五月上澣

神祇道管領卜部朝臣兼連

焉、夫蕩滌中瀝而化生九神者蓋清淨直心而已、所謂包天地表出日月之上蟬蛻於塵區者也、若能體此心則邇事父遠事君且風花雪月之情無處不至也、案先儒以舞雩為上已祓除之所、加之祓禊於四方左氏之所注上已官民禊飲於東流水上、漢志之所誌其來尚矣、我国天子詔有司修祓除國

カミツセ
上津瀬 南之郷村にありて榎神社卯方武田金
すなハち上津片加男神社此うへの山中に鎮
座、祭神三座八十榎神・上村長少・小曾根義高
神 祭日一月四日・十一月初申勅語年紀謹
かならず、いにしへハ今の社頭止方四町許
りに安鎮ありしを爰に遷したるといへり
舊姓今主社の廿方七町許り岩川あり、所謂伊
住諸尊祓除し給ふの時上瀬太疾しといふも



諸名所小鐘潮路
潮くらしと津瀬さして啼鶴
春波

のなり、其源ハ郡城より出て川幅武間許り
岩石を漲り急速の流にして志布志田之浦村
に流れゆく中臣拔云、速川の瀬とハ此所を
いふといへり、宝殿中に多く鹿角を納む、
例祭猪鹿を取獲て贊となすといふ、其内異
角は図を写しぬ

佐久良谷

南之郷村にあり穂神社辰方凡壹里

拾八町許り東の高岡を高山短山といひ西の

高巒を佐久良ヶ平といふ、其谷合に川流れ

佐久良谷と名付佐久那谷ともいふ、谷のう

ちに岩窟あり足を天盤戸といへり、窟中広

からす社なし、巖洞を神と称して常に参詣

するものおほし、岩窟の前に高六七尺の瀧

あり所謂神留り座すといひ天盤戸を押開く

といへる是なるへし、中臣桜云、高山の末

短山の末佐久良谷に落瀧ある即此所をい

ふならん、高山の打越の岡をさして里人高

天原と呼び伝ふといふ承人曰、吉美原とへ上天のことき
り、佐久良のよそへがむる谷
をも庭てといふことそ近江国名所に桜谷を載

たり名寄に俊頼の歌あり、春ならて桜谷に

ハみにゆかしこりともこりぬ道の遠さよ、



これ神跡の佐久良谷とハ見へす

橋嶽 （アキハナツカ） 南之郷村にあり櫛神社廿方武拾七八町

連山ありて其中に名を得る一嶽あり、その下の谷を橋ヶ谷といふ、樹木はなハた茂れ

り谷の間より水流れ出て中津瀬に入る嶽の半腹

アシハナツカ

真木男神社

を安置す、祭神二坐

アシハナツカ

中津瀬

アシハナツカ

年正月廿六日連山の間に社つくり

して升ること拾町許り、勧請年曆許かならず寛文二年正月再興棟札あり

中津瀬 （ナカツツル） 南之郷村にあり櫛原を東より西に流

る川をいへり、其源は橋嶽の山中に出て櫛原を流れ都城に通し後は日州赤江の淵に出

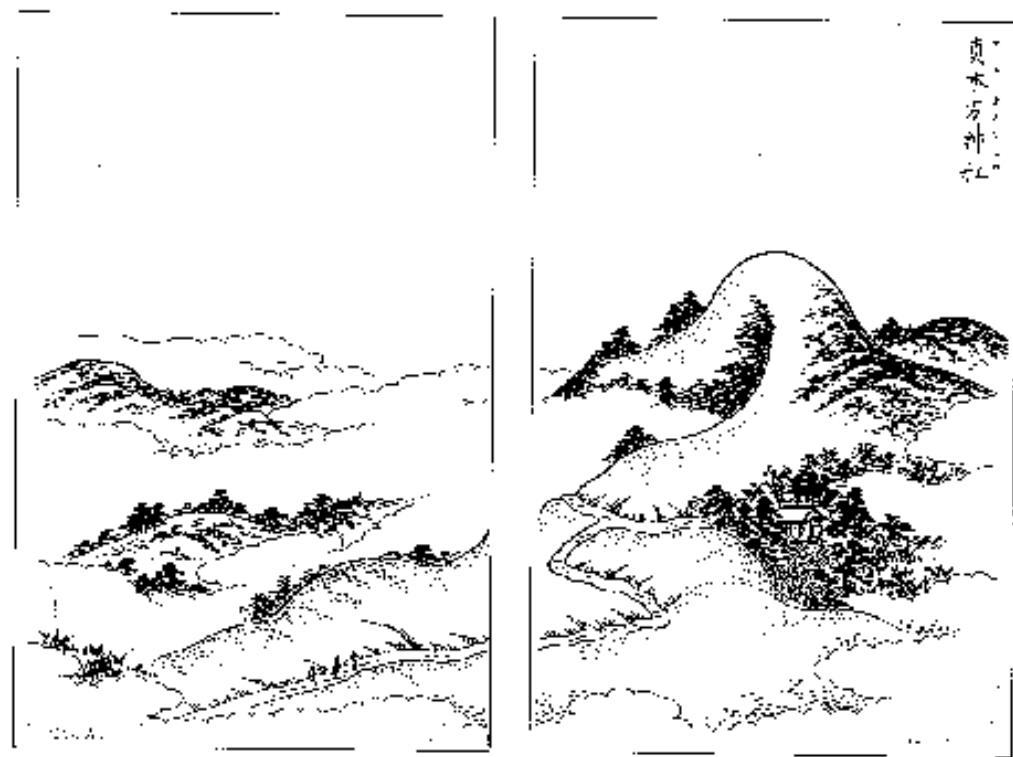
る也、中津瀬は渡り凡拾間許りにして上の岡に

（アシハナツカマツクノツカ） 中津真木男神社

（アシハナツカマツクノツカ） 建治三重櫛原中津少水神社

を安鎮す、櫛神社の卯辰方拾三町許り社頭の右

奥木方神社



に大楠あり其廻り武丈四尺、神代巻伊弉諾尊身の瀧穂を滌去り給ふといふ此所なるへし

説話名所小鏡

高坂
松翁

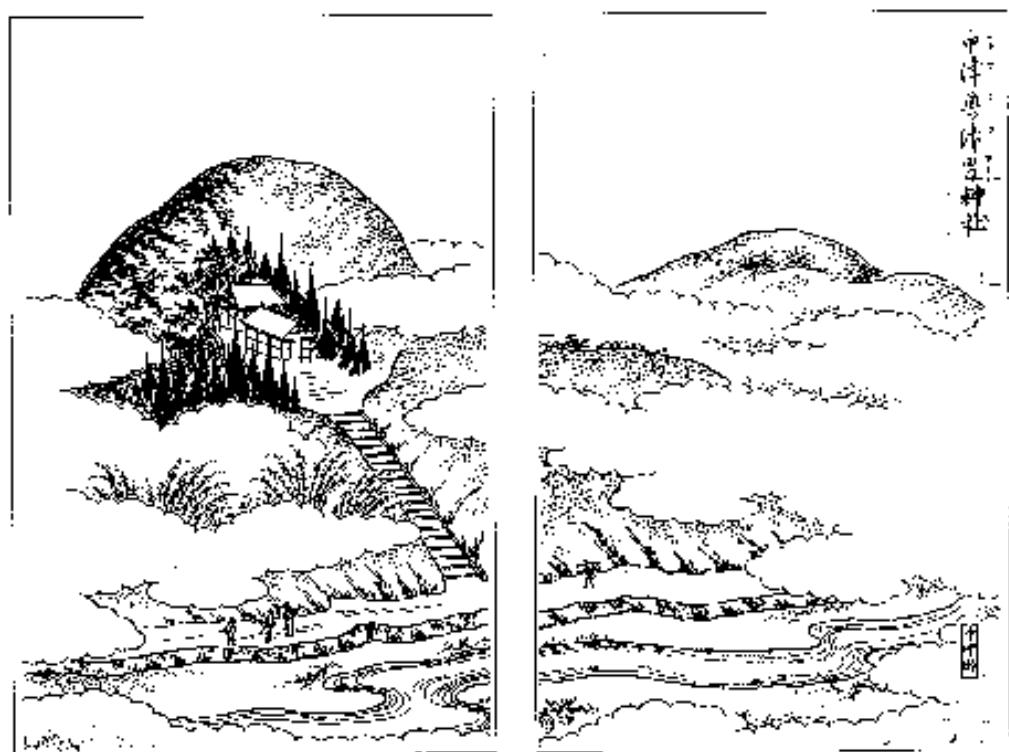
三つの瀧に吹わかれけりむら千鳥

盤根樹イハチコ 南之郷中津瀧川水中にあり榎神社卯

方六町余、毎歳に洪水沙石の為に埋りて年
を経て顯出るといふ、今は南岸の測にあり
て黄色の土石其形爪の如し、水中見所凡長
三尺六寸横式尺八寸許り、砂中に埋しこと
幾尋なるを量りかたし、中臣祓云、盤根樹
の立草の垣葉に語止めてとあるは是門石な
りと社可高橋某かたりき

柄基ハシモト

中瀧川柄基井手南方田地中にある白砂
の岡なり、榎神社戌亥方凡式拾町余其高さ

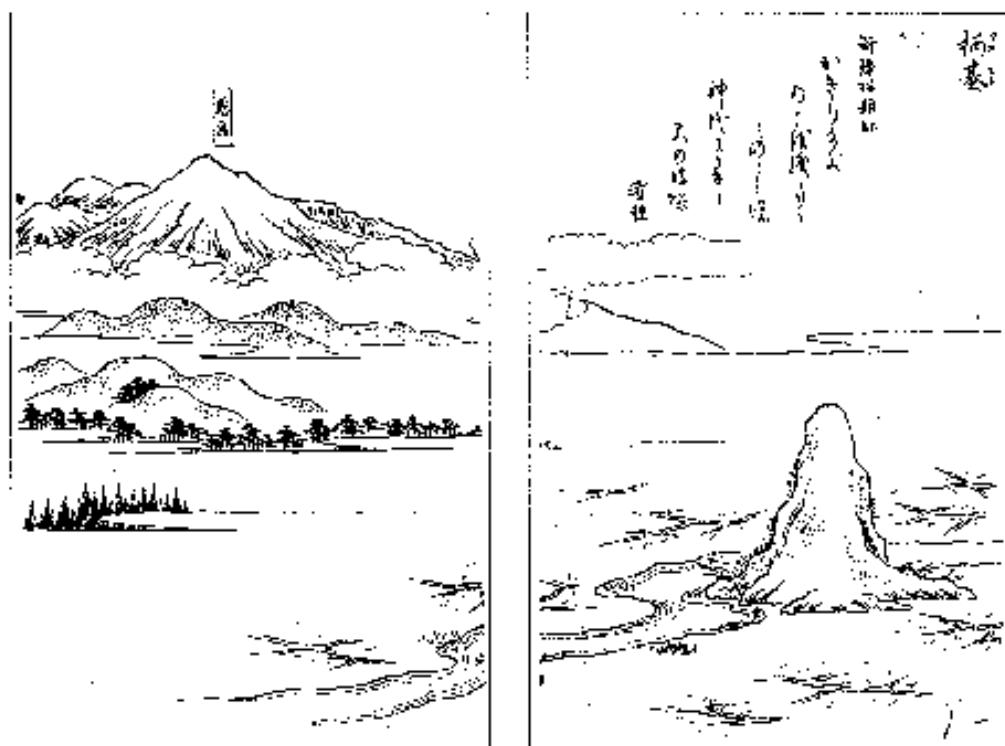


こと三四間めくり拾巻間余邑人是を天の浮橋の柱なりといひ、いにしへより此白砂を取ることを禁す、今その田地の字を浮橋といひ近境をなへて橋野とよぶ、皆これに由ると見へたり、橿原は常に霧深ふして霧島山より此岡にたなびき来れる朝霧の風光をのつから橋の形の如し、いにしへより里俗伝へて天の浮橋といふ、よりて浮橋橋野なと名付しといへり、橿原にかかる名のありしこよしなきにもあらねハ、其図を写し霧島山（霧島には末吉を相手）遙に見る所の図も并せて爰に備ふのミ

新題林雜部

実種

かきりなきあとを残してそのかみの神代にかけし天の浮橋



下津瀬

南之郷村にあり其川源は同村の鹿倉

山に出て松山を流れ志布志安来川に至る、

下津片加男神社鎮座せり、祭神二座

大吉口通底
地主神命底

祭神命御祭十
ノノ申申日 櫛神社を距ること辰巳方凡式拾七

八町、慶長十四年十一月廿四日棟札を納む、

社山の前岩川にて渡り式間許り即ち神代巻

下瀬は太弱といへる、今に至りて静かに流

れて清淨なり、所謂上瀬中瀬下瀬は同じ川
に三の瀬あるにあらず、三流れの川にをの
く、名を得る所あり、其境地を観さる人は
是を知るものなし

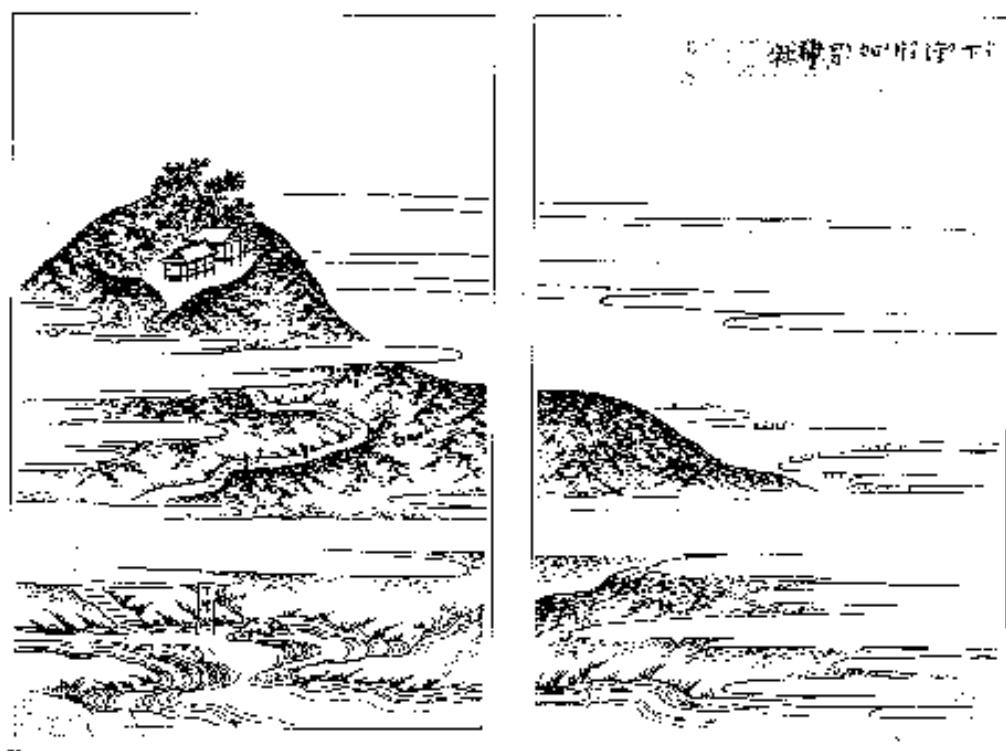
諱禁名所小鏡

堀雨

初潮やト津瀬とても猶はやし

達磨山興昌寺 南之郷村にあり地頭仮屋を距

ること辰巳方拾三町許り曹洞宗福昌寺の末、



木尊积迦如来、開祖の年月しる事なし、中
興は福昌寺五世心巖良心和尚、往古は寺号
正功の文字を用ひたりといひつたふ

福山

宮浦神社ミヤンラシノミコトノミコト

福山村海辺に鎮座地頭板屋ハタケヤ同村上

あり

距ること二午方を町許り、祭神十三坐アマツサセ

五代傳成天皇、祭七座下終ト月廿九日、万初卯月九月九日十一月廿四日当社勅請の履歴詳かなら

らす、延喜式贋驗郡宮浦神社と載せて大隅

国五座の其一なり、福山一郷の宗鎮守にして

神祇道管領徒三位ト部兼雄卿執奏によて

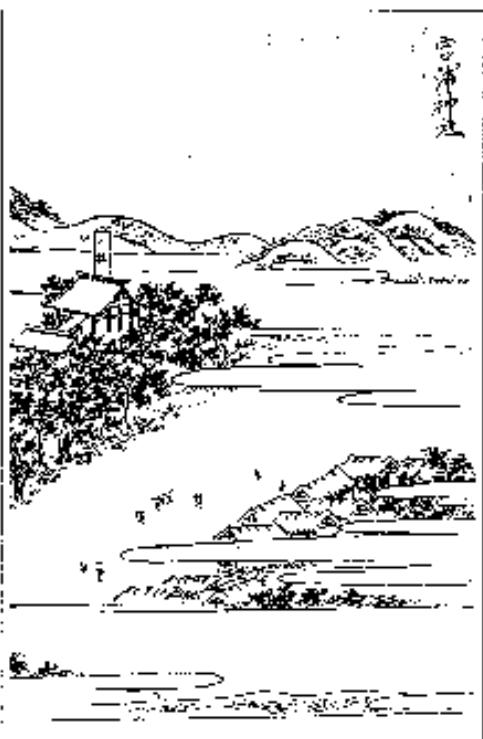
宝曆二年十二月十八日正一位神位宣下兼雄

卿官幣を授らる、当社の祝坂元宮内盈富上

京して勅宣及び官幣を守り翌年五月十五

日宝殿に納め華表に正一位宮浦大明神八字

の勅額を掛らる、兼雄卿の染筆にして神威



ますく顯然たり、今の祝を坂元宮治益榮といふ、別當寺を不動寺といふ、内陳の事ハあつからず、什宝に獅子丸^{ミミズク}金剛宝劍^{カマツチ}二柄の宝劍を納めむかし源三位頼政鶴を射しとき帝の賜ふ所の劍なりといひつたふ、頼政の孫兵庫太郎当國に下向して本邑を領し廻城に世々住居すと見へたり、宝劍おさまりしハ此由縁にや、正月廿五日

例祭にハ徑五尺八寸の的を社の庭中に懸ケ

神の的と称し神官の者武人烏帽子白衣にて之を射る、鶴の惡氣を祓ふ神事とかや、是廻氏本邑を領せし時始るならん

石上山平等院不動寺 福山村にあり地頭仮屋

より寅方四町余、真言宗大乘院の末にして開山歎能法印^{承化年間}本尊不動明王^{開基年}

月由緒詳かならず

小松神社^{コマツノヤシロ}住例川村比^ヒ首木野に鎮座^{ケンザ}地頭仮屋の子丑方武里三拾町余、祭神九座^{カミヌカミヲモニスル祭ノ日辰酉五月}九月十一日酉月^{九月十一日酉月}勧請年月詳かならず、当村の生土神にして小松大明神と称す

永泰山大安寺 福山村にあり地頭仮屋の後宅町許りなり、曹洞宗希明派上野国雄永郡浚

閑村長源寺の末にして閉山勝巖祖幢和尚

本尊十一面觀音

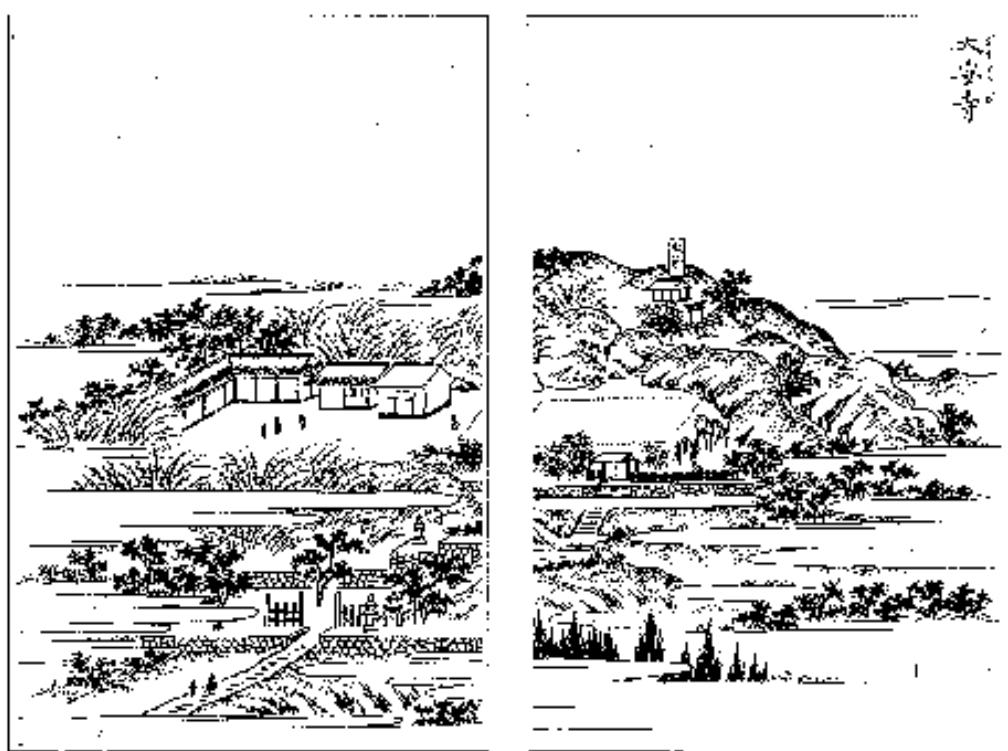
塔

ハ元和五年大内守の五世孫妙誠良常
七世孫也、天文元年二月廿二日不対

初め肝属河内守兼久か開基にて肝付郡高山
にありしを一世包山樹心和尚故ありて大廻
に移したりしに、永祿四年辛酉七月十二日
大中公の令弟島津右馬頭忠將小廻坂中に戦
死す、ここにをひて寺を今の地に遷し忠將
の法号大安の二字をもて寺号となし山を永
泰と改め菩提寺となす、寛政九年の冬類火
に逢ふていまた寺屋造営せず

惣陣

福山村にありて今牧内なり、地頭仮屋
を距ること寅卯方三拾五町余、初め牟礼と
いふ、貫明公永祿四年七月肝付省釣と戰ひ
給ひし時陳所の旧趾なり、廻大塚陣といふ
ハ是なり、其後惣陣と称す



馬立陣 同村馬立坂の南にあり古城と云、地頭坂屋の辰巳方拾町余右馬頭忠将の陳所なり、忠将肝付勢の為に戦死す、廟塔ハ馬立坂を登りて九町余にあり

敷根

劍大明神 敷根村敷根村中俗に呼ぶに鎮座地頭坂屋同村にあり

をさること成方三町余、祭神一座日本武尊御祭元月忌日十一月初

^{勅諦}年月詳かならず、社司瀬戸口伊膳祈願寺遣持院これをまもる

福如山常光寺蓮持院 敷根村にあり地頭坂屋より卯方六町余、真言宗大乘院の末にして開山明濟昌富の子の僧にして、本尊愛染明王坐化年月詳かならず開基年月詳かならず

寿永山瑞慶寺 敷根村にあり地頭坂屋より亥方壱町許り、西洞宗福昌寺の末にして開

山大藏和尚 晋高二十世住持慈雲寺、本尊阿弥陀如来本尊阿弥陀如來

開基年月伝へらず

勝浦城 上之段村にあり地頭坂屋の寅卯方武里余山中にして上古勝浦姫居住の地といひ

伝ふ、かつら木といふ大木壹株あり高五丈餘、根き丈余土民千本木などゝいへり

財部

日光神宮 北俣村宮原に鎮座地頭坂屋北俣村にありを

さること申酉方三拾町余、祭神伊勢内宮賀茂下上大明神正月一月忌日十一月廿四日勅諦年月伝へらず

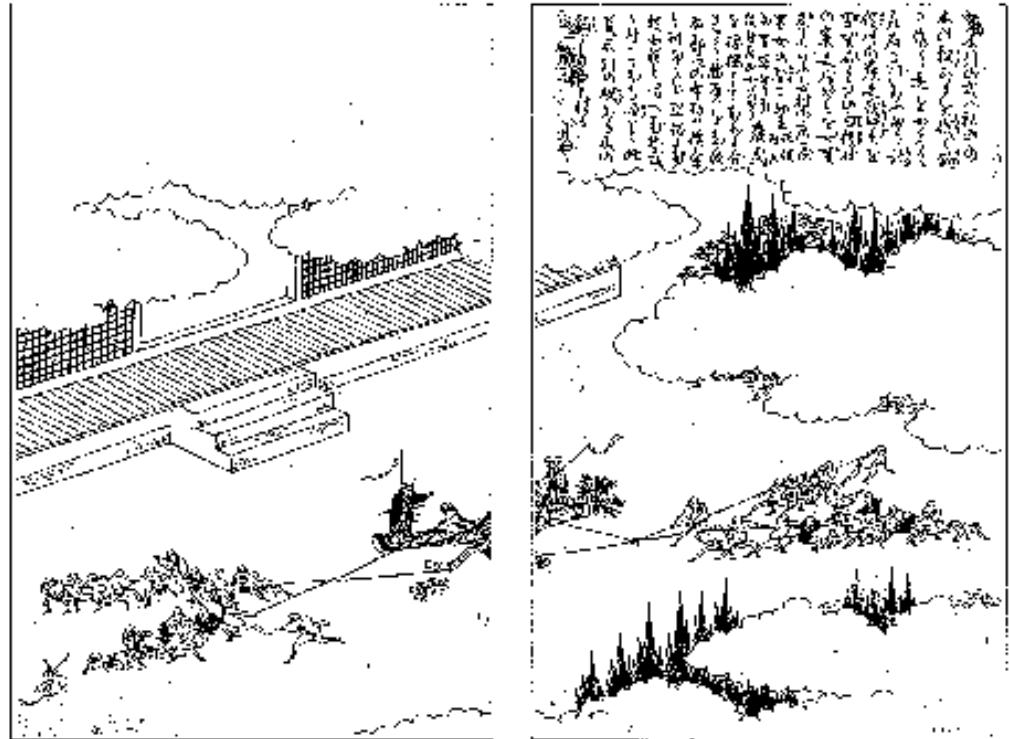
す、初め今の大社より申方五町許りに鎮座ありしとそいつの比にか今の地に遷宮したる詳かならず、いにしへハ大社にて神領若干石ありしといひ伝ふ、慶長四年慈眼公日州庄内の賊を討給ふ時当社の加護あるによて

翌年二月十三日賀明公社參し給ひしとなり、
二月十二日の例祭を打植祭りといふ、北俣
南俣両村の農夫社前に集り南北に分り社山
の木を伐り賀木引の勝負あり、山縁詳かに
らす、財部一邑の惣廟とす

賀木引の式ハ社山の木の枝あるを伐て鉤
に作り足をかけて左右に引あふなり、北
俣村の農夫伐出すを男賀木といひ南俣村
の農夫伐出すを女賀木といふ、両村の庄
屋男女の姿に出立北俣村正月出立女姿なり
もく村上を女姿なり農民を指
揮して南北に分れて勝負をなす、財部郷
の本村ハ拾余ヶ村なるを里俗南俣北俣と
呼へ南北武ヶ村に分ち呼こと此賀木引の
叔ある木の鉤より初まれるにや

日光神社





宝積山正寿寺 オクシヤクサンショウジ

下財部村にあり

財部村ハ上草市區の町
にてモト田村村ノ日向

地頭仮屋 チヅカヤ より貢方三拾二町余、臨濟宗

五山派隅州国分正興寺の末にして開山桂巖

和尚 西福寺圓山也、國師の弟子
子南林也安が和尚の弟子 本尊如意輪觀音 坐像長丈
光才蓮華有

嘉曆二年の開基なり、或説に貞治五年嵐山

下總入道當國に下向して建立すともいへり、

何れか是非を知らず、門の左右に普賢文殊を安して当寺の鎮守とす、本尊觀音大士ハ産婦の擁護並驗多しといふ

澤田神社 サハタノヤシロ

下財部村に鎮座地頭仮屋の並方拾

九町余、祭神詳かならず、宇佐八幡のよし

いひ伝ふ 本地靈験者祭二月
十九日十一ノ一勸請年月伝ハラス、永

正十六年己卯七月二十一日再興の棟札あり、

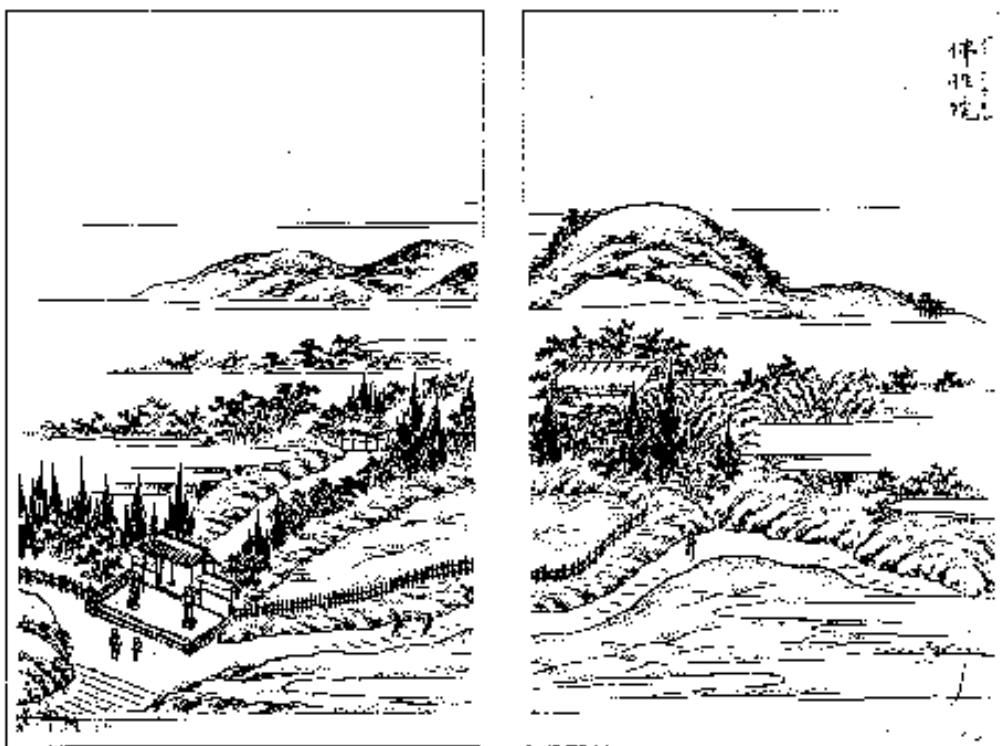
社伝云、当社は霧島山四門隨一の南門にて社前に池あるゆへをもて沢川大明神と号す、

霧島敷地御手洗四十八の其一なりといひ伝
ふ、今に小池あり当村の鎮守生土神なり

小牧山法嚴寺仮性院

北俣村にあり地頭仮屋

の亥子方七町余、真言宗大乘院の末にして
開基年月由来詳かならず。本尊不動明王
中興開山舞海法印といふ歎永中の人な
り、当寺に旅僧來りて祐を喰帰る時に小刀
に一首の和歌を添てこゝにさしかゝるゑに
しか旅の身に情かくるを頼にそ行といふ、
こかたなたしかにをくの沓冠を詠し残した
り旅僧ハ西行法師なりと寺伝あり、今接す
るに寺の創建も詳かならずして西行の詠歌
伝へしこといふかし



雲龍山興禪寺

北俣村にあり地頭仮屋より西
方四町余、臨濟宗国分正興寺の末にして開
基年月詳かならず、開山月川和尚ハ勧請に
して弟子不磷和尚の開基なり、本尊千手觀
音坐像是尼守矣作初め北俣村浦興禪寺といふ
にありて純甫和尚正室八年度六月二日示今の地に移し
たりといふ

市成

垂野城跡

諏訪原村にあり領主坂屋

市成の子孫十
郎義義義義義義
七代あり

を距ること子丑方凡六七町、上古の

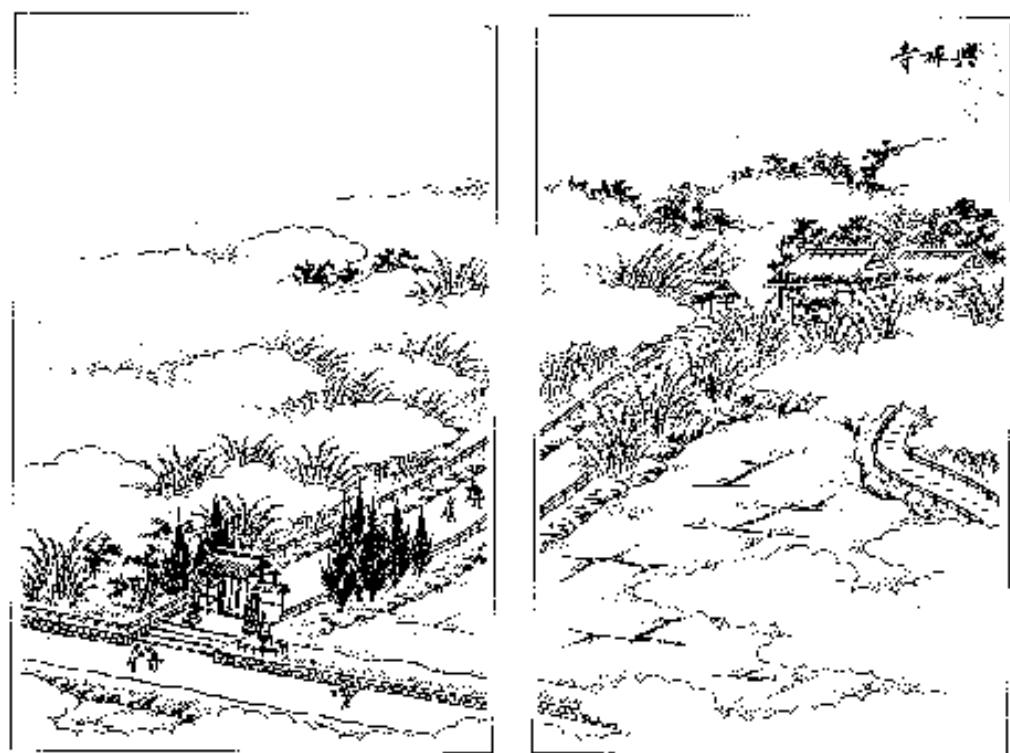
事詳かならず市成氏居住す、天文十三年山

田加賀守忠広市成を邦君大中公に献せしこ

と見へたり、今は山林深々たり、敷根中務

立ノヨリ頼平久方の先祖以来伝領すといへとも爰に居住

することなし



宝城山兩足寺

垂野城跡北一之丸下にあり曹

洞宗福昌寺の末にして開山松圓慧椿和尚本

尊地藏菩薩

坐像

立石は土岐四郎左衛門尉國

房嫡子賢太郎頼房

天文元年二月十日卒

没後の為

に隅州小河院敷根村に創建し大儀庵と名付
といへり、国房十四世敷根中務少輔頼賀文

禄四年大隅郡垂水山上城に移り寺もまた移

し両足寺と改号す、慶長四年又高隈に移り

てこゝに移す、同十九年頼賀四世敷根中務

立頼市成邑を賜り今の地に移し菩提寺とな

す

太玉神社

市成村に鎮座領主仮屋より辰巳方

凡拾五町、祭神一座

合掌例祭月朔日當日

の惣鎮

守にして肝付河内守兼續の時建立といひ伝

ふ、天文二十三年櫻札に地頭岸良伯耆守兼

慶と記す今其棟札朽て見へす

鳳林山瑞慶庵

太玉神社の卯方式町許りにあ

り曹洞宗兩足寺の末、本尊祝迦

坐像開山吟

翁龍和尚開基敷根中務少輔頼賀、天文七年

子息備中守頼兼菩提寺となして敷根城に建

立す、其後愛に移す

恒吉

投谷八幡宮

大谷村に鎮座地頭仮屋

辰巳方を祀

ること半方毫里、社殿方角辰、祭神國分正

八幡宮に同し

正保八年一月十五日

当地の宗鎮守

にして勧請の事跡詳かならず、別当寺吉祥

院におさむる所の縁記を見るに和銅元年八
月十五日正宮の嫡女を投給ふよゝ見へたり、
然とも奇々怪々信するに足らず近世売僧の
妄作なるへし、社司吉岡右近家にも由来記

太玉神社



鞍谷宿



といふ小冊子を藏む、其記文吉祥院の縁記に異ならず今その神山は街道の側に革表あり投谷八幡宮と扁す、夫より阪を下ること武町許り谷の底に平地あり松杉深幽典雅まことの佳境と謂つべし、廟庭に芭蕉はなハた多し社頭申方二十間余の岸壁に大なる石三あり是を石休といふ、内陣に正体とて金銀に梵字仏像を鑄出したるを安置す木地蔵院業
御靈音寺等り永平天正の慶^{天正}守年^{守年}と見えり、年正祭にハ胞衣松^{春月}月^月野^月上^月花立^{大輪身方}社にあり此両所に神土面十一を守下り御酒を祭る是を濱殿^{（ハド）}下りといふ相模守守らむこともいふく内^内神^神を祭^祭りて御^御酒^酒を祭^祭り慶長七年卯月二十六日貫明公慈限公詣て給ひ法樂の和歌を奉納し給ふ

宮ヶ原

八幡宮の邊をさしていふ四顧空濶な

る曠野なり今は畠地となる、此所肝付の属

と北郷氏と合戦ありしといふ、即永禄元年三月十九日肝付の一族庄内都城を攻めんとす、島津豊後守忠親左衛門尉時久の兵に会し肝付の属と戰ふ味方利あらずして北郷藏人を初め武百余人戦死す、首塚二ツ今に八幡宮華表の前畠中にあり、忠親の家老半田新左衛門石塔もあり

恒吉古城^{（カヨシヨウジヤウ）}地頭仮屋上の山なり口輪城^{（カリシキ）}と名付伊集院源二郎忠真逆意の時伊集院宗左衛門此城に籠城すといへり

竹園山惣福寺吉祥院^{（タケイチヤンソウフクジヨウショクヨン）}長江村にあり地頭仮屋の北隣なり眞言宗大乘院の末にして開山快盛法印^{（カイハラシ）}本尊十一面觀音^{（カミン）}当所の祈願寺にて投谷八幡別當職なり

安居山徳泉寺 アンコサントツヤンジ 長江村にあり地頭仮屋を距る
こと子方凡三町、曹洞宗福昌寺の末にして
開山代賢守仲和尚 ダケンショウジヨウ 本尊釈迦如來當寺由
来詳かならず、本山の菩提寺なり

薩藩名勝志

卷之十三

薩藩名勝志卷之十三目錄

始
羅
郡
也

平山城跡

總
禪
寺

戰死稻荷祠

建昌城趾

願成寺

卷之三

岩城址

諫訪大明神

紹隆寺

正八幡右京

アラマウジ
アラマウジ

三
九

北村城蹟

斐列隨

黒島大明神

來福寺

北山古牧

春日
神社

卷之三

龍仁寺

龍門瀑布

本草
アラカツ

安國寺

大通關

1

始羅郡
帖佐

平山城跡 鍋倉村にあり地頭仮屋^{居宅}を距ること且方七町余樹木多く山城なり、弘安年中城州石清水善法寺了清下向してこの城を築き数世居住す、文明中に島津忠廉^{忠良子孫}久の居住す、文禄四年松齡公桑原郡栗野城丁^{松齡の子}より移りてここに居住し給ふ^{父の忠誠の名子成邦}その始め織橋山といふ、いにしへ大隅州諸所に八幡の神領あり了清所司となり神領のことを司とり、又平山村^{其矢を因分村内村}一領家職たり、よりて此城を平山と名つけしといふ、城中に新正八幡宮を安置す、了清子孫平山氏を称し今鹿児島に住す

新正八幡宮 平山城中本丸の東に鎮座石清水

同体^{正泰十月}弘安中善法寺法印了清神輿を守下りて勧請す、初め下向の時帖佐の油^{油河之支派}に着船す、入津のところを八幡港^{油河之支派}と號して之を守り、前またかへと謂す、今後のことをうとねみるをえなかへの略語をらん、土器の呼びならへせる謂ふなどあります、今俗ありて「油」といへり^{油河の源千代神ハ井戸の油}、郷の統領守にして正祭にハ演殿下りあり^{松之瀬に最所あり}、奉じて玉の幡掛松^{幡掛松を守りてより號づひをとする}を築造下りといふ、^{幡掛松}此の幡掛松に開祖下りて八本の松の枝にかけられり、了清果を守りて、^{正祭の油と正む}いは、よろて幡掛松と呼づけるとぞ、古松ハ枯れて今の松の後に枯つきしより神社のはとりにあり石清水^{舊名の碑によりて山中より清泉涌出上流々として在る、下流にて合流するもの、いじへもかためしと石清水が流れ先をめせ御めいのるにまつてを應へる}、山の半腹にあり別当寺を平安山八流寺増長院といふ真言宗大乗院の末にて開基年月詳かならず、本尊阿弥陀如來^{立像}永祿七年貫明公八幡宮を再興し円融法印をもて當寺住職となし中興とす、此時大乗院の

平山城
總禪寺



末寺となりしにや、古鐘一口を納む銘云、
奉施入大隅國平山阿弥陀寺撞鐘　一四〇八弘
安五年五月日石清水了清金師慈蓮初め阿弥
陀寺といひしと見へたり

龍護山総禪寺

平山城址郭内にあり曹洞宗福
昌寺の末にして開山心岩和尚、本尊釈迦如

米_半寺ハ文明中起宗興和尚題橋大禪伯

和尚を勧請開山となす、其後心岳良空大禪
伯_{鳥居前門也}の遺骨を當寺に埋め位牌を安す、
又、貞明公釈迦の像を安置して禪伯の形代
となす

米山藥師堂

總禪寺門前_ノ午方石間に安す、

初め起宗和尚諸州洞庭の時越後国米山に古
口參籠して靈應により身に隨へて本尊なり、

当山の景勝米山に似たるとて安置すと云々

薬師縁記に見へたり、むかし帖佐六七なるもの公に従ひ朝鮮の役に赴きしどき薬師に参籠して堂の柱に書を記たり

命あらはまたもきてミムリ山の薬師の堂の軒端あらすな

六七は朝鮮昌原にて猛虎にあたり死す、彼か自筆の落音ハ寛延二年十二月十二日薬師堂焼亡して失ひしといへり

戦死稻荷祠

平山城中高尾城と云所に安す、

松輪公朝鮮の役慶長二年十月朔月泗川の野にをひて半弓の矢に中り死する所の狐骨を壇に納め陣僧頼雄法印尊号に命し同年十二月廿八日爰に勧請し毎歳十一月廿八日

祭らしむ、故に戦死稻荷といふ、猶鹿児島

護摩所稻荷の下に詳かなり

新城シンジヤウ三拾町村にあり平山城につゝきたる岡

なり、地頭仮屋の子方拾町余辺川筑前守居城なり、大永六年十二月七日梅岳公攻め給

ひ總禪寺口にて合戦、終に辺川落城す

建昌城趾

西餅田村にあり平山城の末申方な

り、地頭仮屋より末方拾八町許り瓜生野といふ、島津豊後守季久の居城なり、今竹山となりぬ、下に翻餌山大門寺といふ曹洞宗總禪寺の末寺あり開山信岩和尚なり

萩峯城

建昌城の子方壹町余にあり地頭仮屋

の末方凡拾七町島山治部大輔直顕の執事野元藤次秀安築るといひ伝ふ、今畠地となれ

り

如意珠山願成寺 東餅田村にあり地頭仮屋の

己半方拾四町余、淨土宗京都知恩院の末に

して開山運譽道^{ランヨウダウ}上人^{（筑前守）}本尊阿弥陀如

来^{（嘉慶元年正月丁未日）}當守ハ松齡公文祿元年桑原郡栗

野城を發して朝鮮國に渡海し給ふ時に宿願
の山ありて栗野城隣に建立^{シテ}願成寺と号し
運譽をして居らしめ祈念のこととなしむ、

同四年公帰朝ありて今之地に方百余間の地
下をトし願成寺を移し其宅地の中央に本堂

を造営し弥陀の像を安置す^{（初の今の中堂にて御坐す）}ひ子すあり其等の本尊執

持は長武尺五寸一分を像左口作にて置かな
るといひ公命あり奉書の本尊となすといへり

其後帖佐を發し再び朝鮮の役に趣かせ給ひ帰朝の後、又弥

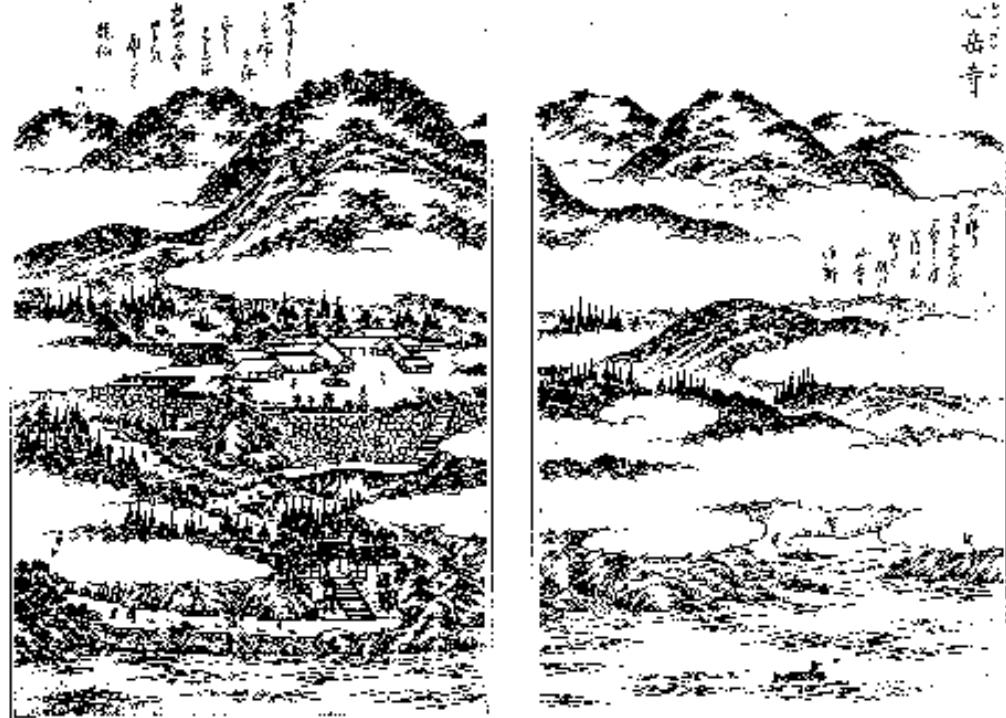
陀千体を彫刻し本堂に安置す<sup>（内六軒公ミシから年より正ふ
妻に其經寫を呈す、世にこれを千体仏といふ、まことに西元九年也、寺
屋の裏はく、去年に至りて是をと見へたり也公夫人美有君の印あり）</sup>

千代の松^{（シラカバ）}願成寺門内にあり松齡公手植給

ふよし伝へり

願成寺





灌水山心岳寺

フクシテ

トトロ

脇元村にあり地頭仮屋より午
方式里許り曹洞宗福昌寺の木にして開山勅

仏光普照禪師代賢和尚福昌寺十八世本尊釈迦^{ハチ}当寺

ハ文禄元年壬辰七月十八日島津左衛門督入
道晴蓑生害の地なり、故に慶長四年己亥の
春貢明公創建し給ひ心岳良空大禪伯の菩提

寺となし同しき十一年丙午十一月禪伯の石
塔を建て貢明公松齡公光臨し給ひ懷旧の尊
詠あり、開基の僧ハ抱巖龍孫和尚にて代賢

和尚ハ勧請なり、海辺の風景清勝の地なり

龍仙

岩木までかけふる寺を来てみれハゆきの

ミ山そおもひやらる、

惟新

夕浪に月と雲とをまちどらはいつくはあ
りと磯の山寺



住吉社 スミヨシ
住吉村に鎮座地頭仮屋より戊辰壹里
九町余、祭神攝州住吉に同正祭九月
ナホ。当社は
和銅元年鈴木三郎政氏勸請すといふ説あり、
得体公の時住吉村八町を寄進したまふとい
ふ、文禄中社領毀破に及へり、社司園田某、
社殿の右脇別當寺あり真言宗増長院の末にして
住吉山誕生寺宝光院、開山行円上人、

本尊正觀音、頼憲法印を中興とす、社の子
正六町許りに池あり住吉の池といふ、蒲生
站佐の堺なり

岩劍城趾

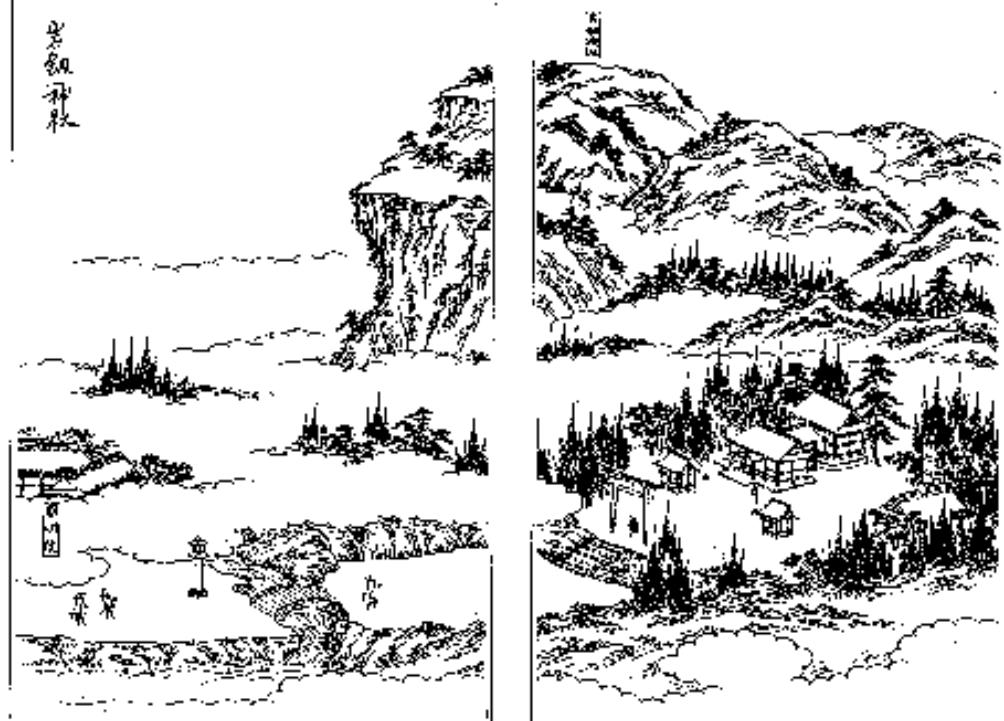
平松村にあり下松ハ松本郷にて山腰に在る者也。領主の氣分なる處名を重んとするといふ。

主坂屋の中西方五町余、大中公の時渋谷の
党権籠る、天文二十二年の冬公發向し給ひ
これを討て勝利を得たまひ十月一日の夜城
兵落去す、是月十九日二男松齡公をして居
しむる事三年松齡公住居の遺蹟今尚存す、
城址ハ劍の平といひ拾余間の絶壁にして山
なり、頂上に平地あり

岩劍神社

城址の下に鎮座、祭神一座大日天火輪菩薩

同上大中公渋谷党を責給ひし時天文二十三
年甲寅十月一日布施金峰山別当某神体を
守護シテ奉りて白金坂の陣所に勧請して祈誓



をなし毎歲神舞をもて其祈を賽せんとす、其夜子刻渋谷党徒尽く白刃城を去て逃ゆく、故に翌日公城乗じて、に安鎮す、これより以来軍神と称して尊崇日々に厚し、拝殿に

岩劍大明神五字の額を掲ぐ、社司後藤某別

当寺岩劍山神宮寺円明院、天台宗鹿児島南泉院の末寺なり、本尊虚空藏菩薩^{梵名}初め真言宗梅慶上人の開基にして年月詳かならず、延享二年天台に改宗し編註^{ヘンツ}僭正をもて勧請開山となす

諏訪大明神^{スバタイミガムジ}平松村に鎮座、祭神二座^{御名各}、^{一七〇}領主坂屋より北方拾九町余、弘治一年六月廿九日社頭一字を造立するよし地頭三原近江守重秋と古き棟札に見へたり、神鏡銘に天文二十四乙卯五月吉日と記せり

惣陣鹿倉山 平松村にあり領主坂屋の申方五

町許り、^{一四九}白刃城を貢給^{ハセキ}ひし時惣人數の陣所

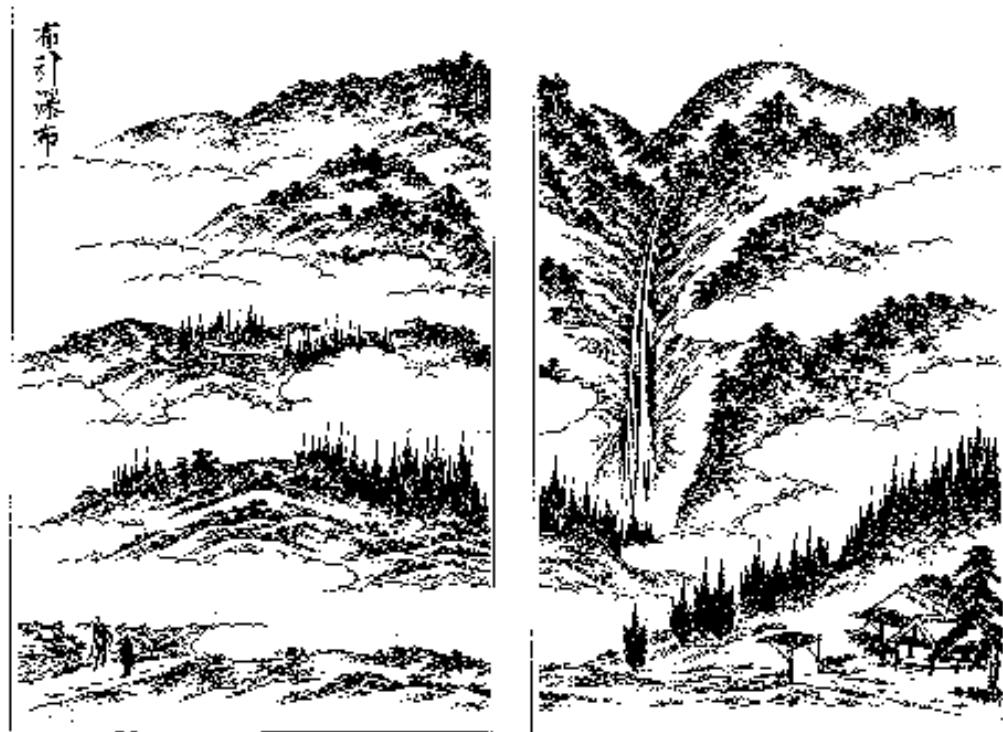
なりといひ伝ふ、本邑第一の高山にて猪鹿多し、公の陣所白銀^{シロクニ}とあり、今其地さたか

ならず

吉祥山三祖院紹隆寺 平松村にあり領主坂屋

の子丑方四町余、時衆宗藤澤山清淨光寺の末にして本尊阿弥陀如來^{半像}初め曹洞宗福昌寺の末なり、開山を心岩良信和尚といふ、石屋派^{ヒコツバ}なりしを延享二年十一月國命によて清光明寺十九世廓心和尚今之宗に改め紹隆寺と号し菩提寺となざしむ

布引滝 ヌノヒヨクタケ 脇元村にあり領主仮屋の上方拾町余、
其源ハ白銀の山中にして止寅に向ひ水勢少
し、高きこと凡拾間許り横五六尺、左右野
岡躑躅多く春暖夏口景勝あり、邑人呼て布
引といへり



蒲生

正八幡若宮

上久徳村に鎮座、地頭仮屋あり

子方壱町余馬場頭なり、祭神三座

忠義天皇伴東大
神御坐主事正祭

六月晦日夏
藝祭といふ社記に云、七十四代鳥羽院の御宇行
賢執印の時、上総介藤原舜清關州下大隅に

下向し若宮八幡を安置し保安四年癸卯閏二
月二十一日今の地に勧請すと云々、按する

に舜清は豊前州宇佐の人なり真光坊といふ、

初め隅州垂水城に下向し始羅郡蒲生院に移
り上総介と称し本城に居住し蒲生をもて氏
とすといへり、故に当社を建立したるべし、
一郷の惣廟にて尊崇厚く太刀中冓其外什器
宝殿中に納む、舜清の苗裔蒲生越前守茂清
大中公に叛き蒲生落去の後、貢明公松齋公
当社を崇敬し給ひしこと旧日に信し社殿を



再興し華表に正八幡若宮五宇の額を掲大幡
八流を寄附す、末社四所官仁保五年武内社宝治元年武内社天保四年
早風社 天社天保四年 天社天保四年 国社天保四年 地神天保四年 本地
堂积迦弥陀觀音鐘樓擴延萬葉一年 社司瀬戸山氏

精水山授福寺神守院 正八幡別當寺にして社
の右脇にあり貞元示大乗院の末なり、本尊
积迦弥陀正觀音開山僧及ひ開基年月詳か
ならず、盛心上人をもて當寺中興とす、い
にしへ妻帯の僧住職すといふ

蒲生古城久木村 久木村にあり地頭仮屋を距ること

一ノ方拾武町余、保安年中上総介藤原舜清な
るもの隅州垂水城を去て此城に移り子孫世々
居城となす、大中公の時舜清の後裔蒲生越
前守茂清叛て城に掘籠る、公軍を出して茂
清をせむ茂清力尽きて弘治二年四月廿日城

を焼て祁答院に落ゆく、惣名を龍ヶ城とい
ふ、本丸二之丸東城倉城岩城等の名今に伝
ふ、松楠森々として出水乏からず、本丸の

午未方に松齡公取添の地あり、追手口耕形
旧趾の東に睿宗新義の寺あり東光山伝生寺
千手院といふ永祿中大中公城の鬼門に創建
して祈願所となし給ふといふ、開山海軍法
印、本尊千手觀音立像 初め慈眼公護持の本
尊にて帖佐看經所に安置ありしを二世実秀
法印に命し當寺に遷すといへり

荒平アラヒラ 本城の末方七町余にあり松齡公の陣所
にして今は取添の内なり

大定山護法院永興寺 正八幡宮鳥居の左脇に
あり曹洞宗能州惣持寺の末にして開山量外
聖寿和尚俗姓諱生民忠本姓 本尊积迦如来坐像 明徳

年中蒲生清覧（本名子山道著筆、立碑の裏
に慶安元年亥申八月と記す）の開基にて
量外一派の占禪場なり、往古焦土の災によ
て米出詳かならず

尼ヶ城（ノイケノリ）下久徳村にあり蒲生本城東にあたる
凡拾町、大中公蒲生茂清をせめ給ひし時陣
所なり、野つゝきに城ヶ崎（ノイケザキ）といふところあ
り其時擁の陣所なり

馬立陣（マタアゲザン）上久徳村にあり本城廿方拾五町許り、

そのかミ島津右馬頭忠將の陣所なりしとい
ふ

向城（カミナリシロシラオ）白男村にあり平城ともよへり松齡公の
陣所、後に陣をアラドウ平に移されしといふ

北村城蹟（カムクニシロシラオ）北村にあり地頭仮屋の亥方武拾三

町余、蒲生一族北村氏代々の居城なり、弘

治三年四月中旬北村伯耆清康落城す



菱刈陣

北村にあり蒲生茂清籠城のとき菱刈左馬頭一陣をかまへて力を合せしところなり北村陣ともいふ、貞明公攻給ひ落去り、その時の頸塚辰巳方を町余にあり

切手園陣 漆村にあり地頭仮屋の子方武里武町余、松齡公蒲生退治のときこゝに陣し渋谷の党捕遠江守をせめたまひし所なり

山田

黒島大明神

上名村に鎮座地頭仮屋

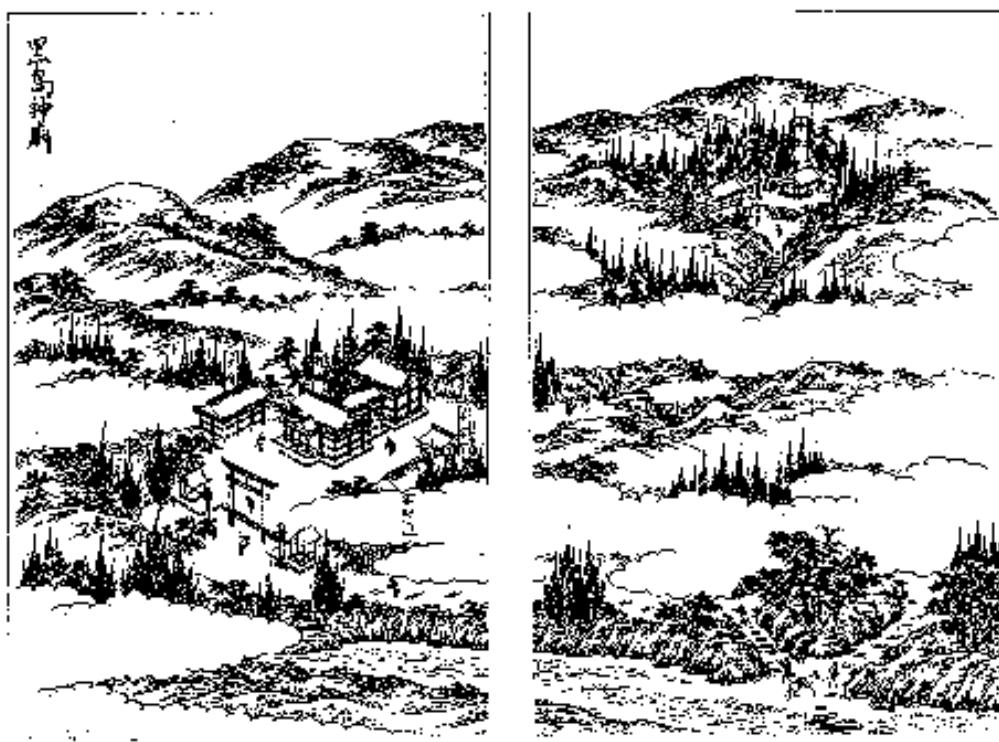
下名半にあり且
町へ山林を有す

し山田村なり、一外城となるて及びて止むを距ること廿方武拾五町、祭神五座

神名無からず
正祭日正月元日

いにしへ鈴木三郎なるもの勧請せしといひ伝ふ、山田村の崇

廟にして初め社山の絶頂に安鎮ありしを宝永六年乙丑六月朔日水湧山崩て神社流失し今之地に遷宮す、其時旧記を失ひ來由伝ハ



らす、残るものは鎧巻領太刀七腰

（一腰ハ波半安
玉井堅子藏相
持行教日、元暦天明御承
七年甲十八月吉日と銘あり）

正月

劍壺振（傳承）今に宝殿中に納
む、末社石堂妙現飛野妙現若宮を安す、社

司川保氏

玉城山禪福寺陽春院

上名村にあり地頭仮屋
より卯方拾三町余、曹洞宗福昌寺の末にし
て開山泰雲和尚（傳承）本尊觀迦如米（傳承）開基年
月詳かならず、二世照山和尚の創建にして
先師泰雲和尚を開山となすといへり

端龍山東光院來福寺

下名村にあり地頭仮屋
の左脇壹町余、時衆宗相州藤沢山の木にし
て開山漢阿弥陀仏（傳承）本尊阿弥陀如米（傳承）開

基年月伝ハらず

宝珠山勝高寺正田院

下名村にあり地頭仮屋
の西方九町余、真言宗大乘院の末にして開



山權律師賢重永正四年卯月廿二日癸未本尊藥師如來庚開基
年月詳かならず、寺内に正觀音を安す立像
長五尺六寸日羅の作のよしいひ伝ふ、觀音
堂後に白山權現祠あり、寺の境地高くして

東南を眺望するに疊峰連山蒼茫としてその
た、すまひ尋常ならず、はるかに帖佐松原
浦のなかめありて浪もみどりの木すへをひ
たし風帆そのあひたに隱見するなとまたな

き佳境ともいふへし

北山古牧

北山村にあり地頭仮屋の子方三里
余、廻り壹里余の旧牧なり、邦君大玄公の

時に中西長門右衛門に賜ふ、其後馬の性あ
らきゆへ牧を止めて林となす、三代実錄貞

觀二年十月八日廢大隅國古多野神二牧、縁

馬多蕃息善百姓作業也云々、按するに北山

村に北野といふ所あり北野神祠を安す、今
の北山村ハイにしへ宰府の神領にて神牧あ
りし所にや、再考すべし、中西氏牧を止め
しも縁あることそかし

松坂城跡マツラカシロアト木津志村にあり八津志村ハ源生の地也
りル名進市川田に属す地頭
仮屋より戌方式里拾四町余、中村氏父子是
を守り弘治中下城すといへり

加治木

春日神社

高井田村に鎮座、領主仮屋春日村にあり
故の宿分なりを距ること亥方凡九町、祭神四座

人見尾根命、武藏守命、斎主命、蛭姫
人御正祭九月十九日十一月十日酉口、當社ハ人皇六十六代一

條院の御宇寛弘二年閏白藤原賴忠公の二男
宰相経ツネヒコ、当郷に配流せられて居住せしに加

治木郡司太夫良長男子なく女子治木山女
房と称すをも

て経半に配し良長の家を相続す、時にあた

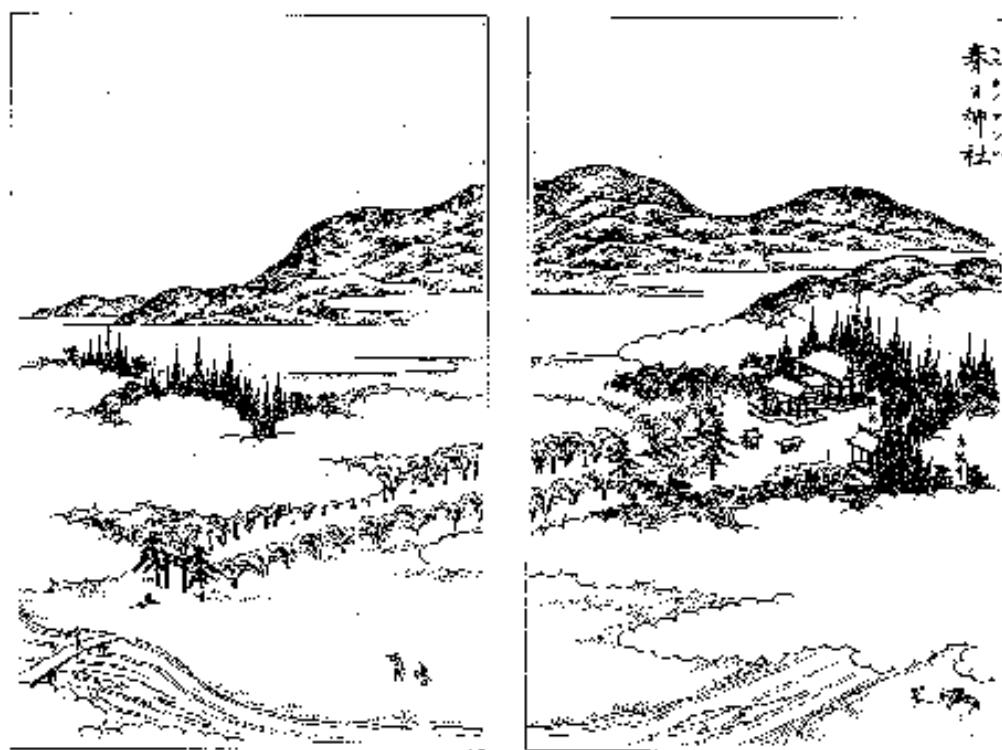
りて南都春日大明神を爰に勧請す。皆井左エ門大夫
生を守り下りし母子孫にて
若宮天を祭るに今に居住す世々を経て數町の神領もありしを殿下の命によて寺社領毀破の時勘落せられ社頭荒廃せしを貢明公再興し給ふ、实に慶長十年六月廿八日柱立なり、是を本邑の惣廟といふ

若宮神祠

春日神社の社頭に鎮座す、左に別当寺あり真福寺と号す、真言宗大乘院の末にして本尊地藏菩薩、開基由縁詳かならず、初め若宮坊といひしとそ

光永山寿福院春日寺

段土村にあり領主倅屋の丑方拾町余、真言宗大乘院の末にして惣鎮守春日社の別当寺なり、開山弘印法印、本尊不動明王立庵院丈五寸
五分合掌寺ハ貢明公春日社を再造し給ひ一時建立して別当寺となし給

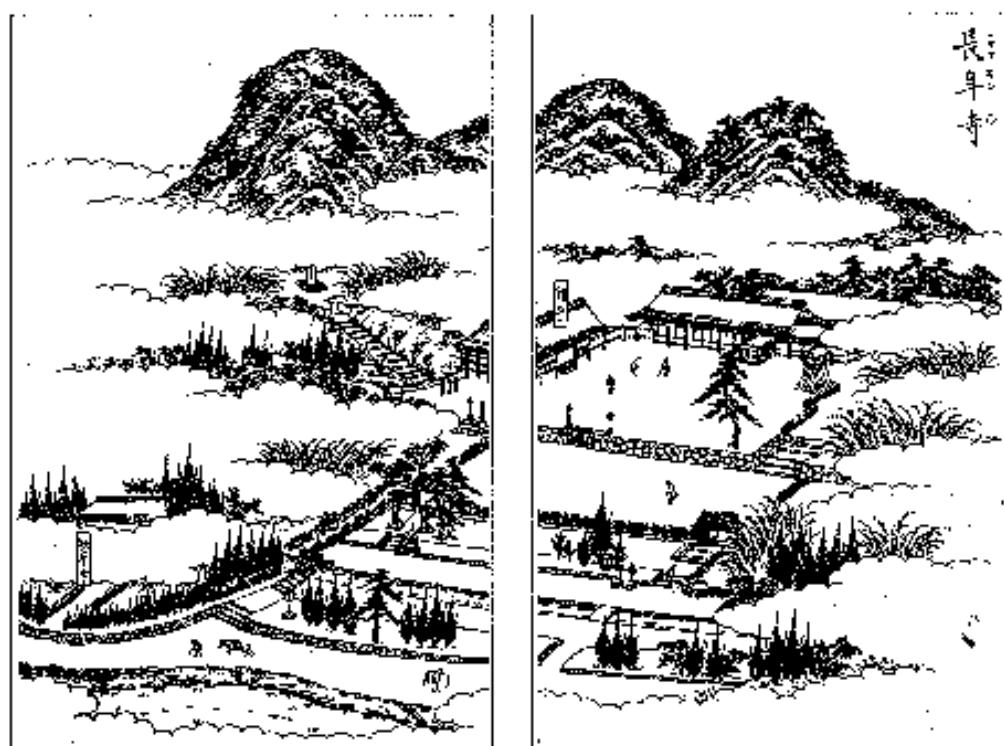


ふ、大中公雪翁君の靈牌を安置して本邑の
祈願道場の所となす。当子の八木集中も相止在應院
古釋寺のありし所なりといへり寺の
後加治木古城址の上より高さ六拾間許なる
幾段にも落る瀑布あり布引瀧と名付といふ
松齡山長年寺 木田村にあり領主坂屋より西

方拾四町余、曹洞宗福昌寺末にして開山勅
フククハシアセセンシグイケン 仏光普照禪師代賢和尚第十六世 本尊釈迦如來坐像
當寺初め段上村加治木本城追手口の東にありて鳳凰山大樹寺といふ、開基年月詳からず、小山田村薬師像の後に大樹禪寺住持宗椿叟ムツシシヤウ と記せり、松齡公慈眼公しハく光臨し給ひ歌の会を興せられしとなり

家久

花鳥の色香のいまはふる寺のひと木に残す霜の松か枝



紹嘉

散やらて今日を待えし紅葉ハの心ハ色に

顯れにけり

大樹寺

おほけなき袖を待えし古寺ハあふく御法
のしるしとそおもふ

寛永十四年のとし慈眼公の命によって今之地
に移し再興し給ふ、丑寅の方遙に龍門の飛
泉布引の滝藏王嶽、辰巳の方黒川崎を眺望
して其景致尤とも美觀といふ

僧島山能仁寺 日木山村にあり領主坂屋より

辰巳方拾七町余、曹洞宗福昌寺の末にして
開山義堂良忠和尚、本尊釈迦如來坐像(高足一丈
治二年)亥十月十五日領主島津兵庫忠朗の
開基なり、初め般若寺といふ密宗の寺あり

しを万治二年改宗し寛文十年庚戌十一月十

五口今地に遷し能仁寺と改むといふ

万齡山椿窓寺 段土村にあり領主坂屋の子方

六町余、臨濟宗京都妙心寺末にして開基年

月詳かならず、開山鳳山明彩和尚、本尊虛
空藏菩薩坐像 初め萩原寺といふ、肝付三郎

五郎兼寛母堂椿窓妙英大姉(松島公の女子子井井正葉
天正十二年四月十六日生)の牌を安置して位牌所となす、
日向の西城に之ゆる

ゆへに椿窓寺と改号す、鳳山和尚初め欽藏
主となつて、松齡公朝鮮の役に供奉し其勞

を賞し田三拾石を賜ふといふ

龍門瀑布 段土村にあり領主坂屋より子方拾

九町真幸街道の東に見ゆる、其源ハ溝辺に
出て小山田村に流れ加治木古城を繞り飛泉
となる、高きこと凡式拾四間余

説た高岡正則著
一折門といふ云々

春秋水多く壯觀なり、夏日にハ水を分
りなりて田間に注ぎけるゆへ水勢少し、慈眼公
往さ来さの尊詠あり

往さ来さ道行人も今しはし立かへり見る
瀧のしら糸

瀑布の前に観音石像を安す、其背隱に題し
て云

代銘詩

千石巖山瀑布前 石鍋大士且鑄蓮
寄言隨喜群遊志 供与花花日擲錢

寛政十一年乙未九月錦水源天錫題東海

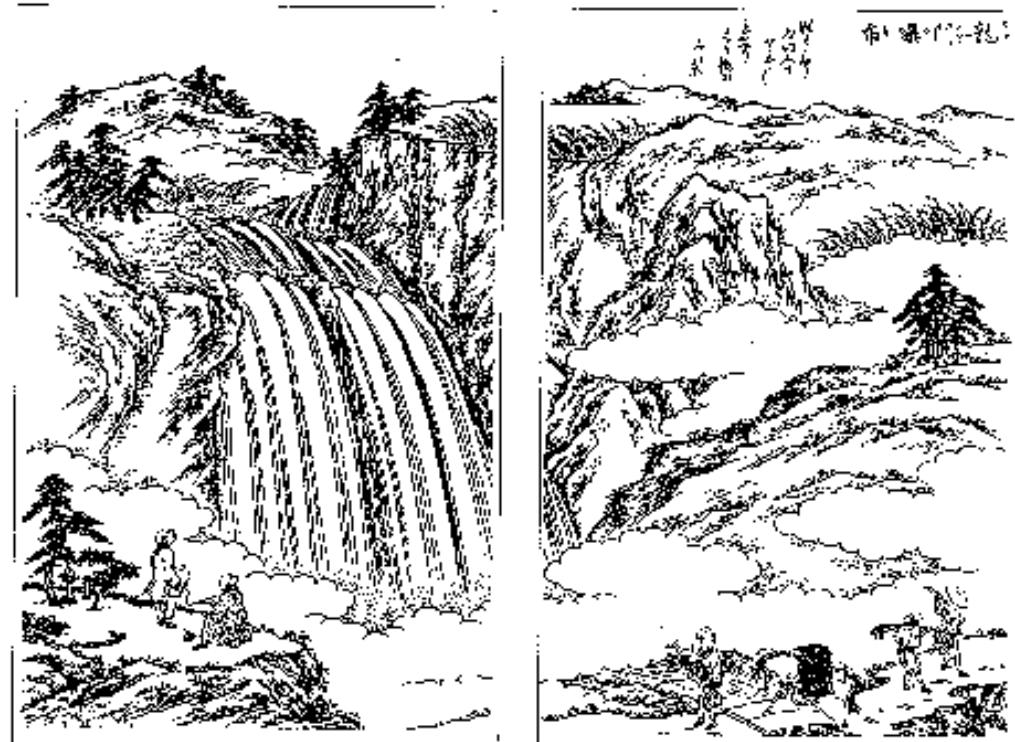
橋游謹書

觀龍門瀑布

源天錫

万丈懸泉匹練開 銀河疑白九霄迴

龍門恰右廬山色 憐不謫仙飄逸才



大和國に龍門瀧あり名所に出たり

の色かな

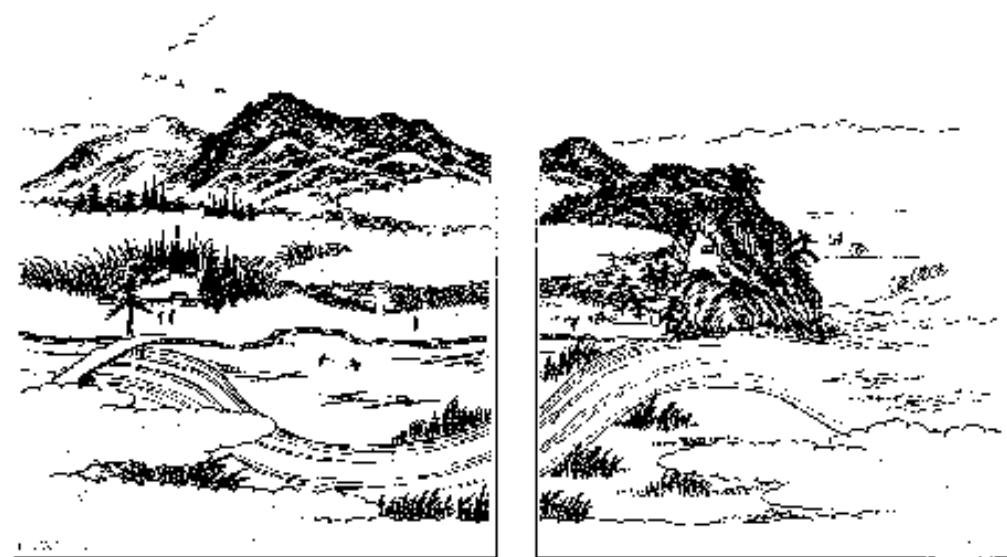
黒川 日木山村の海邊にして領主仮屋の辰巳方捨四町余、能仁寺の前を流て海に注く川末を黒川崎といふ、中古流水多く通船の港口なり、川岸に桜樹多く^{五株久美の桜}祇園社あり、岸上聳へ岩窟に觀音堂を安す、又、秋葉祠あり岩間冷水滴り幽景清閑にして四時遊人多し、邦君恕翁公の時京都將軍家の使節浅山某通行ありし時加治木氏の一族黒川崎へ棧敷を構へ浅山氏を饗應す、又、慈眼公の時椿窓寺開山鳳山和尚黒川に庵室を當ミ鳳山軒と号し退居す、公此庵にしハく遊覽し給ひ歌の会を興せられしとなり

短冊

家久

浪のをりかくる錦は磯山の梢にさらす花

黒川崎を黒川ともいふ、南の岡を陣か平といふ、陣か平ハ天文十八年五月十九日伊集院大和守忠朝邦君大中公の命を奉して肝付越前入道以安^{イアン}を攻む時に忠朝陣する所なり^{以安が治本城に居る。又、陣か平の辺り土中今に焼物}多し、能仁寺の北山中に陶細工の籠跡あり、文和中島山治部大輔直顕加治木上器園を住所となして要害を構へしを邦君鈴岳公多勢を率ひ来て急に攻玉ふといふ土器園ハ即此所ならんといへり、近比領主久微黒川記を石牌を建て是を詔さしぬ

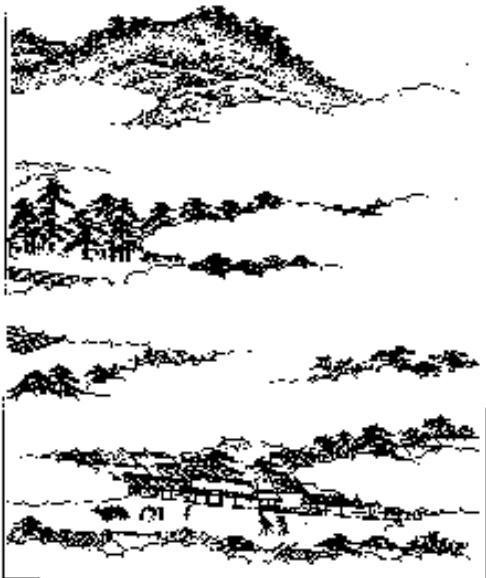


松月山靈鷲院本誓寺

段土村にあり今町のは

つれなり、淨土宗鎮西派京都知恩院の末にして開山運譽上人、本尊阿弥陀如来^{立像}當

寺ハ慶長十六年松輪公創建し給ひ運譽をして居住せしむ、公の肖像を安置す、初め運譽天正十三年九月十五日肥後州甲斐宗運の館にして公に見ゆ、明る十六日合志郡住吉光明寺に居らしむ、同十五年三月廿二日運譽光明寺を去て日向州飯野に來り公に拝謁す、同十六年正月公命をもて加治木上町に小庵を嘗み居住せしむ、其後本山の命に応して善導寺住職となり一年にして慶長十五年庚戌十二月晦日再び当國に下り公に拝謁す、公感悦し給ふこと斜ならず寺を建立し給ひ」といふ、即今の本誓寺なり、作事の



時公屢光臨し給ひ腰を懸られし松とて曲松
と名つけし古松今枯てなしあり、或夜松間の月
を見給ひて山号を松月山と命せらる、靈鷲
の号は慈眼公光臨し給ひて身にしめるの詠
歌によて名付しといふ

家久

身にしめる法の教のあはれてふさながら
鶯のミ山なりけり

岩屋寺

イハヤシ
本田村にあり領主飯原より成方式拾
町余、真言宗大乘院の末なり、開山詳かな
らす、本尊阿弥陀如來半跏長丈一七
佛大師傳寫寺の後西方
五拾町山上に岩屋あり窟中に觀音堂あり、
聖觀音音無度空十六分一
御子の作と云ふを安す、厨子棟木の銘
に嘉慶四年己巳正月十六日願主權律師金剛
位永慶、大工佐伯國満と見へたり、これに

拠ハ嘉曆中建立する所の寺ならん

大平山等持院安國寺 段上村にあり領主板屋

より丑の方拾壹町余、臨濟宗京都妙心寺の末にして湖山嵩山大本禪師

スルナシシモトハ花牛月祥がきとす古記を称して近著家惠正の人を名づけられ

地元に安國寺殿造立を

ハ大本禪師の名なるにぞ、きるへやうす本尊迎如來

坐像長九

をもす當主ハ曆応二年己卯の歲將軍尊氏公の

開基日本八十余州一國一寺の伽藍にして大

隅の安國寺是なりといふ、數通の古記文書

等もありけるに火災のためにことごとく焼

亡して今ハ頗る小地となり、たゞ殿下的靈

牌一基を安置す

源流學會叢書三編第十一卷

とあり

往古總門の跡とて今の寺門より南の方にあり、其辺の

田地のあさなを總門と呼伝ふ

溝辺 ヨノベ

鷹大明神 鶴村に鎮座地頭板屋

右川村石

丘にあり

を距る

こと辰方武拾九町余、祭神一座

ス名前かならず王
祭日未記

中応永十八年勸請す由縁詳かならず宝徳三

年六月大檀那貢親社殿造立の棟札を納む、

一郷の惣鎮守にして元禄二年再興す、社司

宗像氏

祥峯山梅谷寺大定院

有川村にあり地頭板屋

より子方三町余、貞元宗大乗院の末にして

本尊不動明王

開基傳ハラス、初め看初

城の西にあり、元祿九年住僧嚴長法印今

地に移し白から中興となる

看初城

心慶寺の後山なり本丸二之丸旧趾今

に存して林となる、肝付兼光居城なりとい

ひ伝ふ、按するに看初城名義詳かならず、

みそへみそめ訓相似たり、への濁音ハめに

近し、されハ溝辺城を看初城と土俗の呼び

誤まれるならんか、再考すべし

瑞泉山心慶寺

麓村にあり地頭仮屋の口方宅

里九町余、曹洞宗福昌寺の末にして開山心

嚴良信和尚^昌本尊地藏菩薩^{坐像}溝辺領主肝

付越前守兼光^{文政十五年癸卯一月一日}の開基にして

位牌を安し菩提寺となす



薩藩名勝志

卷之十四

薩藩名勝志卷之十四目録

菱刈郡

太良院古城

甘露寺

曹源寺

水天社

御靈社

高源寺

馬越城趾

黒坂寺

曾木古城

觀音寺

曾木瀧

大堂箇足跡

桑原郡

箱崎八幡宮

玉泉寺

内小野寺

栗野古城

正若宮八幡

風呂の岡

安良神社

横川古城

仙寿寺

妙見神社

貞福院

犬飼飛泉

明礬湯

安樂温泉

東林寺

光照院

般若寺

鶴箇岡八幡宮

蓮乘院

徳元寺

栗骨獄

腰越神社

真乘院

金山

東光寺

踊古城

榮之尾湯

硫磺谷温泉

西北寺

二光院

菱刈郡

菱刈は旧一郡に八村を有する名なり、蓋し本紀四上六代を譜
合人日被是郡名前す云々、此時別て二郡となるに至るたり、その後又廿ハ
今之者元不外其地名木をもつていへるなるべく、その地ハ必らず菱
多し或に名とむか、近ニ式ノ郡里等
の名ハニミモ用ひ臺子をスと見えたり

本城

太良院古城 南浦村にあり地頭坂屋同村なり、
菱刈氏初祖三郎坊桐印關州菱刈郡毛利氏家臣一姓家主一子文正を賜り爰
に下向し代々の居城となす足を菱刈の本城
といふ、永禄中菱刈大和守重猛落城す、落
去の折梅岳公狂歌

日新

松かえに花をかすかのふちのゑん大口き

てもまひあそぶらん

諏方神社

南浦村に鎮座地頭坂屋の寅方式町
余、祭神信州諏方社に同し祭七日本城の宗廟
にして勧請年紀詳かならず、文明六年甲午

十二月六日棟札を納む、社司小倉氏

医王山甘露寺

南浦村にあり地頭坂屋より辰

巳方式町余、真言宗大乘院の末にして本尊

藥師如來

最初周王山勝覺寺といふ、星

霜積りて廢に及びしを確大僧都法印照海再
興し寛文十一年辛亥五月寺号を改む、寶保
三年癸亥二月十五日火災によて旧記を失ひ

開山を伝へす

鳳凰山興覺寺

南浦村にあり甘露寺の辰巳四
町許り曾洞谷福昌寺の末にして開山南嶺慶
舜大和尚毎月廿一日元和五年
第十五月十四日度本尊觀音如來

作 薩

太良山曹源寺

荒田村にあり地頭仮屋を距る
アツタケ

こと西方四町余、曹洞宗飯野長善寺の末にして開山要津良宗和尚

長善寺開山開創祖本尊

地藏菩薩

心懺作

開基の來由詳かならず、

当山初め南浦村錢鹿倉にあり天文十二年の秋寺山崩れしゆへ領主菱刈相模守重翁

今この地に移す、宝暦十三年癸未十一月廿三日の夜寺屋崩亡し今の住僧良輪造管す

現王山正覺院大林寺

荒田村にあり地頭仮屋

の亥方八町余、時衆宗相州藤澤山の末にして開山澤岩仙阿和尚

元龟二年正月六日本尊阿弥陀立

像

天文六年丁酉一月二十五日菱刈相模守重翁入道天慶慈母大林妙心大姉菩提の為に建立し同村現王山の麓にありしを其後宮原氏爰に移す



須川原水天社

下手村羽月境川の堤上に鎮座

荒田陣跡

荒田村にあり野岡にして陣の岡といへり、地頭板屋の子丑方拾五町許り松齋公の陣跡なりといひ伝ふ、陣跡の下に血原

地頭板屋より子丑方里武拾八町許り、永禄中菱刈院を鎮め給ひし時球摩の相良氏大口城に來りて力を菱刈氏に勧せたり、其時松齋公当社に詣て祈誓の旨ありしなり、大口落城の後社を再興し給ふといひ伝ふ毎歳十月廿八日祭るといへり、社司成海氏



須川原水天社

御靈祠

湯尾村に鎮座

此延喜式後記に有北村と呼ぶといへり

地頭板屋の

右脇なり、祭神一座

菱刈五郎以改め
正祭八月廿八日

勸請年月詳

かならず、拝殿に御靈宮二字の額を掲裏に長享三年己酉菊月と記す、湯之尾の惣鎮守にして正祭にハ鳥井の外堀町許りに神輿を守下り神樂を奏す是を濱下りといへり、社

ノ給ふ陣跡なるへし

湯之尾



世樂只尊侃首座三月十八日入化建立して奪叟をもて勧請しみつから三世の住持となる。

馬越

諏方神社 前日村に鎮座地頭仮屋前日村ありをさる

こと卯辰方三長余、祭神前に同し例祭五月廿六日勸請年月詳かならず、本邑の惣廟にして天正五年丁丑十二月再興の棟札を納む、社司谷

川氏

馬越城趾 諏方神社の酉方三町許り菱刈重狂

の軍代井手籠弥四郎藤原重久守る、重猛邦君貢明公に叛て永禄十年丁卯十一月廿四日公此城を攻め給ひて落城す

稻荷神祠 城跡の子方三町余に鎮座、祭神前

に同上三月廿二日池頭仮屋の亥方拾町余、貢明公菱刈重猛を征討し給ひし時真幸般若寺の嶮

司田土氏

藥醫山吉祥寺蓮臺院 御靈祠の左にあり別當

寺なり、真言宗大乘院の末にして開山權大僧都光理法印八月廿二日生化本尊虎空藏菩薩唐傳

開基年月伝ハらず、中興を真珠法印といふ

河福山高源寺 湯尾村にあり地頭仮屋の亥方

九町余、曹洞宗福昌寺末にして開山尊安全九月廿二日本尊地藏菩薩中宗当寺二

嶺を越て爰に陣す、其時勧請し給ひしとい
ひ伝ふ

吉祥山妙蓮院黒坂寺

前日村にあり地頭板屋

の西戌方拾二町余、真言宗大乘院の末にし

て開山盛良法印

西元一月廿九日延祐六年正月五日一本尊毘沙

門天

正月廿九日延祐六年正月五日一本尊毘沙門天

將源頼朝公先考義朝公菩提の為に一国一寺

を創建す其一なり、初め天台宗一山の伽藍

にして十二の脇坊あり、開山を觀禪といふ

氏の人弘安中住職大法師水乘以来幾星霜累

りて宗派日々に衰へ永禄中遂に荒廢して六

間四面の本堂

西元二月廿九日延祐六年正月五日一本尊毘沙門天

堂

中享年後

存在せしを貢明公菱刈氏を攻め給

ひし時盛良陣僧を勤む、其功を賞して黒坂

寺の口地を賜ふ、こゝにをひて盛良新に寺



屋を再建し開山となる初め木造の首に山を吉祥とあり」となり。山を吉祥と名づけ院を妙蓮と号す實に元龜元年也、其後豊臣殿下當國に發向し給ひし時陣營となす、時に盛良寺を去て馬越城に籠る、故に

軍兵狼籍し寺財を盜ミ且障子を破り薪となし千阿弥陀脇立仏像を顛倒す、いまた其修造のをハラさるに細川幽齋命を奉して寺領三町三段を毀破せらる、又、四歳を経て丙丁童子ハイティドウジの為に屋舎残らず烏有となる、詳かに所藏の由来記に見へたり、鎮守白山伊勢両社脇に曾我右あり、大磯の虎女曾我後生菩提の為建立せし一国一基の塔といふ

万松山長寿寺 前日村にあり地頭板屋の亥方六町余、臨濟宗圓分宮内止興寺の末にして開山虎岳和尚慶化元年正月生本尊釈迦坐像開基詳かな

らす

弓懸松 德辺村般若寺越の通路にあり菱刈氏征討の時軍勢を揃へ給ひし所なり、公弓を懸給ひし松なるゆへかく名付トクニといひ伝ふ、寛政初年枯木となりて今ハなし、また、矢立といふ所もあり

曾木

曾木古城 曾木村にあり里番に地頭板屋同上よ

り卯方式町許り諫方城といふ、菱刈支族曾木三郎曾妙の子居住す、元弘建武の際曾木藤五郎真義守ると云々、雜木の林となる

悪瀬大明神 曾木村に鎮座里村上地頭板屋の亥

方武町余、祭神一座神名を知らない一月七日初め湯之尾川
南村荒瀬といふ所に安鎮ありしを、洪水に
流され爰にとまりけるゆへ勧請し黒瀬大
明神と号すといふ、今に川南村に社の旧跡
あり、曾木の惣鎮守にて社司長谷川氏

アラコサンムリヤクシユイシクハシオノンジ
惡瀬山無量寿院觀音寺 惡瀬神社の西脇にあ

り真言宗大乘院の末にして開山賴順法印アシシエン
ナガスル本尊阿弥陀不動アマト兩軀を安す、初め
天台宗の寺なるを永祿中邦君菱刈両院の賊
を鎮め給ひし時、賴順屢陣僧を勤たり、其
功によて当寺を賴順に賜ふ、故に真言密寺
となる、元祿中火災あり旧記伝ハラス

コケインサンクハシオノンジ
谷隱山廣德寺 曾木村にあり臨濟宗日州志布
志大慈寺の末にして開山勅謚法光安寂禪師
傳抄著者ハ本統、紀州山良善墨正興ニキヨヒト年の法号、俗姓源氏乙
アキタケイセイトといひ伝ふ、寛化牛月子をなう御日をもてて百と云ふ

本尊薬師如來本尊を有する開基の年伝ハラス、古
昔七堂伽藍法灯派の小木寺なり、寛文八年

國命によて大慈禪寺の末となる、境内に三
基の古塔あり右大經源賴朝公左右丹後局比
金判官能員の塔なるよしいひ伝ふれとも往

昔火災ありて出縁を失ひ安永六年丁酉八月
十日又火災、其残る所の旧籠灰燼となれり、
當寺六十四世玉仲和尚ハ天正十四年七月十
五日筑前国岩屋の役陣僧となりて、戰死す、
後無住にして寺領を失ひ廢に傾くといひ伝
ふ



曾木
龍

曾木曾木村羽月宮人八代村の境にあ

此所に中壇にて二階ハ然室支利都
今其の處伊達羽月上原十曾木地頭板屋を距る

卷之三

方若里拾貳町余、其源八日州諸縣郡飯野狗

ケンシタ留孫獄にして隅州桑原菱刈両郡を流れて遠

く高嶺谿水落て大河となり爰に至りて地形

大石巖々として盤石の滑なり

流となりて三の大瀧となる、利用の方を

之「いふ 南に向ひて落其室を五間余横
武間、水底の深さ二間三尺、中の飛泉を

之口といふ、是また南に向ひ北に落三段に

落るなり、曾木の方を二之口といふ、西北

に向ひ四間許り岩上の滝瀑布となり岩間に落入岩底をく、りて見えず親音淵に出るな

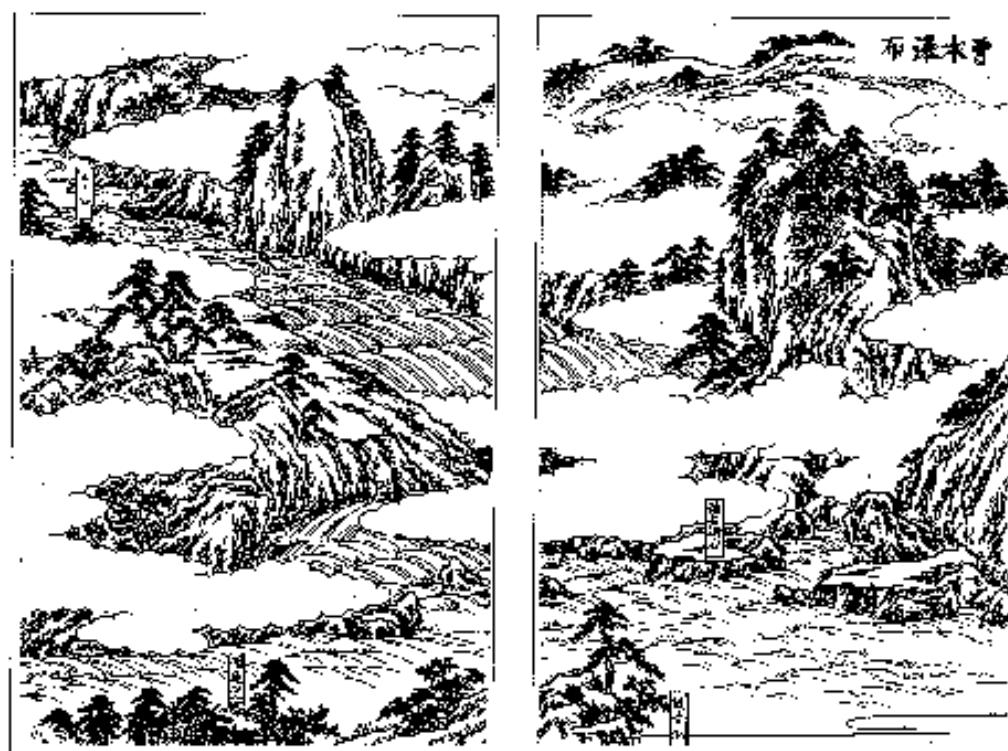
り、一七二三〇の間に甲組の二回あり

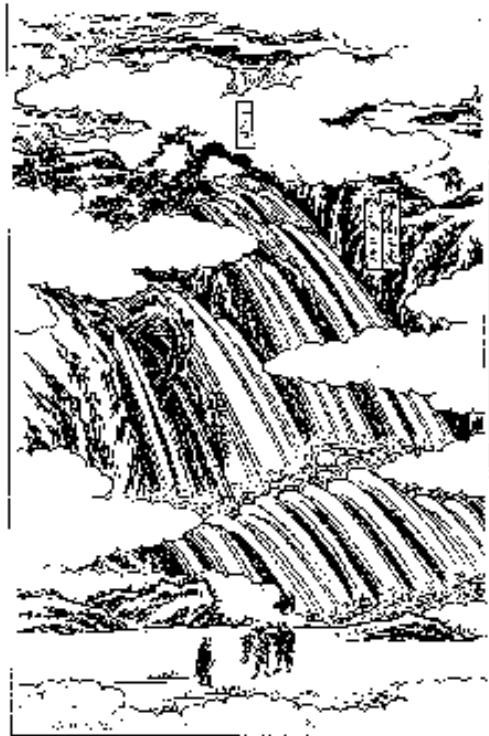
雜木鬱然として赤松を生す、其下に水天祠を安す武岡方の茅屋なり、羽月の方潤上に円通堂あり、武岡四方の茅舎にして千手観音石像を安す何人の安置するや許かならず、毎月十七日をもて祭るといふ、むかし釈性空上人爰に來りて法を修せられしないふ説あり、ありやなしやハ知らす、邑人の伝ふるところなり

性空

薩摩かた曾木の瀧の白糸をよるくきけば只法のこゑ

春ハ両岸に櫛獨多く花さき枯木にかかる藤浪ハいつれをそれと岩根つたひ獨頭蘭色香を争ひその風景いはむかたなし、毎歳三月四日男女群遊して觀音大士に參詣し飛泉の





頭盤石に筵を設け、樽をかたふけ或ハ謡ひ
あるいは舞ひ詩を賦し歌を詠して御堂の柱
に書はあるは岩窟に釣魚す、是日娛樂の
興といふ、今飛泉の図を厚すに其流八拾余
間漸々に落て広大なり、景色一所に見かた
し、又細画しかたし、図する所羽月より見
る所なり

円通堂柱

六月の雲も動か滻の音

強兵衛石

押川強兵衛公近此川に水練せし時

此石より水中に潜行すよて世人かくよへり、
公近ハ押川対馬守か二男にして武端の誉少
からず、関ヶ原の役松齡公の供奉し大垣に
をいて大川を泳潜行して敵砲騎馬上り引落
し首をとりて公の見参に備ふ、石田三成大

垣にての太刀初なりと大に賛美し大判金一
枚を与ふ

天堂箇尾陣跡

曾木村にあり祁答院往還鶴川

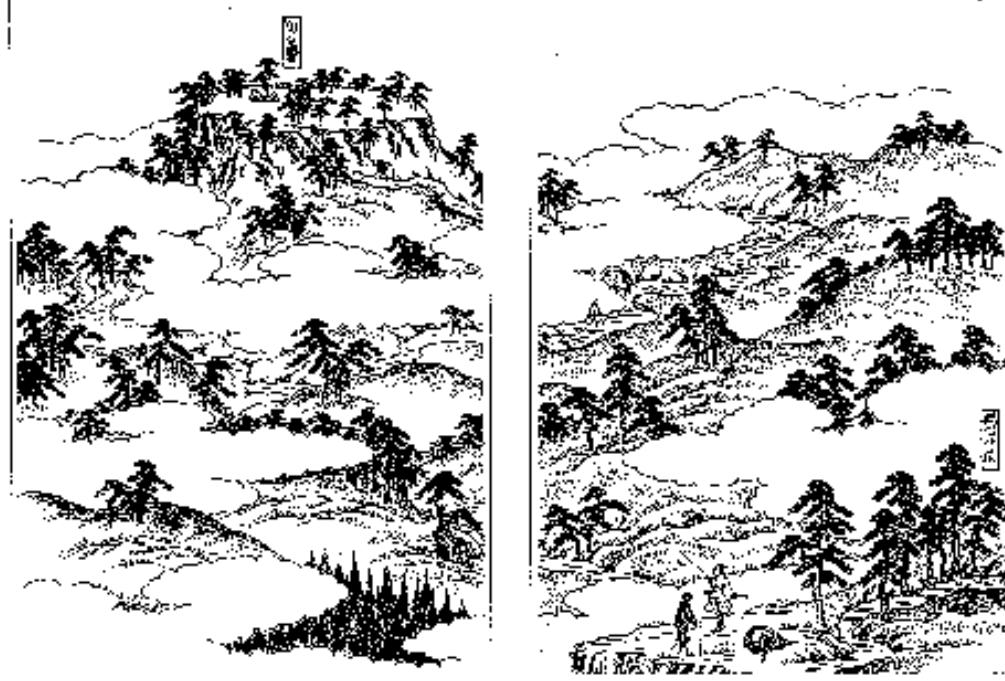
街道なり、地頭板屋の西方式拾町余、天正
十五年豊臣殿下薩州水引泰平守に勤座し帰
陣し給ふ時陣堂の旧跡なり、大口城上新納
武藏守忠元公、に出て台顔を拝しける

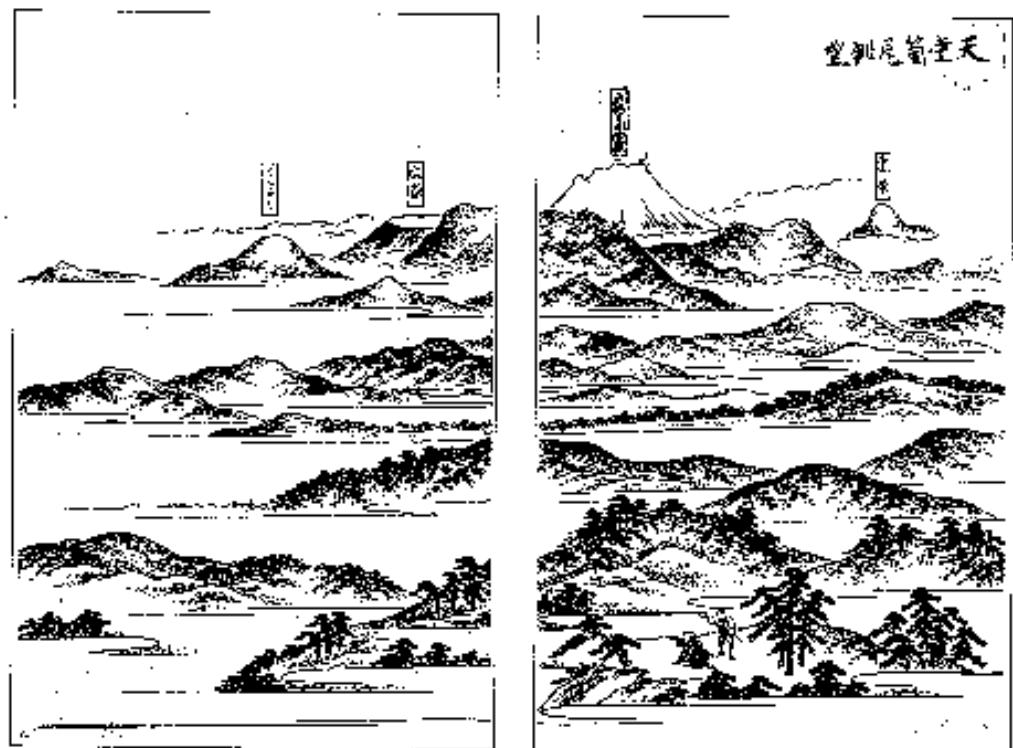
忠元公 今これを關白陣ともいふ高き野園に

して松林なり、四方廣々として路次の松一
眼を遮るばかりなり、大口城ハ丘の方にあ
たりて遙に見ゆる陣堂の旧跡に東西拾四間
南北三拾七間半地にして石墻の跡など今に
のこれり、其中に方五尺許り土を築き傍に
一松樹を栽て関白の御輿を居へ給ひし所な
りと称す、いつの世に松を栽山跡を伝へし

にや、松の廻り僅に二尺余もあらん、御陣の南五拾間許り野原の卑き所に土を築き平地となして一陣を設けし跡一所あり、當時供奉の人々の跡跡ならん、又御陣の南六拾余間に清泉の流れあり四時絶えず水勢多し、軍勢の用水を助けたるへし、比は五月中旬なり城下陣営を發し給ひ大川を左にして曾木の往還壹里許りをすきゆき羽月堂崎村に船渡りし渡日本本城村三石塚大島村下野村の里番をを過鳥巢村出延寺の下園田に出給ふ此即新納里元高をおへて隠姓へ左右に就て起居を被ひ名前を貢ふ事上場越を通り山野村園田に出白野園田に因口附あり、上場越へ日野と有河内音の上場也小河内往還を経て肥後州に入り給ふ

尾高堂天





菱刈野

今其所を詳かにせす水戸黄門源光園

卿の扶桑拾葉集に菱刈野といふこと繪稽古

繪ね女ハ肥後の國の萬文にして後原與範と号を同るす、その姓氏を號かにせずといふ、興範ハ元和年中文官にて選ばれしより幕臣として參議正四位下並正五位に至り近江守兼め、近江守七家に於てしてらす。

家の集に出たるよ

し見へたり、その大隅薩摩のなかにひしかりのといひしをもて見るに菱刈郡ハ大隅の国にして薩摩の國伊佐郡と界を接す、されハいにしへ菱刈郡のうちそれのわたりにありて菱刈野と呼ひたるなるへし、世遠く人亡ひて今は所を認さることおしまてもなおあまりあり、よりて其ことをしるして後の考かへをまつこと爾り

家の集の内

繪稽古

大隅薩摩のなかにひしかりのハいまハ

ちかくことよ見しに

春の駒をうちいててみれハあきよひし

かりのハいまはちかくありけり

またおなしたいを

たか、ひしいへひいつくとミちとひし
かりのハいまハちかくならすや

桑原郡

吉松

箱崎八幡宮

川西村に鎮座地頭仮屋同上を距

ること西方拾町許り祭神筑前箱崎八幡宮に
同し正月十月勧請年刀詳かならず、本邑の惣

鎮守なり

東向山神宮寺光熙院

八幡宮の左にあり真言

宗大乘院の末にして八幡の別当職なり、性

空上人の開基といふ年歴詳かならず、開山

勢順法印真言宗の比本尊藥師如來火供

龜鶴山地藏院玉泉寺 繩丸村にあり地頭仮屋

の子方式拾町許り曹洞宗飯野長善寺の末に

して開山大同舜智和尚慈化年月不詳本尊藥師如來
開基年月詳かならず、本邑の普提寺な

り

日向山九品院般若寺 細若寺村にあり地頭仮

屋の子方凡毛里、真言宗大乘院の末にして

開山阿字然慈化年月不詳本尊千手觀音立像七丈二尺木像

吉上いひ伝々、上古の木身鐵ハ医者
既刻未なり今ニ墓内に古色を玄々初め性空上人の開基

にして大台宗なりしに、何れの比にか真言

新義宗とハなりしや詳かならず、觀應年中

將軍尊氏卿當寺に下向し本陣となし給ふ、

是故に本堂第五號入門を建立し給ふといふ、亨

保九年四月寺院火災に罹り、記を失ひ、由縁
委からず、鶴丸村鶴ヶ岡八幡由緒記を閲る
に尊氏卿築紫に下向タカヒヨシシキ、草部義國に謀りて口
向山をもて本陣と定め給ひ別当を徵して御
盃を給ふ、其時卿の歌に口に向ふ山のある
しを来て見れば端山に照す有明の月と詠し
給ひければ、別当の返歌、あつまより西の
山の井清けれハ月日も澄る寺井なるらんと
申奉ると記したり、時に八幡宮の別当職を
般若住僧名持務めたると見えたり、又文様
中細川幽齋殿トの命を奉たまへりて寺領
を勧落せられし時住僧名持歌に、心経のま
かの下なる般若寺の一切くやく御免あれか
しと詠て出しけれは、寺領八町故の如く附
置れ墁破なかりしとなり、其後松齡公栗野

を去て後加治木に移り給ひし時、住持頼長
法印を召して般若寺を建立し居住せしめ當
寺ハ掛持寺となす、頼長遷化し公も卒し給
ひしゆへ寺領悉く没収せられて岩石もなく
なりぬ、既に坊舍廢壞に及びしを頼盛法印
豊後守兼好住持本堂鎮守山王社本坊涅槃せんこと
を憂ひ寛永十八年二月、日本編中の勧進を
許され奉賀の力をもて再興す、よて頼盛法
印豊後守兼好花を中興開山といふ、當寺境内茶
園おほし世に足を賞美す、名を朝日之森と
よへり

鐵
君
寺



其
二



新熊山三藏院内小野寺

川添村にあり地頭飯

屋より午方凡壱里、天台修驗本山派日州大

崎飯隈山照倍院の末にして新熊野三所權現

を安鎮す

正縣十一月廿五日本尊摩利支天

白帝に
其の邊

開山詳かな

らす、代々山伏住職の寺にして愛甲相模坊

と称す

相模坊光祖委申ハ次郎ハ科佐公のむだして相模坊と下曰
うといふ、「木造」某の代に至り寺「白帝」と云ひて居候

脇坊五箇寺

根木坊移木造あり
拔藤之助名一坊

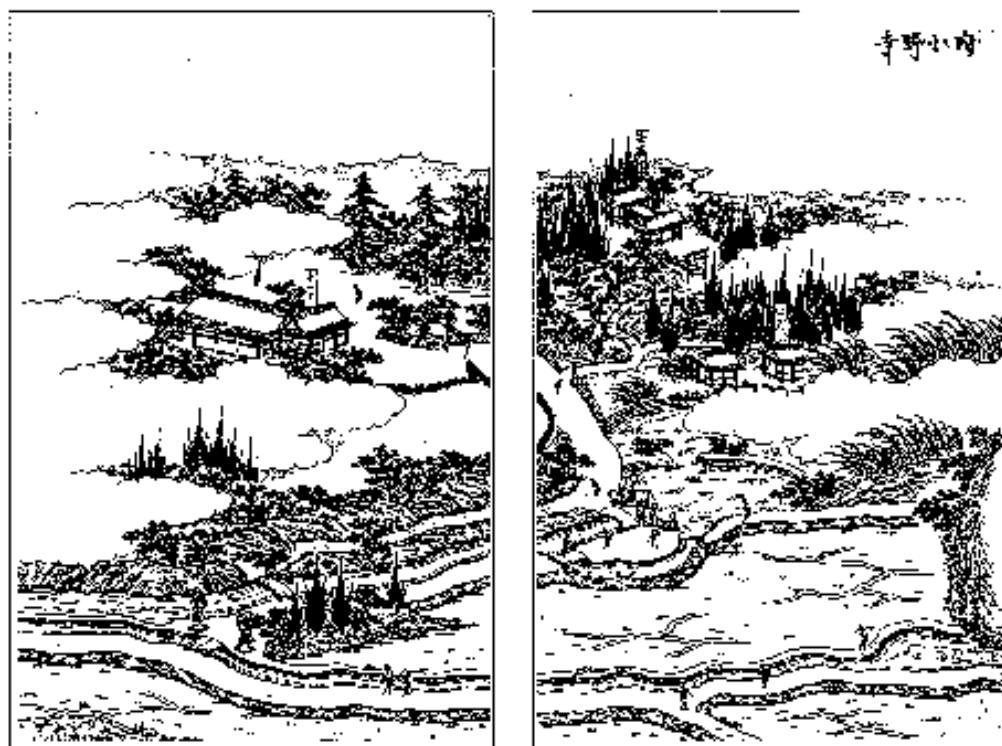
あり、境内に清泉多

し、或人の歌に

又も来てみすやあらなむ此寺の岩まの水
のきよきなかれを

天正十二年甲申二月十五日相模坊光久松齡
公の命を奉たまはり日州志布志檜榔權現に
参籠して天狗相伝の三略書を得て公に奉る
といふ、又元龜中伊東氏飯野桶ヶ平に來り
陣しける時丹精をぬきむて、祈念しての功

寺野小野



あるによて小林瀬戸尾權現の別当職を命ぜられ今に瀬戸尾寺を兼帶す

鶴箇岡八幡宮 鶴丸村に鎮座地頭仮屋の子方武拾町余、祭神相州鎌倉鶴ヶ岡に同し勧請年歴詳かならず、当社の由緒書に將軍尊氏卿に向山に下向し給ひし時崇敬厚く白洞の戸帳に詠歌を書して寄進し給ふといふ、其歌に

天地をなひけまかする神丘の名を尊氏
か世とぞ守れる

今社司とめなくして農夫香花を備ふといへり

遺趾多し

智明山不動寺蓮乗院

木場村にあり古城蹟追手の口なり、地頭仮屋の子方三町余、真言宗大乗院の末にして開山賴充法印

慶長十五年庚辰
九月廿二日癸未

本尊不動明王

應永開基年月詳かならず、當

邑の祈願所なり

正若宮八幡 米永村田間の一山に鎮座蓬萊山

と名づく地頭仮屋より西方七町余、祭神二

こと子方三町余松尾城と名づく、川記を按

するに建久の比栗野郡守綱なるもの此城を守るとあり、中古以来北原某^{トモ}に居住す、天正十八年六月廿六日邦君松齡公飯野城を去りて此城に移り給ひ文祿元年朝鮮国の役にも^ニより發して肥前州名護屋に至り給ふ、今ハ松杉の林となりて石垣礎石等

詳かならず、大隅止八幡宮の別宮となりといひ伝ふ、本邑の惣鎮守にしていにしへ領主北原氏崇敬厚く再興の棟札を納む、又寄附の品も多し、天正以来松齡公再嘗し給ひ

神領を寄附し神馬を寄進して今に定立なり江原氏正所領る社司木之瀬某といふ、別当寺を蓬萊山梅中寺といへり、天台宗剃髮妻帶の僧住職し正仙坊といふ、国分宮内衆徒の類なり、松齡公朝鮮の役に赴き給ひし時当社に詣て首途し給ふ、其日大雪なり公神前にて

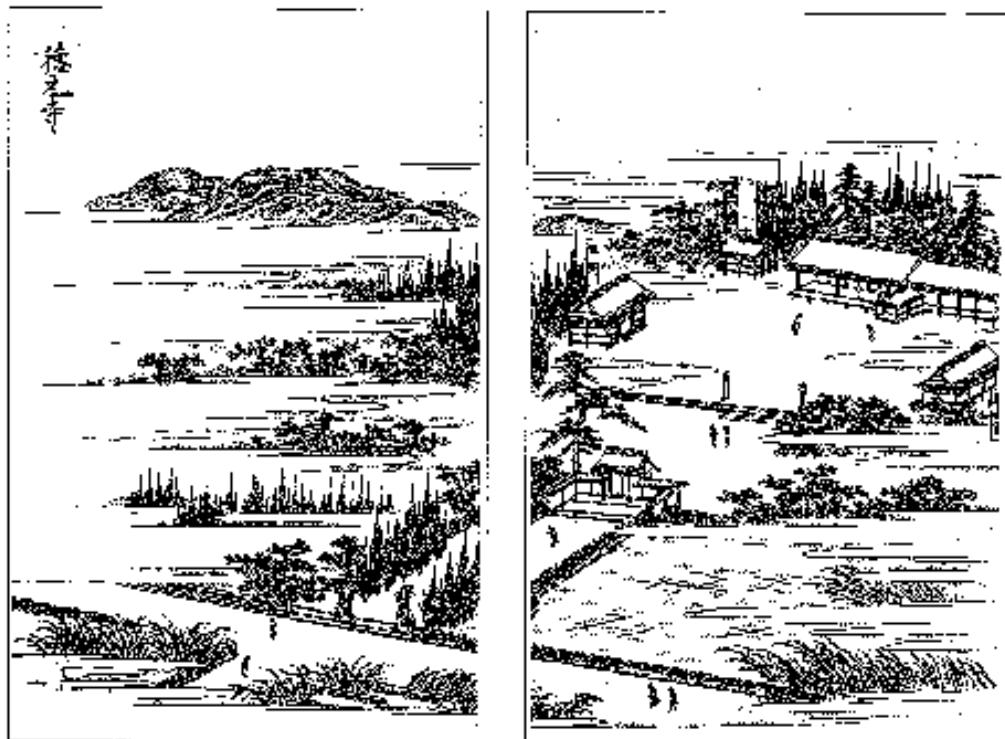
から立の其身はやかて帰國かな
公供奉の人々に備前の鑄刀研欲踊を命し口
鉢巻をゆるし社庭にて踊を興せられしとな
り

福城山徳元寺

木場村にあり地頭飯屋の卯方武町余、曹洞宗福昌寺の末にして開山竹居和尚福昌寺本尊如意輪觀音應供初め崇壽寺といふ、應永十三年十月二日伊豆守酒井親貞止定門家安の牌を安置して徳元寺と改むるといふ、文祿四年七月四日島津久四郎邦君久清没して菩提寺となす、庭中に蓮池あり千葉蓮といふ、文祿の役朝鮮國より邦君の携へ給ひしといひ伝ふ

野も山も皆山城となりにけり今宵の宿ハ
かち栗のさと

義弘



風呂の岡 ノリカワカ
米永村にあり往還田間に其廻り六
拾間余もあらんか小高き所なり、地頭仮屋
の末申方拾五町松齡公朝鮮の役に赴き給ふ
時此所まで人々見送り奉りて山田松千代満
谷二五郎など御暖乞の筵を設け名残おしま
給ひし旧址なり、ゆへに栗野見返りの岡と
もいへり

栗野嶽 クリノダケ
雑島山の内にして木場村に屬す、嶽
の半腹に温湯涌出す 温泉へ吐出する事 疏石明礬の
氣多く、踊栄之尾の薬湯に類す、又、野中
に二日月の池あり形ち半月に似て廻り拾六
町冬出水なく夏五月水あり菖蒲多し、其花
色濃して殊に潤ハし、雑島山御花池ともい
ふ、

正一位安良神社

上之村安良嶽の麓に鎮座地

頭仮屋

中ノ村
祭月廿九日

を距ること西方三拾五町余、祭

神一座家宣延年、正當社ハ和銅元年に勧請すと
祭月廿九日

いふ、初め安良嶽の絶頂に安鎮す、後神事

の便りよからずとて今の地に遷宮すといへ

り、正面に安良大明神五字の額を掲享保十九年五月十三日神祇道管領ト
御守持者

御守持者享保十九年五月十三日神祇道管領ト

部兼雄正一位の神位を受けらる、正祭にハ

華表の外に神輿を守下りて神樂を奏す是を

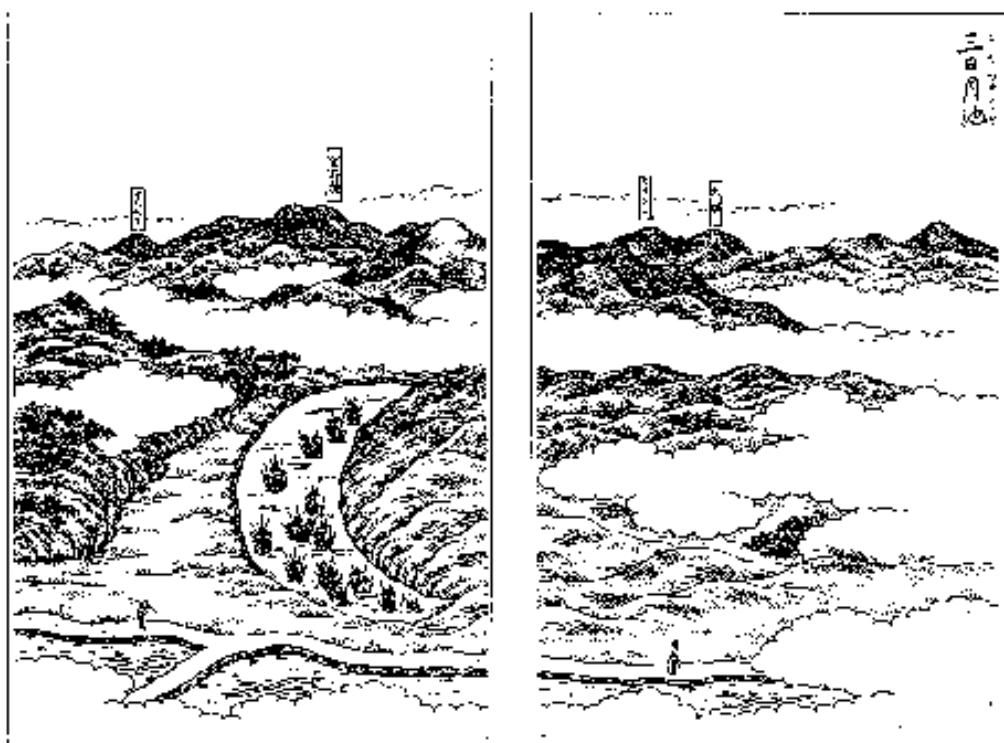
演下りといふ、社説に云、安良姫ハ内裏の

女房なりしに、ある時紺色の直垂を洗ハむ

とて川辺に出られけるに向ふより、白鷺數多

飛来りしを見て覺へす直垂の片袖を流しけ

る、その科により穢多に命して門壁に張付





火をもて焼殺し給んとありしに、彼姫平生
十一面觀音を信仰ありし利生によて遂に其
難を遁れ陽州横川に下り此所にて自害し終
り給ふゆへ即ち兵靈を崇めて安良大明神と
号す、是によりて本凸ハ白鷺采ることを忌
ミ、又、門屋を立てず炭を焼す紺屋をせず
穢多を禁すと云、社司月堅木某

腰越神祠

コシヨエカシロ

上之村にあり安良神社の寅卯方拾

町余、安良姫の母堂を崇めたりといひ伝ふ
横川古城

中之村にあり地頭仮屋の木方凡拾

武町許り、旧記を按するに、承久の比横川

藤内兵衛尉時信こゝに居城

延喜ハ平井聖麿守有基の三
奥藤内兵衛尉時信行の事

其後北原氏居となりて長尾城といふ、永禄

六年六月朔日島津國督頭忠長貞明公の命を
奉たまはりて城主北原伊勢守を攻む、此日

伊勢守か弟北原氏部少輔亡殺す。（之御家とてさゆら
り其家に於あり、
通じし日大風のたに樹木となり、
又、便屋より午方九時六町所り、翌日大風吹て合戦なし、
明る二日軍始り伊勢守遂に力尽て自殺し内
室も共に白刃ありて落城す。伊勢守が自らハ城中にある事
ハ必に然れしものある事

安良山來福寺真乘院

中之村にあり地頭仮屋
より中方六町余、真言宗大乘院の末にして
開基の僧を伝へず、本尊十一面觀音後本
邑の祈願寺なり

万龜山仙壽寺

中之村にあり地頭仮屋の中方
拾寺町余、曹洞宗栗野徳元寺の末にして開
山三了達和尚（了了）
（了了）
（了了）北原氏の菩提寺なり、
中興鶴峯仙和尚（了了）
（了了）
（了了）本尊釈迦如來（了了）

横川上之村に属し、西ハ薩摩伊佐郡永野村

に属す水野村は薩摩多知郡
其木邑の支配なり夫當山ハ寛永明暦の際

始めて金脉を見出し將軍家の免許を蒙り式

里式拾余町を開ミ金山と名つけ東西に出入
の口あり、番所を置て出入の人をあらため、
東を山か野口屋といひ西を永野口屋といふ、

初め金苗の出しハ永野村なり、因て永野金
山と呼び後に出しハ上之村なり、是を山か
野金山と呼ふ、役所を置所なり（了了）
（了了）
（了了）より中方六町余

山中人家おほく藪をならへたるハ山か野
なり、これに次ものハ永野なり、また其次
を九寿大郎と呼ふ、白仁田其次にして出来
山又是につけり、凡竈戸三百軒許り多くハ
淘金戸なり人体一千にも及へとも白池州の
出入日々に増減ありて計るにいとまなし、

家ことに沙金製法の器を設け男女その産業

を勉めて怠らす、朝は早く起きて礁をあみ
或は石臼に入水に和して粉となし是を盆中
に盛り水をそき蕩搗して沙金となす

これを
ゆくと

といで 矿徒のものハ石を鑄し坑を盤金脉ある

方へ穿ち人土落のせをなすをのく竹簾たけだらを
背負ひ炬火をともして坑に入沙石を負ひ出、

金石多きところに至れハ人々悦ひ先を争ひ
其坑にいらむことをねこふ、出金のおはき

山の巣スナバへといふ、坑のほとりに茅屋を造り
碎場スザンと名つけ多くの人を雇ひ金石を取出し

碎場にて製法をなし煎銷屋フサヤに出してふきわ
け金の上中下を辨候しその位を定む

其谷のもの
をもねむ

呼 碎場にして日々に製法する体或ハ七八十
人或ハ百余人、をのく礁を踏み石臼を転
し自の不外によどて盆を蕩搗す、此時同音に諷を

うたひ囃子をなす其諷四章あり、くり返し
うたふ、其節奏尋常の俗諷に異にしていと
販ハし、

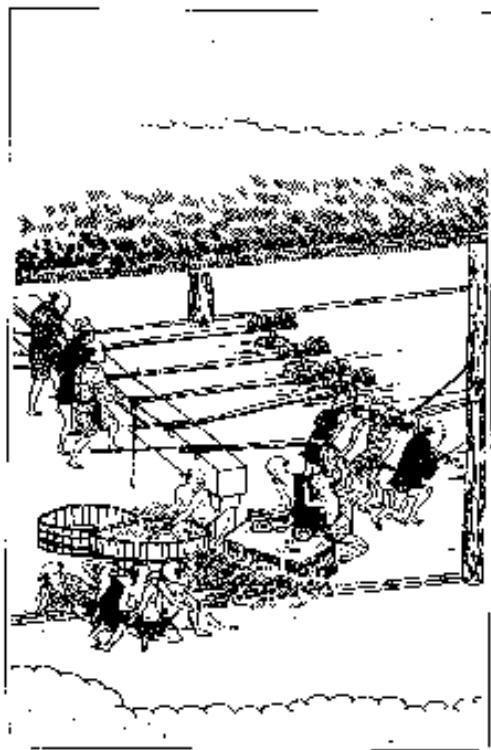
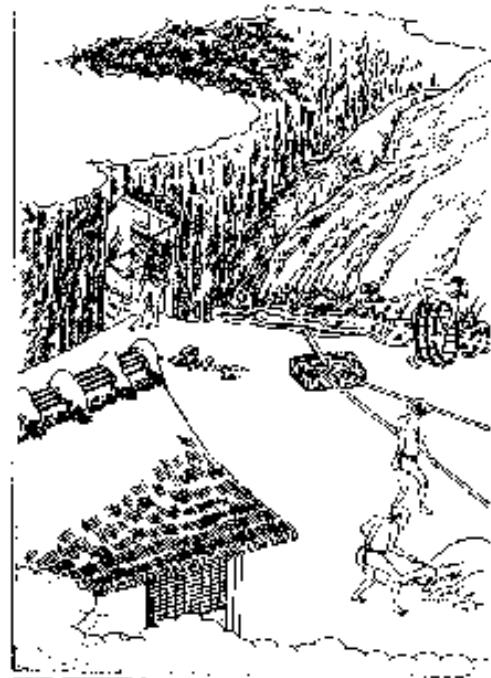
碎場諷

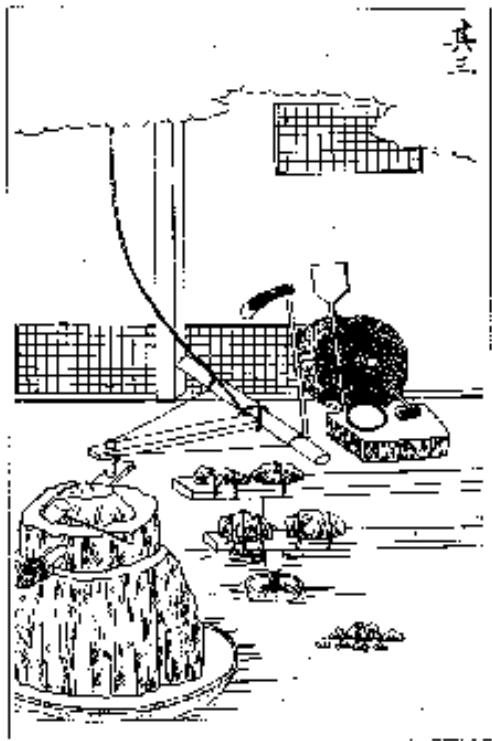
嬉し口出たの若松さまよ枝もさかへる葉
もしける

山も盛へるくさりもつゝくたのむおやま
はなをよけれ

四海おなみも静かにこされ國も治まる時
津かせ

うへの床屋と碎場の音ハいつもとんど、
鳴かよい







説
アトリエ

妙見神社 中津川村に鎮座地頭仮屋

宿在田内

距ること辰巳方二拾五町余、祭神北斗星

祭九月廿九日勧請年月詳かならず、往古宿蓬田村中

津川村の境に鎮座今に移入あり、其後今之社

未中方壹町許りに遷坐ありしを天正十三年

乙酉六月七日の夜大雨降て山崩れ社頭砂石

の為に損すゆへに今の地に社を造営して同

年八月十五日遷宮すといふ、祠官上原某

踊古城

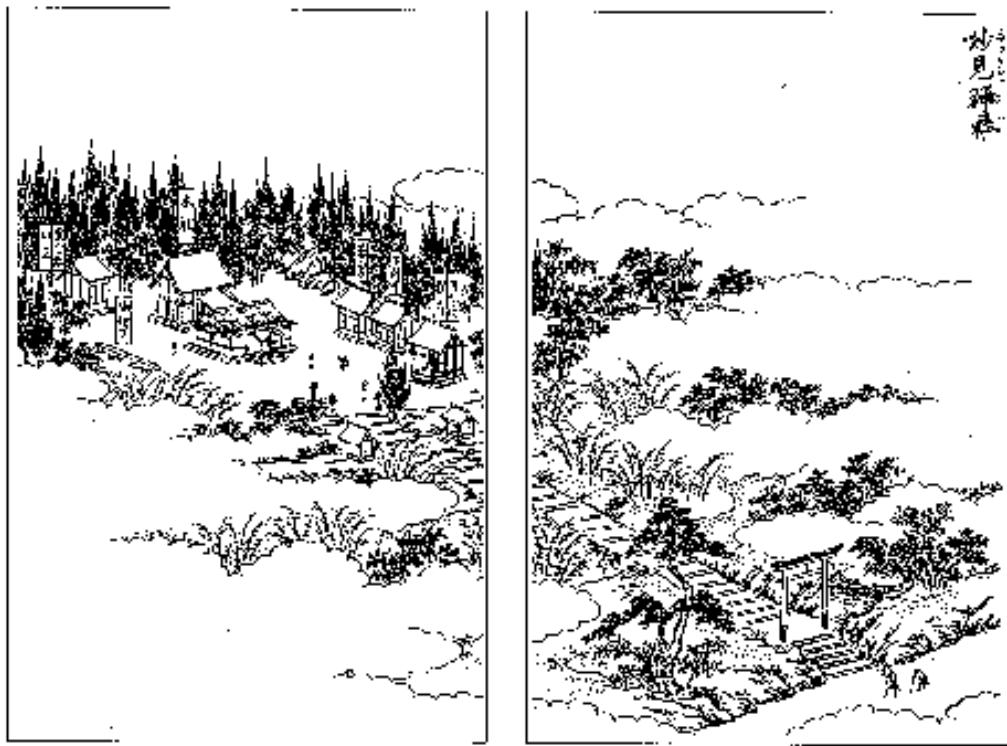
宿蓬田村にあり地頭仮屋より申方凡

拾八町本丸を新城といふ、中之城内之城と

て三の遺址あり、誰某の居城なること詳か

ならず其餘これを舟若に據ことあり、船の接続古留葉ハシナガの城下たゞ
て南に居る、ことをたゞマ、城中の兵士もなし、に名被をなむし與ま
ざる間して廢される、されよりそ浦の城と呼みたへしとぞ

慈峯山長久寺真福院 宿蓬田村にあり地頭仮

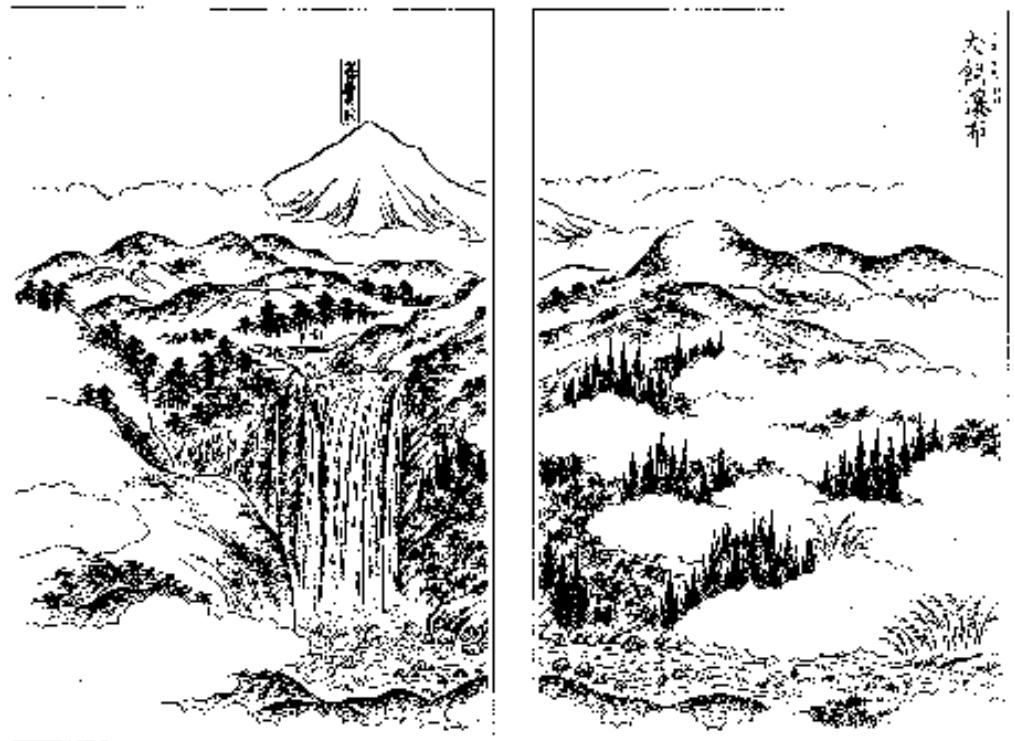


屋の亥方五町余、喜宗大乘院の末にして
開山忠実法印^{ヲウジツ}本尊正觀音^{ミタケスカニシテ}上原作^{カミハラヘテ}
十一面觀音^{イレブ}の二躯をして両本尊とす、
邦若松齡公の開基なるよしいひ伝ふ、木岡
の祈願寺なり

白峯山東光寺

ジワホカサントウクハタ宿達山村にあり真福院の巳方

壹町許りなり、舊洞宗福昌寺の末にして開
山喜冠和尚^{ヨウクン}本尊藥師如來^{サザンヨクシ}坐像^{ミヤマニ}三寸定額作^{セイケイ}
開基年月詳かならず、これを當邑の菩提守
とす



大銅飛泉

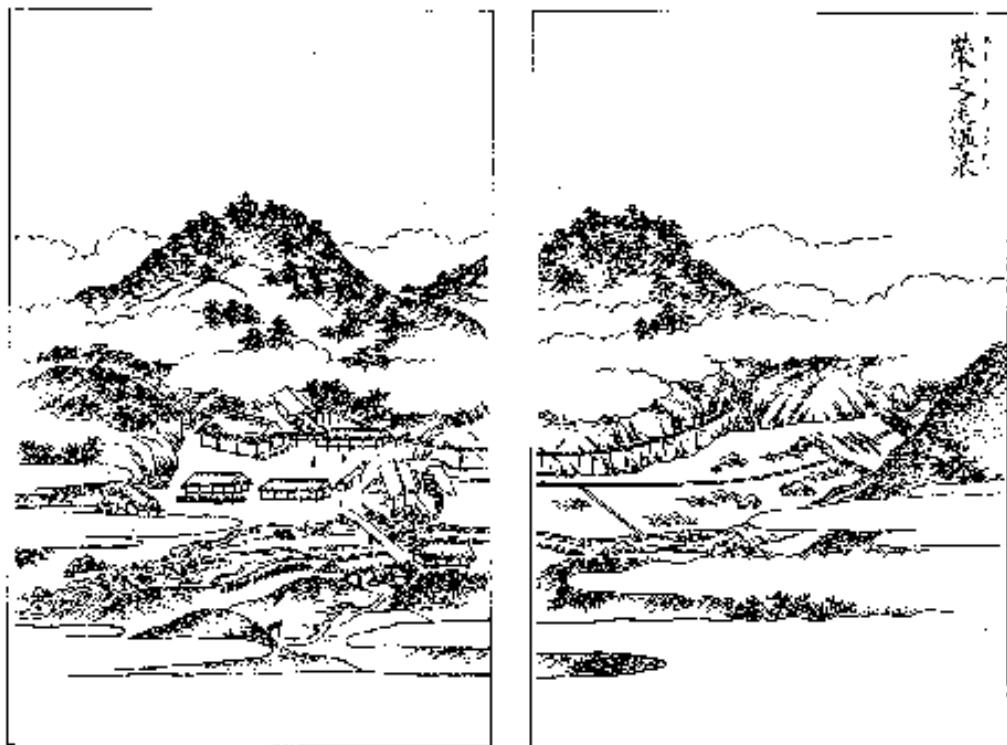
中津川村にあり、大銅といふ所な

り地頭飯屋より上平方二拾五町、水源霧局
山硫磺谷に出て、に至り末ハ口當山に流
る、飛泉の高きこと凡武拾余間、且寅の方
より未申の方に落横凡拾間余、川水少きと
きは或ハ三筋或ハ四筋となりて布を引か如
し、滝淵の左右岩石數山にして刹の深さ量
りかたし



硫磺谷温泉 「ワターワンセン」 中井川村の山中谷合に湧出す、

地頭仮屋の寅方式里二拾四町余、湯勢多く
硫磺氣ありて、桂一郎太郎著『日本古風の子生文庫本』 小治ミヤツクを治し四季共に浴客絶
ることなく霧島山の温泉なりといへり
明礬湯 同しき谷頭にして温泉を距ること三
町許り、明礬山の流なり、眼疾のもの入湯
してしるしを得るといふ



榮之尾湯

中津川村硫磺谷の温泉を距ること

山路五町許り岡越の谷中なり、湧出の年月
詳かならず、硫磺氣多し覓をもて数十の飛
泉を作り入浴のもの其下にしてをのく痛
所を飛泉に打たる是を打せと呼び、また、
口覆の一屋を構へ方壱丈余の池を造り湯坪
といふ、谷の左右に茅屋をならへ湯木屋と
名付入浴のもの止宿の家となす、常にこの
所に居住のものありて浴客の逢迎をなし諸
用を弁す是を湯守と呼ぶ春秋の際ハ湯浴の
男女尤とも夥し

安楽温泉 アンラクオンセン

宿霧田村にあり地頭仮屋より牛末方壹里六町金山川の川邊なり温泉湧出の上に熊野權現を安置す、社説に云、むかし聖熊野山より三所權現を背負ひ来て岩上に憩ふ、明る日笈を挙むとせしに動かす、重きこと盤石の如くにして力に堪かたし、即ち權現を岩上に安鎮す今はその大岩社の左にあり其後聖本巴之女子と縁を結ひ夫婦となりこゝに居住し權現の眞助によて温泉涌出しけるゆへ安楽と名付しとそ、硫磺氣なし、冬灰湯にて第一癆氣を和らげ筋骨の疾ひを除くといふ

几当山 ヒタチヤマ

日当山淨土院西光寺 日当山淨土院西光寺 東北にあり地頭仮屋東北にあり地頭仮屋は御宿所に屬すを距ること亥方四拾八町、真言宗大乘院の末なり、開

山大僧正行玄上人 シヤウケイジ
久安元年一月廿七日大僧正、久安二年九月廿日歸處回生一月五日入滅、廿年五十八
高僧三足八寸五分八寸八分 本尊不動明王
高僧三足八寸五分八寸八分 当寺人皇七十六代近衛院の御宇康

治元年創建なり、行玄上人ハ天台宗にして

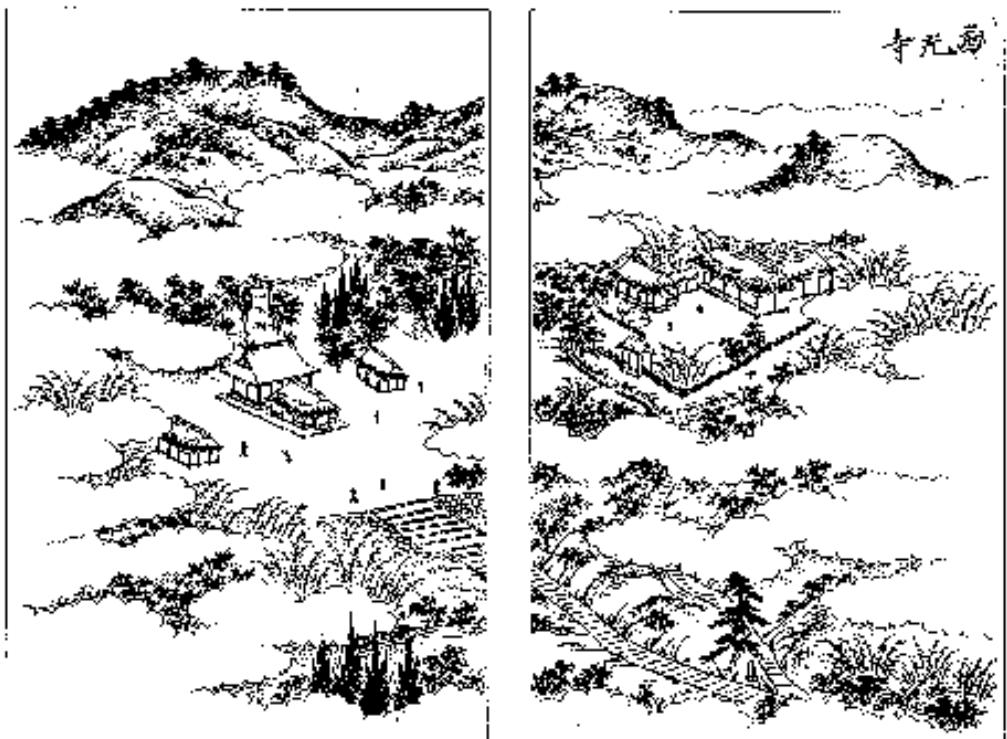
隅州清水台明寺に住職し此寺を建立す、ゆ

へに台明寺鎮守日吉神祠廿一社の内七社を
こゝに遷して安鎮し鎮守となす、其後十四
社を安置して廿一社となす新江口日吉山王に同
祭九月九日十一月初中

いにしへハ伽藍にて脇坊餘多ありしに悉く

荒廢し別當房日桂坊正善坊圓房院乃貢之坊口中也
舊易祓院也 本寺はばかり

を存す、いつの歲真言宗となりしや、日吉
神祠の別當職を務む真言宗院祖シヤウジンを正尊法印
といふ、邦君貞明公慶長六年辛丑二月廿七
日田四拾石をもて白玉祠に寄附し給ふと見



萬壽山東林寺

トウルイジ

東郷村にあり地頭仮屋の西脇
なり背洞宗福山寺の末にして開山泰雲宗琮
和尚萬治二年六月廿四日達化本尊阿弥陀如來座像開基年
月詳かならず、邦君貞明公國府城におはせ
し時夫人宮溪妙蓮大姉アシカイミヤクミンの為に建立し牌を安
置し給ふといへり、寛政十年四月八日火災
によて旧記伝ハらず

金華山神照寺三光院

フサヒ

朝日村にあり地頭仮屋
より未方式拾三町貞吉宗大乗院の末にして
開山日秀上人大正二年之亥十月初八日命木尊藥師如來藍色身也
スリドウノシナ金當寺は日秀上人正八幡宮を再建してこ
に居住せしに邦君貞明公の豊後州に軍を出
すや上人に命して強敵退治の法を修せしむ、
上人尋常の折誓にて叶ひかたく入定と充め
入定所となして創建する所なり、正宮の後

にて前は南海桜島を眺望し岩坂を歩行すること三四町茅屋あり通堂と名つく、左右に石仏式拾二体を安す皆上人の作なり、客殿の後入定所あり、石室の上に靈堂を建^{樹木}_{入三間}正面に定室の二字円相の額を掲左右の柱聯あり、^{一也道觀法界}_{是門三事}皆中山向越中^之の書なり、上人の行業世に聞え常に参拝するもの多く祈れば必らず感應著しきゆへとかや、事ハ当時の縁記に詳かなり

薩藩名勝志

卷之十五

薩藩名勝志卷之十五目錄

肥後郡

四十九所社

高崇寺

長能寺

山之城跡

瑞光寺

道隆寺

高屋神社

国見陵

母養子山

御腰掛石

叶嶽

一之宮神社

弘誓寺

古江浦

真如院

專念寺

安住寺

高牧野

國司山

弓張城

呂林寺

日新院

柳川谷陣跡

川上神社

感應寺

天子山

黒園獄

小田林

「春」
萬葉集

長泉寺

鶴龟城跡

万八千大明神

新八幡宮

照山寺

大始良城跡

幸山寺

天泉寺

高隈獄權現

近戸宮

笠原野

春日神社

寺之上

田貫神社

長谷觀音

医土院

安養寺

高隈獄權現

鶴戸權現

八幡宮

高隈獄權現

篠塚

龍翔寺

台粒寺

龍翔寺

白龍潭

岩戸神社

樟原定寺	神貫神社	妙蓮寺	淨聖寺	中津宮祠	山島寺
神貫神社	高隈嶽	法音寺	法音寺	松尾城跡	淨琳寺
高隈嶽	利大明神	般若寺	般若寺	谷川滝	中津宮祠
利大明神	善福寺	新留村	新留村	加瀬田城跡	山島寺
善福寺	新留村に鎮座地頭仮屋	新留村に鎮座地頭仮屋	新留村に鎮座地頭仮屋	新留村に鎮座地頭仮屋	新留村に鎮座地頭仮屋
新留村に鎮座地頭仮屋	九山寺	九山寺	九山寺	九山寺	九山寺
九山寺	陣平	陣平	陣平	陣平	陣平
陣平	高山	高山	高山	高山	高山
高山	肝属郡	肝属郡	肝属郡	肝属郡	肝属郡
肝属郡	四十九所神社	四十九所神社	四十九所神社	四十九所神社	四十九所神社
四十九所神社	新留村	新留村	新留村	新留村	新留村
新留村	新留村に鎮座地頭仮屋	新留村に鎮座地頭仮屋	新留村に鎮座地頭仮屋	新留村に鎮座地頭仮屋	新留村に鎮座地頭仮屋
新留村に鎮座地頭仮屋	にあり	にあり	にあり	にあり	にあり
にあり	を距ること已方町余、祭神伊勢四官	を距ること已方町余、祭神伊勢四官	を距ること已方町余、祭神伊勢四官	を距ること已方町余、祭神伊勢四官	を距ること已方町余、祭神伊勢四官
を距ること已方町余、祭神伊勢四官	万十九	万十九	万十九	万十九	万十九



す、永正十一年甲戌六月再興ありしより以来の棟札共ありて肝付家全盛のむかしより世々崇敬ありし神社と見えたり、今にいたりて正祭にハ一騎の鎧流馬を張行す、又、

寛永二年乙丑七月十二日神祇管領吉川兼苗

神号伊勢御位と記されしよし社司守屋舍人

いへり五十所人明神肝付の棟守と云々
大正十一日奉筆石碑文に観へたり

弓張城きゅうとうじょう 四十九所神社の上の山なり地頭仮屋

辰巳方にあたる麓之城ともいふ、むかし榆

井遠江守頼伸姑おとこより邦君齢岳公に憲をなす、

城中に榆井丸茶臼丸小城丸などいへる所あ

り、其後肝付家出張の城となし結構せしと

見えたり

摩尼山五大院高崇寺マニンゴタインコウウジ 四十九所神社二の鳥居

右脇愛宕社の前にあり、真言宗坊津・乘院

末にして開山^{カクサン}安^{アキ}快上人、本尊不動明王^{モダクミヤウ}兼行永觀三年乙酉の歲肝付の領主河内守伴兼行建立して肝属一郡の本寺龍頂所なり、星霜重りて漸衰微し今ハ高山一郷の祈願寺となれり

神護山昌林寺シンゴリンシャクリンジ 新留村にあり地頭仮屋より午

方拾壹町余、臨濟宗志布志大慈寺の末にして開山剛中柔人和尚^{カワチノハシナヒト}本尊文殊菩薩^{ムツボサ}本

邑の菩提寺にて嘉慶元年開基なりといへとも宝曆の初年丙子童子のために旧記烏有となり由来伝ハラス

円通山長能寺エンブサンザンノウジ 前田村マヘイ 前田村を今名に古姓相田にあり あり

地頭仮屋の上半方拾五町、曹洞宗福昌寺の末にして開山泰雲守瑞和尚^{タイウンノルハシ}本尊釈迦^{セキジョ}坐像^{ザシヤウ}本尊釈迦

迦^カ當寺ハ初め後田村岩下にあり勝巖祖幢^{シヨウイケンスウツク}

和尚太田門下寺明の御墓にて本尊千手觀音なり
しに六世の住持智之門鍋和尚の時肝付没落
によて開山真像及び住持の位牌を携へ串良
安住寺に退き、又、福山大安寺に携へ行
当寺ハ祖傳利出の頭、安住寺ハ第
二大安寺ハ第二開基なりと云故に泰雲和尚を勧請し
て福昌寺末となる、今當寺正面に千手觀音
の像を安置し瓢迦を側に置其由縁なるにや

玉池山日新院 前川村にあり地頭仮屋の申方
九町余、西洞宗福山大安寺の末にして開山
太屋香甫和尚、本尊虛空藏菩薩半像二世寿
堂和尚普請元龜元年庚午八月肝付河内守兼
續夫人日新公の娘女也。中正九年平昌ノ初月二日卒日新公の為
に建立せらる

山之城跡 新留村にあり此辺を本城といふ、
地頭仮屋をさること曰下方丸宅。肝付氏代々

の居城にして高山本城といふハ是なり、永
正三年八月六日邦君円室公肝付退治の為に
出馬し給ひしに新納越後守忠武。日州志布志
より米り後攻をなしけるにより利あらずし
て是年十二月十二日退陣し給ふ、城跡の川
越前田村の原中に戦場とて頸塚あり

柳井谷の陣跡

新留村にあり地頭仮屋の牛方
三拾町はかり山之城を五六町隔てたる跡な
り、邦君円室公の陣所なるよし云伝ふ

曹溪山瑞光寺

新留村にあり地頭仮屋より已
午方毫里拾四町余、西洞宗能州諸獄山總持
寺の末にして開山春岩祖東和尚住法主大師當寺

ハ應永九年壬午二月二十八日肝付河内守兼
元建立にて春岩祖東初開の地なり、其境地
を望むに前に川流後は深山にして宋朝六祖

住山の曹溪に相似たるとて山を曹溪と名付、
伝灯映暉を炎にすとて寺を瑞光と号す、小
境あり口、松籠鱗、富尾川、宝陀境、勝戸
河、石虎渓、鹿野苑、靈光岳、烏石堂、万
年峰、多聞谷、応永二十九年正月十一日二

世聖柔和尚額を製作す見たり弘治二年丁巳
十二月十五日火あり寺屋焼亡、寛文十二年
壬子六月廿四日又火あり近比竟政初年又火
有、重宝ことく灰烬となる

川上洗井神社 後田村に鎮座地頭仮屋より牛

未方武里九町余、祭神一應鶴田家御祭合勧請
年紀伝ハラス、天文二十三年肝付左馬頭伴
良兼社檀造立の棟札を納む、社山の境地た
るや溪水社頭を巡り深谷幽邃にして社の後
に二の落滴あり池のことし御手洗といふ、

村民往来して覗き見る事を懼る、此川上に
蛭多し、しかばあれと人の肉に入血を呻こ
と絶てなし、是異事なり、源順倭名類聚に
肝属郡川上と載たるハこの川上をいふなる

へし

柏尾山道隆寺 新留村にあり地頭仮屋の牛方

凡毛里五町、臨濟宗志布志大慈寺の末にし
て開山開基道隆大覺禪師、本尊十一面觀音
東本願寺元七十七年正月廿二日道隆禪師は宋國西獨
毛作二年にして成就と曰記を見ゆ

の人にして靈地を巡り此地に來り寛元四年
当寺を建立し自作の觀世音を安置して其後相
州鎌倉に至り北条時頼の請によて巨福山建
長寺を創建せり延喜祥徳寺に大覺禪り行持を承り、本因西獨毛作二十三年の時と云ふたり、「子因美の入海を缺て慈尊入滅時に至る前年即、大朝寛元

四方縁獨江錦の白帳元本寺の上記を以て之を正也相次ぐ事半もあらずに本寺正にありて之を以て觀音堂は二間四面なるよしと云ふたり、今子久がへり

あり道隆禪師観音に掛置しものなるにや、
今寺宝となす、又、お南君手白織て寄進せ
らる所の「帳幕帳あり、天文十四年正月
二月十八日の文書を發出せり」を納む

内之浦

貴福山感應寺

南方村南方村といふ
底浦村を合併

にあり地頭板

屋同をさること申方八町許り、真言宗坊津

一乘院の末にして開山性空上人、本尊正觀

音坐薬セモアリニ才余
上院上院作善法当所の祈願所、開基許かなら
す

正一位高屋神社

南方村に鎮坐、祭神一座座

タ出見御利益元月元日同二年廿七日之祭あり当社は人皇十二代景行帝口

向の國行宮を建給ひおハします時、國兄の
陵ハ其峰麓を距ること三里許り、断岩絶嶮
にして輒く登ること能ハス、故に此地に勧
請し給ふといふ、元禄九年丙子六月三月神

道隆寺



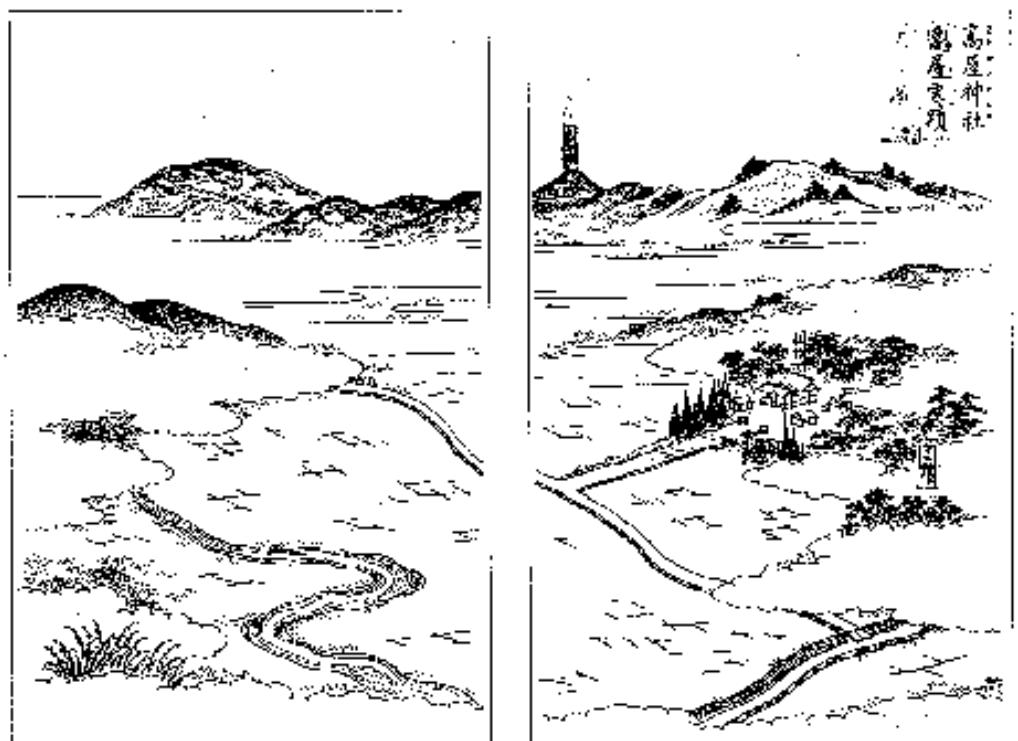
祇道管領ト部兼連高屋大明神五字の額を奉納し、又、縁記を書して宝殿に納む、其後享保二年丁酉六月廿六日神道長上徒一位ト部兼敬正一位の宣命を授け正一位高屋大明神八字を筆して華表に掲ぐ、正祭にハ流鏑馬を張行す

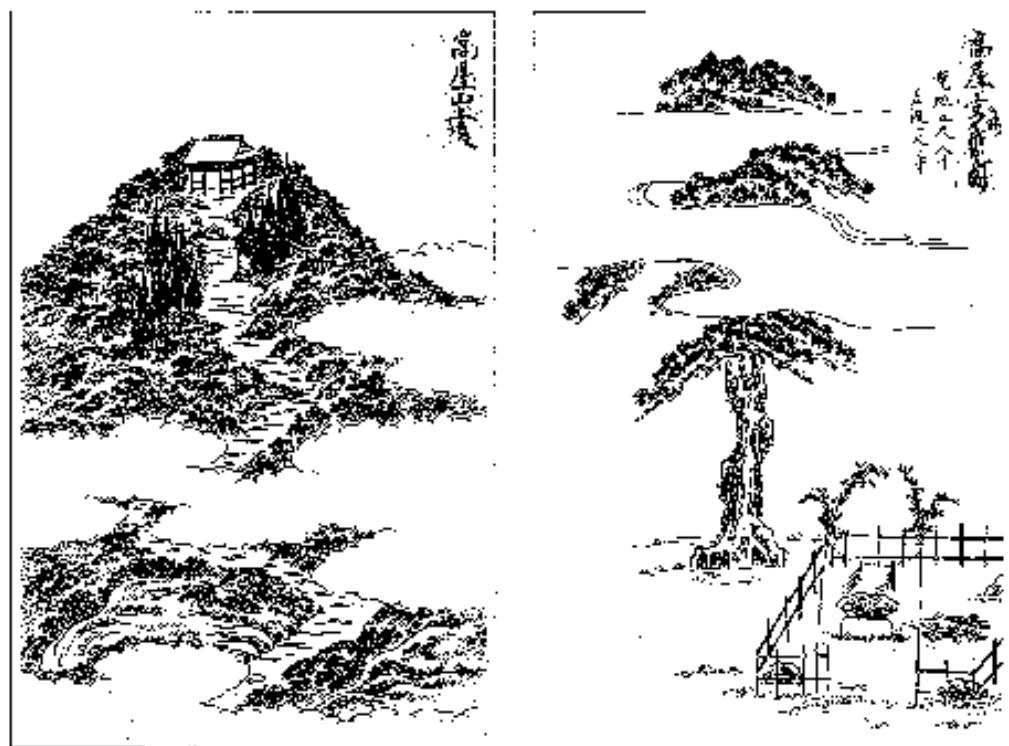
天子山

アシシヤマ

高屋神社辰巳方凡式拾間余田間の中

に一山あり景行帝行宮の遺蹟なり邑人大子山とよへり、其周廻九拾武間雜木生ひ茂り中に一の堀を埋む、一堀は廻り五尺八寸、一堀は享保十四年己酉の歲倒木の為に損し寸尺さたかならす、二堀共に白石の蓋をなすいかなるゆへにてありしにや由縁伝ハラス、堀の戌亥方三間許り古松一樹ありアリ邑人常に此林中に入ることを畏れ懼るアリ





といふ、日本書紀を按するに景行帝十二秋
元年七月廿日
壬午七月熊襲カミアシ反ひて朝貢カミアシせす、八月筑紫に御幸
 し十一月日向国に到り行宮を起て十二月熊
 襲カミアシを討事カミアシを議し給ふ、帝謀カミアシをもて熊襲の梶
 師厚カシマツチヤマ、文近カゼカズ、庭文カニワ等を殺し給ひ翌年熊襲こと
 くく平伏す、よて皇居カミアシし給ふこと六年是
 を高屋宮タカヤマノミヤといふ、即天子山アマテラスノヤマなり、当國の住
 人御力媛ミムリヒメを召して妃となし豊別皇子トヨハセノノミコトを生し
 給ふ、豊別皇子は日向國造の始祖なり日本
 紀に委し、天子山の亥方凡七八町に熊城と
 いひ伝へて熊襲の屯したる跡あり木西武吉著南朝遺
記小古志同道
 又、天子山半方七八町に川上神社を安鎮し邑人伝
 へて熊襲の徒川上梶師居城の所といふ、不
 審、又、熊襲合戦場として日間にあり足又

不審、口傳に伝へし」と尽く信するに足らず

國見陵

北方村

小中村を有する

の山中頃にあり地頭

仮屋を距ること戊方凡三里許り小社を安置し社壇の下に自然石を安す、其たかさ上中を出ること七寸余、廻り八尺、即、地神第四彦火々出見尊尊体を葬り奉りし所なり俗に国見權現と云、神代卷に久之彦火々出見尊崩、葬日向國高屋山上陵^{ヒサシマツカシマツ}延喜式諸陵にハ高屋山上陵在日向國、無陵戸、上古大隅肝属郡は日向國なり

隅州肝付郡内之浦鎮座高屋大明神者地神第四彦火火出見尊之降跡也、古老伝云、当社者往古在山上曰國見陵、蓋薩隅日三州之海山悉在日下也、其峰也去

麓二里、斷巖絕壁、不能輒登臨、故中古以来勧請于此地、社之古記旧章若干墨言悉紛失而無隻字之遺文、為可惜矣、雖然神之為

神也、未必属文、若能通其心則天地之間無物而非文、所謂天高地下、山峙川流則天地之文也、草木之花葉鳥獸之羽毛金石珠璣之精粹此又萬物之文也、以至三綱五常之道、三千三百之札皆是不測之妙用自然文章也、況又書之於本紀昭々者乎、昔天孫辛大山抵

木花開耶姫忿恨乃作無戸室入居其内而號曰、妾所娠若非天孫之胤必盡滅、如美天孫之胤火不能害、即放火烧室、始起煙末生出火号火蘭降命^{アラシノミコト}次避熱居出生之兒号彦火火出見尊、次生出之兒号火明命、凡三子矣、兄火

闇降命白石海幸、弟彦火々出見夢日有山幸、
兄弟互易幸而各不得其利、弟時失兄釣、豪

吟海边、逢鹽土老翁入海宮而留住已經三載、
海神懸懸奉慰焉、因以女豐玉姬妻之生兒

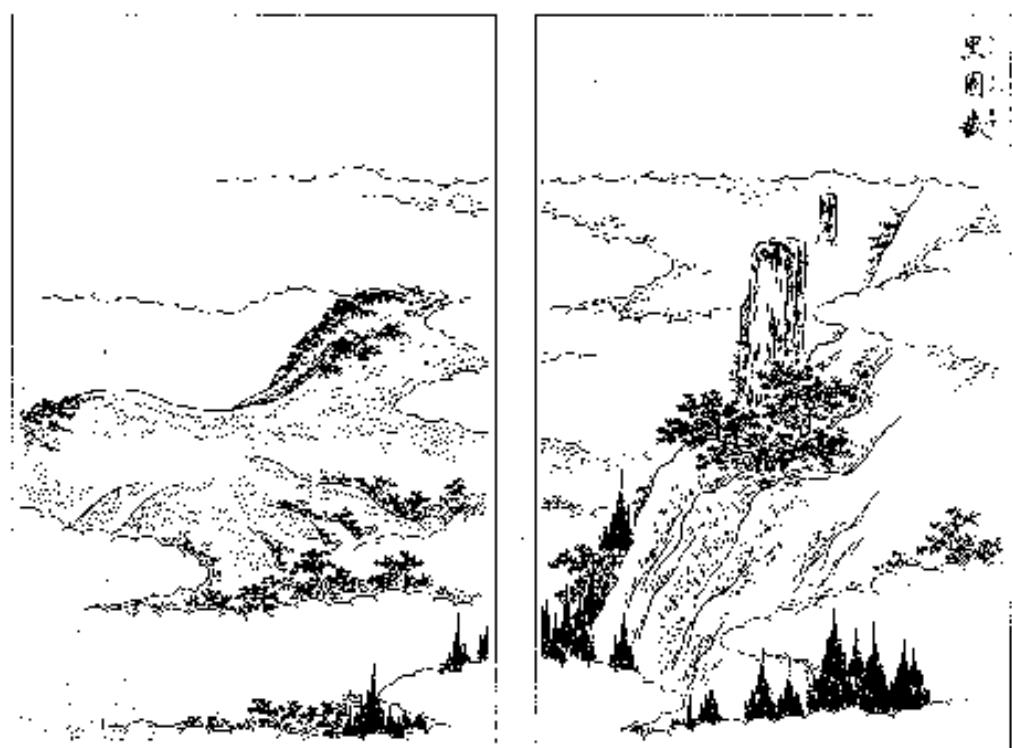
彥波瀬武鷦鷯草岸不合尊、後久之彦火々出
見尊崩葬日向高屋山陵也、是則吾神孫紹述
之跡也、孰不仰崇哉、屬者三州之牧伯源羽
林之臣、吏平重堅令從五位上藤原信秋正六
位下藤原親信等子書緣起因述其大概授与之
訖

元禄内子林鐘初三

神祇管領長上正三位左兵衛督ト部兼連

黒園嶽クニンカタ 北方村にあり地頭仮屋を距ること凡

三里余、國見嶽の牛未毫里余なり、火々出
見尊遊行し給ひし所といひ伝へて一大石あ



り其高さ九尺余、土中に峙立チヨウリトて二巒アツツケと名付

四月一日参詣ハムクイタマツルするもの多し

母養子山

北方村にあり笹峯慈ともいふ

母子山

母子山地頭仮屋を距ること中方凡三里余深山

鬱然として其巔に登れハ常に青笹を生し石

洞あり高五尺余洞中に小社を安置し彦火々出

見草を祭るといふ、岩洞の側に清泉流出産

婦乳少きもの此水を乳房に付けハからず

其功驗を得るといふ、火々出見尊を養育し

奉りし所といひ伝ふ、笹峯の亥方拾六町許

り山中に京都の馬場とて横四間流れ九間の

平地あり、また、戌亥方毫里余に貝ヶ瀬といふ所あり貝殻出ると云、かゝる山中に貝

殼あること奇異と称す



勝軍山長泉寺

南方村にあり地頭仮屋より平
方堺町許り臨濟宗志布志大慈寺の末にして
開山的堂和尚義和本尊正觀音半跏享保十五
年庚戌二月十四日類焼にて由来詳かなら
ず、中興を刀耕和尚革履三年皮草といふ

御腰掛石

南方村海辺川原瀬にあり地頭仮屋
の辰巳方を里許り諸を距ること凡三四町山
港にあり、其石高式間横式間三尺、むかし

景行帝御幸の時御船を用原瀬に着給ひ此石
に御腰を掛けひしといひ伝ふ、川原瀬の農
夫十助なるもの代々爰に居住し此石を鎮守
と崇め香花を奉る、石の下三間余にすこし
の清水あり四季増減なく用木に足れりとい
ふ

御腰掛石



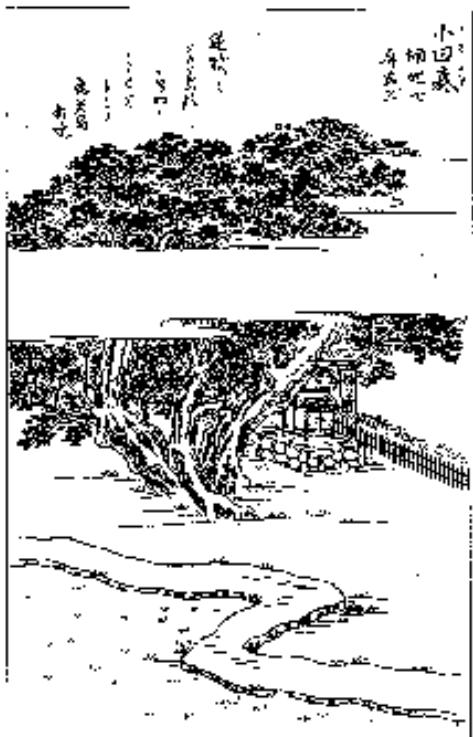
小田森

南方村小田といふ所にある楠の老木
なり四七五五尺高梢雲間にそひえ枝葉日光をお
ほえり、景行帝川原瀬に御着ありて高屋山
の陵に至り給ひし時、此所にて日暮けれハ
御一宿ありし所といふ日暮瀬のち御宿場と云ふ老樹の
楠は帝の御杖を逆に立給ひしに根つきて枝
葉を生したりと伝へり、何の頃にか上古の

楠は枯て丘古根また萌葉を生し今のことく老樹とハなれりといふ、樹下に小社を安鎮す福谷大明神と呼ぶ祭神詳かならず、初め南方村福谷といひし所にありしを高屋の社司宮路雜樂武辰なるもの娶に遷し祭るといふ、或説に景行帝を祭るといふは誤りなり

南曉

逆枝に若葉の花やこたの森



叶嶺 南方村の野藪なり峯の岡ともいふ、地頭仮屋を距ること凡拾五町景行帝この嶺に登り給ひて郷内を観覽し給ひ皇居の地を定給ひ_{坂子正を詔書の下見する}熊襲の党もことく平均し御處に叶ひたるとてかくハ名付給ふといひ伝ふ、今石に小祠を建て景行帝を祭るといふ、初め祠なく終木七株を栽てしるしとす、今の宮路衛守武元祠を建立してより三拾余年になるよし語れり、或説に高屋の社地觀慮に叶しといふ是誤なり

申上

鶴鳴城跡 岡崎村にあり地頭仮屋の上山なり

其經始詳かならず、文明中半田右馬之介兼宗房城主明応四年島津豊後守季久此城を領し半山越後守忠康_{元の}をして居らしむ、大

永中肝付氏の領となりしに没落して鳥津更
書頭忠長この山の地頭職となりて居城す、

今山林となれり

イチノミヤノヤシロ
之宮神社 有里村に鎮座地頭仮屋を距ること
と亥方八町拾七間、祭神一座月讀尊坐力山云々
市長院の二之宮にして宗廟なり、勅請の年
紀伝ハらず、慶長八年癸卯四月以来再興の
棟札を納む、社司宮地勇馬

万八千大明神 下小原村に鎮座地頭仮屋より

辰方三拾二町、祭神三座別當神、崇德天命、經津主命創祭九月九日、一月初十日、白
治元壬寅の歲肝付河内守伴兼経勧請なり、

社司宮地典膳、社説に云、弘安年中蒙古の夷賊退治の時方八千の神九万八千の軍童子と化し賊徒退治せしゆへかの軍童子を表し

神号を万八千大明神と称し崇め祀るといふ、

今に毎歳十一月初午其吉例に上て武者舞とて鎧を着、秋の弓箭の矢にて神事舞をなす、

九月九日流鏑馬あり

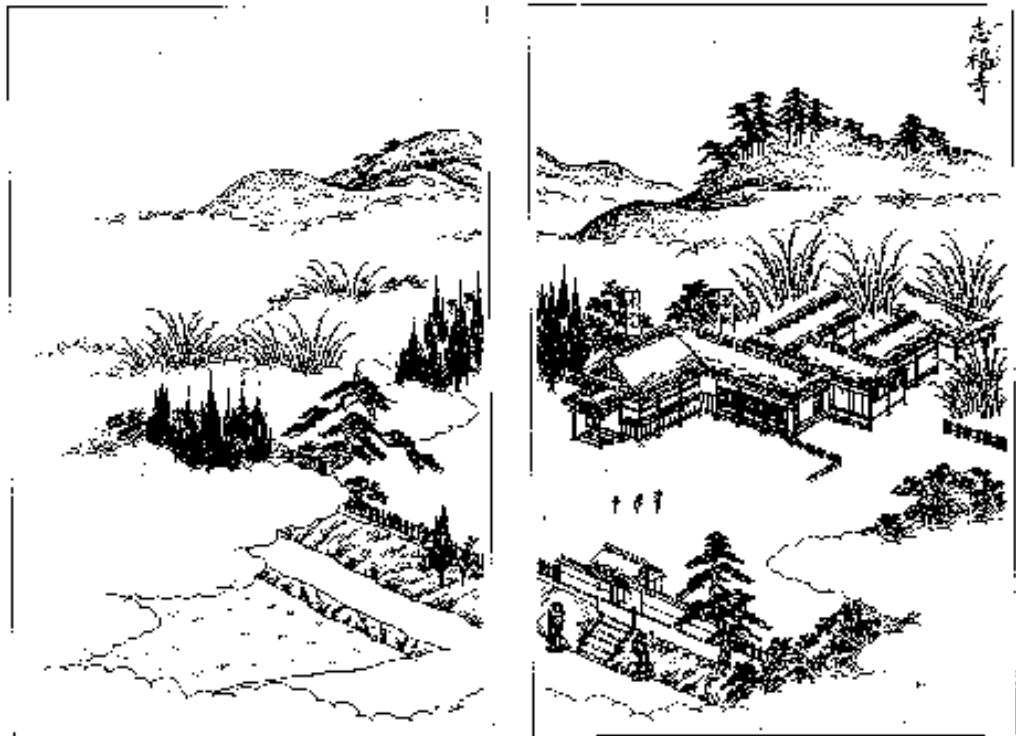
竹林山志福寺 岡崎村にあり地頭仮屋の半戸
拾町許り、時衆宗藤沢山清淨光寺の末にして
て開山南要上人善行十
六世本尊阿弥陀如来立像
松山天文
二年辛巳の歲儀雲平忠居十
の入の善堤寺と
なして建立す、享保十五年庚戌二月廿九日

火災に罹り寺の由来委しからす

雲山弘誓寺 岩弘村にあり地頭仮屋の子方

て開山徳翁和尚（八月十七日鑑化）本尊正觀音（年次誰がなす）半身坐像
文和年中邦君輪岳公開基のよし伝へ
（立派作）

寺地を反三畝を住持中巖宗珉和尚に賜ふ



無量山安養院専念寺 川東村相原カヘトクン カシハハフ

仮屋を距ること辰方凡老里九町、淨土宗鹿児島不斷光院の末にして開山運譽上人カシハハフ
キサキス本尊阿弥陀如來カシハハフ天正中松齡公の命によて創建す、享保以来三度ひ火ありて由縁詳かならず

大塚山医王院成願寺タツチヨウガクニイエウジヤウイハシ

一之宮華表の右脇にあり、真言宗坊津一乘院の末にして開山永伝

法印、本尊藥師如來カシハハフ初め大塚山の麓にあり、六世忠瑜法印旧成願寺に移し其後九世堯仁の時今地に移す、本邑の祈願所也

瑞雲山安住寺ズイウンサンサンヂウジ

岡崎村にあり地頭仮屋の牛方

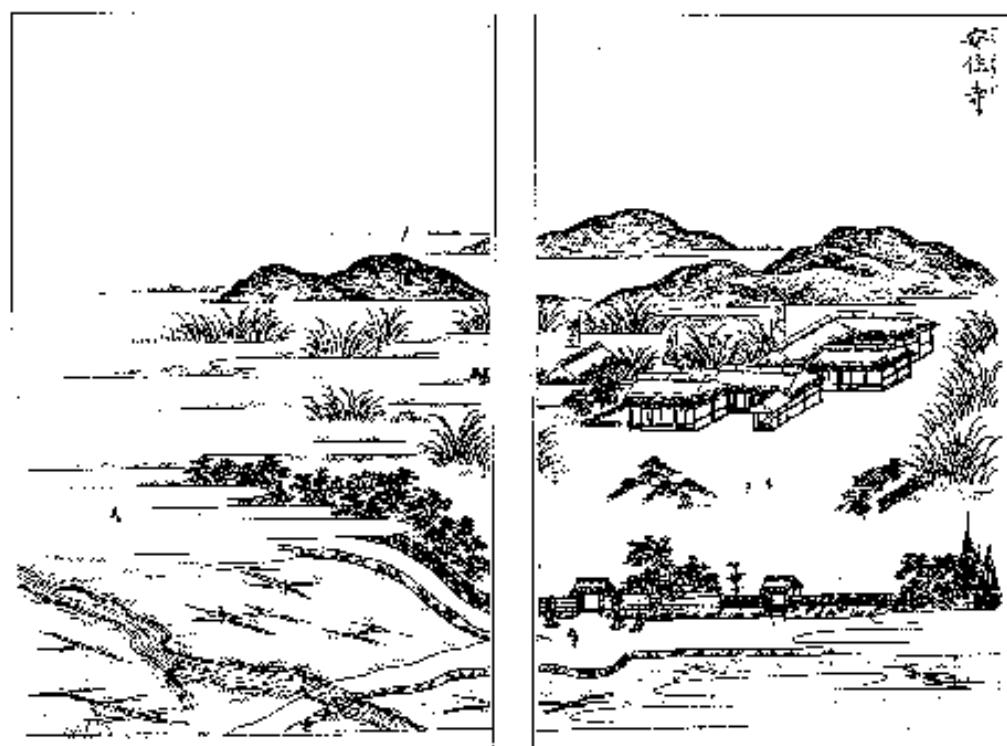
拾壹町志福寺石隣なり、曹洞宗天真門下希明派福山大安寺の末にして開山勝旅祖輪和尚、本尊如意輪觀音カシハハフ天文初年開基にし

て二峯山莘善寺といふ、肝付家にて後廢に及ひしを二世齋之門鑑和尚^{文宗平甲午}鹿屋院宇津間に再建し、大正中遷に移す。

寺之上 安住寺の上にありよて寺之上といふ、鶴亀城の牛方三町許り、平山越後守忠康鶴亀城を守りし時肝付の属軍と合戦せし所なりいま島となりぬ、戦死の骸を埋し塚とて今に数多あり

鹿屋

高牧野 中名村上名村^{太宰府之村、田舎主君}の地に跨りて惣廻り四里五町余、此馬牧いつれの年初よりことと詳からなす、近口官^{二所権}現社頭に寛永二年四月の棟札あり、高牧繁昌^{シヤウ}の文言みゆ、されハ寛永のむかしよりすでに此牧ありしと見へたり



狩長田賀神社

下名村川崎に鎮座地頭飯屋

坂

「名上」をさることと巳方式拾宅町許勸請年紀詳
あり

かならず、祭神京都加茂神社に同し

御留印

当社は本邑の惣鎮守にして初め伊勢国の住
人田丸玄蕃なるもの背負ひ來りて中戸宮に
勧請し其後今之地に安鎮すといふ、西の宮

本社の右にあり蛭兒の神を祭る、永正元年

甲子霜月十五日社殿造立の棟札納も大願工

伴朝臣兼明とあり、年中數度の祭あり、六

月晦口にハ夏越の祭りとて高洲の浦に演殿

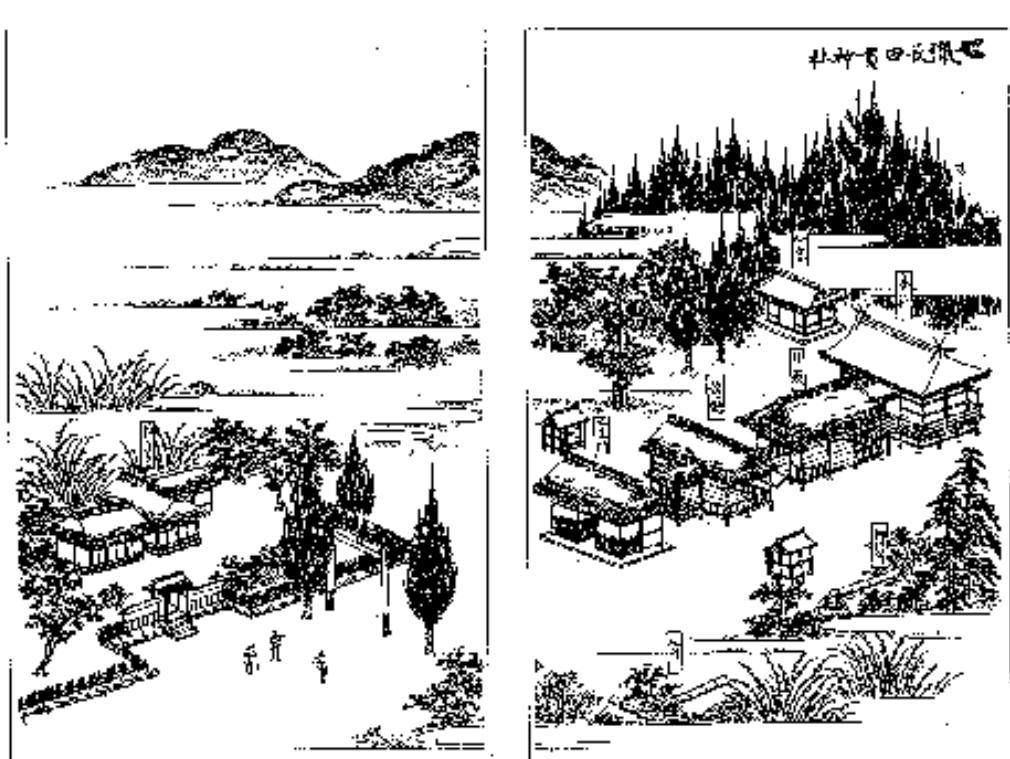
下りの神事あり、神幸の式をなしていと賑

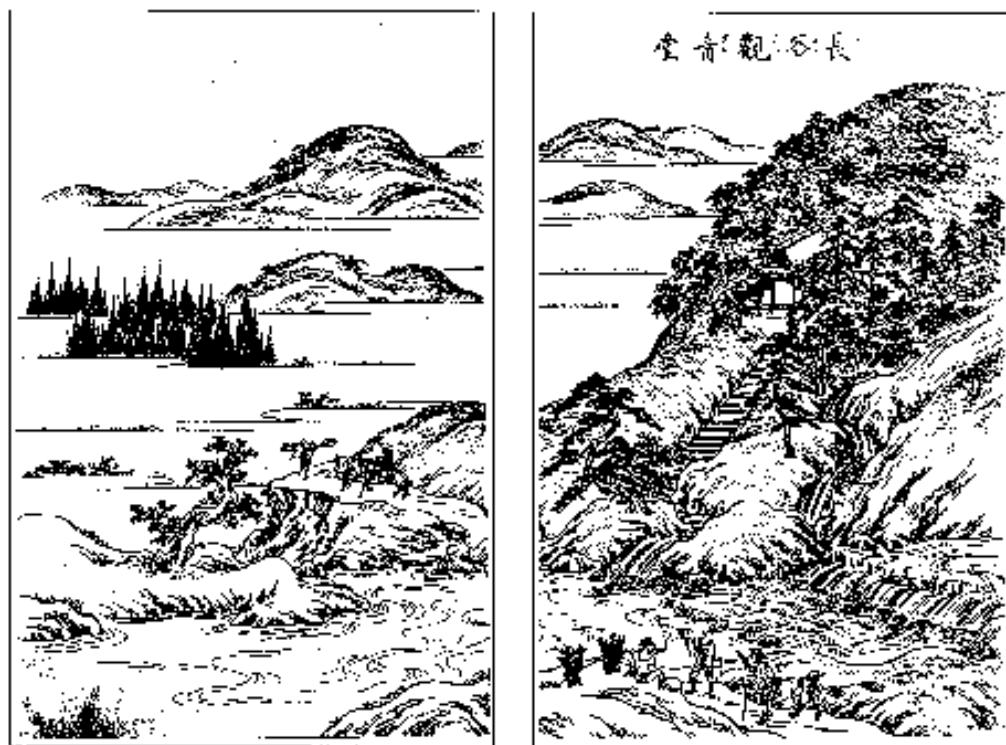
しき祭りなりといふ、華表左に社司大経止

親居住す、右脇に別当宝龜山阿弥陀院神宮

寺あり、真言宗大隅郡垂水成就院の末寺に
て本尊觀迦弥陀藥師

夫上
なり





國司山 コウシヤマ 狩長神社の社山後の田地中にあり、
幾なる雜木の森なり、中に石小祠を安す
詳かならず

長谷觀音 ハラハラノミタチ 上名村長谷山にあり地頭仮屋より
戌亥方武拾八町、鹿屋川の流に臨みて堂の
構へ四間四面丈五
四方各五丈五 いと古く巧みなり、仏像白木
半身長丈
六四寸 佛体の後に毫光あり後人の作と見え
て梵字など彩色したる裏に永正二年丙寅九
月權律師慶朝ケイジョ と記せり、また元來の毫
光なりしと見へて仏像と同本にて雲形など
膨たるか破損して仏厨の内にあり、里民伝
へいふ、古へ炭焼五郎治といひしもの都よ
り此地に來り妻むかへて歳月を送り常に炭
をやきて生活としけるが、あらかねの土の
中より出るを山中に得たり、取て都に煖り

上り是より世にならひなき有徳の家となりぬ、五郎治初め都にありし時より常に長谷寺の觀音を信しけるか、今かゝる天地のめくみに逢ふことひたすらに觀音念佛の力なりと長谷寺の觀世音の御影をうつし、工ミのものに詣ひ、うつくしき材木ゑらみて再び爰に來り、堂造り靈像を安置したるにより此所を長谷山と呼ひなしたりとぞ、今仏厨及び堂の堂を見るにたくみ細やかにして尋常ならず鄙野庸工の手に出たるものとハ見え侍らす、里俗の説由ところあらんか

春日神社 中名村に鎮座地頭板屋の辻寅方八町余、例祭九月九日、天文三年四月四日社頭一字造立の棟札を納む大檀那伴某と見へたり

豊岳山富岡寺医王院 中名村にあり、真言宗大乘院の末にして開山賢光法印^{シジョウ}本尊薬師如来^{立像}當所の祈願所なり、開基詳かならず

笠原 中名村の地にして鹿屋邑東方一面の広野也、東西武里許南北三里に過たり、北ハ高隈郷に至り東は串良高山の二邑に界へり、四面渺茫たる原野に島地を開き所々に松の林などあり、本邑より串良へ通ふ街道ハ東西に亘りて松の並木あり、其余諸邑從來の岐路あり、みな松をうへてしることす、

この地に朝鮮國寄化の民居住のところあり

朝鮮寄化人の手ハ薩州口置郡伊集院苗代川の様子
苗代川の様子にさをさう 地頭仮屋より卯方壱里余

をへたて、街巷を開き宅地を画してこれに

居る、はじめ薩州口置郡伊集院苗代川の居

民三拾余戸をわかつ此所に移し地を与へ居

らしむ、實に宝永の初年なり、それよりし

て歳に繁り月に昌へて今ハ八拾余の数に及

へり、衣服言語苗代川の俗に異なることな

し、つねに耕作を業とす、寛政年中よりは

しめて陶器を造ることもなせり、この地、

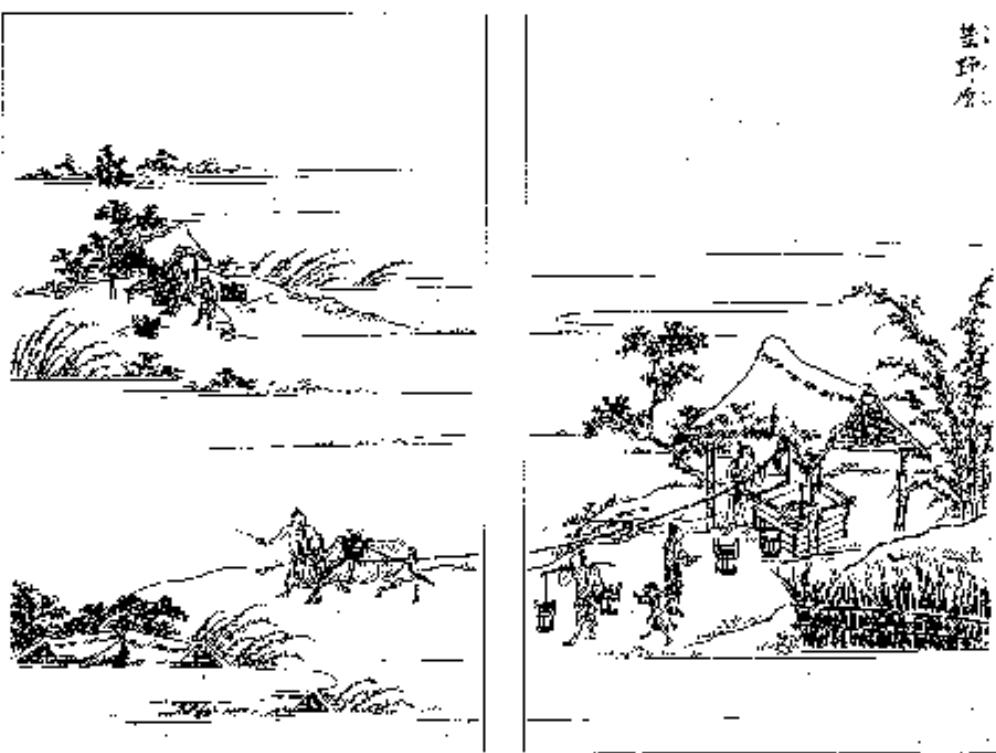
水なし井を掘ること大凡三拾余尋、皆甌盤

を施してこれを汲む、また、相距ること拾

町許り北に神社あり、高麗國の靈神を祭め

祭り華表に玉山宮と題す、享保十年正月

勧請せりといふ



池上山安養寺

中名村にあり地頭仮屋より午

未方五町余、曹洞宗鳴岐郡清水楞嚴寺の末にして開山松堂玄龍和尚教義寺本尊阿弥陀如

来立原鹿屋の菩提寺にて寛文九年二月七日

火ありて出来伝ハラス

近戸宮三所権現

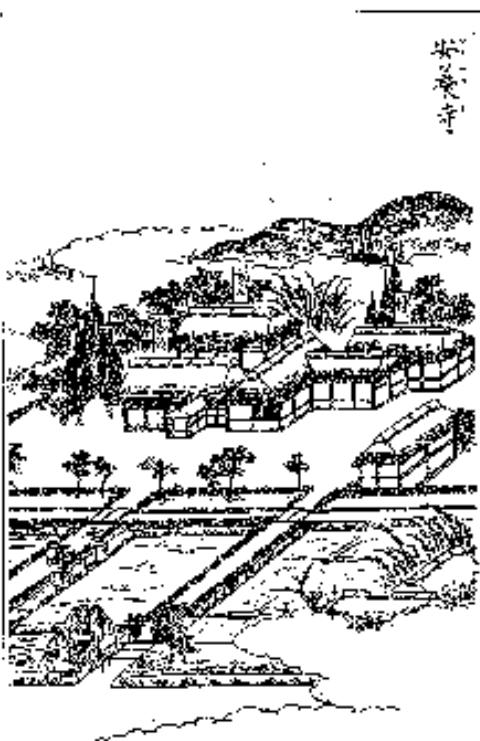
高隈嶽の麓に鎮座上名未地頭

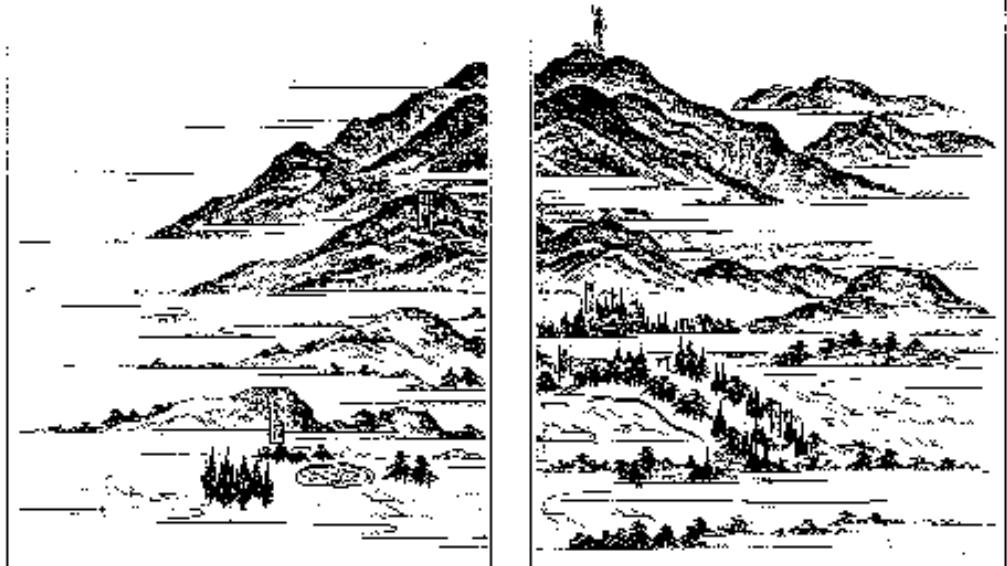
仮屋を既ること子方武里、勧請年紀及び祭神詳かならず、いにしへより高牧の守護神なりといひ伝ふ、二王門の内松杉立ならひ

八町許りにして鳥居にいたる高隈三所大権現と扁す、石階を登ること六拾二社頭に至る、華表の右脇に別当寺あり高嶽山宝精院

五大寺といふ、真言宗大隅郡垂水成就院の末にして本尊阿弥陀坐像左右藥師觀音坐像開

山伝ハラス





高隈嶽立藏權現 高隈嶽頂上に安鎮す

上名村
地

頭坂屋より子方三里、本地弥陀薬師觀音、

例祭九月九日

中嶽藏王權現

中嶽

嶽の半腹に安鎮す、地頭坂屋より子方三里拾八町、祭るところ立藏權現

に同じ、例祭九月九日

始良

鶴戸六所權現

鶴戸

上名村に鎮座す、名村は始良郷始良正村を

地頭坂屋

鶴戸

を距ることと巳午方三里余、祭

神六坐

正則の後裔正則通直不吉事五事正則

當社ハ

初め岩窟のうちに小社を建て祭りたりしに

前太守中将公淨國公の遺志を繼給ひて新に

地をトし鹿児島譲方神主從五位下出羽守藤

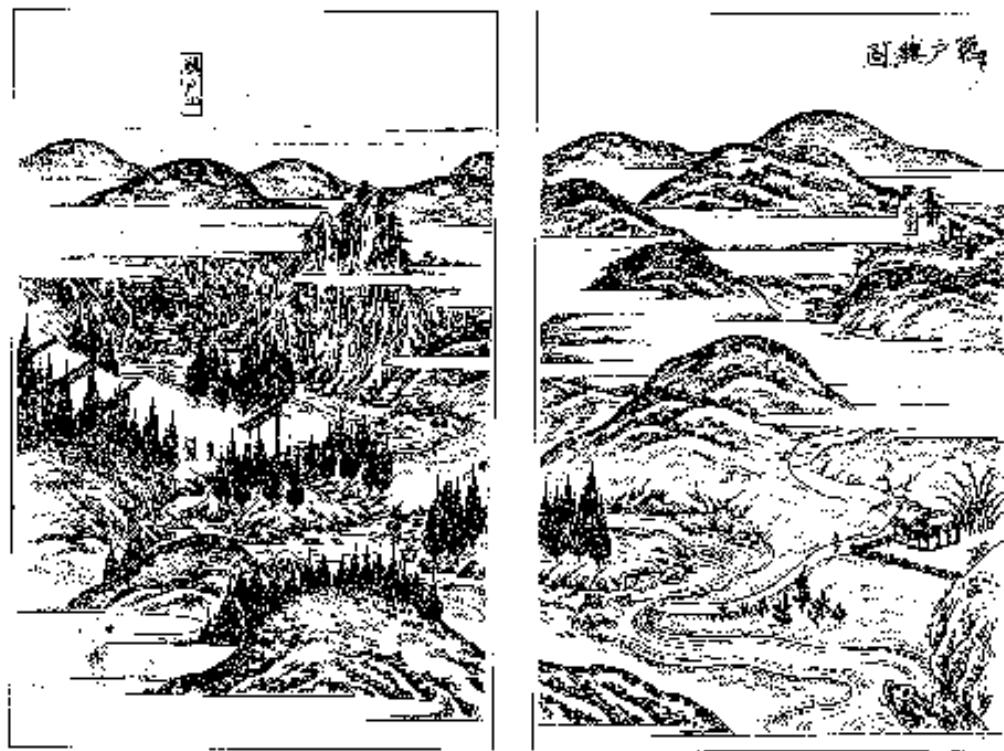
原親益をして地鎮淨めをなし社殿を建立し

高隈靈像を安置し明和五年戊子十二月十八

口の夜神靈を勧請せしむ、此夜や岩窟鳴動して天に響き荷掛原山居の方にあたりて電光移しく今に伝へて奇異といふ、社殿の午未方凡三拾六間鷦鷯戸山（鷦鷯山が廻り）の下、巖壁に大なる岩窟あり（金剛峯寺御園記之古事記年、明和四年十二月二十六日舊石室入口のうへ五六丈の所まで落成りて、其蓋石の高さ二丈八尺貳丈八尺を北門と曰く古事記見へなり）即ち、神代の遺跡にして地神五代鷦鷯草葺不合尊の草彅を葬り奉りし所なり、神代卷に葺不合尊崩於西州之宮、葬日向吾平山上陵云（初書抄古文のもの始より終り松下山根の前王墓也記年太祖弟羅也之子也、古事記吾平庄へま十載山又西上々へたり、今方向をさるるにこれ置れるなり、遂に世口ハ今も鷦鷯山めにして給良ハ森島山南にあるところなり）其岩窟の入口より九間許りの所に切石を布て社壇となし上に高き六尺余の社を安し古鏡數多を納む、社壇の下ハ井戸の如く幾尋ともなき穴にして往古より此穴を神体と挙し陵といひ伝へしといふ、今其穴

を窺ひしにミラス、旧記を按するに慶長九年洪水して篇中を洗ひ社壇流失すと記せり此時砂石埋りしにや、社の後に表丈五六尺余も廻りつべき土岩あり、中に穴（一通りて根とする）と云ふまた、社の右の方壇間ハかりに高さ二尺廻り壇丈余の塚あり、上に一片の石を建たり、神武天皇の陵なりと傳へいふ、明和の古牒に長祿二己卯年と銘しまた梵字などもありけりといへとも今は文字殘缺して詳かならず、神武帝は大和國畝傍山東北之陵に葬といふ、葺不合尊の御子なるによて後世爰に勧請し奉るもしるへからず、社壇の左七間許に清泉出る目洗ひ水といふ、此水にて目を洗ひしものは一生眼疾の患ひなしといふ、岩窟の前東の脇に瀧湧あり御池といふ其深

さ拾尋余、最磐そハたら水色藍を湛ヘ神龍
のすむべき所ともいひつへし、上に五輪の
石塔あり高さ四尺、児の石といふ、往古
の邊に寺ありて六箇の坊守もありけるとそ、
其寺の児瀧に身を投たりししるしの石なり
といひ伝ふ、又石塔の向ふ高き巖の中程穿
ちて窓のこととき所あり児の窓とよべり、抑、
吾平山陵は神代二陵の一にして延喜式に載
る所なり、式に云、在日向國無陵戸古西代、
ハ蓋日向國山陵の下に在り、馬鹿田を號されし時は大隅國曾れ、後なれ
ば日山本國國と記せるべからず向と書れりると口李紀の草文を改めら
れざりしもべなり、吾平山の陵谷がこより陵に守戸守戸しといへとも上れ
材木盛りの草木今の業木を謂は世ノ若聲の事とぞ、生葉と者花を供へ供言
可を聽け、庄官守主の頼むるへし、國府中社廢定を
するに及びて免職を下禁田主をして祭祀を司らしむ





清池山玉泉寺

上名村にあり地頭仮屋をさる

こと辰方拾八町、曹洞宗源翁派ト野国那須

泉溪寺の末にして開山源翁和尚

本尊如意輪觀音、当寺の古篋を見

るに源翁當國に下向して當寺を建立し開基

は玉広守泉禪伯といへる人といひ伝ふれと

も其俗名及び其年月詳かならず、応永二年

丙子正月七日和尚落命し境内に石塔あり源
翁開基四箇寺の一にして靈地なるよし記せ

り今按するに源翁は

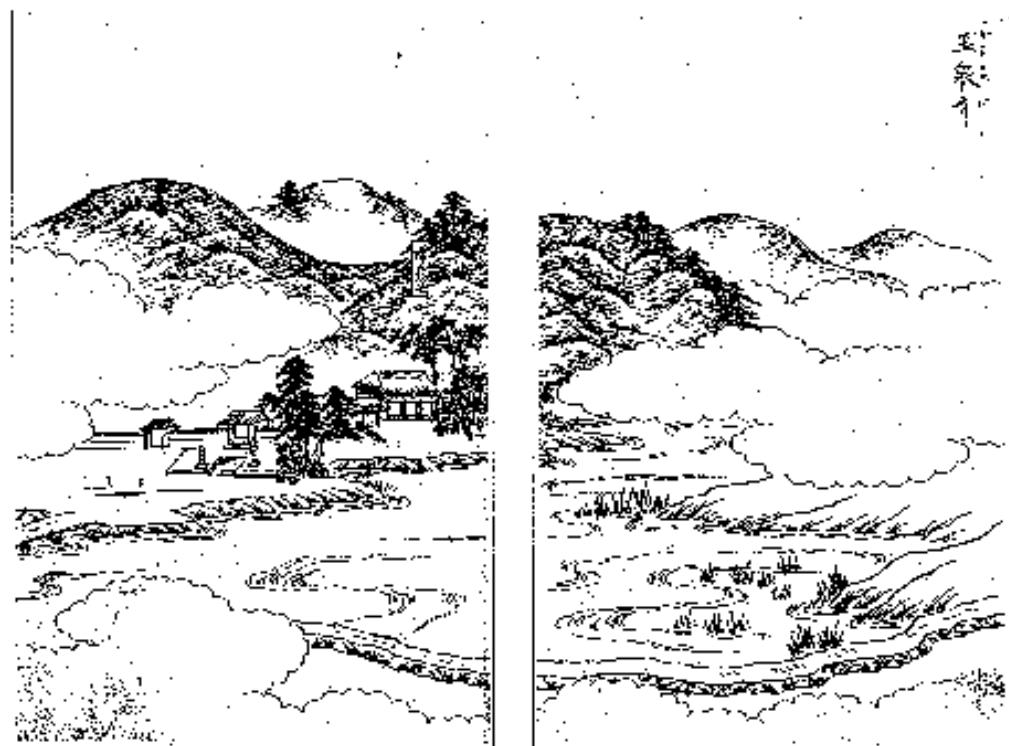
弘安二年庚辰正月七日示現寺におひて寂す、

門人骨を山の西南隅に埋む、九十代後宇多

帝勅して源翁禪師と謚す、当寺の古簿応永

三年落命と記したるは誤れり、行状は鎌倉

志海藏寺源翁の伝に詳かなり、また、殺生



石を持りし事あり、当寺にあつからすゆへ
にこゝにもらしぬ

正若宮八幡宮 龍村に鎮座地頭仮屋の末方四
町余、祭神一坐正若宮御祭月
初節十日十吉 始良の惣鎮守に
して長久四年に建立ありしと文明拾二年庚
子八月二十七日肝付河内守伴兼忠再興の棟
札写に見へたり、当社をもて大隅正八幡宮

四所宮の一社といふ

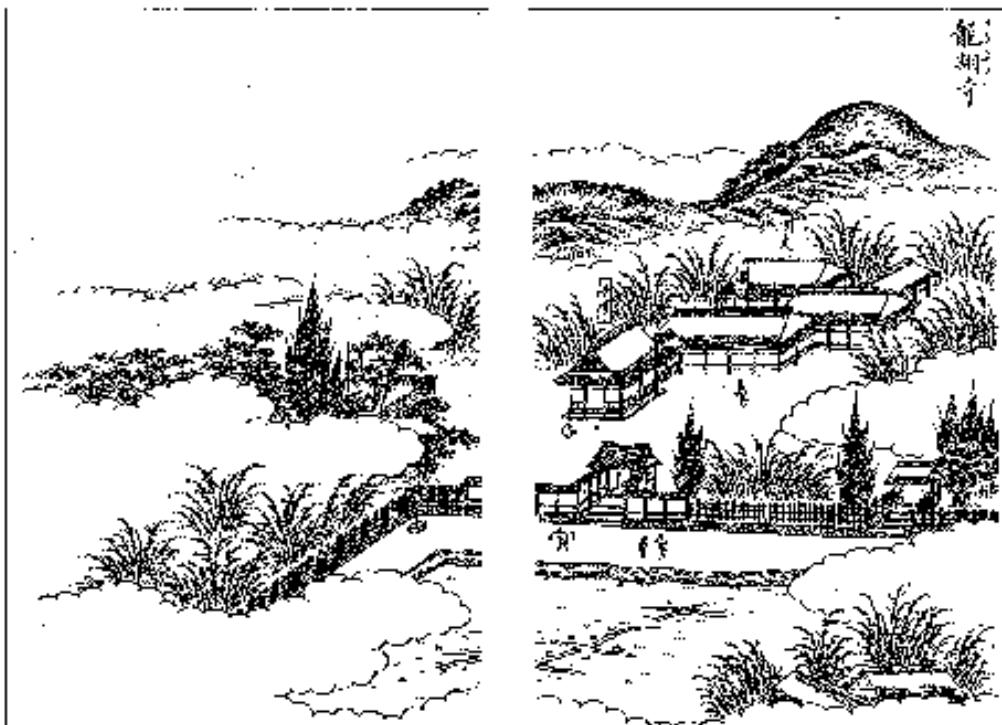
摩尼山千手院幸田寺 正若宮八幡の別當寺に
して社頭の後にあり、本尊阿弥陀如來半後
開基年月伝へらず、往古蓮養院宮司坊、宝
実坊、智積院、東持院などいへる末寺もあ
り、皆破壊してその地のミ残れり

宝院山含粒寺 上名村にあり地頭仮屋をさる
こと午方三拾四町余、曹洞宗福昌寺の末に

して開山仲翁守邦和尚守邦寺 本尊千手觀音、
当寺ハ正長二年の開基にして和尚は文安二
年乙丑六月七日六拾七歳にて遷化し寺中に
石塔あり、再興の石と見へて台石に延宝四
年丙辰三月廿日と記せり、茶毘所の後寺門
外田畠の間に石塔めり、本山の普提寺となす
大始良

大始良内城 大始良村にあり池頭仮屋同上 を

距ること巳午方壹町、凶徒肝付八郎兼重の
弟肝付五郎九郎此所に居住せしに濱田横山
完上シテ 大始良四か村の長守護齢岳公に内通し
けるにより五郎九郎大にいかり即時に横山
か居城に攻かゝり合戦に及びけるに、濱田
某は戦死し完上某ハ遁れて街道に出、路辺
の林間に隠れ居五郎九郎勝軍して帰りける



を馬より下に乘^のして仁礼頃仙當城を奪ひ遂に騒乱のちまたとなりけるが幾程なく内城も公の御手に属し在城し給ふこと数歳也。今島地となりて一樹の古松あり、御看経所の松とよへり

ズイ
瑞雲山龍翔寺

大始良村にあり地頭仮屋の申方四町、臨濟宗志布志大慈寺の末にして開山玉山玄堤和尚（嘉定二年辛卯四月二十五日入定）本尊地藏菩薩（半身）玉山和尚人唐して帰朝のとき草箇漢（萬山口）に着船し草庵を結ひ春海庵と号し、次に当寺を建立し其後大慈崇福の二禪刹を創建す、大門に瑞雲山と扁す、鷲岳公をよひ夫人敬外崇欽禪尼翁主溪月宗江大姫の廟所を建並骨を納め位牌を安置し給ふ

廻林山宝勝院照山寺 ヒヨウランサンボウセイインノウサンジ 大始良村にあり地頭飯屋の卯方四町、開山安信法印、本尊不動明王^{ミツタケ}開基年紀詳かならず、本邑の祈願寺なり

篠塚 照山寺の西毫町許にあり田地の中に凡廻り百間余もあるへき森山なり、篠竹多し
胞衣塚ともいふ、惣翁公誕生し給ひける時
胞衣を納めし所といひ伝ふ、塚の上に松あり下に一石を置てしるしとなす

新八幡宮 大始良村に鎮座地頭仮屋より已午
方四町、祭神二座必利天、尊皇天、神功と后
列祭九十九日ノ事也 当社は輪
岳公内城に居城し給ひし時勅請なり、神体

黄金の凸鏡を安す、表に弥陀藥師觀音の二像（一對）を持出し、裏に新八幡宮氏久と記さる、

の側に繁昌門の農夫孫太郎日々香花を供す

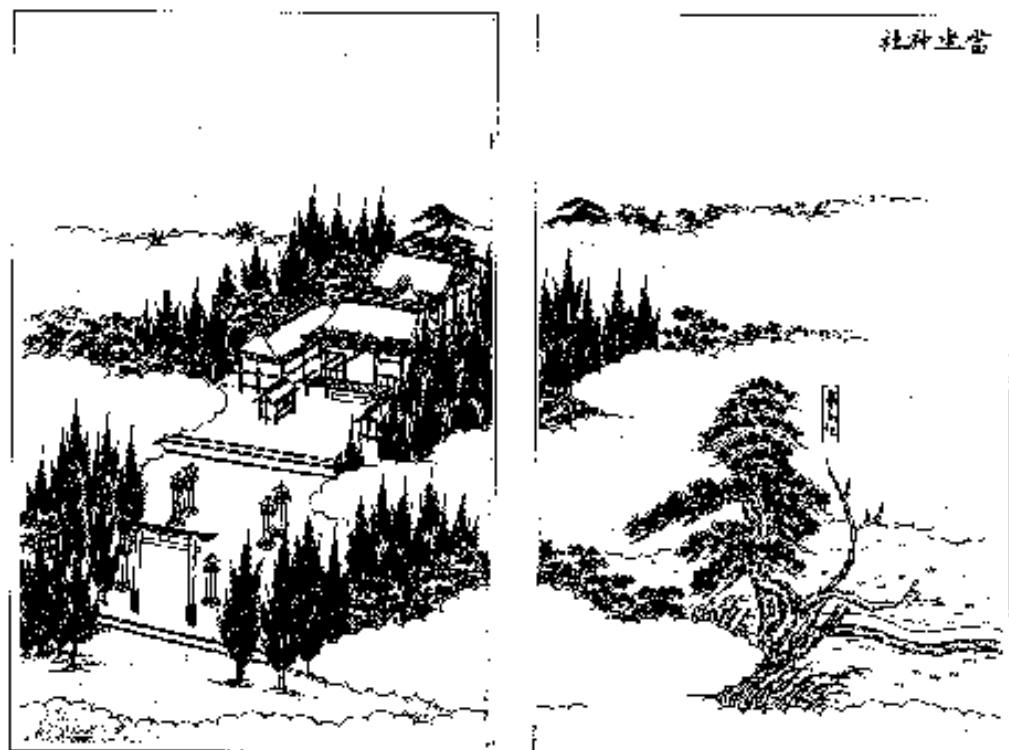
岩戸神社 大始良村に鎮座地頭仮屋より未申
方八町余、祭神二座大始良村天日命本邑の崇廟
にして永禄中勅請す、社司黒木櫻負

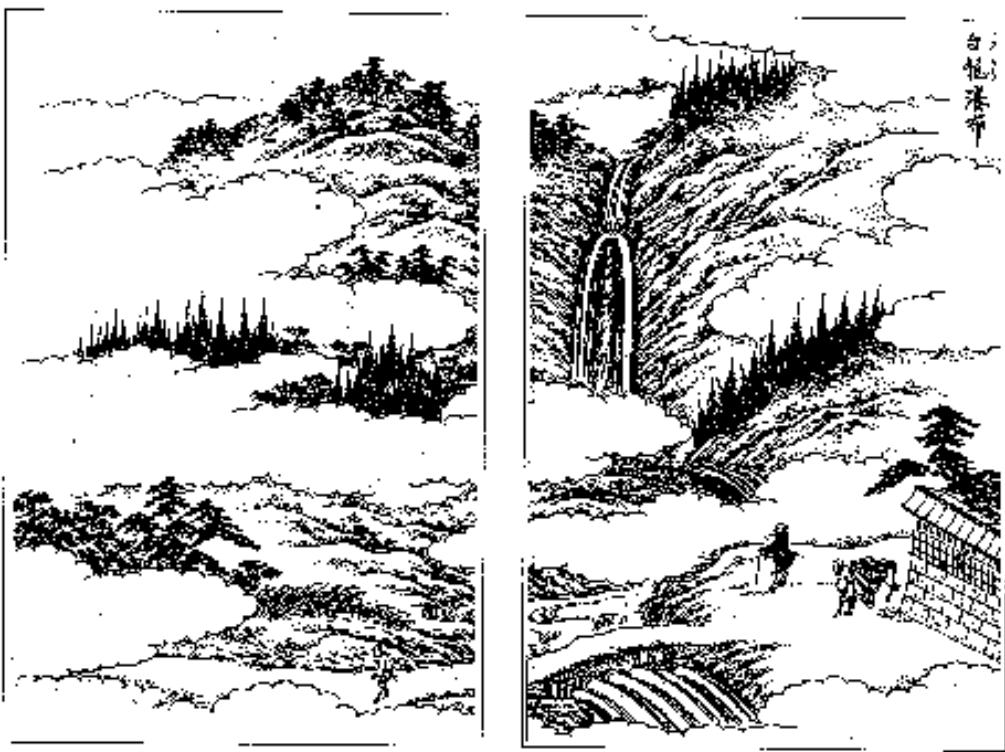
卷之二

正一位当座神社



にして在
祭神一座
（祭九月九日） 勘請の年月詳かなら
ず、本山の宗鎮守なり、当社は皇孫日向高
千穂の峰に降臨し給ひけるとき此所に当座
ありしゆへ神号を當座大明神と名付しとい
ひ伝ふ、享保十一年八月十一日神祇管領吉
川兼敬正一位の宗源宣旨奉納あり、社の未
申方四拾余間に古松あり鶯島松とよへり、
即皇孫影向の跡なりといへり、又社の西方
にあたりて小池あり御手洗池といふ、池水
流れて拾尋余の瀧となり白龍の瀧と名づく、
末は井手の瀬川に流れ古江浦に出る、今古
江浦の濱辺に一奇石あり、六月晦日夏越祭
とて社頭より土面と鉢とを捧て此石上にい
たり神位を設け祭りの式をなす、是を濱下
りといふ





古江浦

古江浦

木谷村にあり領主仮屋^{（同村上）}を距ること

と拾余町西の海濱なり、類字名所集に古江浦を載てその所いまた勘へすといへり、木谷村ハもと古江浦にて彼浦ハ舟舶入津の所なれハ行客の往来絶す居民いらかをならへて常に賑ハへり、東は山高く松杉縁りを争そひ白龍の瀧その木すべを洗ふ風情絶勝といふへし、又、霧島松はかの浦を上ること遠からず、相模の歌に相模は移内裏上の御文代、相模大河心資に據す、よて相模より古江浦とよみけるはこれならすや、今其歌を載て後の考をまつ

續後拾遺

相模

万代のかけをならへて越の住古江の浦は
松そ木高き

しに雨のふりけれハよめる 僧古月

王、天文年中日秀建立、中興を堯周上人と

春雨の古江のうらハ波もなしおさまれる

いふ

世のこるしとそ聞

新城

円覚山法界寺真如院

木谷村にあり天台宗南

泉院のすゑにして本尊不動明王、開基詳か

ならず、初め日州高原神德院の末にて隅州

末吉郷にありて廢壊せしを享保十五年八月

爰に移して再興し南泉院の末となす

惠海山光明院禪定寺

木谷村にあり曹洞宗福

昌寺の末にして開基長西といへる人なり、

初め鹿屋安養寺の末なり、元文元年十二月

福昌寺の末となす

龍池山明王院山島寺

白水村にあり白水村ハ大船良

馬巻に白水村と
いふところあり、真言宗坊津一乘院の末にして本山

の祈願所なり、開山日秀上人、本尊不動明

神貢神社

新城村に鎮座領主坂屋

坂屋四郎をさること子方五町三拾八間、祭神

詳かならず、例祭九月九日、神鏡の裏に天

文二年と記るしたるを社内に納む、社司郡

山多宮曰、垂木手貫大明神と同神にして七

貫の一社なるよしいひ伝ふ

撑月山淨珊瑚寺

神貢社の左にあり曹洞宗福昌

寺のすゑにして開山特峯代英和尚

（生没年未詳）

本尊十一面觀音坐像此邑の領主代々の菩

提寺にして、初め湖月淨珊瑚庵主

（高公の女たて

慶寛平八年慶長年中貫明公逝去し給ひしとき

建立して公の位牌を安置しその法名の字を

とりて貢明寺と云はせられしといへり、其後

いつれの年月そや伝ハらす特峯和尚をもて

開山となし寺号も淨珊瑚寺と改めしといふ

仏通山妙蓮寺 新城村にあり領主仮屋より子

方凡六町余、法華宗京都本能寺、攝州尼ヶ

崎本興寺兩寺の末にして開山木住院日勝

本尊釈迦如來多寶如來_{供養}當寺は島津守

右衛門尉彰久の室母堂安溪妙蓮大姉の

為に鹿屋已に建立、其後垂水市木に移し又、
林の松原に移一母後また今之地に移すといふ

高隈

中津宮祠 上高隈村に鎮坐地頭仮屋_{長屋}上

り卯方凡四町、祭神一坐_{少林寺創立者}一月一日高隈

の惣鎮守にして勅請年月しるへからず、永

禄中肝付省鈞慶長中敷根頼幸社頭を修營せ

し棟札を納む

高隈嶽 地頭仮屋をさることと西方武里余にあ

り、この嶽は大隅肝属阿郡に跨り鹿屋花岡

新城垂水百引牛根皆嶽の麓にあり高きこと

行歩するに凡夫車、其尤高きものを大路_木

に亘るの巻_巻多_多を下すもの等_等といひ權現嶽といふ

ともいふよ_シ大牟小見といへり_シ新規に_シ大牟

小見に_シ次なるものを小見、表嶽_{新規に_シ大牟}鷹羽

本宮に_シ其外名を称する嶽々あり、鬱然たる高

山にして山中ニ三所權現を安鎮す_{本宮二社近ノ一}

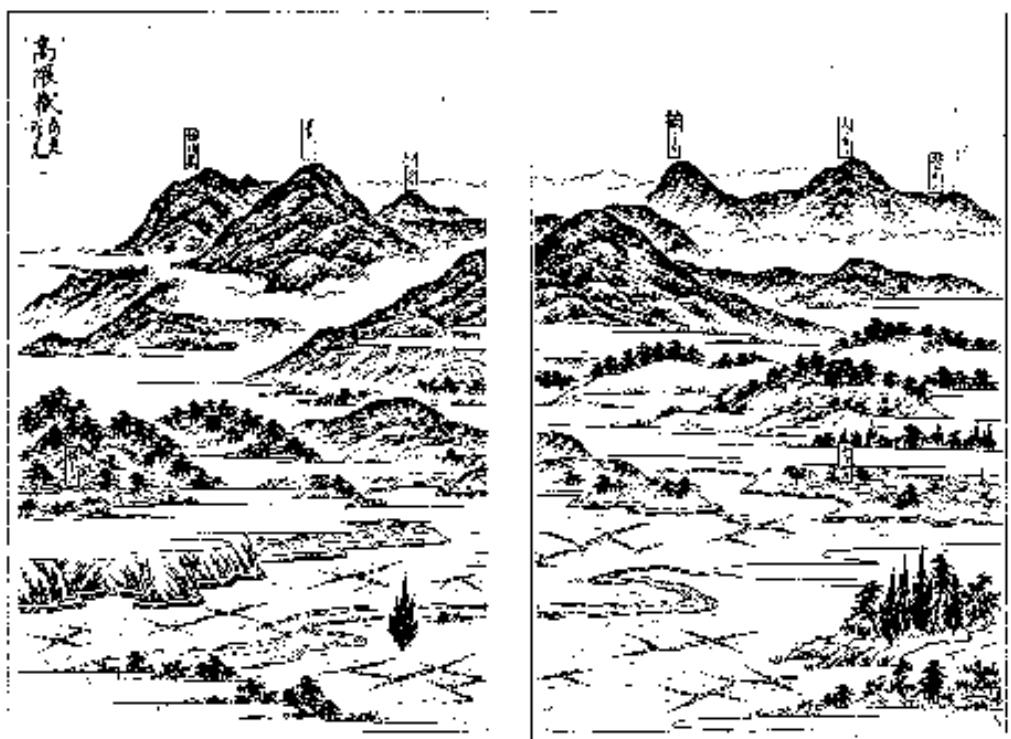
社_御ニ_シ是を合て_シ所權現といふ_シ毎歲二月四日近郷

の男女此權現社に詣であるハなし、是を七

嶽參詣といふ_{上原は延喜六年春日帝中義近言をいを此}
{所權現あり、其太連縫中義近言の事也}にて外ハ祭な{樹木}
を主神としモ

口野資枝

立まよふ雲よりうへに高隈のみねほの



くとかすもあさ戸出

松尾城跡

上高隈村にあり地頭仮屋の戌方四町三拾八間高隈の麓人居の上なり、上世誰

人のトセし城地といふことをしらす、中世
敷根中務少輔頼賀領地たりしどき大半結構
せしものなるへきにや、城の西の山根に其
所地の跡とて未反余もあるへき平地あり、

右垣猶残れり

高岳山慈現院淨聖寺

上高隈村にあり地頭仮

屋より酉戌方毫町余、真言宗坊津一乘院の
末にして当地の祈願寺也、開山快譽法印

一五七二年
吉日落成

本尊十一面觀音

谷田滝

下高隈村谷田といへる所にあり地頭

仮屋より辰巳方三拾町許り、其源は高隈嶺
の山中に出る水と牛根百引より流来る川々

と合して上高隈下高隈両村を流行し谷田に至り巖々相重り石々相疊ミ横幅八間許りに流れて殊に水勢強し、岩組岩瀬戸ゆへ潛流蕩漾して池のこときものあり、里俗これを高隈三所権現の御手洗といふ、流水分れて四筋の飛流となる、其高八九尺、硃碑漱澣の音雷達の轟くかことし、又卯方の岸に清泉流れて岩縫に溜り池となるものあり是を権現出現の所といへり、又、譽石といひて堅横長く平等一面の岩あり筵席を開けるかことくにして両岸躊躇古藤多し、春の風光尤よし、菱刈郡曾木の瀧を見ざる人ハ此岩石飛泉を観覽して驚異せずといふことなし

宝持山法音寺 下高隈村にあり地頭仮屋を距ること戊方八町余、曹洞宗天眞派清水枋嚴

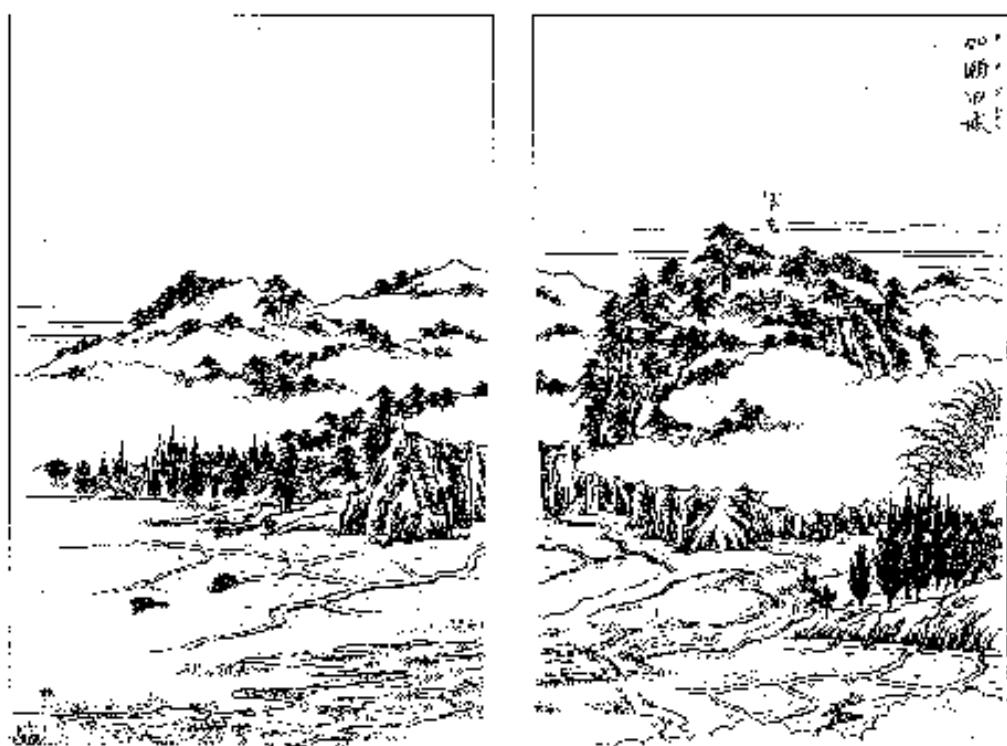


寺の末にして開山橿堂^{セキドウ}応和尚^{ヨウショウ}著草せ二祖道承二五
西國西行三三之靈化也一^{シテ}世花猿芸春和尚^{イチエイカクジン}因慶一年丙子
一月廿日靈化を中興開山となす、往年火ありて由緒詳かならず

百引

加瀬田城跡^{カセダシタノアト} 平房村にあり地頭板屋^{ボウヤ}板屋百引を

距ること卯方壹里拾町許り、此城初め誰某の人何れの年紀に經營せしこと詳かならず、建武三年肝付八郎兼重同彦五郎兼隆以下官方に属しこゝに楯築しかハ道鑑公旨から持として五月六日發向し給ひ軍労ありし所なり、本丸二之丸の遺蹟あり皆樹木森々たり、本丸中に荒神祠井戸の跡あり、東南ハ回岸危岫高こと拾五間、その下を平原とす、川流れに隨ひて今ハ川地となる、これ城の追手の方なり、西北は高窪松林堀切深二之



丸の方なり、搦手口北にあり今通融なし

利大明神

百引村にあり地頭仮屋代所を置く所を去

ること辰巳方式拾町許り、祭神一坐天正元年元

当邑の宗鎮守にして勧請年紀伝ハラス、

社司石塚多吉

宝円山千手院丸山寺

百引村にあり地頭仮屋

より辰方拾四町許り、真言宗坊津一乗院の末にして当所の祈願所なり、本尊阿弥陀如

来立休開山及び開基年月詳かならず

慧日山般若寺

百引村にあり地頭仮屋の寅方

凡拾武町、曹洞宗天真派清水楞嚴寺の末にして開山江海和尚、本尊十一面觀音半應此

邑の菩提寺にして由來伝ハラス

陣平アシヒラ加瀬山城の丑寅方川越五六町を隔てた

る高岡をいふ、嶺の平なる所を反許り、う

しろは原野続ける堀切あり、いつれの時いかなる人の陣せしといふことをしらす、建武二年肝付八郎兼重同彦五郎兼隆以下加瀬田城に楯籠りしを道鑑ドクサク公勤座し給ひ軍労ありしどきの遺跡なるへきもしくへからす、しかれとも其後小賊時々の戦争に當したるものなるへきにや、片言隻字も伝ハラされハ考ふるに便あらず

徳祐山善福寺

加瀬田城の北、野首ノケの堀越にあり、曹洞宗福昌寺の末にして開山明岩正

文和尚承化五年本尊如意輪觀音如意輪觀音當寺由來紀

を見るに文明年中新納左馬佐近藤家宣なる人加瀬田城在番たるの時美作守藤原忠常開基すと記せり

薩藩名勝志

卷之十六

薩藩名勝志卷之十六目錄

牛根城跡	早崎陣跡	太崎觀音	高翁院
居世神社	花藏院	手貫神社	成就院
大隅郡	御嶋二所權現	火尾權現	心翁寺
濱宮	蘇鐵山	影向石	崎山城
御嶋二所權現	米迎寺	御鎮坐松	江之島
大瀧	鳥泊浦	大泊浦	桜島
寶壽院	川上神社	曹源寺	御獄藏王權現
北尾權現	誠方神社	報恩寺	新島
園林寺	大松院	旗山神社	御獄藏王權現
花瀨川	成円寺	東漸寺	御獄藏王權現
宝光寺	橘山	新島	御獄藏王權現
新島	成圓寺	東漸寺	御獄藏王權現
烏鳥	黑上	燃	御獄藏王權現
新島	黒上	の燃崎	御獄藏王權現
沖島	燃	温泉	輕砂崎
島	燃	溫泉	新田祐社
		西寿寺	五社大明神
		藤野の楊梅	鹿児島神社

大隅郡

佐多

御崎
三所権現

馬籠村に鎮座地頭飯屋

伊佐麻村

を距ること未申方凡五里、祭神三座
主神・少主神・御祭神、
庚午年正月一
三月八日十九日、社記云、当社ハ和銅元年

庚戌三月二日の夜託宣に依て同年六月社殿

造立し御崎三所権現と崇む

故するにこの寺も今は大隈

大隈那なり、和銅六年にこそ向こハなりたりき、又当地へ人氣のはてにて
尊なるゆへ御者といふといへり、山の秀を尊となるひにこの意に通する
が、或曰六、當社ハ出雲國秋原郡御神社を創
著する多の名はこの神であるは至る

初め今之火尾権

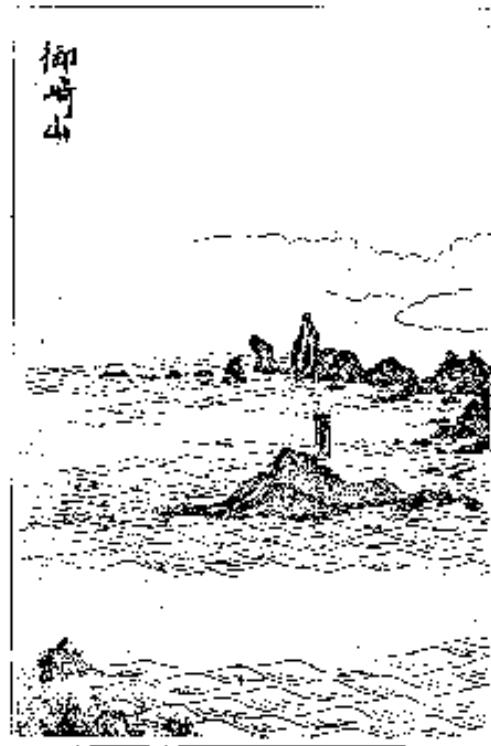
現鎮座の地にありしを慶長中邦君慈眼公琉

球を征し給ひける時、其大將權山権左衛門

久高誓願の旨趣ありて帰朝の後今之地に社
を遷し再興す、時に久高琉球の蘇鉄所謂
番木を

神前に寄進し鳥居の左右に栽置しか、年々
盛長して実を結び今は廻り七里有余の社山

御崎山





皆蘇鉄山となりて其間に松及び^{ヒツジ}桺^{シラカシ}あり其風景たとあるに物なし、西南は海岸高く甚た嶮にして猿も攀のほることかたし、東の方は石濱にて岩間に船の着場あり船にして当社に参詣するもの爰に繋、北は岡続き陸路參詣の路あり、彼船着より武町余蘇鉄桺榔繁れる路をのほれは華表建又拾五間の石



段を登れハ本社に至る華表の左三間許りに本地堂あり大觀音を安置す、祠官山名隼人といふ、補陀洛山極樂寺^{モダラド}是を護る

火尾權現^{カツオイケンジン} 本社の巳午武町余にあり右小祠にして上瀬火^{カミノヒ}の岬を勧請す

濱宮^{ハマノミコト} 本社の卯方武町余に鎮座小板葺の小社

なり、中瀬^{ナカセ}肥^{ヒトトヨ}の岬を勧請す、所祭入^{イチナフ}已貲

命^{ミコト}なり

影向石^{エイカクイシ} 本社より寅方壹里余大泊浦野岡の頂

上にあり、石の高さ九尺余廻り三丈余、伊弉諾尊此石上に降臨して上瀬中瀬下瀬を見給ひしといひ伝ふ、其上瀬中瀬下瀬ハ佐多の岬海中にありて常に潮汐張り流其瀬見ることなし

蘇鉄山^{ソテツヤマ} 御崎權現鎮座の山をいふ、廻り凡壹

里に余る岩山皆蘇鉄なり、世にめつらし蘇鉄を探りて他へ移栽することを禁す是権現嫌ひ給ひ其祟をなすゆへとかや、社山の顛に登て戌亥の方を望ハ薩州の名山開聞嶽海を隔て見え渡り其勝景筆の及ぶ所にあらず

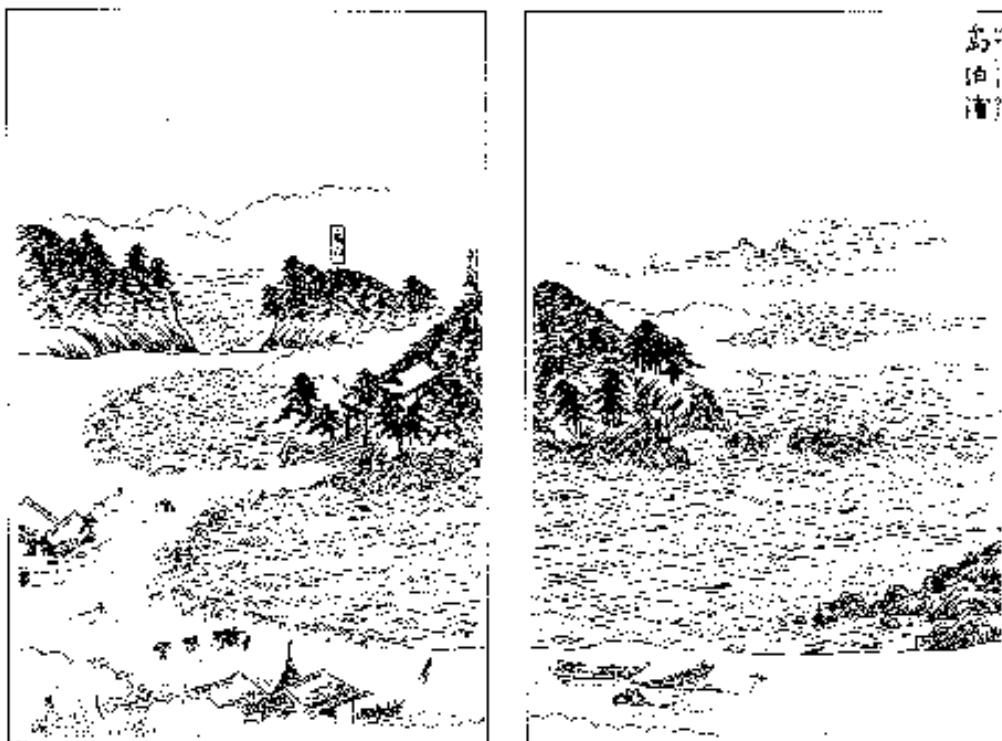
明月も浦かと見えて沙堤^{サカタ} 宇^ウ橘^{クルミ}

御鎮座松^{ゴテンザノマツ} 田尻浦にあり神の鎮座し給ひし所

といひ伝ふ、里民これを平松ともいへり

蓬萊山^{ボウライサン} 医王院^{イニヤウイニ} 来迎寺^{ライヨウジ} 伊^イ座敷村にあり、地頭仮屋の半方凡壹町、真言宗大乘院の末にして佐多邑の祈願寺なり、本尊阿弥陀如來

開山伝ハラス



薬王山曹源寺

伊座敷村にあり、地頭仮屋を

距ること午方五町、曹洞宗不見派小桙^{シカシ}古園^{コウエン}林寺の末にして、開山^{カクサン}河參^{カサ}義印和尚^{イモン}寶文^{ボウモン}五年¹⁵⁷⁶正月九日

本尊薬師^{ヤクシ}化^ハ佐多^{サト}田^タの菩提寺なり

島泊浦

伊座敷村にあり、地頭仮屋を距ること

凡音里、少しの入江に人家あり、西洋を受たる濱にして前に二の山あり、島のこと

くして島にハあらす、地統なり、うらひと

の為に風涛はけしきを凌き^{ハシメテ}を弁^{ハシメテ}大^{タカ}山とい

ひ、弁財天を安鎮す、一を島山といふ、海水渺々として漁舟波上に浮ミ、其風光絶妙

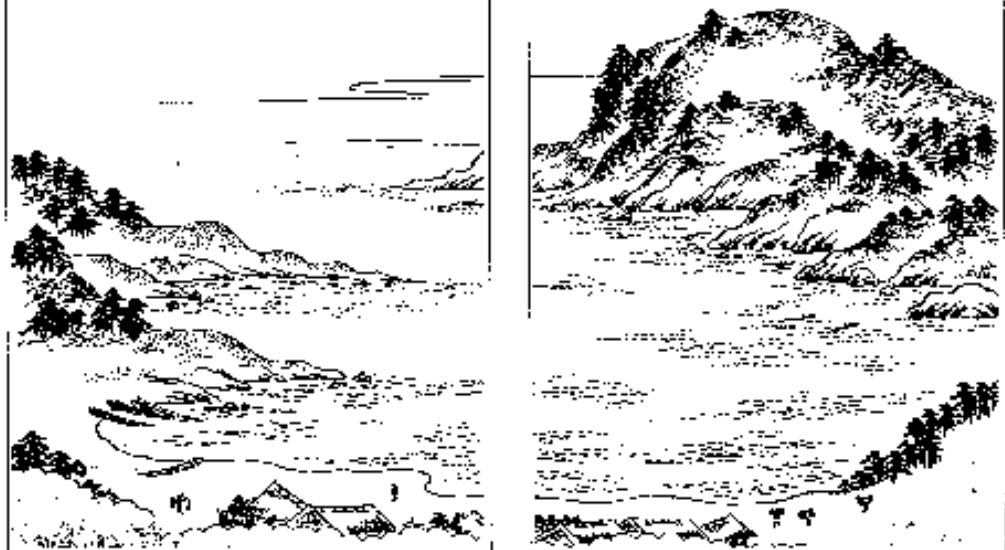
なり、凡佐多の地ハ岩山おほく^{カミヤマ}青山蛾々として平地少し、海辺に佳景おほし

大泊浦

溢津^{ヒツ}加村にあり、地頭仮屋の午方凡

三里、東南を受たる入江にして人家あり、

大治
大治
大治



好風景なり

大根占

川上神社 カミイノカミ 僮カムシの辰巳方、凡拾式町余、祭神詳
かならず、例祭二月初卯七月七日、九月九
日十一月初卯、大根占邑の總鎮守にして
を禁す

說法山慈眼院報恩寺

大根占村

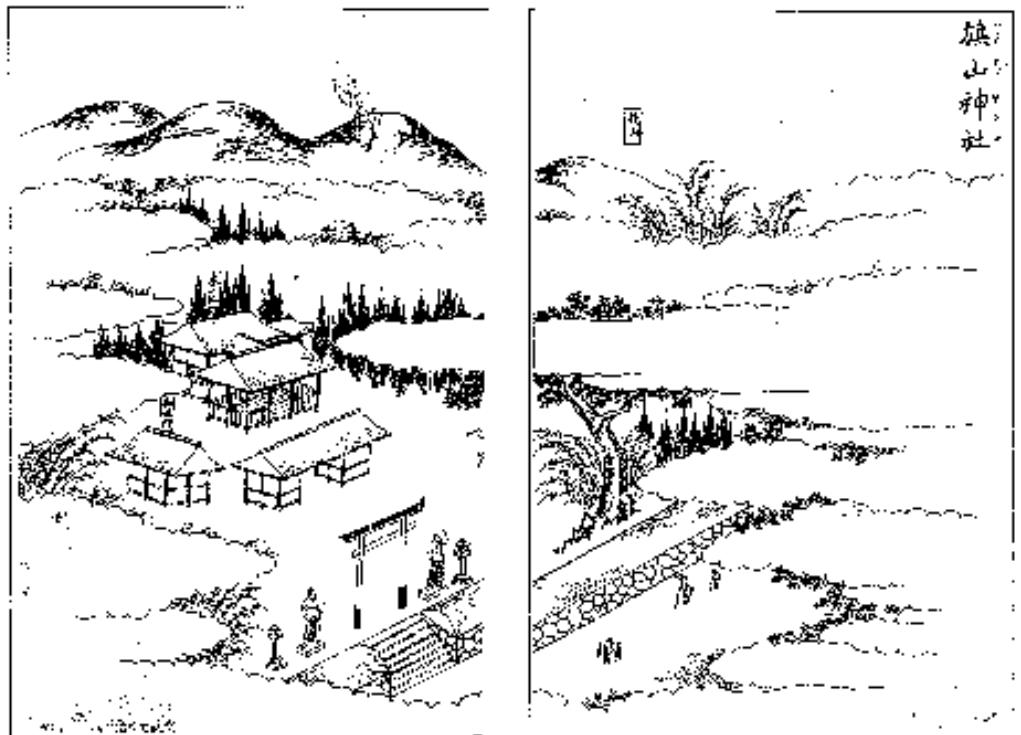
大根占村は里俗に馬
勝村といふといへど

にあり、地頭仮屋より午未方武塙三町五拾
九間、真言宗大乘院の末にして本尊勝軍地
藏セイジン 當寺ハ本邑の祈願寺なり、元禄年中
火災に罹り、又寛政二年十二月の失火に記
録を失ひ由緒伝ハラス

龍樹山天松院

大根占村にあり、地頭仮屋の

午未方拾五町余、曹洞宗小根占園林寺の末



旗山神社

にして開山月釣如泉和尚（承元年甲子の間）本尊釈迦
如來（釋迦）本邑の菩提寺なり

旗山大明神

坂屋之村の内池田といふ所に鎮

座す、地頭板屋を距ること卯辰方武里三拾
町余、祭神二座（大明神・開基を祭る）、
勸請年歎及ひ由縁伝へらす、社辺の山中竹お

ほし、旗竿に用ひて其性強し、松齡公朝鮮
の役に用ひ給へる旗竿ハ、この山の竹もて
製し給ひしより佳例となりて、今に旗竿の
材は此山より出るといふ

小根古

諏方神社 川南村（川南村ハ佐原郡小根村の役なり）に鎮座、地頭板

屋より卯辰方拾壹町余、祭神二座（大明神・開基を祭る）、
勸請年歎及ひ由縁傳へらす、社司鶴田某

實資山光壽院東漸寺

川北村

川北村ハ少松古村の棲守りにて

地頭板屋の戌亥方五町余、真言宗大乘院の
末にして、開山祐印法印^{建花年月}本尊虚空藏
^{坐像高五尺八寸九分五厘}中興開山堅興法印^{宝永三年庚辰正月}開基伝ハ
^{老々古松}一首を詠して奉る

清淨山園林寺 川南村にあり、地頭板屋を距
ること卯辰方拾町余、曹洞宗不見派越前国

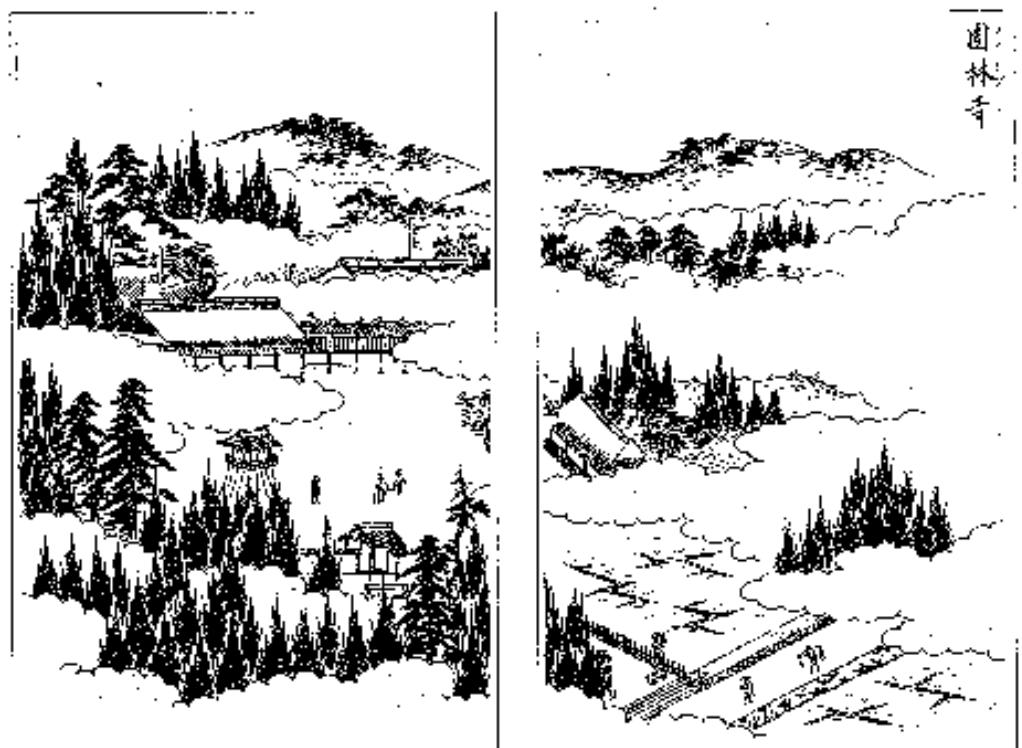
興禪寺の末にして開山了山玄明和尚^{不元和尚弟}
本尊釈迦如來^{坐像高五尺八寸九分五厘}称綬左馬助清平戰死

の後、冥福の為に草建すといふ、慶長中
貢明公當寺に来臨し、一首の和歌を詠して
住僧問道に給ふ^{既に供養の寺と云ふ大祭日}問道もまた

一首を詠して奉る

龍伯

松杉のたちならひたる古寺はわけ入てこ



そ心す三けれ

問道

おほけなき袖を待えて古寺も玉しく庭となりにける哉

蓮臺山成圓寺

川南村にあり、地頭仮屋をさること辰巳方八町余、時衆宗相州藤沢山の末にして開山覺阿、本尊阿弥陀如來

吉良家持

天文十一年領主柳石近重長創建

大瀧

川南村にあり、田代花瀬川の末にして水勢おほし、邑人男瀧といふ、里俗伝へてその高さ三拾三尋、深きことも又同しといへり、然れども容易にその淵に臨むことあたわす、故に其深さ高さ量りかたし、横別府村赤瀬川の瀧を女瀧といふ、水勢少し、これに對して男瀧の名あるなるへし

橋山

川北村にあり、地頭仮屋を距ること卯方六里余、祢良重長称寢院を領地して南谷城に居住せし時、温州の橋をうへたりといへり、貞明公慶長十五年十月廿五日和歌を詠し給ふ、今其旧跡村長屋しきとなりて橋樹ハなし、土俗伝へて密相山とよへり

いにしへ重長といひし人の温州の橋山



とて植そたてをかれし所に行てこれを

詠す

法印龍伯

時ならぬ冬まで残る木の本ハこれやと

こ世のやとの橘

田代

北尾大権現

麓村に鎮座麓八幡正派宗家、大御門井を奉
祀する。地頭飯屋を有す。麓村、山見村とよ
ばり、地頭飯屋を有す。麓村によれば、大川尻ら、地頭飯屋

ゆへとある。人亦口上は山見の田代村のことなるべし。

の卯方六町拾五間余、曹社ハ本邑の崇廟、

祭神詳かならず、例祭一月初卯、九月九日、

霜月初卯、出緒伝ハらす

妙淨山寶光寺

麓村にあり、地頭飯屋を距る

こと卯辰方凡拾壹町四拾間余、曹洞宗福昌

寺の末にして開山竹翁知巖和尚卒承三年庚午
八月九日退化本

尊阿弥陀如来唐傳田代一邑の菩提寺なり

如意山意性寺寶壽院

麓村にあり、地頭飯屋

より一里半八町五拾間余、真言宗大乘院の

末にして開山空快法印癸化年月
にからく本尊虛空藏

花瀬川

川原村にあり、地頭飯屋を距ること

辰巳方壹里余、其源は邑の山中にて北よ

り南に流る川なり、その横三拾間余、両岸

野岡にて石なし、雜木繁り占藤など稀に

躑躅もあり、春秋秋葉の詠め広々たる、

流の滑り石甃のことくにして見渡したる流

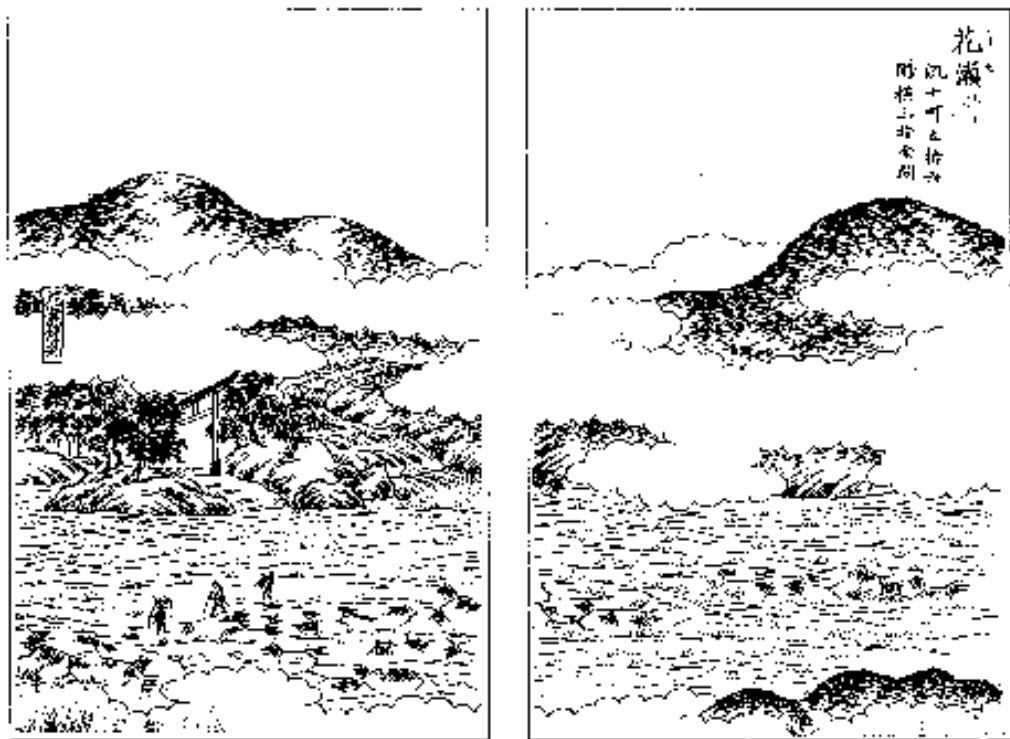
七町五拾六間、常に水少ふして浅し、深き

こと尺余に過す、或ハ三四尺或ハ七八尺を

過て綫となる瀬あり、漣たつこと白花に似

たり、故に花瀬といふ、寛延中邦君圓徳公

巡視し給ひて、一日北川に遊観し給ふ、御



茶屋の跡あり此花瀬川右
式町余流に隨ひ式町余をくた
れハ、東岸に華表あり、花瀬三所權現六字
の額を掲、右階拾問余をのほれハ芳屋あり、
即權現の社なり衣笠の大澤二報を奉西、祭日ニかなうマ、御祭
月二日元は三半丁止照多古原祭リと云ふる尊
れを華表の左に一流の川あり川代九
五六度小根占、田
代の境より出、これまた滑かなり、西河相
合て水勢増し、漣少し、壹里半許りを流れ、
小根占川南村の境にて大瀧となる、按する
に田代の領主田代刑部少輔清久、応永五年
壬寅十二月二十五日田代村の堺の事を記せ
る文に、花瀬川の名見え侍れば、むかしよ
り花瀬の名あることしられたり、是等の美
くしき山川ありても世の名所に漏しぬること
と都に遠き西の海路、唐の倭の歌たにも伝
ハらねハ、たゞ埋れ木の花瀬川水くきの跡

巻二
岩川や
水の
波



も残り侍らざることいと浅まし、權現社の
柱に小森一山一首を書付侍りき

しけりおふ藤やつ、しの花瀬川咲ころい
かに水のしら波

巻二
風六

岩川や水の浅きにむら時雨

牛根

牛根城跡 薩村サムライにあり、地頭仮屋の

辰巳方三町はかり、これを入船城といふ、
大手口ハ子方海水に面し平方をうしろにして
野頬に続く左右ハ絶壁そひ之深谷因ミ敢て
躊躇へからず、上古池袋氏代々居住す、
其後肝付良兼支配し家臣安樂備前守同弟彦
八郎をして守らしむ、邦君貫明公出馬し給
ひ、城の卯方深洞を隔て相対する、平常の

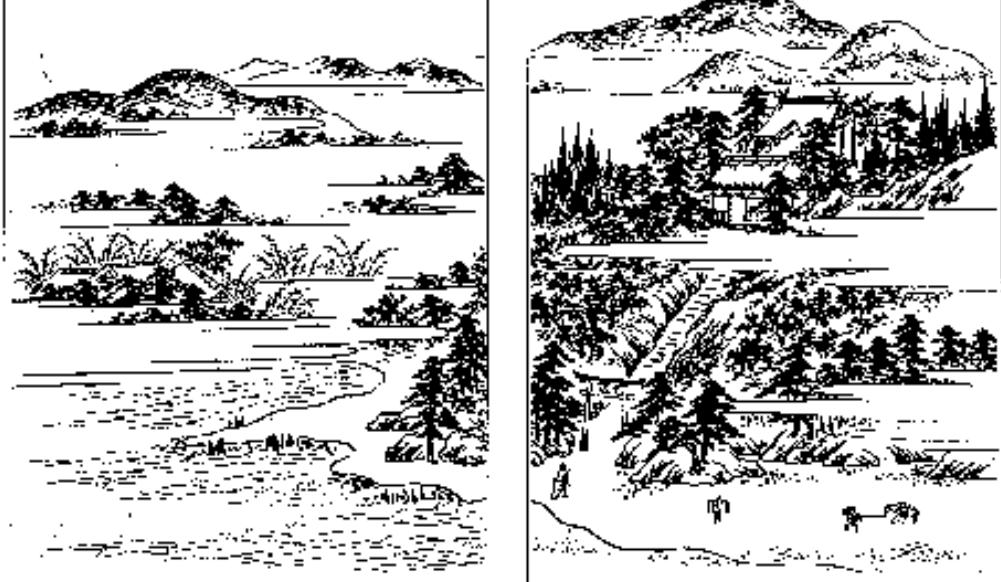
岡に陣し給ふ平素よりの大正二年正月三日肝付
の軍勢高隈山を越て茶園ヶ尾おのとねのまへに通じるに陣
を構ふと聞えしかば、旦壽の陣早崎ハ島津守義よ
り新納武藏守忠元同刑部大輔多勢を率し、
石の尾アリに至て公戦せしに敵遂に叶ハす
して引退く、其時諸将直に茶園ヶ尾に陣營
を構へ、同十八日忠元下知して茶園ヶ尾よ
り逆瀬川豈前兵衛・本村筑前守・久留半五
左衛門などを遣して數十丈の切岸二重堀を
掘崩し本丸に責入けれハ城主備前守和を乞、
城を降り剃髪して玄省クニシテと名つく、同廿七日
貞明公鹿児島に帰陣し給ふ

早崎陣跡ハヤサキノマチシテ 薩村にあり、地頭仮屋より中西方
拾八町許り、西北ハ峭壁聳立して深海に臨
む、東南ハ岡阜高低、樹木断続來往甚かた
し、天正元年島津中務太輔家久在陣せしに、
同七月廿四日天正二年八月早崎陣のうしろに敵兵
肝付の間行して翌日早天西の口へ多人数押寄
せり、銃砲にて互に戦ひし折節、うしろよ
り忍上り陣屋を放火せしかば、入船城より
も寄来り、已に危難の所を家久数百人の中
に切入、敵余多打伏、自身も八ヶ所手疵を
負ひけり、其時敵味方入乱れ追掛られて岩
の上より飛去りしゆへ、今に其所を散花平
と名つくといへり

居世神社コヤカワノミヤ 薩村湊子に鎮座、地頭仮屋の寅方
凡三町、祭神一座坐主の子むかし當邑の領
主池袋氏安置して宗廟となす、神鏡の裏に
永正三年丙寅十一月廿六日願主建部宗政タケベムネマサヨシ
宗清等の名を彫刻す、是即池袋氏なり、社

司山口某伝云、當社ハ極月廿九日の夜居神門の農夫潮汲として海濱に至りしに、嬰児の泣声あり、奇異の思ひをなして燭をもて臨むに空穂船漂流して汀により来るを引揚げて祝るに、人皇二十代欽明天皇第一の皇子七歳なり、雪庭に出て地を踏給ふゆへ、天子の位を嗣給ふこと能はずとて、空穂船に乗せ流しけるとそ、農夫皇子を撫育し奉り、十三歳にして終に薨し給ふと云祭居の御本紀並前記にあり、即原御内神門の邊に在け所なり茶毘所サキとて人船城揚手の尾テ崎サカイ小高き所森の中にあり、石の小祠を建て小鳥大明神と称す、又居世神社の寅方式町許り濱邊に森山あり、陵所と云、石小祠を建、毎歲正月三日早天爰に演殿下りとて其式あり、居世神門の農夫雜煮神酒を供ふる

居世神社



こと今に解^{アラカ}らす、此時行司役のもの來りて

火を打始むと云、

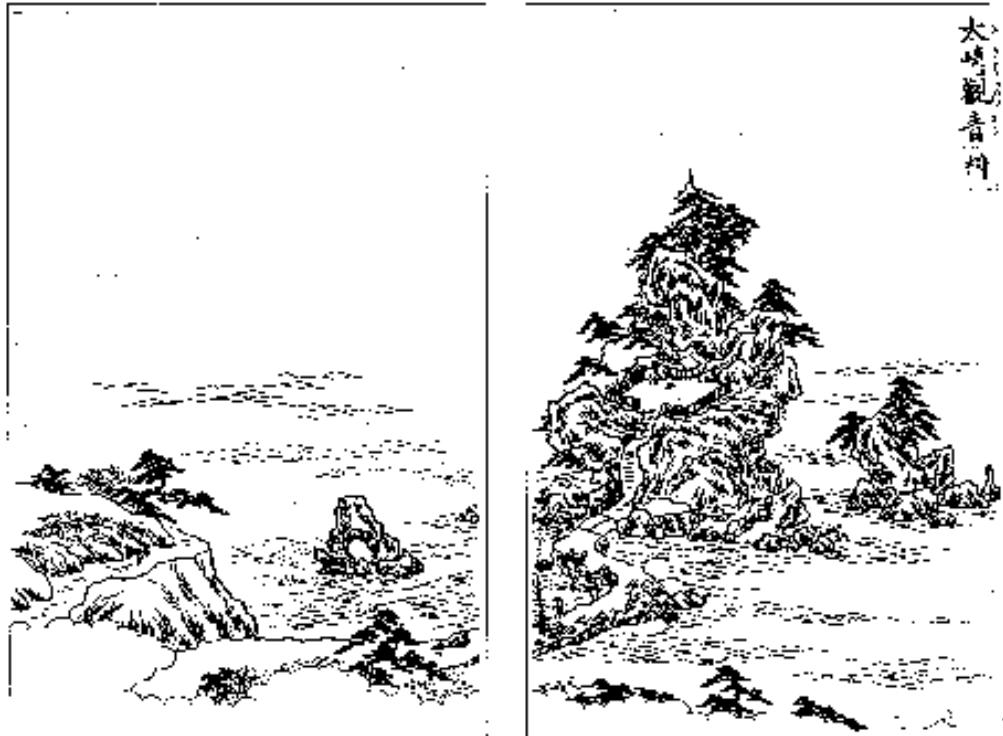
正月元日より三日は正月神社落成奉事大酒
を出すことを正月神社落成奉事大酒
を出すことを正月神社落成奉事大酒

居世神社の御生身を參す。い
じへ、さゆへあることに又陵所卯辰方に御所の尾
といふ所あり、そのかミ皇子遊び給ひし所
ゆへかくハ名付^{シテ}そ、居世神門の農夫此
山を支配す

太崎觀音

麓村にあり、地頭仮屋を距ること
寅方凡老里許り、渚をざること遠からず、
海中に巻敷はかりもあらんとみえし岩あり、
その岩上に安置せり、石座に延暦一癸亥二
月建立と銘を鏽てありしよし、明和三年花^{サツ}
院住持の僧建るところの石碑の文に見え
たり、安永己亥の年十月桜島燃たりし時、
新島涌出して津波揚ること數度に及びける
か、その石座をうしなひて今ハなし、又此

太崎觀音



山手の方に愛松山小河寺といへる寺ありて
常に香花を供せしに、元和六年岡崩れ寺も
廃に及ひて今ハ其事なし、村民六月十七日
をもて群集し、これを祭るといふ

江南山東光寺花藏院

カウナンリントウクルカウジササウエン

麓村入船城の山涯にあり、地頭仮屋より巳方丸壇里許り、真言宗
大乗院の末にして本尊十一面觀音^{半身}開基
の年月詳かならず、万治年中當所の祈願寺
となす、中興の僧を盛意法印といふ、其後
池魚の災ありて由来伝ハラス

望海山喜翁院

ワカイサンキョウエン

二川村にあり、地頭仮屋を距

ること卯方凡廿里武拾七町、曹洞宗福昌寺

の末にして開山龍谷和尚^{開化年丁}本尊正觀音

半身^{坐像}當寺ハ鎌田尾張守政年菩提寺にして石

塔あり、此境地たるや東望すれハ山岳峙列

し、林縁深密にして、其間石屋車々に置む、
中に飛泉あり、完籠の瀧といふ、高さ三十
余間、水勢少し、南ハうしろにしてこれを
見る、西北の方を望めは積水明媚遠山濃淡
恰も画かけるか如し

垂水

タツミツ
水木は初め下大隅郡といひ、とみえたり、延久八年
大隅國岡田郷下大隅郡凡十五丁八段より足たり

手貫神社

タヌキノヤシロ
本城村に鎮座、領主仮屋^{町役の内申主事}の祭分^{祭の祭分}にて
坂原八口^{上村にあり}を距ること卯辰方二十町余、祭神四

麻^{坊主天皇、仁智天皇、吉備津}神功皇后、御祭八月一日^音神社は石清水八幡を守

り下したるよしいひ伝ふ、垂水の總鎮守にして永正四年丁卯九月再造の棟札を納む、

正祭には流鏑馬一騎を張行す

垂水大明神

タツミタマイマツジン
領主仮屋に鎮座、例祭二月十四

日、初め薩府城下宅中にあり、榎荒神と崇
む、元禄十年閏一月十二日是を島津又四郎



忠直私邸に遷す、安永五年丙申六月廿一日
神祇道管領勾當長上正一、位ト部朝臣兼雄宗
源神宣を賜ひ垂水大明神と称す、兼雄神号
五字を筆して華表に掛らる

寶巖山心翁寺

田上村にあり、領主坂屋の卯

方四町五拾九間、曹洞宗天真派清水楞嚴寺
の末にして菩提寺なり、開山松堂玄龍和尚

本尊歎如来

嘗寺は永祿四年右馬頭忠將戦死の後菩提の為に楞嚴寺内

に建立し心翁院といふ(續の三八文祿四年守

右衛門尉彰久朝鮮に没し遺体を楞嚴寺に帰

葬し、法号の二字を採て天宗寺と改め寶巖

山と号し垂水に移す(寶巖ハ是名也)寛永元年又四郎

久敏武州江戸に没す、又法号の字をもて河

三年節心寺と改め、延宝八年又寺号を心翁

寺と改む

妙法山華嚴寺

田上村にあり、領主板屋より

牛未方四町、法華宗京都本能寺、尼ヶ崎本

興寺兩寺の末にして開山伝良院日珠^{シヤクニンジン}（播磨守）

（嘉慶二年十月）本尊釈迦如來、多寶如來^{（シラタマノシロ）}（本是院

妙性日悟大姉^{（シヤクシヨウノヒメ）}（豊國公の養寺親王・元母）菩提の為に大

玄公の命ありて領主玄蕃忠直建立す、此地

華嚴寺といふ廃寺の跡なりといへり

如意山法智寺成就院 田上村にあり、領主板

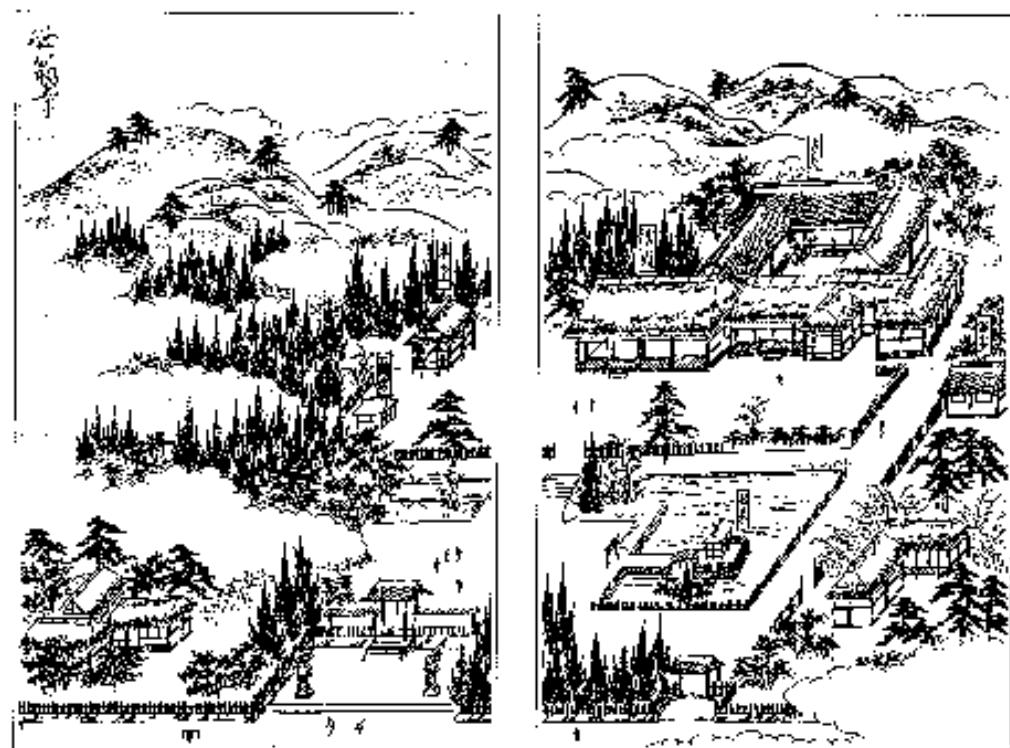
屋を距ること卯方三町武拾間、真言宗大乘

院の末にして開山賢光上人^{（シキクハウ）}（嘉慶二年十月）本尊不動

明王^{（ミヤウ）}（像）初め相模忠仍肝属郡鹿屋に建立し

阿弥陀如來^{（アミダ）}（像）をもて本尊となす、爰に移

したる年月詳かならず



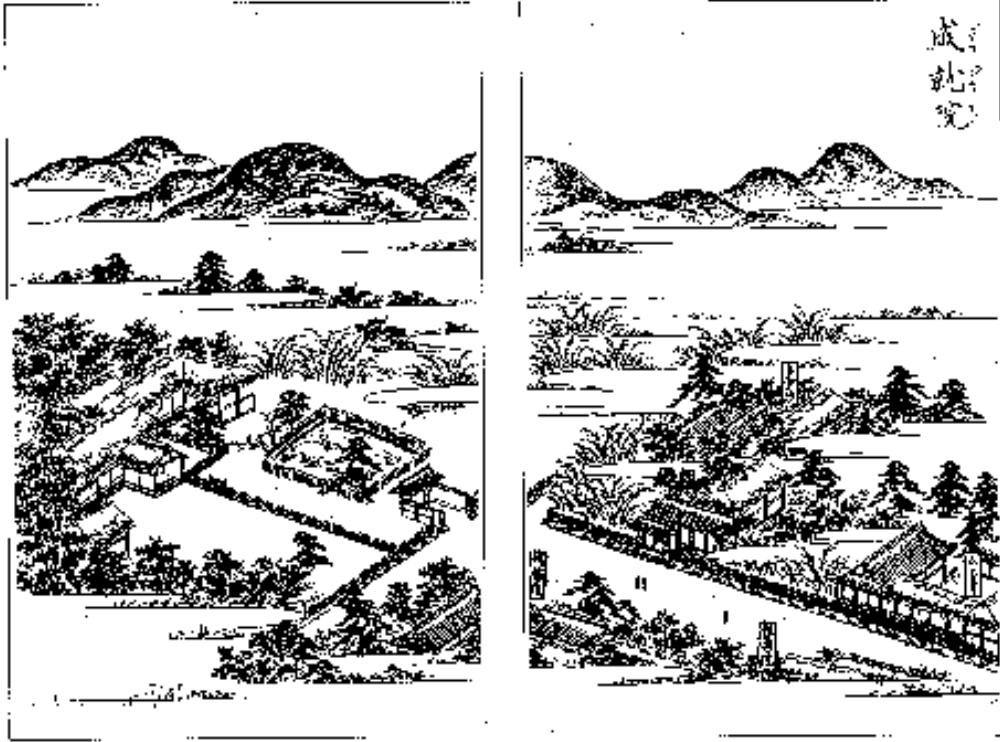
カコシマノヤシニ
鹿児島神社

田上村松原に鎮座、領主仮屋の

未申方九町余、祭神八座奉火々山見御、金玉參合、金玉御命、大御大神、大河姬、三後姫、媛十老等、皆田夜命、
御御九月十九日、當社は手貫テタキ大明神軍神なりし

時、顯姓開聞九社の内より乗りて加勢し給ふゆへ直に安置すと社記にあるよしいへり、いかなることにや推て考へかたし、社号ハ神代塩土老翁無目籠カヨシホツサノマトナマシカケを作り無目籠ヒハ火々出見を籠中に入奉り海宮へ落し奉りし、古事によて鹿児島といふといへり、今接するに開聞にハ火々出見尊の神跡顯然として下井などといへる古跡伝ハりてあれハ、開聞の神号を鹿児島といふへきにやしるへからず、垂水に鮎を禁すること此神の嫌ひ給ひしよし社司谷口衛守カニクナミサムライかたりき、社は海濱廣々たる松林の中に安鎮して南の方塩濱湊川流れ

成
就
院



て清奇なり、正祭にハ濱殿下り、騎の鏑

流馬を張行す

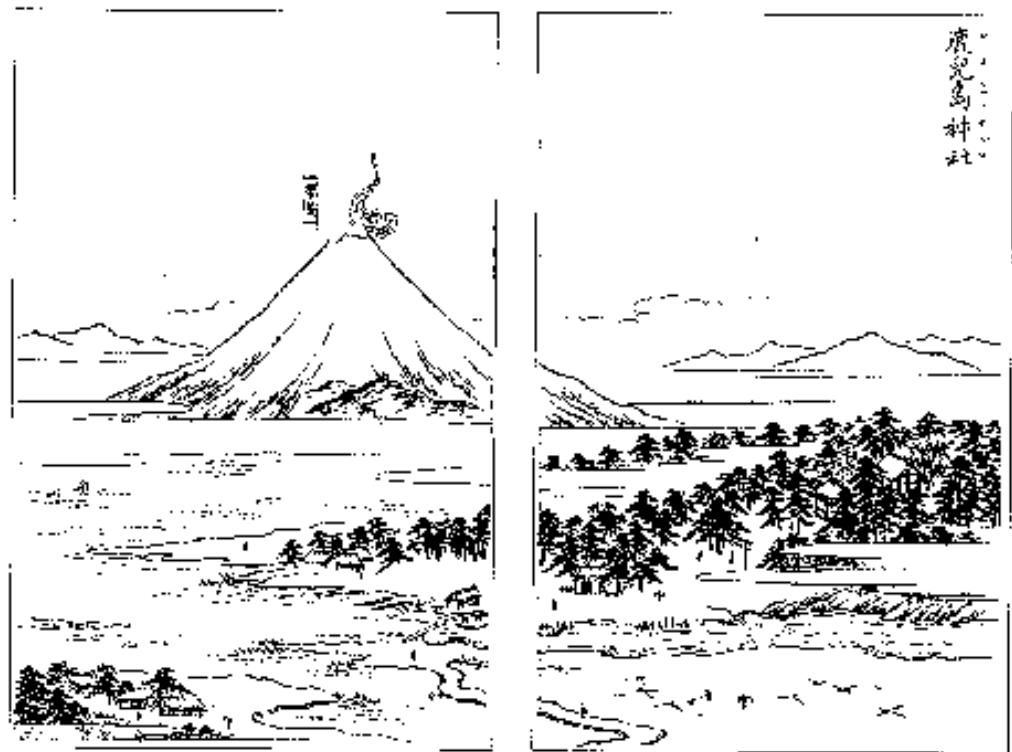
崎山城 海潟村にあり、領主坂屋より升方凡

壹里九町余、旧記を按するに肥後彦太郎種
顯、同弟彦次郎種久、岳山修理亮直顯に同
意して文和四年四月五日凶徒を崎山城に引
入しを、邦若齢岳公発向し給ひ時刻を移さ
れず貰落し給ふ、海潟村に崎山といへる所
あり、高聳なり、此所なるへし、堀切もな
くて畠地になり、城跡とも見えざりき

新田神社 市木村に鎮座、領主坂屋の戌亥方

拾町余、祭神、座海潟むかし中保村漁人の
網に掛りて揚りしを勧請すといひ伝ふ、元
龜三年壬申十二月十一日社壇一半造立の標
札を納む、眞明公當地に光臨し給ひ、五月

廣島神社



雨頻に降て出船なりかたく滞留し給ひて

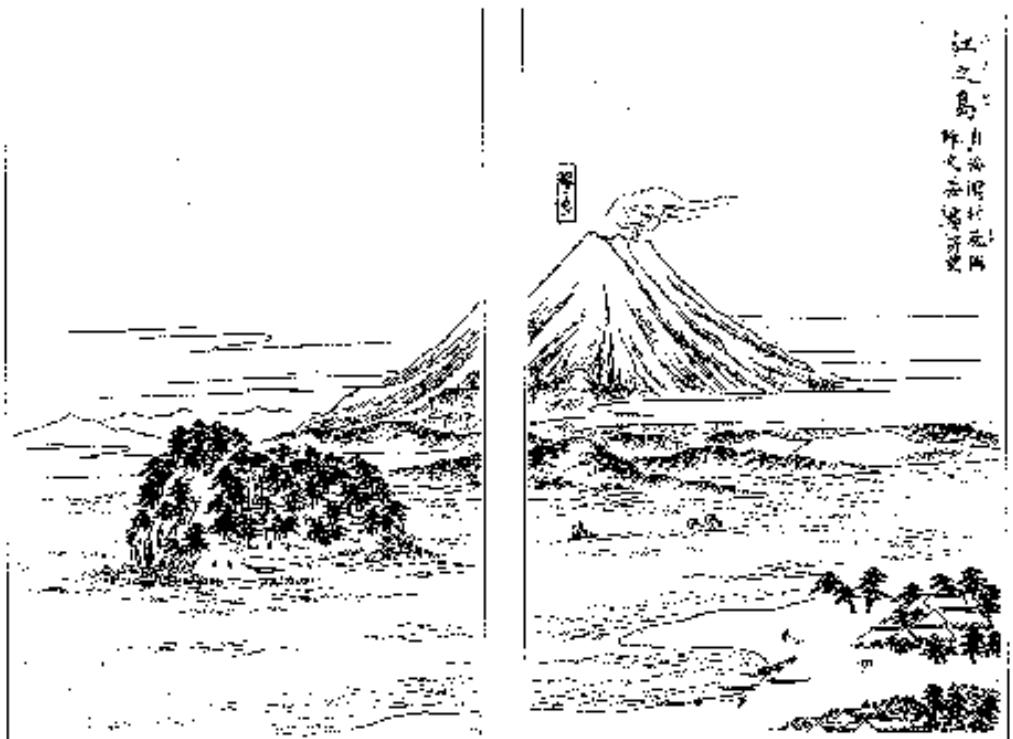
五月雨の雲の名残もおさまりてなかめ風

せぬ西の海原

短冊に青給ひて奉納ありければ、忽ち天晴
解帆し給ふといへとも、其短冊は伝ハラす
江之島 海鷗村の地を相距ること海上凡三町、

島の周廻八町六間、東の方に弁財天社を安
鎮し、石華表あり、慶長七年正寅十二月社
頭再興の棟札を納む、樹木多く峠々として
聳立し、桜島一目の中にありて、其風景い
ハんかたなし、文禄中、近衛信輔公此島に
遊観し海湯の浦、和田小濱の邊を見給ひて
袖の浦と名付下ひしといひ伝ふ、今江之島
に野牛數十を放生畜す、初め早崎陣下に野
牛牧を置、安永中桜島火を発し砂石を雨ふ

江之島
井谷義行著



らすゆへに野牛を此島に遷すといへり、近比楠某^{サイニウ}遊記大隅州に野牛牧あるとしるすハ是等のことなるへし

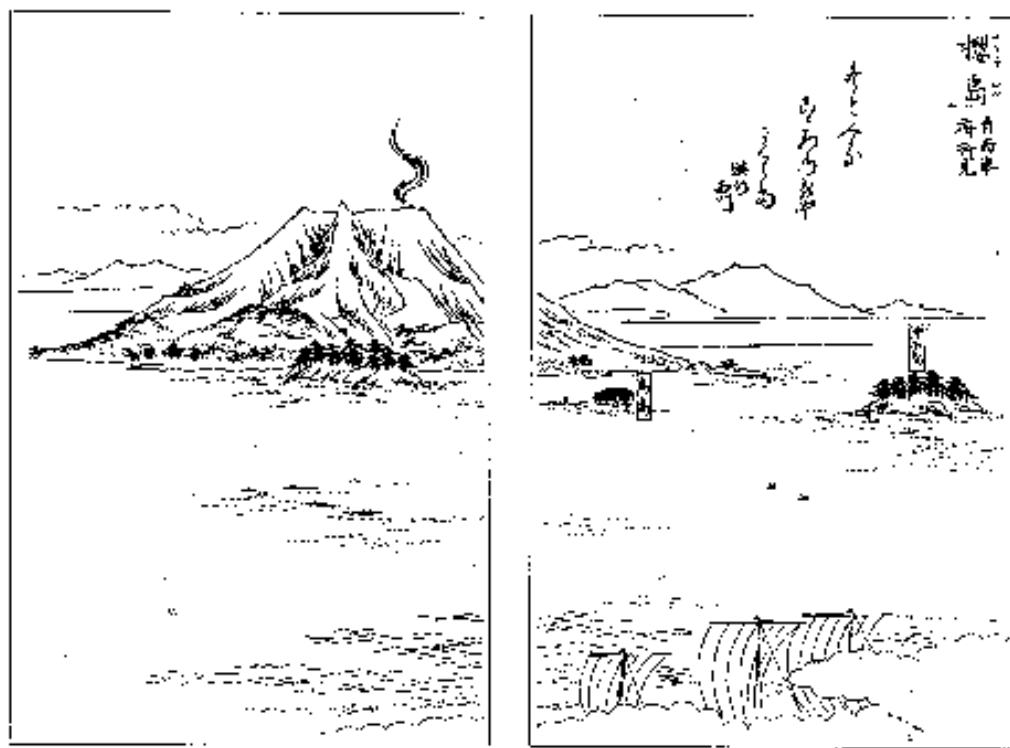
輕砂崎^{カルサザキ} 桜原村の海邊にして新城に往來する路なり、海へさしいてたるゆへ輕砂^{カルサ}の界ともいふ、山手の島地に只般を多く掘出す、邑民是を焼て灰となし生業をなす、

櫻島

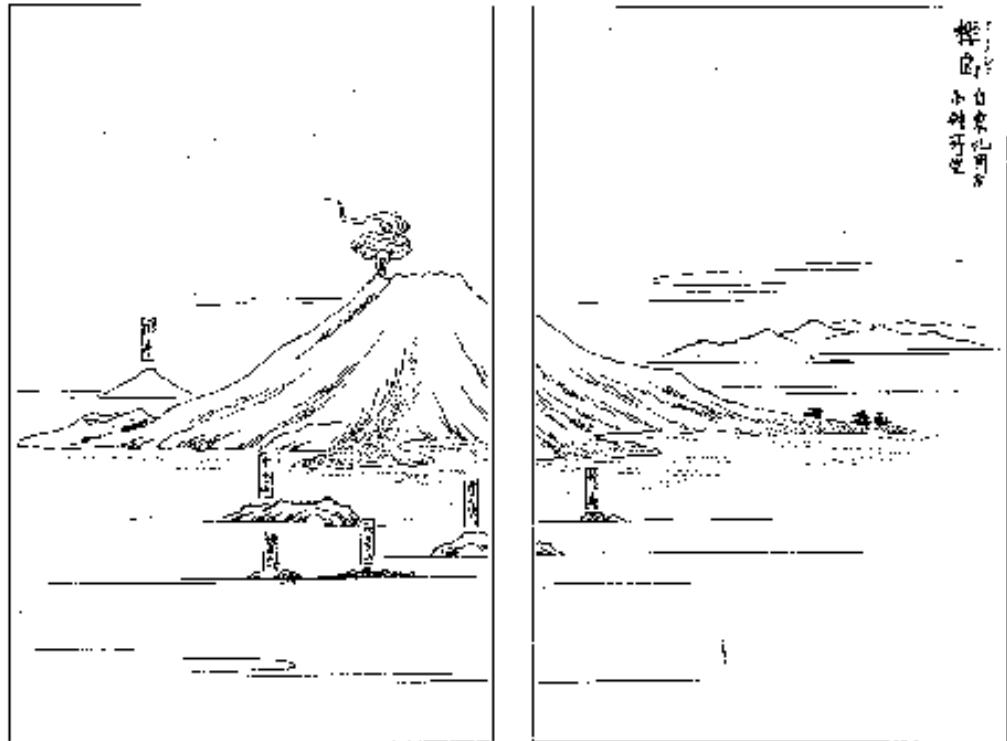
櫻島^{サクラシマ} 大隅郡の海中にあり、垂水の地を距ること繩に三町許り、府城の東にして海上七里、向ふ島ともいふ、島の廻り七里拾武町余^{宿泊地九里}高きこと行歩するに凡三里、頂上一峯あり、南なるを南嶽といひ、北なるを北嶽といふ、又絶頂に三の池あり、南嶽にあるを白水^{シロミツ}となつて、北嶽にあるを御鉢^{ゴハチ}帝雲龜四年、大隅向島湧出と記す、又島の

と名つく、白水御鉢の中央凹にあるを両中といふ、此池中に石像の觀音を安置す、又南嶽の嶺に一鉢を建^{永正六年三月三十日 蓮口寺十一世大}立^{蓮口寺和尚著所にて、唐金額物なり、}爲めん爲めに是るといひ候^{大角や火を帝に燒かせざるや}島の形は圓する所の如くにして嶺の麓に人民居住し拾八ヶ村あり、地頭仮屋を島の西面横山村に置き麓といふ、

横山を出て東に廻島するに小池村といふ、其次を赤尾原村、其次嶺村、其次藤野村、其次を西道村、其次松浦村^{島の北端にある}其次^{アカヒタ}侯村、其次白濱村、其次向面村^{島の東にあり、安永已亥火を分して二村入掌をし}其次黑上村、其次瀬戸村、其次脇村^{島の東にあり}其次有村^{奥 有村の山村も安永ノ年火に燒かれて入掌をし}有村の次を古里村、其次を湯之村、其次野尻村、赤水村を経て横山に帰る、接するに皇帝紀云、四十四代元正



士池田新兵衛所藏の年代記を見るに、養老
二年向鳥湧出と見えたたり。櫻島ハ二年に上を金魚と望む
山家御四年ハ養老ニ上なり
されハ此島養老二年湧出なるへし、近世続
日本紀を引て櫻島ハ寶字八年十二月沙石聚
り化して鳥と成と云説あり、これ誤れるな
り、事ハ隅州国分の属島小島の條下に記す、
櫻鳥と名付し由縁詳かならず、前太史平田
清右衛門純音櫻島のことを記するに、櫻花
海に浮ひ此山湧出す、其花瑞に因て櫻島と
命す、又洲上に櫻樹あり、其洲一夜に湧突
して山と成故に名づくといふ、此両説いよ
た考へす、本朝文粹に櫻島忠信落書を載せ、
忠信落書によて大隅守に任じけると、又拾
遺和歌集に櫻島の忠信が国に待ける時、都
のつかさにかしらしろき翁の侍けるをめし



かんかへんとし侍ける時、おきなのよみ侍
ける老ばてて山の山をはいた、けどしあと
見るにそ身ハひへにけると轍せたり、是に
よて推て考かふるに忠信大淵の守たる時、
爰に居住せしゆへその姓を称して鳥の名と
するもしられず、名所方角抄地名便覽等薩
摩の部に櫻鳥を載るハ、大隅の鷦島といへ
とも府城の東海にありて詩歌俳客の輩、城
下より眺望し、其風光佳景なるゆへ吟を
残して櫻鳥をもて薩摩の名山といふもの多
し

短冊当座 龍伯

春にこそさくら鳥ともいひつらめしくる、
けふハ紅葉ならまし

読人しらす

桜島
さくらじま

夏ながら時雨でミゆるさくら島浪のかた
衣きてやほすらん

冷泉為村

月雪の見るめのミかはさくら島なミのは
な咲ゆふへ明け灰

葉行四士一通
南門

いつはあれと雲のかゝれる時になをさな
からふしと桜島やま

葉行四士一通
尊通

名にめて、世ハ冬からさくら鳥花にそま

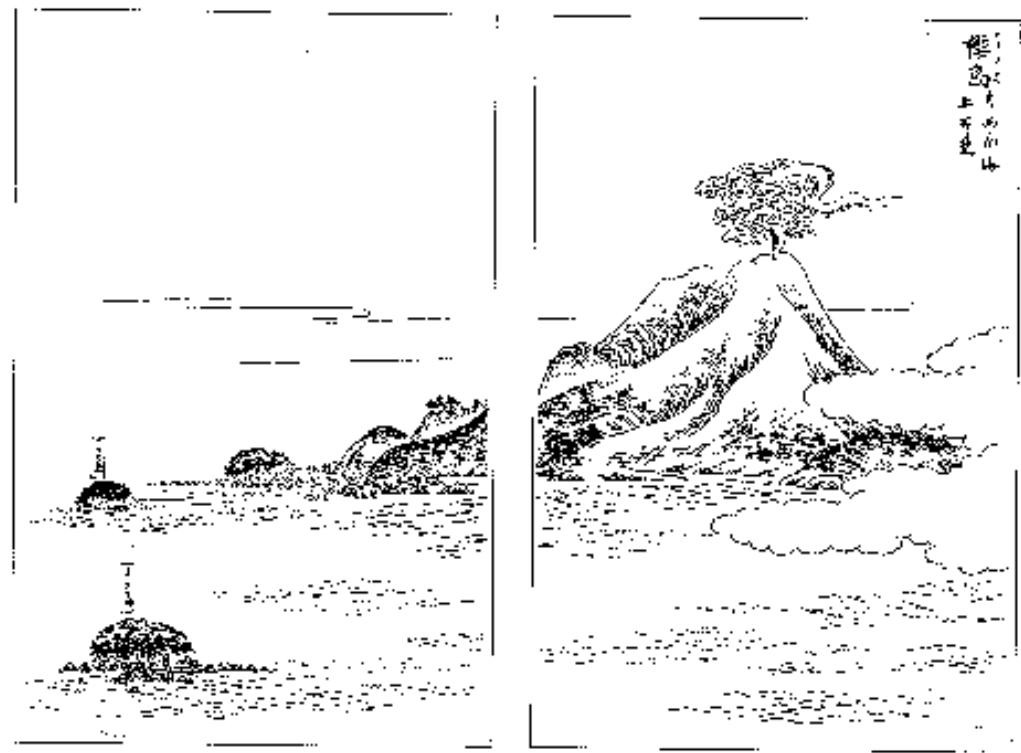
かふゆきの曙

櫻島秋月
葉行四士一通

樋口三位康熙

秋ことに光を花とさきやすむしまは桜の

名にたれとも



櫻島春月 小松十
一

日野資枝

浪かすむ月のみはるのさくらしま夜をへ
て花に影もめでまし

櫻島暮雪 楠木正人

高辻幸相家長

桜しまひかたをかけて降雪ハちりかふ花
の春の面影

野宇橋

影うつる水もみどりやさくらしま

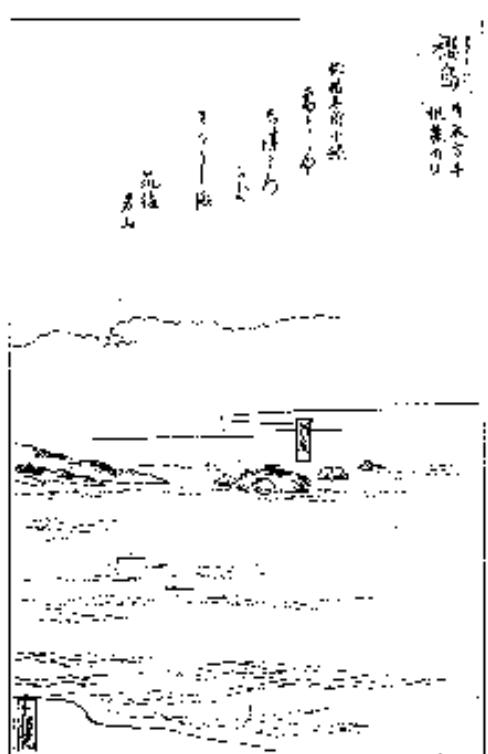
野雀

咲ころかなを思われつさくらしま

新続大筑波集

人隅のさくら嶋にて

藤原
謙也



花の名におほすミそめやさくらしま

慶南 晓

夜は海に明たりゆきのさくら嶋

蓮行南 門

奉納 家久

冬もみなこゝろの花やさくら島

俳偕名所小鏡

義徳君 山

雪そらやしつこゝろなきさくら嶋

五社大明神 赤水村宮坂に鎮座、地頭仮屋の

巳午方拾六町許り、祭神五座上兩月後立春例
祭元月廿九日勧請

年紀詳かならず、嘗島の宗鎮守にして寛永二年五月邦君慈服公の命によて社殿を濱辺に遷し再造し給ひ崇敬あり、天明中洪水の難甚しく、寛政十年九月旧社地宮坂に遷す、内陣に古響ひとつを納め神物となす、山米

る秋の浦浪

御嶽藏王權現

横山村神野に鎮座、地頭仮屋

の辰巳方凡式拾明、勧請年紀詳かならず、祭神彦火々出見尊、例祭春秋彼岸、初め嶽の西巔九分許りに安す、天明中湧山崩れ深谷岡となり、水難多しくよて地をトし遷宮すること數度に及へり、享和二年六月又今の地に遷宮す

藤野の楊梅 藤野村藤崎止兵衛庭中にある、慶長六年松齡公爰に塹居し給ひ、仮山を築

伝ハラス、九月廿九日にハ御輿を守護し神樂を奏し演殿下りあり、祭祀懈らずといふ、

社司岡生式部

き旅寓の思ひを慰め給ふ、時に手白栽給ふ
よしいひ伝ふ、邦君寛陽公此楊梅の為に屢
光臨し給ふ、宥邦公もまた高駕を寄せ給ひ
しといふ、今其古木枯てなし

カイガシノリシニンガウキジタウオシシ
海岸山金剛院潮音寺 横山村にあり、真言宗

大乗院の末にして本尊不動明王立像 延宝元
年十二月草建して島の祈願寺となす

マツベシザンサンフクシ
萬年山西壽寺 嶽村にあり、地頭仮屋より寅

卯方武治五町、押羽宗福口寺の末にして開
山古田和尚、本尊阿弥陀坐像 當寺由緒詳か
ならず、島の普提寺にして触頭フクマシといふ

ミタケリウラコングン
御嶽龍王権現 松浦村に鎮座、地頭仮屋の卯
辰方凡毫里武治五町、勅諱年歴伝へらず、
例祭春秋彼岸、初め北嶽の九分許りに安鎮
あり、己亥島燃の後爰に遷宮す

温泉 古里村にあり、地頭仮屋を距ること辰
巳方凡武里許り、安永八年湧出す、沙湯に
して万病を治す、初め有村に温泉あり、已
亥大燃の後遂に其温泉を失ふ、このとこ爰
に湧出す

黒上の燃崎 黒上村にあり、文明三年九月十
二日本岳の地中に火を發し大石を飛し砂を
雨ふらす、其焼石岩岡となる所なり、又向
面村に燃崎あり、安永己亥の焼石にて島民
新燃とよへり、有村の燃崎も同時なれば同
しく新燃といふといへり

燃崎 野尻村、湯之村の堺をいふ、文明七年
八月野尻村火を發し沙石を雨降し、焼石置々

たる所なり

燃崎白雨 小松子
一云の

日野資枝

もえさきの名ハそれながらあつからぬ風
もふきいて、すくる夕たち

鳥島 カラシマ 赤水村の南二町許りにあり、年代記を

接するに文明七年八月廿五日野尻村に火炎
發せしことあり、此時湧出なるよし、鳥民
伝へたり、雜木繁茂して烏多し、松樹の生
する事を忘む、いかなるゆへにや、今も一
樹の松なし、寛永十年癸酉五月邦君慈限公
弁財天社を安鎮し給ふ

沖島

オキシマ

烏島の南にあり、湯之村の前なり、其
大きこと烏島に一倍す、水あり、年代記に
云、文明三年九月十二日黒上村に火を発し、
人民多死す、同七年八月十五日野尻村に火
を発し、此時湧出するにや、近比安永八年

十月崩口櫻島両所に火を發し、向面村の海
中島々湧出するを見て考へ知るへし、今松
樹多し、俗に是をたこ島といふ

新島 シンジマ

向面村の北に五島あり、安永八年正月

十月朔日櫻島火を發し黒煙天に上り地大に
震ふ、忽ち暗夜の如し、五日の後煙散す、

是月十四日一島湧出

吉田村の池を跨ること五町、島の名

十五日、翌年七月朔日 十五日又一島湧出

五十七町、松五箇村、吉田三尺、一

木中は發して今見度す 木中は發して今見度す

十六日、翌年七月朔日 十一月六日夜

又一島湧出

吉田村の池を跨ること五町、島の名

十一月九

日夜又一島湧出

吉田村の池を跨ること五町、島の名

俗に新島と名づく、若 島として確実氣あり

翌年庚子四月八日二島双湧出

吉田村の池を跨ること五町、島の名

名づく、これを名づけて五番島といひ、里松原水島と名づく

六月

十一日又一島湧出

吉田村の池を跨ること五町、島の名

十月十二日又一島湧出

吉田村の池を跨ること五町、島の名

七番の口に發し、是を人當數口と、其後十八番の二十七口と、此
出と處、又眞鑿六番とあり、二十七口と一十九口處、火發きの名残れり、
里番の火を表す然れど名づく、この口にあ多くを有す。初め火を發
して一年の際、頗る白砂を沸騰し、三口を
経て或は没し、又泥を發し石を發し、五口
を過て或は没し又岩石崩れて小さくなるも
あり、泥砂聚り大きくなるもあり、海底鉄
冶の音あり、其形定ることなし、鳥湧出



するときハかならず泥砂派上り波濤高く、
或三丈或は四丈、人家に逼る、島民是を沖
波といふ、炎氣漸く鎮り五島全その形を得
たり、時の人新島と称す一卷三章四節五第五
御の島々今に在り五番
島大して草木生し水あり、よて寛政十二年
庚申閏四月島民六口を此島に移し居りしむ、
其海底の深さを長間に問ふに、向面の沖は
凡八拾尋或ハ九拾尋なるよしいへり、かか
る海中より湧出して島と成こと天地造化の
妙測りかたし

風六

泥島や木の葉の種子を渡り鳥

薩藩名勝志

卷之十七

薩藩名勝志卷之十七目錄

諸縣郡

妻方神社

心慶寺

若宮神社
新熊野權現

運慶墓

永泰寺

山仮屋

海德寺

擁現局

内城

大慈寺

千年松

山宮神社

御在所

多聞院
照倍院
山口神社
寶滿寺
中之宮神社
人性院
志布志壓鋪
有明浦
松尾城跡
腰掛石
平瀨
御在所
即心院
御在所
嶽

船磯
濱宮神社
鎮母神社
逆華院
天長寺
都城旧跡
興金寺
光明寺
神社宮
四生寺
黑尾權現
菖蒲原
正應寺
祝吉御所
閑尾瀧

檳榔島

官神社

止若宮八幡

蒼龍庵

兼喜神社

龍峯寺

延命寺

龍泉寺

上念寺

天ヶ峯

二嚴寺

新礎權現

稻荷神社

和光寺

明觀寺

荒嶽權現

荒嶽

走湯權現

走湯

山之口古城

山之口

十輪寺

十輪

的野八幡

的野

諏方神社

諏方

長久寺

長久

梁新寺

梁新

日向國

日向はもと大國にして薩摩大隅もこれより分れたり、いにしへ景行帝に向ひし國とて日向國と名づけ給ひしといふ、其時までハ今のことくに國境も定まらず、國号とてもなかりしと見へ侍れとも皇孫瓊々杵命初めて天降し給ふ時、天神の御子ハ筑紫日向高千穂^{タシブ}触之峯に至り給ふへしと猿田彦大神のいひしを見れば、日向の名ハとくよりありて日向国といふ、國号ハなかりけるを

諸縣郡

大崎

妻万五社大明神

假宿

村

鎮座

地頭假宿

屋

同村^{トコ}を距ること辰方七町余、祭神二座

主祭例祭正月中の申酉日、九月中の申酉日、

本邑の總鎮守にして一宮といふ、秋の祭には演殿下りあり、神輿を守りて神幸の式をなし、又鏑流馬を張行す、勧請の年曆詳か

ならず

景行帝の時より初めて國号とハなし給へるなり、それより國境を定め郡邑を分ち世をへて今のことくにハなれり、一國凡五郡、

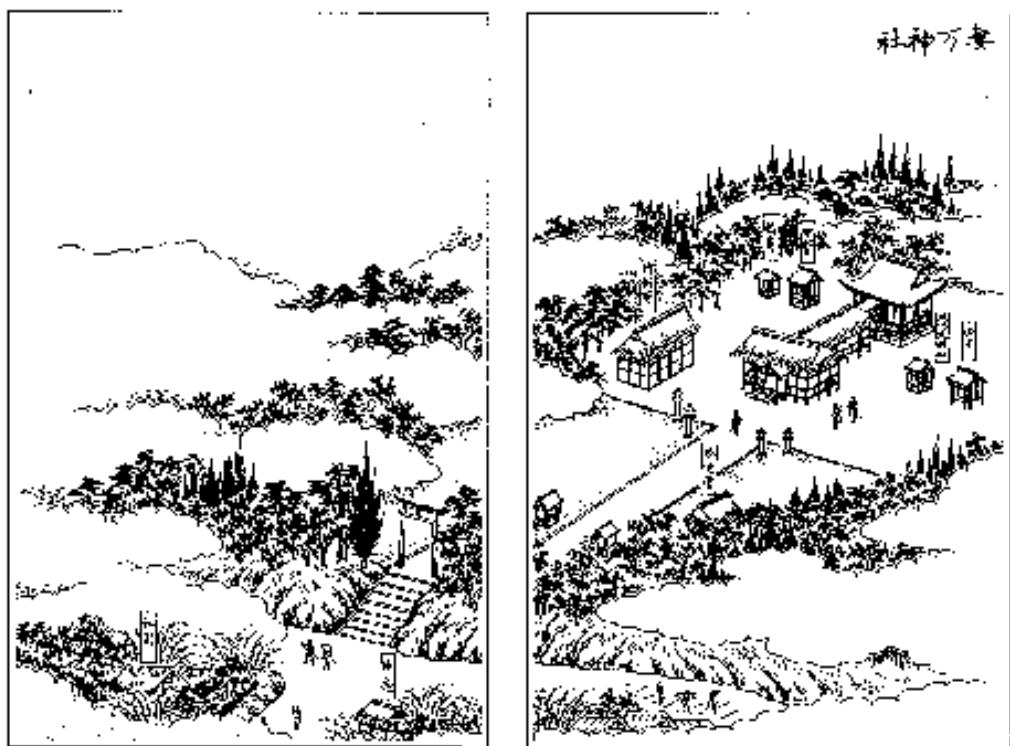
白杵、児湯、那珂、宮崎、諸縣^{モロカニ}諸縣郡^{モロカニ}度延元

普吉郡^{モロカニ}御平郡^{モロカニ}度延元

度延元

三代實錄天安二年冬十月一丁二日己酉授日向國從五位上都萬神從四位下云々、建久八年日向國岡田帳諸縣郡妻万宮領九十八丁云々、邦君大岳公の時、坊津一乘院住僧賴政法印の筆記に守護社參の次第、薩摩惣廟開聞、大隅惣廟止上大權現、日向惣廟五社大明神号妻宮云々とするせり、されハ往古ハつまの宮といひけるを今い里俗文字に隨ひ誤りてさいまんと呼へり、肝付氏當日を領しける時崇敬ありしと見へて、天文廿一年癸丑三月の棟札を納む再興と見へたり、由緒記を接するに妻万の神社八日向州五郡自井、荒瀬、那珂、古賀諸郡ことに一社ありて、五郡に五社なりけるを合祭して五社大明神と称すといへり

妻万の神社占ひ今之志布志郡日向村にあり、何れの年次にかこ、ト連富をりし、詳記なし、而山林に日社景あり、今た本官と呼ふ社



殿の左脇に五林大明神祭る神をサンクルマニカミ山王社あり、

また右脇に稻荷社及び伊勢大神宮石の祠あり、

鳥居の左に本地堂あり、十二面觀世音の木像を安置す往古別當寺ありて本地堂は其堂也社司の家ハ鳥居の前右側にあり、篠原某といふ

如意山寶棒寺多聞院
ミイナシオウハウヂタモンイニ 仮宿村にあり、地頭仮屋より寅方四拾七間余、真言宗大乘院の末にして本尊毘沙門天、開山權大僧都賴忠ライチヨウ月不観基年歎詳かならず、本邑の祈願寺といふ

大崎山心慶寺 仮宿村にあり、地頭仮屋の辰方六町余、曹洞宗福山大安寺の末寺なり、本尊觀迦如來、開山龜慶抱大和尚平保元年甲申十一月廿二日受戒開基年月詳かならず、往古肝付越前守兼久の草創なりといひ伝ふ、今當邑の菩提寺と

なる、境内に鎮守堂あり、飯綱權現、多賀大明神、稻荷大明神を祭れりといふ

飯隈山飯福寺照倍院 飯隈村飯隈村皆に飯村と呼ぶに

あり、地頭仮屋を距る」と寅卯方式拾三町余、開山覺進上人永仁五年癸酉本尊神變大菩薩

本尊是貞元年余作 不動明王大般若經是貞元年余作 當寺ハ本山派山

伏の住職大台宗皇都聖護院の末寺二十八大先達の一にして薩隅日三州の年行司職を勤む、初め邦君道義公の時、弘安二年庚辰十一月建立あり、僧覺進をして開山住持とす、

山中に新熊野權現の社あり、社頭に一天護持四字の額を掲ぐ中止崇元慈吉當寺の住僧に命して別當職を掌とらしめ、開基より以来世々院家勅願所として實祚の延長國家の寧靖を祈り呪符を禁闈に献しけるに、中ころ其事

廢れたりしを、大文公の時、聖護院宮道尊親王に奉し、古に復せむことを請給ひしに、優詔ありて初めのことく勅願所となし、符を獻する等のことを容され、今に至りて、

としことに大峯に入法を修し符を鳳闕に獻すといふ。古稀品を修するに人皇世一、二代文武帝時五十年鑑定、寺を開きて他鄉にありしに、其後何れの年月にかゝるもに移れる計凡ならず、四十五代聖武帝太平十五年勅願の所となり大光明の號にして成ること二人奉仕して、室内にて御礼を獻しけるに、かつかハ其事とも甚はれたりしに、慶長十三年慈照院公の前にて耳の老病のことを訴され、又元禄十四年大公の清ありて、いにしへのことく勅願所となり、現符を承る者有するに止むる所、今にそよたらすこそ、武藏村山の古き同なり、象徴守りにへて、道中御宿のうちにありて、後に今に傳わると云ふ也、今志和志野連家の地に相應す據現社あり、昔日境内に眺望を以てして既往のありて跡も今に存せりといへり。

境 内 に 眺 望

の十二景あり、みな絶勝なり、一景ことに

東園參議左中将基辰郷の詠歌あり図に載す

十二景ごとく慈照院内にあるにハあらず、觀光

山王社慈照院内
本社の左

の方に愛宕社白王社の
左にあり

山口大明神云々の右
にあり

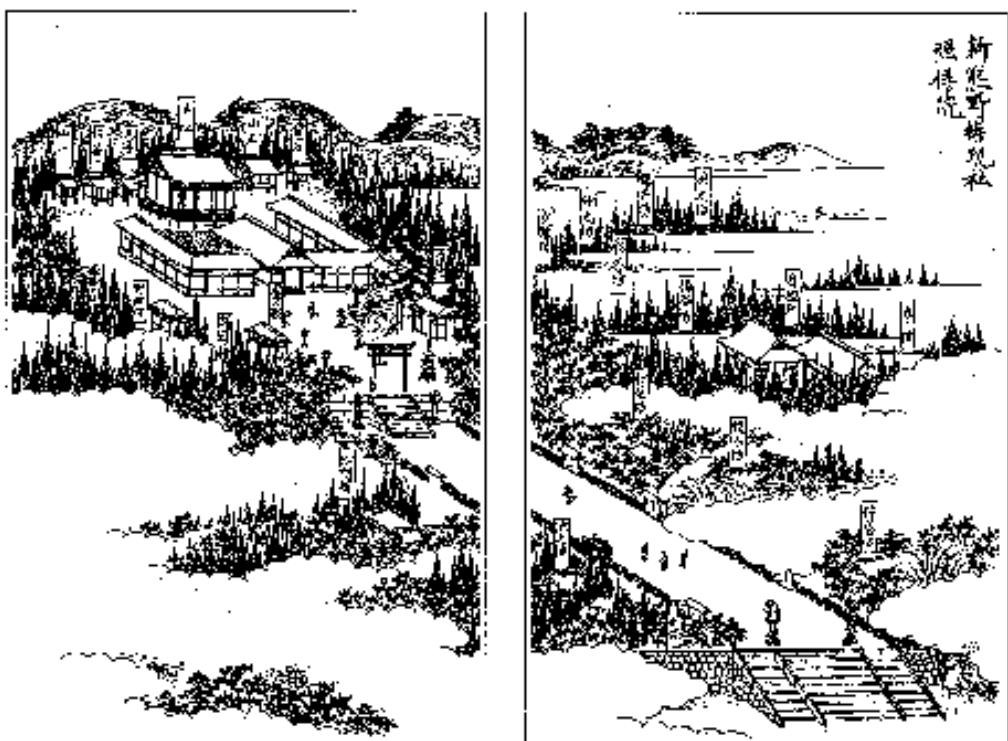
天満宮

右にあり

稻荷社天満宮の
右にあり

本地堂本社の右左にあり

虚空藏



堂木を名前有の方など、其余山中末社諸堂あり、ここに省
けり、又二十六の坊舍小之坊、唐谷坊、御藏坊、根本坊、
御谷坊、御上坊、十石坊、文政坊、根本坊、源之坊、山本坊、
萬谷坊、御藏坊、森之坊、四石坊、天仙坊、室之坊、文正坊、文政坊、
松谷坊、上石坊あり、常に照倍院に屬し守務を助け
朝夕の勤行怠たらず、境地広大にして一山
秀を鍾め、寂莫たる神廟皆砌錄深くまことに
清淨の修驗道場なり

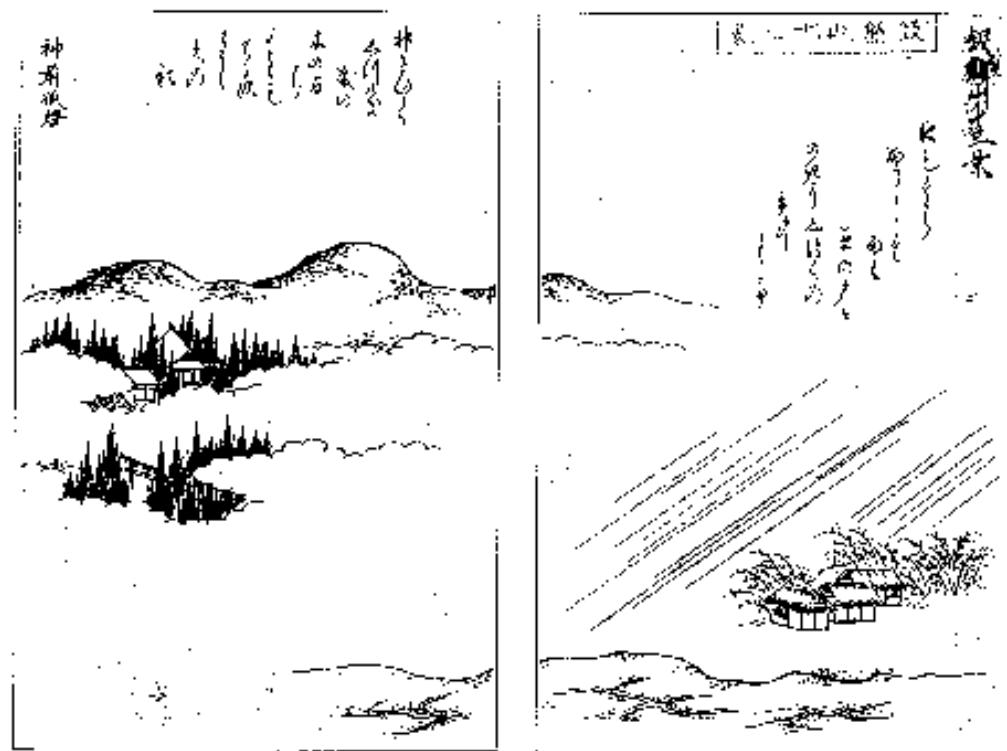
飯隈山上三景

茅屋夜雨

夜もすからふりしく雨も草の戸はのきにしつくの音計して

神前狐燈

神さひてしつけき森の木の間よりよと、もてらすともし火の影



隣寺暁鐘

此さとはいとしく人のねさむらん軒端にち
かきあかつきのかね

板橋朝霜

宵のまにをきそふ霜もふかゝらんけさなを
うつむ野路のいたはし

社山杉雪

すきたつるそのかミ山にありそへて手むけ
のぬさとまかふ白ゆき

二浦帰帆

こきつれて帰る夕や二浦の波にかすある海
士の釣舟

長沙網引

うら人のいとまも波のあらいそにいそかハ
しくもあひきする声

關伽井蛙

声そあるかわつも法の時きを得て清きあか
るの底にこそすめ

田中松風

畔に生る山田の松の枝たれてそよくあらし
の音もしつけき

下村晩霞

いろも香も花も霞にへたりてむらたに遠
き春の夕暮

平田山鶯

をく霜にまとふはかりに打むれてひらの片
山に遊ぶ白さき

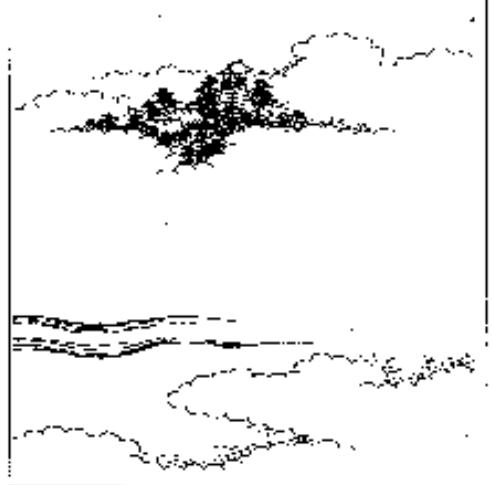
檳榔秋月

もうこしにあるてふ木々の秋にいま下さと
のはかもつきやへたてぬ

板橋櫻坂



障寺花種

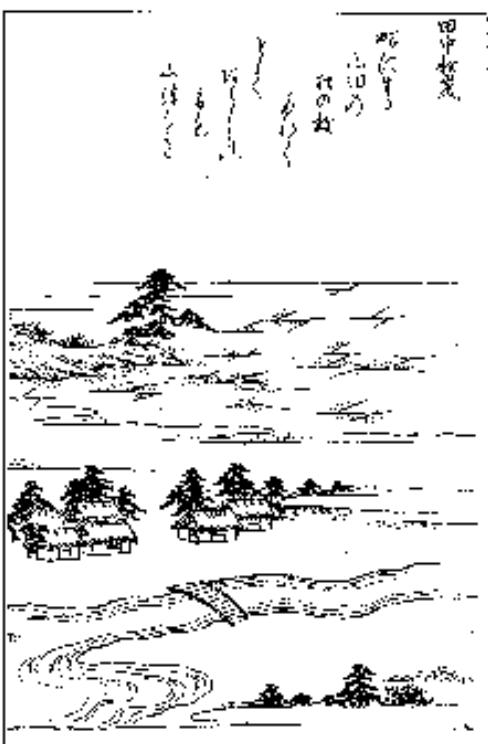


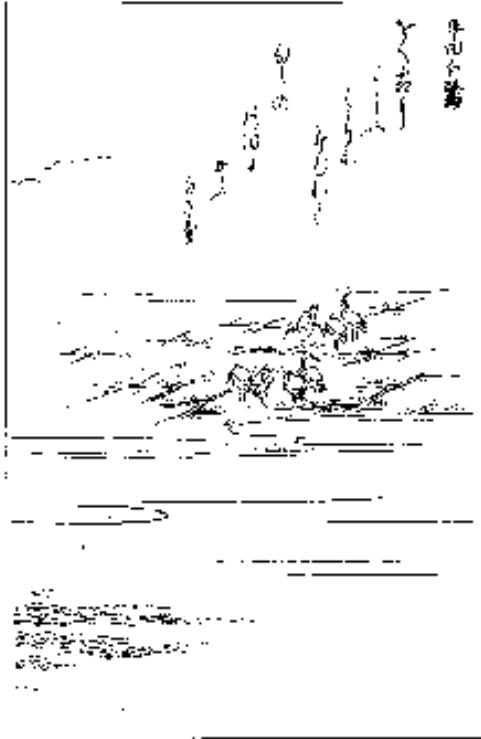
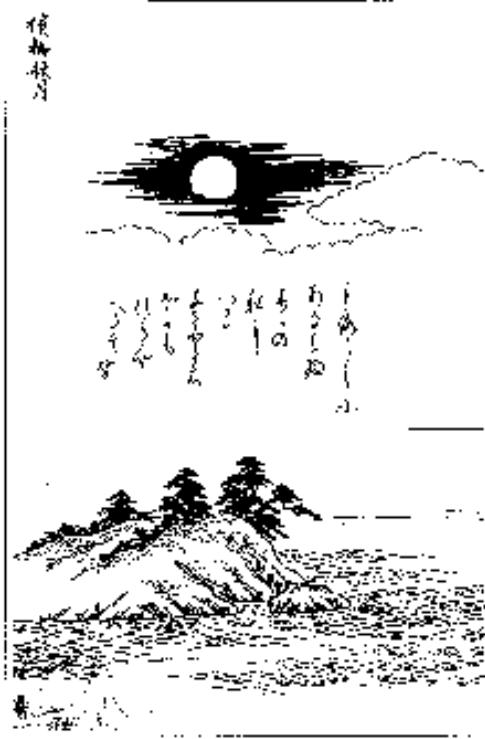
六浦櫻坂



社山松雲







橫濱浪音

ふきはらふよこせの演の夕風にをとそへて

打冲つじら浪

志布志（シブシ）も、就に志布志源氏、九代大始帝源平（イエヒラ）爰にあ
よて志布志と名付け給ひといへ事ハ、志布志原





正一位山口神社 安樂村に鎮座、地頭仮屋を

距ること申酉方式拾八町余、祭神六座天智天皇、後

桓、玉依姫、大友親王、義経太夫、久羅
御祭日庚戌廿二日九月廿二日當社ハ初め大友親

王の靈を祭り、山口大明神といふ、大同二

年丁亥八月六社山口神社、御宿神社、若宮神社、中之社、横櫛御前五社を合せ六社といふを一

社に会祭し、山口六社大明神と号し、志布

志の宗鎮守となす、享保十九年甲寅二月

神祇道管領勾當長上從三位行侍従ト部朝臣

兼雄正一位の宗源吉旨シジンを奉納し、華表に正

一位山口大明神八字の額を掲ぐ、春秋の正

祭は演殿下りあり、また秋は流鏑馬を張行

す、鐘樓に古鐘を掛く、其銘云、

讚岐國石志尾八幡宮龜鐘金輪聖王天地久、

兩庄豊小史氏安、杜家繁昌興仏事結縁上下

願門滿

文永六年己巳十一月日

大工丹治是助 亮秀坊

當社の敷地にしへより白馬の入さること異事なるといふ、大智帝白馬に乗り給ひ、其併帰り給ハざりき、其前縁ともいふへし、帝のかくれさせ給ひしと頼莊郡開聞神社陵の下にしてしむ、併せ見るへし

若宮神社

志布志村にあり志布志村を里舊に新村といふ 地頭仮屋

の卯辰方式町八間余、祭神一座扶桑天皇祭正月初迄口 山口

大明神春秋の祭市渡にて神輿を此社に行幸して祭祀あり

秘山密教院寶満寺

志布志村にあり、地頭仮

屋を距ること卯辰二町余、律示京都泉涌寺、

南都西大寺両寺の末にして開山信仙上人銀

極樂寺光山寺本尊如意輪觀音法師、延慶、正月八日立堂、運慶、生

性空の弟子本尊如意輪觀音法師、延慶、正月八日立堂、運慶、生

當寺は九十四代花園院の御宇正和五年丙辰の歲、信仙上人院宣を蒙り當國に下向

し當寺を建て、勅願所となし、元応二年本

尊西大寺より下向、今本堂に安置新堂建て三月

七〇年正月、吉昌於内大寺開敷、聖三光正元泰定院道良教と云々教する

に座上一人なり、亦古原田人吉左衛門入道ハ津守白鷹守白鷹守の子也、又教は井谷吉之助吉之助の子也、

かなうす。興正菩薩の開眼といひ伝ふ今般するに度後

より、又興正菩薩ハ近頃二五に殺す、建久よりハ正泰ハ凡百半の後なり、

又元祐二年ハ正祐二年よりハ三十一年後にある、時後甚ぞ遠へり、興正

菩薩の開眼であることを知るべし、正祐作の事也を元祐二年正月

美して題旨を改め作りしを、寺住持安会して説くものなるべし。本堂

に円通閣支那書二字の扁額を掲、毎歲正月元

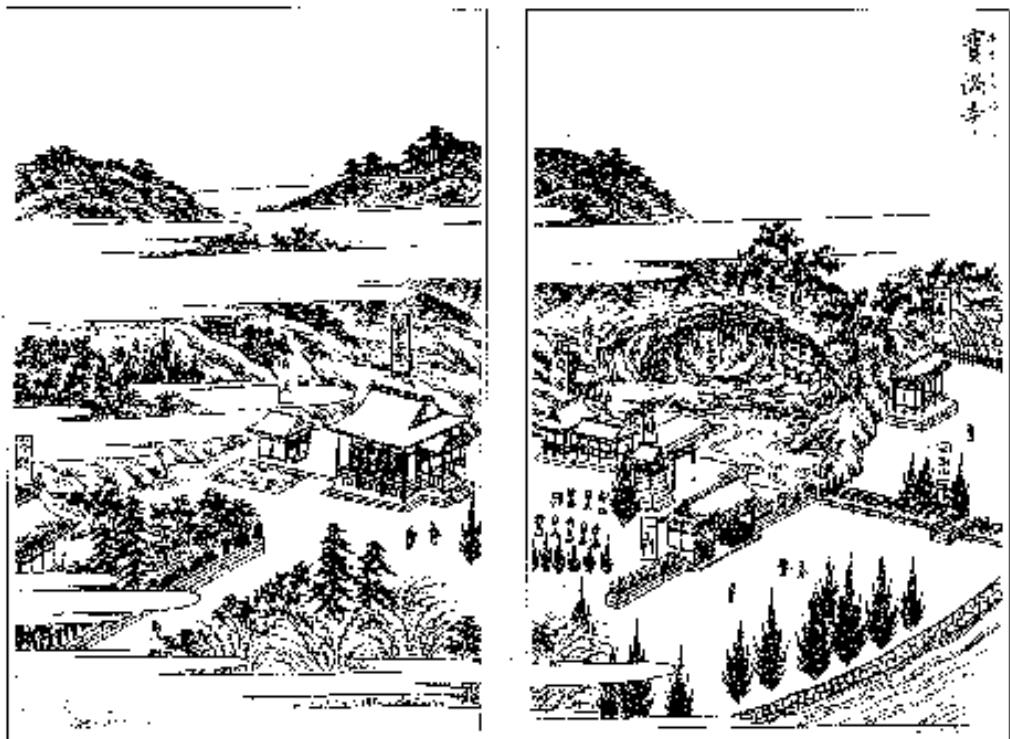
日より一七日宝祚長久天下泰平国家安全の祈禱を勤む、就中正月十八日の夜大法事を

修行す、觀音の靈験新にして平日參詣の人

絶す、殊に產婦の擁護深きによて平產の護

符を出すといへり、本堂の左に鶴ヶ岡八幡

宮御堂、正月九日、本地蓮華寺御開基、正二十六分余布金にして發出し後は當寺二任、主伴が安置し鎮守



となす、いにしへより住持上京して院参の寺格なりしに、中古池魚の災に罹り此事を闕、ここにをみて住持仙秀和尚上洛して吉院宣を捧げ東山泉涌寺に就て勧修寺前大納言経廣卿紹介をもて院参の旨を訴ふ、百九代後水尾院の天聴に達し、萬治二年己亥十一月院宣を蒙り、同く十九日院参して龍顔を拝し奉る、爾來住持代々院参せしに住持玉鑑和尚_{（法名）}百十八代後桃園院の勅許を蒙り、安永七年戊戌六月廿六日參内し、其後住龍門和尚寛政元年乙酉十一月十七日參内し、永く參内參院の寺格となる、當寺付宝舍利塔をもて第一とす、足利左兵衛督源直義一國一粒奉納の舍利なり、事は直義歴心三年寄進状に見えたり（直義院を卒たまひり、四一基者參をせらる、本善寺の爲め奉願いたす）

大門の二王の石像は、応永八年辛巳三月三日向川原の合戦に野邊薩摩九郎か従兵熊田原兄弟十九歳十六歳の若武者戦死を遂、

諸人哀憐に堪す、二世安染の為に兄弟の形代とて二王を彫刻し安置すといふ、此戦ひ事驚きによてここにもらしぬ

運慶墓 緋満寺山中にあり、銘文なし、運慶は仏師定朝六代の孫にして建久八年東大寺脇侍を作り世に名高き人なり、寺説に云、宝満寺の本尊下向の時側を離れずとて當寺に下り、このところにて死したるゆへ廟所あるといへり、觀音大士は元応一年の下向にて、建久におくれたること百有余年、時代違へり、此説誤りなるへし

中之宮神社 安樂村に鎮座、地頭板屋より申

方志里七町武拾間余、祭神一座天香寺の五王
慶長十二年丁未十二月宝殿造立の棟札を納む

新豐山永泰寺

志布志村にあり、地頭板屋を

さることに牛方四町五十間余、曹洞宗福昌寺の末にして開山代賢守仲和尚十八世本尊觀

迦如来坐像大正七年己卯二月建立、邦君

大中公の位牌を安置す

密巖山丈陸寺大性院

志布志村にあり、地頭

仮屋の貢卯方七町余、真言宗大乘院の末にして開山良範法印、本尊阿弥陀如來坐像寺内天滿宮を安す、例祭十一月廿五日、新納悲四郎久頸形代といふ、天文三年甲午八月廿八日新納近江守忠勝建立、神体の内に銘あり

山仮屋 志布志村にあり、地頭仮屋の丑寅方

凡八町許り、大性院境内の山中にして五反
許りの平地なり、三十九代天智帝后人宮姫オミミコヒメのあとを慕ひ給ひ潛にこの地にましまして、

仮に宮居を営み給ひ、しばらく皇居ありし所といひ伝ふ

志布志屋鋪 志布志村にあり、山仮屋の下なり、天智帝山仮屋に潜居し給ひし時、此屋しきの主の妻布の手拭を獻る、其時召仕の下女もまた布の手拭を獻る、天皇教感斜ならずして上下よりの志に布を獻ること是誠に志布志なりと詔ありて、此所を志布志やしきと名つけ給ふ、よて後人志布志をもて一郷の名となりぬるとそ、今も此辺山島の字志布志屋鋪の名のこれり、衆妙集に

霜月廿八日日向国志ふしといふ所ちか
きわたりにて冬枯に柿の残りけるを見
て

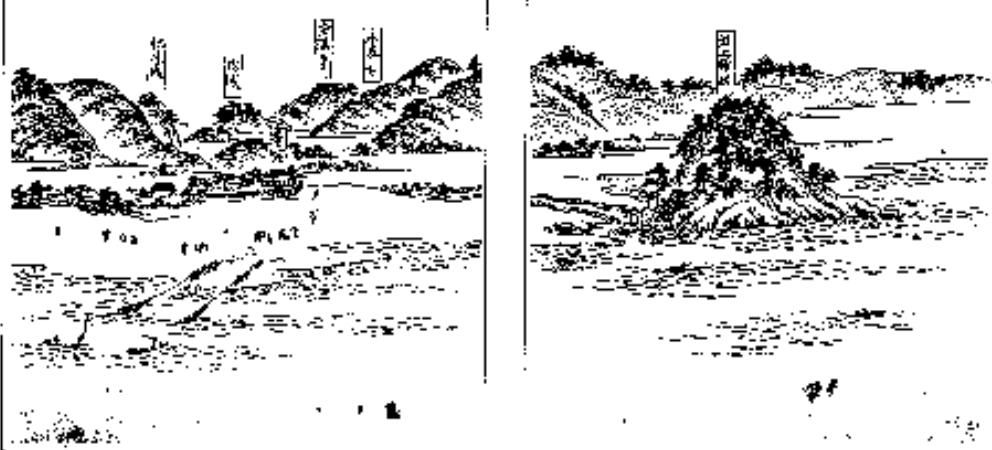
法印玄旨

冬枯に残れる柿をかきとりてなをしふし
とやかふりくふらん

福壽山無量院海徳寺 志布志村にあり、地頭

仮屋を距ること甲西方凡七町三拾間、時衆宗相州藤沢山トヨタケサンの末にして開山託阿上人トクアシヨウジン本尊阿弥陀如來立像高七寸七分
寸去五分五厘半曆応九年戊寅の歲セイ託阿上人巡行の時建立せりといふ

有明の浦 志布志村の海濱をいふ、地頭仮屋の半方八町、此浦を眺望するに、東は日州福島の浦、土肥の岬、南は内之浦火崎の島、西ハ瀬州高隈嶽、岸の中にして、前に檳榔



島、権現島ふたつあり、其風情いはんかたなし、安永三年遊行五十三世尊如上人當國

に巡行して

他阿尊如

たくひなや春も名残の月の影浪白州の有

明の浦

権現島 有明浦の前にあり、林岳高く此浦の波涛を除く海上権現を安置す、例祭九月九日、宝満寺格護なり

松尾城跡 志布志村にあり、地頭仮屋より西

方式町余、榆井遠江守頼仲居住す、畠山治部太輔直顕頼仲を滅して自ら居城とす、直顯落去の後、新納近江守時久居城となり、子孫延て爰に住す、當城の守護神藏王権現社あり、時久の子孫新納近江守忠勝天文八

年七月廿六日没落し、鳥津忠朝_{（前朝ハ今ミ内也外の姓をヒ）}領地となる

内城 松尾城の東にあり、邦君輪岳公心安中大始良内城を去て爰に移り給ひ、惣翁公にいたりて居城し給ふ

腰掛石 薙の馬場塚の内に埋り長壹丈許りの石なり、天智帝暫腰を掛給ふといひ伝ふ、

今に山口神社濱殿下りの時、此馬場にて神輿を止むらハ其故事を伝ふと云

龍興山大慈廣慧禪寺

志布志村にあり、地頭

仮屋を距ること申酉方拾壹町、臨濟宗開山派京都正法山妙心寺の末にして開山玉山和尚_{（勧善弘智大法師海音寺妙心正法師の法號也）}本尊千手觀音_{（建久二年辛卯五月廿五日入定）}當寺ハ歴応二庚辰の歲櫻井遠江守頼仲隅州肝付に建立し帝釈寺と号す

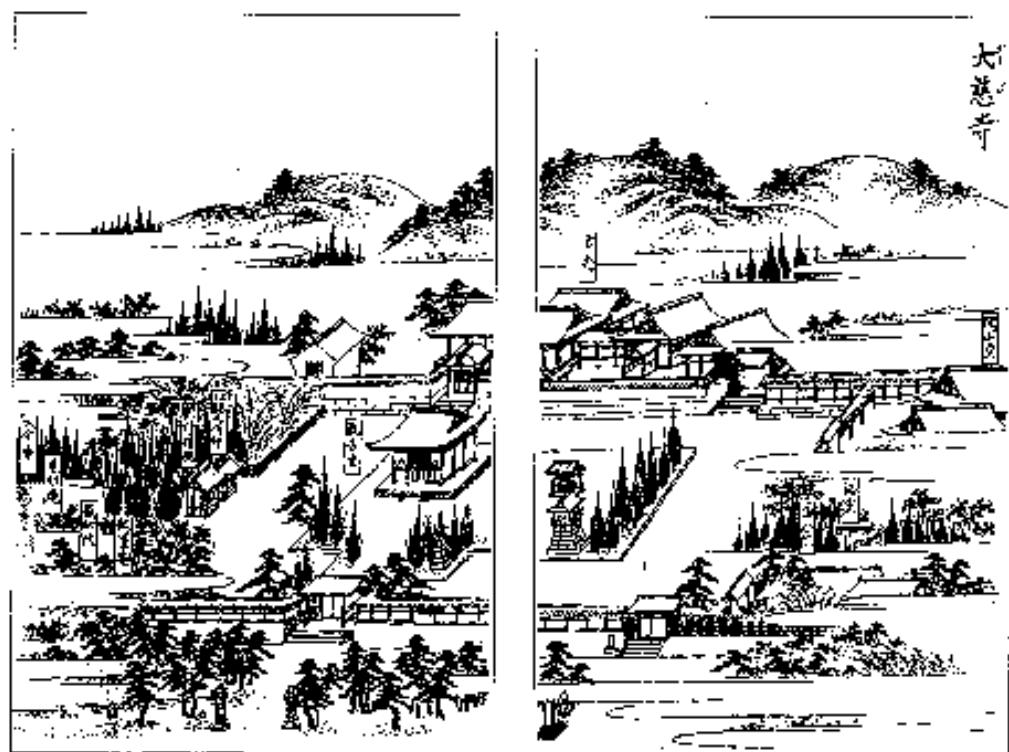
_{（新神田當向）}
_{（表紙に昌任）}

其後今の地に移し大慈寺と改む、後廣慧の二字を賜ひ大慈廣慧禪寺と号す、延文二年丁酉二月五日頼仲畠山治部大輔直顯と戦ひ利を失ひ寶池庵ボウチヤンにをして自殺す、辞世の偈頌位牌の裏に書す

山 大事因緣
五十七年 遊戲自在
銳樹刀

こしかたも又行末もこのとしの此月の片
ふ只今にあり

賴仲石塔寶池庵今はの寺地にあり、十境八景あり、十境は蘭嶼福峯、檳榔島、夜明庭、雲秀溪、潮音閣、拈菴堂、烹金炉、止々庵、清涼軒、綠池、八景ハ龍山春望、古寺綠陰、野市炊烟、漁浦帰舟、橋邊暮雨、江上夕陽、東營秋月、西塞夜雪支那西海岸に鐵牛出没等の傳めり、後に勅す將軍義詮ヨシタケ



三州の乱を鎮めん為に朝山出雲守師綱、同
小次郎重綱上使となりて、明徳二年下向、
惣翁公當寺にをいて対顔あり、盛饌を進ら
れ、和漢の会を催し給ふ、又文祿五年七月
廿五日近衛信輔公當寺に着給ひ、旅宿とな
し給ふ、信輔公阿蘇玄興に發向せよとあり
けれハ

浪のこゑや松に入江の秋の海 玄興

又閏七月五日志布志を出船し給ふを祝ひ侍
りて

追風も有明の月の舟出かな

函嶽峯

天德南源

函嶽峯如函嶽開 亭々玉立脱凡胎

昔年曾入諸禪夢 感得地無半点埃

樟榔鳥

全

朝山出雲守師綱 同
小次郎重綱上使

檳榔島湧寺南隈 常有仙翁採藥來
何處鳴榔明月夜 漁人得意弄潮來

夜明庭

弘福鐵牛

十里汀沙寔布霜 星河臨映散晴光
幾回誤認門前曉 夜半鐘声山上方

雲秀溪

南岳悅山

秀麗清溪疋練分 廣長舌相好音聞

神龍錦鯉為宮殿 曉夕飛勝有彩雲

潮音閣

弘福鐵牛

閣湧碧空客法界 不須彈指引追尋

雪湧影裡宛然座 晓夕潮音讚梵音

拈華堂

弘福高泉

誰建梵堂似鸞山 鋪金抹綠照雲間

金花猶在迦文手 只是無人鮮破顛

烹金炉

全

此間原是大炉冶 鍑鐵頑銅那敢當
獨有真金終不變 愈烹愈煉愈堅剛

止止庵

南岳悅山

梵王宮殿立何年 煙檜霜杉影接天
經過乾坤如甌口 火雲飛不到庭前

野市炊烟

弘福鐵牛

庵中靜座豁雙眉 指顧溪山分外奇

止止不須開口說 徒米我法妙難思

清涼軒

全

漁浦歸舟

全

茅茨結構倚山丘 蔽日松篁陰氣浮
長夏涼忘三伏暑 晚來爽納一簾秋

綠池

全

日寒長洲人曝網 村幽孤樹翠成堆
潮平萬項玻璃面 許見仙槎天上来

橋邊暮雨

南岳悅山

穿後鑿成半畝塘 巧心妙手莫能量
一泓爐水照頭綠 倒蘸西輪日月光

龍山春望

天德雨源

西岸橫安鼈背闊 人無病涉往未過
陰雲拏地黃昏候 俄爾為霖潤物多

江上夕陽

弘福鐵牛

山頭突起欲從龍 忽聽雷震九重
倒岳傾湫興大用 浩然法潯濤三農

松門口々立斜暉 淹聽蒲牛吼翠微
風落遠帆望處沒 江空水鳥逐潮飛

古寺綠陰

弘國高泉

東晉秋月

弘國高泉

簷牙堂角露林端 夜静往来倚曲欄

一片冰輪升碧漢 射人毛骨亦皆寒

西塞夜雪

全

冬深夜永月凝光 六出紛々下碧荒

若使三軍親到此 猶疑為主守邊疆

即心院

大慈寺の塔頭にて左脇にあり、開山

剛中和尚大慈寺 本尊観音

半像

邦君嶺岳公及び君

夫人の廁所あり

千年松 大慈寺の南六月坂の松林にあり、む

かし慈眼公志布志に光臨ありて帰り給ひし

時、大慈寺住僧龍雲和尚送り奉りしに、公

此樹下に休息し給ひし所なり

家久

時に龍雲尊詠を和し奉りて

平原砂麓又層巒 今日送君恩万般

獨立亭々松樹下 高歌一詠和皆難

是よりして千年の松といふといへり、いに

しへの松は枯て栽継なるよし、今の松もまた稍かれて近き比栽しとは見へす

絶せぬや契りなれたる秋ならんちと勢の
松の陰の休らひ

千年松



御在所嶽

田之浦村にあり、志布志第一の高

山にして地頭仮屋を距ること子方三里余、

天智帝此嶽に登臨し給ひ、薩州頬妹郡開聞

嶽を眺望し、后のましませし所ミゆれハと

て官居を立給ふといへり、御腰掛石とて今

にあり、崩御の後和銅二年乙酉六月、嶽の

絶頂に靈廟を建て山宮大明神と号す、石小

祠を安鎮して天智帝の廟と五字を彫刻す

大慈

天智帝又、一祠ありひょううり帝の供奉の人々此所頬妹

平ともいふ

山宮神社

田之浦村に鎮座、地頭仮屋の子方

武里余、祭神一座天智天皇御祭一坐
正月卯日九月卯日當社ハ初め御

在所嶽に鎮座ありしを、聞聞嶽見へて崇り

をなすとて爰に遷宮すといひ伝ふ、元龜二

年十二月廿六日山宮大明神御寶殿造立、伴



兼充息災延命、伴兼朗^{ハシマサタケ}、箭勝利、子孫繁昌

と記たる棟札を納む、此時遷古とも見えず、

内陣白銀の幣を納め、又古鏡三十四を奉納

す、祭祀の時犧狩^{ヒヨウガリ}と称し、いにしへより今

に至りて例祭の前申日いつも狩をなし^止

は宮者御立元月獲もの、鹿猪は社殿を三度廻る故

ハ角牙所取候獲もの、鹿猪は社殿を三度廻る故

事にして、社の左なる川の流に漬置、祭日

神前に供す、鹿角ハ皆社内に納む、今其故

事を知るものなし、按するにかかる辺鄙の

山中小社なるに銀幣唐鏡等を奉納し尋常の

古鏡の大一是裏に銘印有るが、銘云、貴
人御名三字の里道千秋多

内に其角あり、因名をしら

山宮村古鏡五鹿角圖



平瀬^{ヒラセ} 夏井村の海中渚をさること二町余にあ

り、凡五六反許りの平瀬の上に漬あり、清

景の岩なり、邦若志布志に光隔し給ひし時

ハ必ず此瀬に渡海ありしといへり、海蝦、

石決明^{ハゼ}、蠣^{カキ}、ながらめ^{或の本にして小なるアカカキ}、赤貝、

海草多し

船磯^{ブシマツ} 志布志村にあり、往古磯邊にして大智

帝下向し給ひ、此所に御船の着たる所ゆへ
船磯といふといへり、今ハ田地となりて其
名のみ残れり

檳榔島

志布志半方海上三里、志布志に屬す、

島の廻り凡て余、怪石樹竹殊に檳榔多し、
嶺に檳榔御前の祠あり、祭神一座乙姫宮大
音御東母は二の母
あるよこひはく

祭

例祭正月巾日天子遷幸に用ひ
給ひし檳榔毛の御車、檳榔の葉はいにして、

より此島に產するを獻るといふ、寛政二年

庚戌十二月仙洞御所百人一首御詩子
御町屋第一重女遷幸の時も

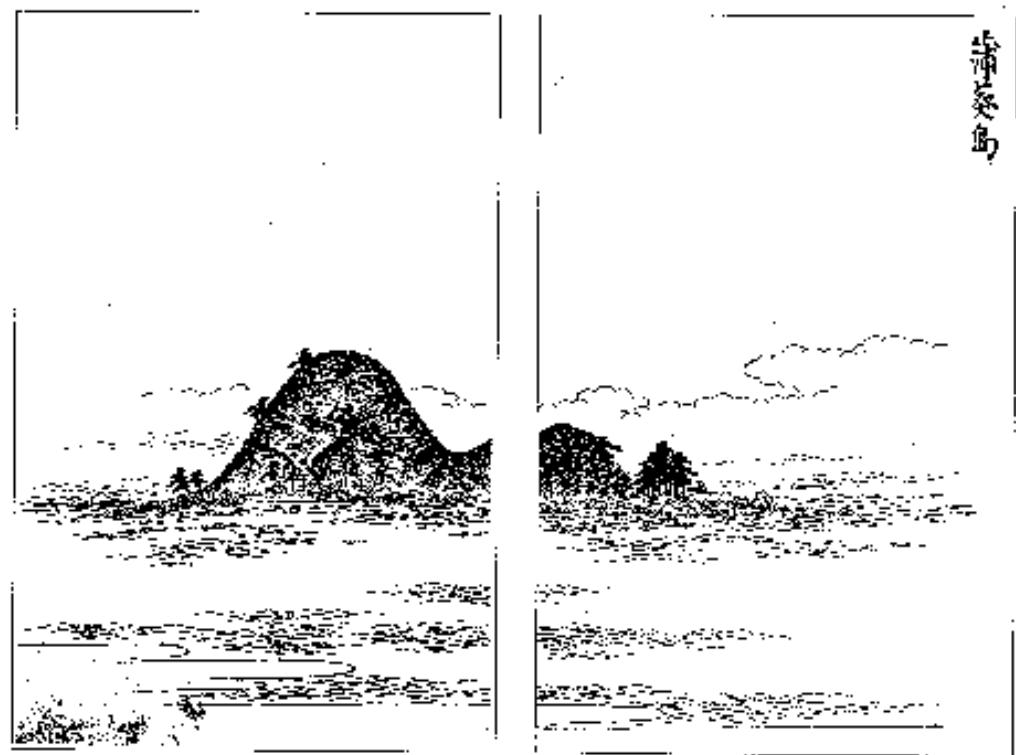
檳榔葉百五枚近衛家所望し給ひしにて、

京都に贈り禁庭に獻せらる、按するに保延

五年十月八幡賀茂詣日檳榔毛の車川ひ給ひ、

又承元二年十一月春日詣の時も檳榔毛を用
ひ給ひこと見へたり、
抄中京事
御御事毛車の

浦之島





漬宮神社

安楽村船磯に鎮座あり、これ檳榔

島檳榔御前の神靈を崇まつれるところなり、

海路よりあしけれハとて爰に勧請し、漬

宮大明神と号す

一宮神社

安楽村に鎮座、地頭仮屋より中方

志半拾七町余、例祭正月末日、當社ハ天智

帝船磯に着給ふ時、此所に夫婦の老人居住

して一夜の御宿をまいらせ鮑螺菜などを取り

りて、供御に奉るといふ、その二人の老翁、

姫を一宮と崇め祭るといふ、今も山口神社

正月中午日祭に鮑さゝえの作り物を供する

ことは此由縁とかや

鎮母神社

安樂村に鎮座、地頭板屋を祀ること

と申酉方毫里五拾間余、祭神一座

（五箇所の御事）

の事といふ、おとせ
日本を打越祭といふ

勧請年月許かならず

松山

正若宮八幡シヤウワカミハチマン 新橋村に鎮座、地頭仮屋アキヤを

距ること升方壹町許り、祭神及び勧請年歴詳かならず別卷二三十五下
月二十一日。社内衣冠の木像一躯を安す又神鏡一面を納む、裏に神号を書し永禄九年丙寅十月廿五日願主円満坊と記す、往古の神体と見へたり、是を本邑の總鎮守とす、本社の左に麻利支大社あり、右に稻荷天明神あり、社司を庄司右近といふ、真言宗蓮華院社頭を譲る

師、觀音の三尊を安置して八幡の本地なりといふ

霧島山蒼龍庵

新橋村にあり、地頭仮屋の午

方三町許り、曹洞宗福昌寺の末なり、開基年月伝ハラス、本尊正觀音代賢守仲和尚アイセンジユウヂョウ。泰寺の末寺なりしと見へたり、何れの年何の印ヒツを勧請して開山とす、初め志布志永尚住僧の時に福昌寺末となりしや詳かならず、本邑の菩提寺とす

都城

八幡山壽福寺蓮華院

新橋村にあり、真言宗

大乘院の末にして本邑の祈願寺なり、正若宮八幡の別當職を勤む、天徳元年丁巳の歲開基なりといひ伝ふ、開山僧詳かならず、

中興開山堯日法印セウジツ 本尊阿弥陀、藥

都城旧趾ミヤコノクシ 五拾町村にあり、領主仮屋アキヤを距ること戌亥方凡拾五町許り、永和元年乙卯の歲、北郷讚岐守義久始て築く所にして世々居城となし都城と名付といふ、文祿四年伊集院右衛門太夫忠棟謀計によて、

義久九代の孫左衛門尉時久城を去りて、薩

州郡答院宮之城に移る、忠棟に庄内を賜ふ、

忠棟此城をもて居城とし、凡八万余石の主

となり權勢日恣なりしに六年を経て、慶長

四年陰謀露顕し邦君慈眼公忠棟を誅し給ふ、

忠棟嫡子源次郎忠貞、都城に捕縛り、安永、

山田、志和地、野々美谷、高城、山之口、

勝岡、梶山、梅北、末吉、恒吉十二所に皆

を構へ亡父の讐を報ぬと欲す、公庄内に出

馬ありて忠貞を征し給ふ、兵並歳を越へ忠

貞降参す、公庄内の地を北郷次郎忠能に賜

ひ都城に移る、忠能に賜ふ、元和元年八

月大家の鉤命によて、忠能城を下りて宅地

をトし、今の地に移る故に、城地は松杉の

林となりて其遺蹟存す、筑後久留米忠能十

代の孫なり

正一位兼喜神社

五拾町村に鎮座、領主仮屋

より戊子七町余、祭神一座
北郷若院介持久の妻、本姓
下就吉、乳名八月番日、一
萬張引。

天正九年故ありて北郷左衛門尉時久

忠久の子久
の父なり社を造営して靈を勧請し若宮八幡と

崇む、祝子妹尾重貞をして東門に移し、社

務職として南門に僧坊を建て延寿院となつ
け、実成法印を別當職となし、西門に禪閣
を建て常徳寺と号し、大年和尚をして幽魂

の菩提所とす、其後領主讚岐守忠能慶長七

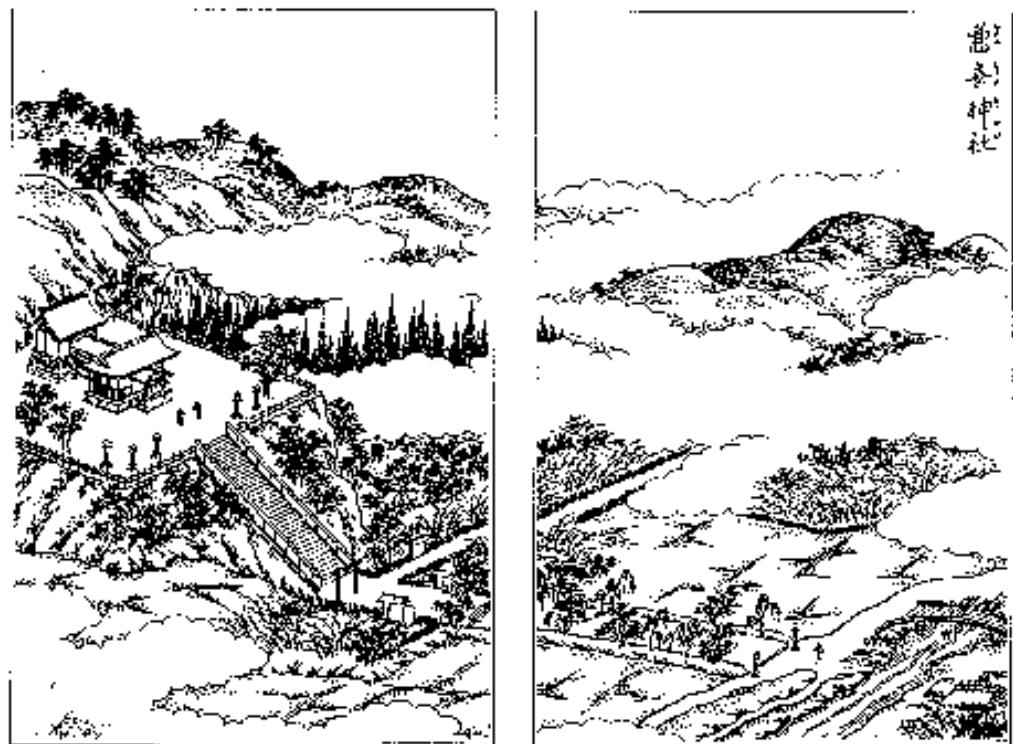
年十月北門に密院を建て本地院と号し舜與

法印を開祖とす、同十三年妹尾重親をして

神祇官領吉田兼治に神階を請ふ、兼治若宮

の二字を削て靈の一字を加へ靈八幡と称す、

又明暦元年十月吉川兼起に請ふて兼喜明神



と改号す、又天和二年壬戌の秋、吉田兼連
神号に大の一宇を加へ兼吉大明神と増進し、
五字の扁額を華表に掲、享保十九年五月吉
田兼雄神位正一位を授、宗源宣命を奉納し、
正一位三字の額を寶殿に掲、是皆北郷氏の
崇敬厚するゆへなり、本邑五社の第一にして
て總鎮守といふ。

松林山成就院天長寺

五拾町村にあり、領主
坂屋より未中方拾四町、真言宗大乘院の末
にして開山舜巌阿闍梨、本尊十一面觀音^{ムサシ}
天文七年八月北郷讚岐守忠相建立して祈
願道場として天滿宮を草建して鎮守とす、
國土安泰を祈り寺を天長と名付、寺院繁茂
のことを見て山を松林と号すと云々、む
かし比丘尼あり、此所長松の下にト居す、



松林尼

時人呼て松林尼和尚と称す、故に松林の号

は初るともいへり、護摩堂、本尊不動明王

立像三五尺毫心相顔、名古有北村西生寺の幽谷に安置す、或時甘火燃來りて草宇灰燼となる、人皆これを嘆す、其後御門入を率て被度を過ぎ、拂

櫻樹下に平れハ大吼とぞと祝めり、此師往く見るに櫻樹が明上山かとして、詠人耳傳して奇觀す、即彼本尊也を取なし、何ゆへに著者すに著てたるや又止詳かならず、今櫻樹を不動像といふといへど、隨伴尼定是、外多別、尼能延士高雲作

長城山龍峯寺 五拾町村にあり、領主坂原の

末申方拾式町余、曹洞宗福昌寺の末にして

開山起宗守興和尚開山起宗守興和尚、嘉慶六年三月四日寂本尊藥師如

來開山起宗守興和尚、嘉慶六年三月四日寂本尊藥師如

來開山起宗守興和尚、嘉慶六年三月四日寂本尊藥師如

大姉大姉、元妻久安の為に草建す、開山起宗ハ妙椿妙椿

大姉の肉弟なり、故にここに招請すといふ、

爾來北郷氏代々の菩提寺となる



蟠龍山興金寺

宮丸村にあり、領主坂原より

亥方拾町許り、臨濟宗関山派京都妙心寺の

末にして開山香山悦和尚、本尊阿弥陀如来

伊佐北姫、當時名作、茶木丁多種子に在りて木根をもてて茶室の佛頂坐を形刻す、効美甚艶の靈私にして且て之の四向を飾り、又、紙ハ上質の質樂等野々美名の著す、安永の甲久院に安す

いふ、其年月今詳かならず

亀溪山延命寺 キケイサンエイジヤウジ 五拾町村都城旧趾山涯にあり、

時衆宗藤沢山清淨寺の末にして、草創の年
月伝ハらす、領主北郷讚岐守義久、弟跡次
郎基忠、永和三年三月戦死の後建立して告

提寺となす、本尊地蔵菩薩は基忠の形代の
よし伝へたり、中興開山但阿上人慶化年月
きかなうじ

神柱宮 梅北村益貢に鎮座、領主仮屋を距る

こと巳方凡七里、祭神伊勢外官木嶽坐主、玉
香取坐主

篤吉助當社ハ平朝臣大監末基益貢に居住して、

万寿二年丙寅正月廿日大門を建んと欲し、

門柱の良材を大吉山より人をして奉しむ時

に、神託の旨ありて、同年九月九日社殿造

立すといふ、同時に内宮は出羽国庄内に現

し東三十三箇國を守り、外宮は日向州庄内
に現し、西三十三箇國を護り給ふと云々、

神柱神社



故に神柱両社と称し、日本二柱神といひ伝ふ事ハ縁記に詳かなり、什宝に太刀六腰、

長刀一振紺紙、金泥法華經八卷紺紙、銀泥法華經八卷を納む、其外什物多し

萬年山龍泉寺 マンネンヤマリョウセンジ

五拾町村にあり、領主仮屋より成方拾町許り、臨濟宗閩山派京都妙心寺の末にして開山大明國師タクメイコクシ本尊正觀音ボクジンセイケンモン

初め五山派にて靈照山薦福寺レイセイサンセンブクジといふ、北郷

讚岐守義久の嫡子藤次郎久秀、二男又一郎

忠通梶山タヂムツカミにをいて戦死、時に菩提寺となし

て草創といふ、中興開山大年宗延和尚タケイサンゾウノハサウエイ出世塔

利村草塔大納言経済院の在任状教義宗
に號す、慶長九年甲辰十二月二十一日慶化

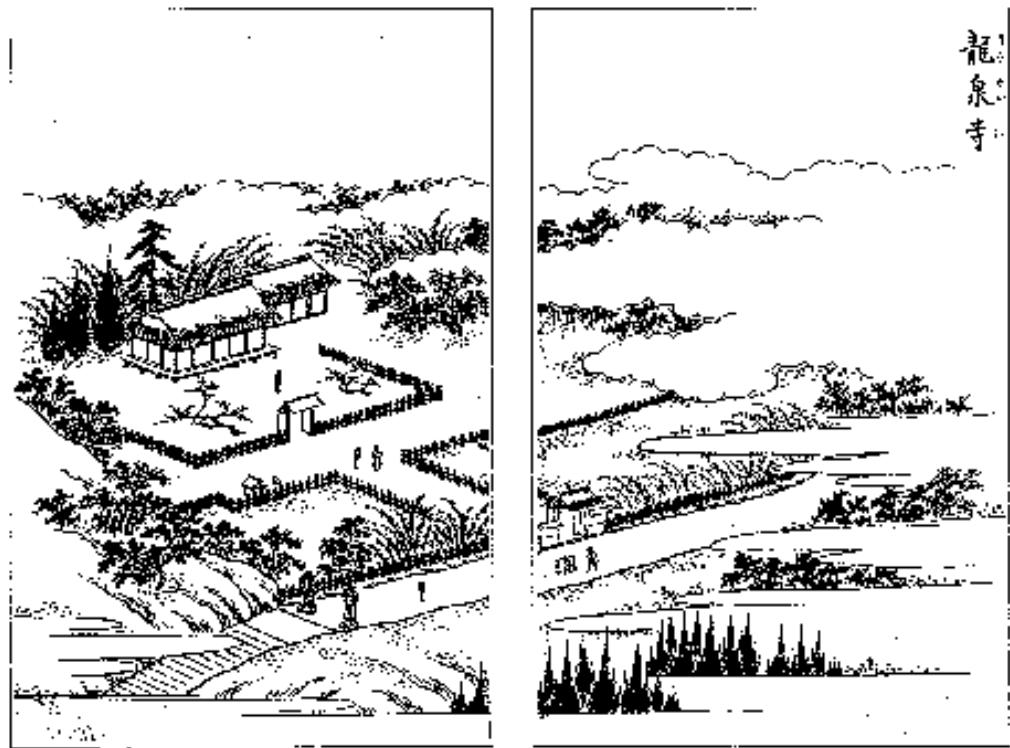
北郷常陸介相久

善提所となじて萬年山常德寺と改む、其後

北郷式部大輔久直花心琴月公の靈牌を安す

るに及びて今之寺号に改もといへり

龍泉寺



常照山攝取院光明寺

五拾町村にあり、領主

仮屋の戌亥方十四町許り、時衆宗相州藤沢

山の末にして開山^{ククヤ}託阿大和尚^{アハセ}本尊阿弥

陀如来^{ムツコトスミテイモウダラヅル}

徳文五寸安當作

初め貞和一年^{セイワ}島山治

部大輔建立にして梅北村^{メイヒキ}益貢^{ヨクコン}にありしを、

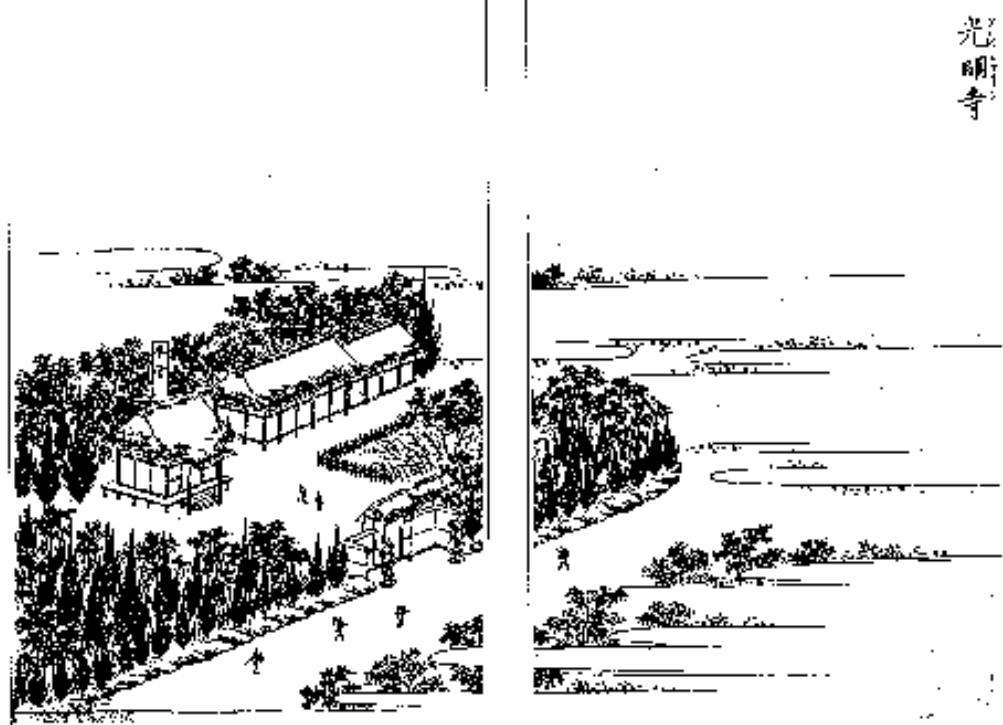
天正三年乙亥十二月廿七日北郷左衛門尉時^{ヒタチ}

久今^{ヒタチ}の地に移して再興すといふ、本堂の隅
に一遍上人の像を安置す、初め大林山とい

ひ後松林山といふ、遊行四十九世一法上人
廻國の時常照山攝取院光明寺と改むといへ

り

光明寺



深心院十念寺 五拾町村にあり、領主仮屋より酉方凡拾八町、淨土宗鹿児島不斷光院の末にして、慶長十四年北郷讚岐守忠能貞普上人を請待して建立す、本尊阿弥陀如來^{坐像} 行基菩薩の作といひ伝ふ、初め如覺山本覺寺といへり

霧島山大曼荼羅院西生寺 梅北村にあり、領主飯屋の己方凡壹里拾八町許り、真言宗大乘院の末なり、本尊阿弥陀如來^{坐像} 由来記を接するに、當寺は小松内府平重盛の開基にして年月詳かならず伝称す、重盛病中夢想に西國の並山渤海の淨土あり、其地に寺を建立すへしと云々、重盛祈願を凝され病惱頓に平癒せり、即大橋中将を當国に遣して霧島山の麓狹野^{サカノ}に寺を建立して霧島山西

生寺と号し、知行若干を寄附して伽藍となす、其後或夜神童來りて住僧尋^{シテ} 上人に告して曰く、二日を経て必らす震火あり、當舍僧坊尽く回禄すへし、速に三單の外に退けと云々、こゝに置いて四拾武坊六ヶの末寺住僧等本尊及び鎮守山主を守護して南方七八单今の梅北の地に移る、果して震火ありて寺屋一山皆燃崩す、實に仁安三年なり、故に上人今之地に伽藍を再造して中興開山となる、初め天台門宗派なりといふ、其後九十一代伏見帝の御時勅して大曼荼羅院五字の額を賜ふて木堂に掲^書 之^ニ 仁三年乙未七月十一日丙午^ノ 金会^ノ にて付すとす、また平重盛御著のよしに付て、面を鏡^{ミツル} に御安置所^ノ 寺内^ノ 本尊阿彌陀の像ハ天竺^ノ にをいて月蓋^{ムカシ} 長者^{ヨシタチ} 開浮檀^{カクヒン} 金をもて鑄る所の靈像にして、信濃國善光寺

の本仏なり、むかし亂世の時當國に下向し
給ひしといひ伝ふ、堂ハ七間四面四方縁天
井ハ唐木組入天井八方より鐵鎖をもて釣り、
柱ハ朱塗釘ハ正宗作、頗る善光寺の堂を模
し莊嚴最端麗にして美を尽すといふ、明応
九年三月新納近江守忠武^{タチマサ}梅北を領するの時
再營す、其後本堂の後山岳崩れて堂舍を埋
ミ、本尊弥陀の像と觀音の像ハ現ハれ給ひ
しか、勢至の像ハ遂にかくれ給ふ、今の勢
至は延宝五年丁巳四月邦君寛陽公如來を旌
府城に迎へ暫く留め、後光及び厨子を修造
し給ひし時寄進ありしとそ 現はるまの基古はか
りをも進むべり

同年七月西生寺に返し給ふ、其時領工筑後
忠智三間四面の堂を営ミ三像を置し大覺荼
羅院の勅額を掲、客殿の阿弥陀如來ハ智證^{チヨウ}



大師の作高徳寺 鎮守山王は寺の左山中に安す、社の後白梅あり、無根梅といふ、尋査上人入唐の時携へ來り植置し古梅にて、朽根の託する所なきことくなれハ無根梅と名つけしそ、今其種苗一樹あり

天ヶ峯 天ヶ峯テンガミネ 西生寺の南に高山あり、齡岳公陣所の趾なり、山縁黒尾權現祠の下に記す

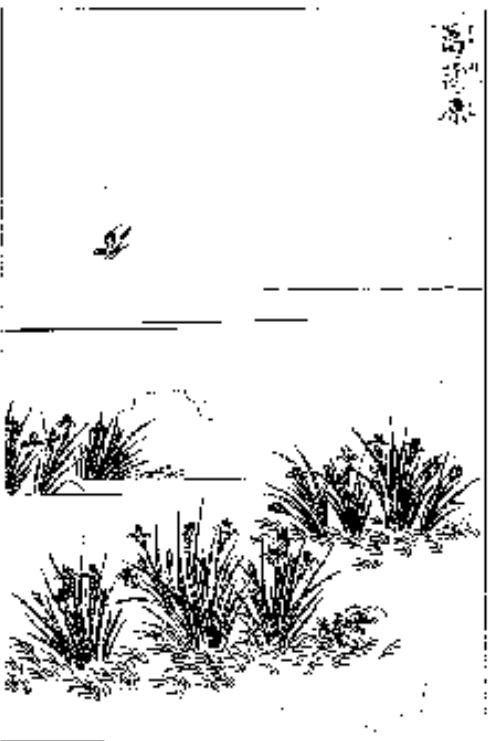
黒尾權現 梅北村益貫に鎮座、領主飯屋の巳方巣里六町許り、祭神愛石本姓足利氏、愛染不動祭一日 永和

三年齡岳公勧請し給ふ、初め伊東、相良、

三月朔日より二日の戦ひ敵方打負、下財部手勢を三つに作り義原の敵にあたり給ふ、三月朔日より二日の戦ひ敵方打負、下財部手勢を三つに作り義原の敵にあたり給ふ、故に愛宕社を造営し黒尾權現と崇め給ふ、此の戦ひ義久僅の城兵にて大勢の敵兵を打破り、三つから数ヶ所の疵を蒙り、弥次郎基忠、同七郎忠宣戦死を遂くといへり

雞足山 雞足山チクサン 二嚴寺ニエンジ 宮丸村にあり、領主飯屋を距

北原の三家一味をなし新野某ハラヤマヒタチ を大将として袁原に陣を取、北郷讚岐守義久の都城を開む、義久籠城して難儀せり、齡岳公これを聞給ひ、永和三年二月中旬志布志城を發向して梅北天ヶ峯に陣し、後詰の時西生寺脇立し安居す、歲を経て回禄し今の地に移す



といふ、鐘楼に正平二十四年鑄る所筑後州
二猪庄寶林尼寺の供鐘を掛く、天正十四年
領主北郷弾正忠虎豊後国に出陣し、軍功の
驗として大般若経六百巻と共に携へ帰り寄
進する所なり

菖蒲原 下長飯村井筒田村を早俗に良飯村と呼ぶの野原にありお城跡
風に之を小山を放ち、まことに出を助ける所なり東西八町許り、
南北凡式町余、土地湿氣をたち、いにしへよりなへて自然の菖蒲を生じ名付てあやめ原といふ、夏四月五月に至れハ花開、尤色濃して他所の菖蒲に異なり、草花を愛るものは庭中にうつす、一年を過れハ色薄し、世人呼て庄内菖蒲といへり

新磯六所權現 梶山村に鎮座、領主板屋の卯方凡式里、祭神霧島權現に同し例祭下ノ御事和銅元年社を建立して勧請すといふ、往古火災に罹り、由来詳かならず、永正十七年庚辰六月十三日伊東サ祐造嘗の棟札あり

醫王山知足院正應寺 安久村にあり、領主板屋の辰巳方毫里拾八町許り、真言示大乘院の末なり、本尊薬師如來は伝教大師入唐の時、赤栴檀の靈木を震旦國に得て、一花一香一刃三札の作にして、大師彫刻二軀の其一なり本は北畠山延慶寺の本堂、一軀六脚前日本寺の本堂、一軀八脚前。初め仁安元年丙戌の歲二井寺座主二品統王の命によて天台禪慶和尚、長井氏、弁佐使等口吉山主及び藥師の尊像を當國に負ひ下り、此山に安置し當寺を建て山王をもて鎮守とす、十二

の坊舎を造営して伽藍となし。人名坂、井上坂、御坂、篠坂、黒谷坂、天台叡山の末徒
院坂、守川坂、以上十坂今廢して存す。天台叡山の末徒院坂、井上坂、御坂、篠坂、黒谷坂、
なりしか、数百の星霜累りて伽藍も荒廃し漸く薬師堂山王社存在せしを、永正中權大僧都有喜法印寺を再営し居住せしか、三四世を過てまた廃に及ひたりしを慶長十二年領主北郷讚岐守忠能再興し、真言宗宥政上人^{元能法輪の法號}して住職ならしめ、同十七年十月川七百石を寄附す、こゝにをいて宥政をもて真言中興の開祖といふ。

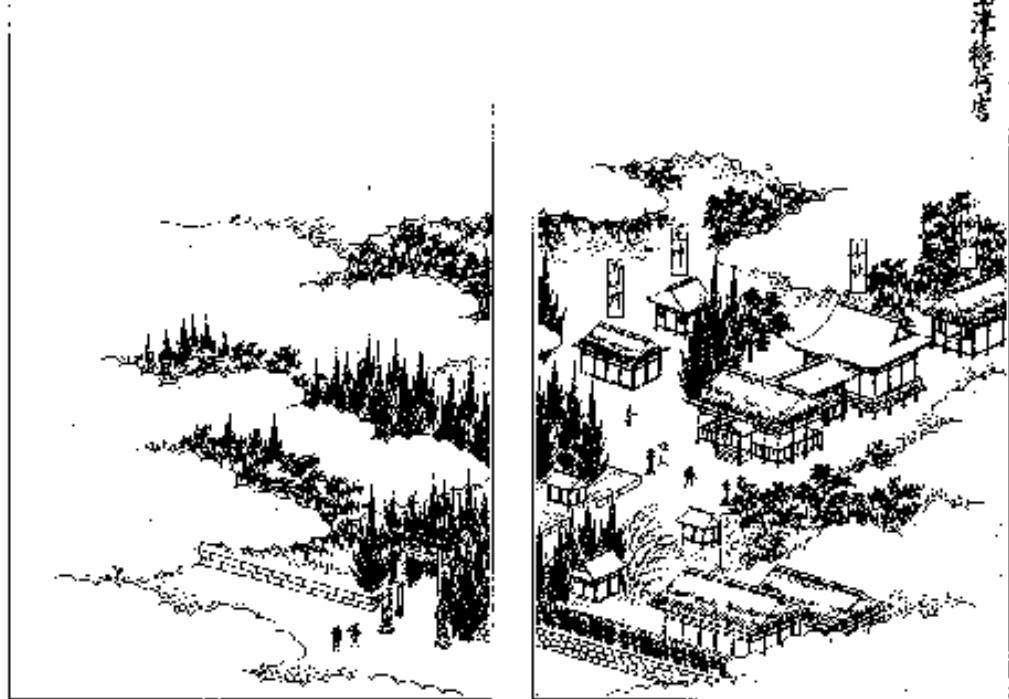
當寺客殿の前に大なる緋桜あり、開祖宥政印植るといふ、或人薬師參詣して枝を折て帰りしを法印見て追懸しに或人のおしむをは手折ハ花の色香ゆへとかは桜の枝にこそあれ



と詠したれハ法印をハざりしとなり、諺
に此樹を正應の桜と呼ぶ

稻荷大明神 イナリダイミンジン コスモロード 郡本村に鎮座、領主仮屋を距る

こと子方式拾里はかり、祭神三座ミツサセ 森羅水體を祀る 本社御神事、主祭神御神事、主祭神御神事、九月廿日、同
年十一月、二月二十日、五月廿日、十二月廿日祭りすといふ。當社は
得仏公藤開日三州の守護職に封せられ給ひ、
蘆州山門院マツシノヤンに下着し、日向方島津に移らせ
給ひて、建久八年九月建立し氏神を崇め給
ふ。社説上云、付近公初の掛川作吉を邊にて誕生ありと候、本社御神事時
神の靈験あり、執をもて築居三州の財を乞給ひ、建久七年八月蘆州
山門院に下着し、第八年正月諸郡は伊豫由三に移り、看守持りておへし
り、是を祝吉の御所とも、且午の九月御神社起立あり、九月廿日祭りす
て、同十九日に遙々の義を執をもて奉へるゝも、此ところを口傳といふ
によどせに眞無利有て叶へり、又眞口マツコともいへり、今郡本村とモキ
和光寺を創建して別當職を掌とらしめらる、又
社司を鬼東某といふ



イハヨシコシラノゾト
祝吉御所趾

稻荷社の辰巳方八町はかりにあり、建久八年得仏公蘿州山門院より日州島津の御庄に移り給ひて御館つくりておはしける所なり。其遺趾今に存していにしへの

門の跡などいひて塚築きてあり。挿するに得仏公幼生母井詮房に附せ、人女を尼都へ相付(セツブ)の意に有なれ給へり。初め眞言宗河國司にて島津に居住してゐことより、おもハ公の貴祖の口半にあること、そのかく成口の事に省ハキ給ひし時既にこの御館におへしけるるらんが、又是入日には既終ひて後、初めてこの御館をより移へるを今昔かとしがたし。姑く二番の伝ふると、これを記といふ。

命婦山正覺院和光寺

稻荷社鳥居の左側にあり、真言宗天長寺の末にして稻荷神社の別

當寺なり。開山權大僧都辨全(辨全)建久八年十一月作成本尊

十一面觀音

高さ三尺五寸
作者やかなもす

建久八年十一月得仏公

創草し給ふといふ。

関の尾瀧

安永村

にあり、領主飯屋より戊亥

方凡武里許り、水上ハ財部郷より出て西に

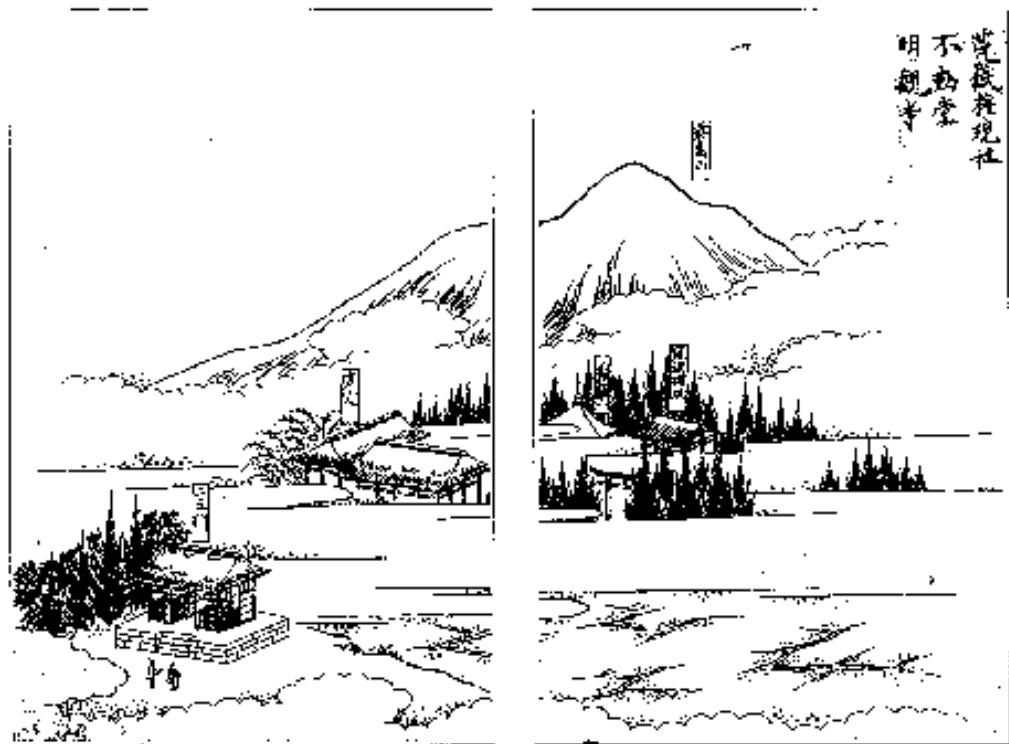
あり、東に落る瀧なり、高さ僅に十丈余、幅三四間、左右野岡畠百疋にして躊躇多く春花の時風景尤ともよし。

霧島山金剛院明觀寺

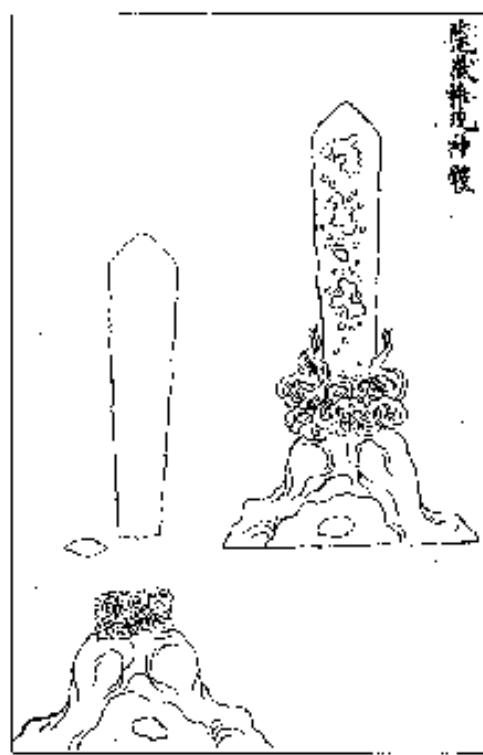
西嶽村

安永村なり、今春に分て西嶽村山麓農村と曰ふ

にあり、領主坂屋を距ること亥方五里ばかり、天台宗南泉院の末寺なり、開山性空上人、本尊不動明王(立像)當寺ハいにしへ性空上人の開基にして不動堂を建立し、霧島山の南門と唱ふによて霧島山不動堂明觀寺と号し、いつの比よりか修驗宗山伏住職なりけるに、寺宇荒廢に及びたりしを正徳の初め、命ありて再興なきしめ南泉院の末



荒嶽權現社
不動堂
明觀寺



霧島御鋒

荒嶽權現社

不動堂の東にあり、霧島山御鋒
の折を勧請して荒嶽權現と崇め祭れりとい
ふ、勧請の年曆を伝へす、本地十一面觀音
明觀寺住僧これを護る

山之口

走湯權現

山之口村に鎮座、地頭飯屋_{同村にあり}を
距ること東方四町余、本社伊豆走湯權現_御を

十一月當社山來を接するに建武四年十一月平三
郎實重建立すと云々 上史次第、平三代の孫なり。初め貢豆
部著以、國徒林復として建武二年十一月五日下向、攝土寺に下りし、翌
年二月忠止兵將がとなして御王寺の邊を賣て居る。貢豆後に攝土寺より
いにしへハ四ヶ寺の坊舍あり、東之坊、

西之坊、南之坊、北之坊といふ、今三坊廃
してなし、天文三年北郷讀波守忠相山之口
を領するに及びて走湯權現をもて本山の總
鎮守となす、別當寺を桂谷山示現院修善寺
といふ、即いにしへの東之坊是なり、真言
宗大乘院の末にして、開山快朝法印、中興
開山尊信法印正徳二年九月廿日
向村生近の神に御死木造一千觀音像
長元ノ年
奉書堂作
上肥實重安置にして權現の本地なり、
西國には無類の靈仏にして六月十八日殊に
参詣多し

答善寺



走湯權現



山之口古城 山之口村にあり、地頭仮屋の丑

方六町許り、名付て龟鶴ヨリハタツ一石城といふ、初

め平氏の侍悪七兵衛景清築しなりといひ伝

ふ、山城にして左右に尾筋あり、右を龜の

尾、左を鶴の尾といひ、景清は龜の尾に居

住せりといふ、城北五六町許り金剛山福土

寺といふ、旧寺地あり御主事ハ玉傳ハまそハあり茅葺

の小堂を營み薬師如来四大余の木像を安して

景清の女人丸姫の形代なりといひ伝ふ、景

清ハ口向宮崎に居住といふ、宮崎ハ本邑

を去ること遠からず、景清の居住ともいふ

へし、其後建武二年土肥平三郎實重、源氏

島山に隨ひ福土寺に下着し三石城に住すと

云、天文元年伊東氏の領地となりて長倉播

磨守海老原刑部少輔築城し、同二年二月七

日落城して北郷忠相これを領す、其後慶長四年庄内の内寇に煽を殺し柵を構へ今ハ景清の絶張ともいひかたかるへしとそ

桂昌山地蔵院十輪寺 山之口村にあり、地頭

仮屋の卯方式町、曹洞宗福昌寺の末にして

開基詳かならず、本尊地蔵菩薩生像寛文九

年正月福昌寺二十四世特峯代英和尚を

して勧請開山となし、福昌寺末となる、永

伝和尚森九郎をもて二世中興となす、初

め都城高木村に捨林寺といひしと伝へたり

的野山正八幡宮 富吉村にあり、地頭仮屋よ

り牛方毫里式町許り、本社隅州正八幡宮創

上元和銅二年創請、上古三侯院の崇廟にし

て大社なりしといへり、社司を龜沢某、別

當寺を的野山花藏院弥勒寺といふ、真言宗

大乘院の末なり、初め八幡宮同時に建立し

て天台宗なりしよし伝へたり、開山僧伝ハ

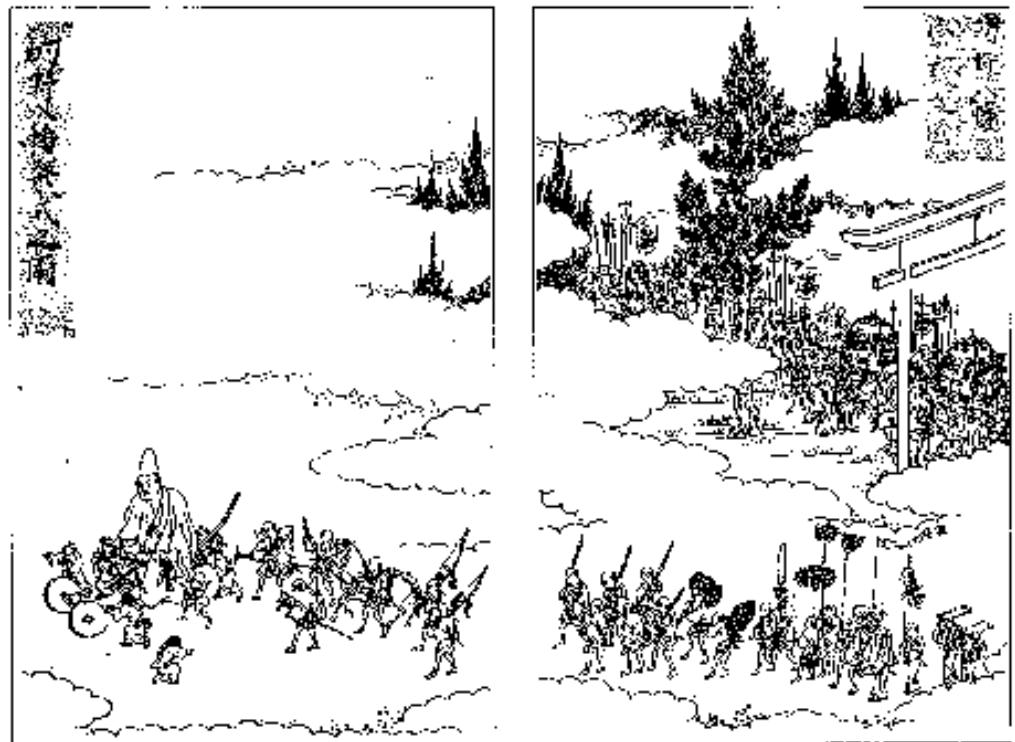
らす、中興盛圓法印七十六年本尊弥勒菩薩坐

脇坊大林坊、多門坊、金藏坊、福藏坊、

滿藏坊、金光坊ありしといへども今尽く廢して本坊はかり存す、十月十五日例祭にハ

御手洗池の脇に仮殿を設け、三つの神輿を守り下る、是を濱殿下りといふ、中の神輿を第一と定め、神樂を奏し行列旧規に隨ひ、各其式なり、また大人弥五郎と呼て長八尺許りなる人形を作り、四ツ車に乗せ捨一三歳の童子大勢にて押し廻り引廻す、往古大隅國隼人を征し給ひし故事なりともいへり、其權輿きたかなす、また武具を用るハ北郷忠相山之口を領するの時初るともいひ伝ふ





勝岡

誠方神社 勝岡村勝岡村今平字町にあり、地頭仮屋
をさること卯方四町許り祭神前に同祭主月丁入日天文十二年正月十八日遷宮の棟札を納む、
此時勧請なるへし、本邑の崇廟なり

無量山連乗院長久寺 勝岡村にあり、地頭仮
屋より牛方式町許り、真言宗大乗院の末に
して、開山重鋤上人延喜牛月本尊阿弥陀如来聖
開基年月詳かならず

龜足山梁新寺 勝岡村にあり、地頭仮屋より
子方凡毫町、唐洞宗福昌寺の末にして開山
延喜牛月本尊藥師如來聖是を本邑の菩提寺と
いふ

薩藩名勝志

卷之十八

薩藩名勝志卷之十八目録

諸縣郡

長善寺

滿足寺

白鳥山権現

白鳥靈湯

出水觀音

保壽院

大王権現

本光寺

高妻大明神

人戶諦方社

六觀音池

木崎原

田原陣

法正寺

福萬寺

雛守獄

觀音寺

人刀洗川

二八坂

三角川

雛守權現

瀬戸尾權現

寶光院

圓岳寺

粥餅田

金毘羅祠

田原陣

岩瀬川

呂壽寺

山神祠

大年神祠

世尊寺

須木瀑布

飯野吉城

幻生寺

一麟寺

之宮祠

愛染院

一之宮神社

昌明寺

天滿宮

高牟禮權現

不動寺

威徳天神

東福城趾

威徳院

威徳守

二之宮寺

澤原野池

大圓寺

吉田温泉

觀音寺

吉田溫泉

加久藤古城

德泉寺

狹野大權現
霧島東御在所
錫杖院
二王門
御池
霧島六所権現
神石
春日神社
高柳寺
河添驛
幸樹院
野尻

年月伝ハらず、堅尻の惣廟とす、社司川野某

岩屋山本光寺

麓村にあり、地頭仮屋より上

牛方五町許り、真言宗大乘院の末にして開基年月開山僧詳かならず、本尊藥師如來坐像寺の巳牛方四町許り古城趾に大ひなる岩窟あり、馬頭觀音の像を彫刻し、岩觀音となづく、又小堂を嘗なミ藥師を安置す、傍に梵字など見へたり、初め當寺の住僧足を安置せしゆへ岩屋山をもて山寺とするにや、來由伝ハラズ

長用山真光寺

麓村にあり、地頭仮屋より辰巳方七町余、剪洞宗飯野長善寺の末にして

大王權現
麓村に鎮座、地頭仮屋ありを距る

こと丑寅方四町余、祭神一坐
曾田彦神、御榮
十一月廿日勸請

開山素用和尚
馬頭口大圓寺正化平口請から
安永元年辰十二月廿八日火あり、山緒

伝ハラス、初め山城趾野首にありしに享保
中霧島山燃たりし時、砂石の災を被るによ
て今地に移すといへり

高妻八社大明神 紙屋村に鎮座、祭神一座

地頭仮屋の卯方凡式里拾八町、勅請

年月詳かならず、是を紙屋村の惣鎮守とす

正元山法正寺 紙屋村にあり、真言宗大乘院

の末にして開山僧詳かならず、本尊地藏菩

薩 中興の僧を盛賢

月十五日遷化

といふ

流水山福万寺 紙屋村にあり、曹洞宗高岡法

華巌寺の末にして開山東岳和尚

法平妙寺主桂深化
年月をつたべナ

本尊藥師如來

平保

開基年月詳かならず

小林

雛守六所權現 細野村雛守嶽の麓に鎮座、地
頭仮屋（木立）を距ること未方凡毫里、祭神六

座 シタ 竹葉、木花御耶姫、彦火を出見事、豐玉姫、 日御子 不食草、五箇草、止舞九月十九日、十一月十五日 當社ハ村上天皇の御宇性空上人霧島山に下向して電跡を探り、六座の神靈を雑守嶽に勧請す、よりて世に雑守權現と呼び伝ふ、初め嶽の半腹に鎮座ありて数百の星宿を経たりてを、享保元年霧島山燃たりける時、今の地に遷宮すといひ伝ふ 山河ハ社の内方主の八百日音の御事あり、即ち御坐なり 本臣の惣鎮守にして社司を黒木某といふ

雑守嶽 細野村にあり、是また霧島山中の嶽にして、いにしへより夷守といひしと見へたり、いつれの時よりか雑守の字を改め用ゆる、許かならず、人皇十二代景行帝筑紫に幸し給ひ、熊襲の乱を平らけて、日向高屋の宮にいますこと数年、京師に還幸ましまさむとて筑紫の國を巡狩し給ふに、夷

守に到り給ふ時に石瀬川イセカワハカハの邊に人衆く聚集るを遙に望み見給ひて、左右の人におほせて、かの集るものハいかなる人そ、若賊にてや侍らん、見てまいれとて兄夷守、弟夷守二人を遣ハされけるに、弟夷守懸て還り来りて諸しけるハ、諸縣の君泉媛カミイヌヒメの大御食ミヤクシマを献まつるに依て、その族のつとへるにて侍るといひしこと日本書紀に見へたり

岩瀬川 東方村、真方村の間に流る、是いにしへに所謂石瀬川なり、地頭仮屋の寅卯方一里はかり、雑守嶽を距こと丑寅方二里余、水源ハ諸縣郡と肥州求摩との境山中方ケ水といふ所より出て小林の地を流れ野尻を過、すゑハ云川ヨシカワに流れ入て海にそゝく

中島山普門院觀音寺

觀音院

厓より東方凡武町、真言宗大乘院の末にして開山^一惠善法印^{慶化元月}木尊不動明王^{木像}開基年月詳かならず、當寺初め別所にありしを寛永中今地に移すといふ

福城山昌壽寺 真方村にあり、地頭仮屋の亥

方凡六町、曹洞宗飯野長善寺の末にして開

山環宗和尚^{慶化元月}本尊觀音如來^{坐像}開基由来

詳かならず

鷹導山承和寺寶光院

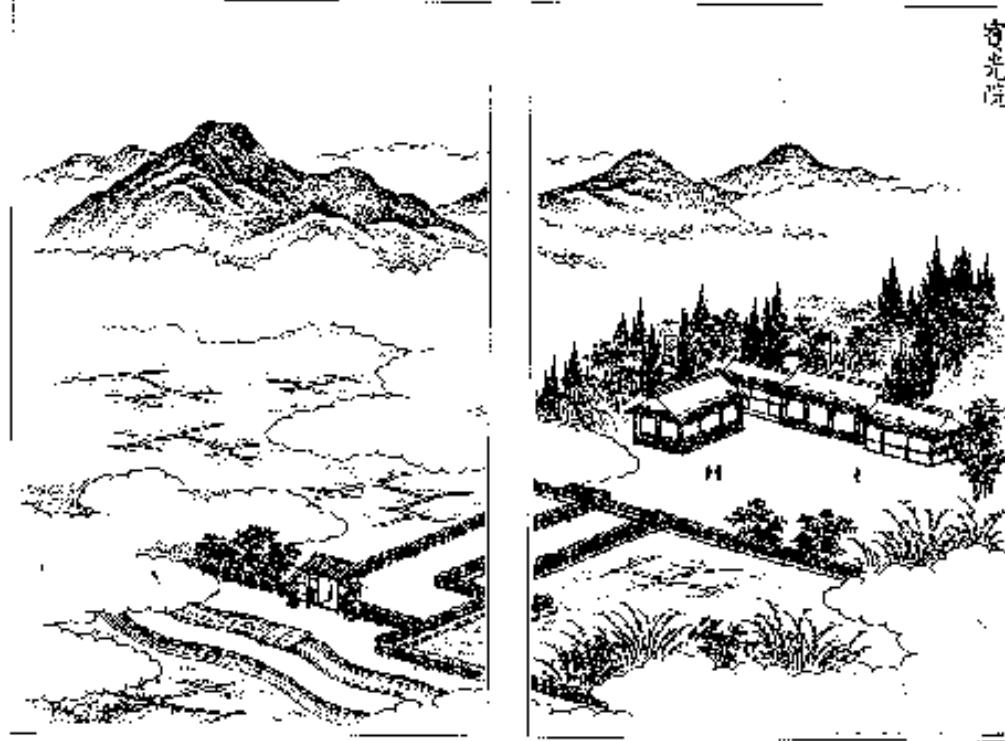
細野村にあり、地頭仮屋を距ること申方拾町余、天台宗高原神德

院の末にして本尊阿彌陀如來^{坐像}由来記を

按するに人皇五十四代仁明天皇承和十四年

丁卯の歲、慈覺大師唐土より帰朝の時、薩

州坊津に着岸し上京の路次霧島山にて錫杖



を執て供養し、此寺を開基して承和寺と名付、其後天皇の叙聞に達して伽藍となす、

其時本堂に本尊藥師如來、脇侍釈迦如來三
躯を安置し日吉山主を勧請して鎮守となし比
叡山の末寺となる、其後村上天皇の御宇、
性空上人雑守權現を安置するに及びて權現
の別當職となり、二峯山宝光院承和寺とい
ひしこなり、おほく年月を経て荒廃に及び
しや、顯慶上人なるもの再興して中
興となりしと見へたり、其後伊東義祐二山
小林を押領して永祿、天正の間下戈止むこ
となかりける時、別當職を失ふといふ、寛
文五年寺社官天台の一派寺院本末を改めし
に、神德院看憲法印認を伝へて彼寺の末た
るよし、書を呈してつるに神德院精舍の末



寺となる、總覺大師唐土より携へ来れりと
て、圓鏡を面今に當寺に留て付宝とす、裏
に整衣冠尊瞻視の六字あり

瀬戸尾權現 細野村に鎮座、地頭仮屋より午
未方二重許、祭神瀬島六所權現外是九月
下月勧請
年曆詳かならず、社説に云、往古性空上人
霧島山中に在て靈跡を探り五方に神社再建

しける時、當社をもて中央と定むよりて、

これを霧島山中央権現といふ。性空高社再びの時、霧島権現正を勧請するにあ、今本寺の

生を活かし、時代を超越して、本の文化を発展させようとする意図がうかがえる。今本との比較で、その点がよくわかる。

左に御所御社あり、初め霧島山上の瀬戸尾といふ
行と後藤王子の名あり、

現といふ。而してハ東北四國の間にあり、今は又山上の雪原に残るといふ施設の跡を有す。

天正二年壬辰一月三日文書不牛印半一月二十日費火人等
宮ありして酒社せき候すといふ。運官何れの牛次とや許かをうす

吉保若狭守甲申ノ日落火あらず、
砂石相付守家を呪ひてゐる。しハらく岡原カムラの地に
本体已の
地名なり

をいて仮に神殿を構へて安鎮し、程なく又



愛宕山十輪院圓岳寺

アタヨサシシフリンサンショウニガシ

屋より未方四町余、天台宗南泉院の末にし

て開山亮巖僧正^{（正風院）}本尊地藏菩薩^{（半像伝教大師作）}

初め愛宕山勝兼寺といふ、真言密宗の寺な

りしを享保中^{（1716-1735）}宥盛法印^{（安原御達）}再興して亮巖

僧正をもて開山となし南泉院の末となし、

三つから一世となる、山中に愛宕社を安す

山神祠

真方村求摩境木浦木の山中にあり、

地頭板屋を距ること子方凡三里余、祭神二

座^{（大正紙金、後刀身）}行司八重尾某世々祭る所にして、

勧請年月詳かならず、慶長十二年閏四

月廿四日松嶮公願書を納め給ひしことあり

と見えたり^{（人正尼久保なるもの心承中ここに記せしと見えたり、其後不見度小林を引くに及びて天文廿四年八月尾}

（元次第此塔に北東久事入神不白多者之証文を有る、北原氏

古事記松嶮公に敵す時に八重尾某世々祭る所といふ

粥餅田

クニモチタ^{（キクニシナカ）}北西方村^{（北方村をし俗北ハシナカ）}橋谷原にあり、い

にしへ真幸街道なり、地頭板屋の西方式里許り、元龜二年五月四日飯野木崎原の戦ひ、

伊東敗走して、一手の大将袖木崎丹後なる

もの逃れて引退きしを、松齡公鞭を揚て追

懸、手自鎗をもて突伏給ひし所なり、真幸

街道の旧路今にあり、木崎原を距ること武

里、或説に丹後兜を脱てここに憩ひしに橋

谷村の農夫粥を持來りて丹後に與へ食しめ

ける時、公追來り給ひしとなり、よて粥持

田といふといへり、兜を置し石なりとて今

にあり、高さ凡四尺、圍式丈四五尺許り、

兜石と名づく

須木

六年神社

オホトシノヤシニ須木村に鎮座、地頭板屋^{（同上）}を距

ること戌方拾三町、祭神一座^{（典義坐主、正月十九日勧請）}

大年神社



二之宮祠

大年神社の卯方式町許りに鎮座、

祭神詳かならず、祠の右に荒巖大明神なり

須木瀑布

須木村にあり、地頭仮屋より寅方

凡六町許り、その源は本邑の山中に出で縫川に流るなり、雌瀧、雄瀧とて同流に二つあり、寺町許を隔つ、瀧の寅卯方岩上に

観音の石像を安して岩觀音とよへり、此岩

に至りて西の方瀑布を眺望するに、男瀧の

高さ凡三拾尋許りにして西より東に五筋に

分れ落、両岸縁へて景尤ともなり、見當の

岡ハ赤松多くこれまた一佳景といふ、瀧の

深さ三拾尋といひ伝ふれとも淵に臨て量ることかたし、雌瀧の高さ崖に式間許り、岩

觀音よりハみえず

年紀詳かならず、本邑の惣鎮守とす、社司

河野某

誕生山真幸院世尊寺

須木村にあり、地頭仮

屋の子方八町余、真言宗大乘院の末にして、

開山勢伝和尚

本尊釈迦如來

堂宇

開基年月詳かならず、中興を勢

思法印といふ

元日奉化

須木瀑布



龍鳳山自得院一麟寺 須木村にあり、地頭飯

屋の西二町余、曹洞宗飯野長善寺の末にして開山久翁和尚九月一日誕生本尊地藏菩薩立像

天寶元年創建
茶室

飯野

飯野古城 原田村にあり、地頭板屋同井子より

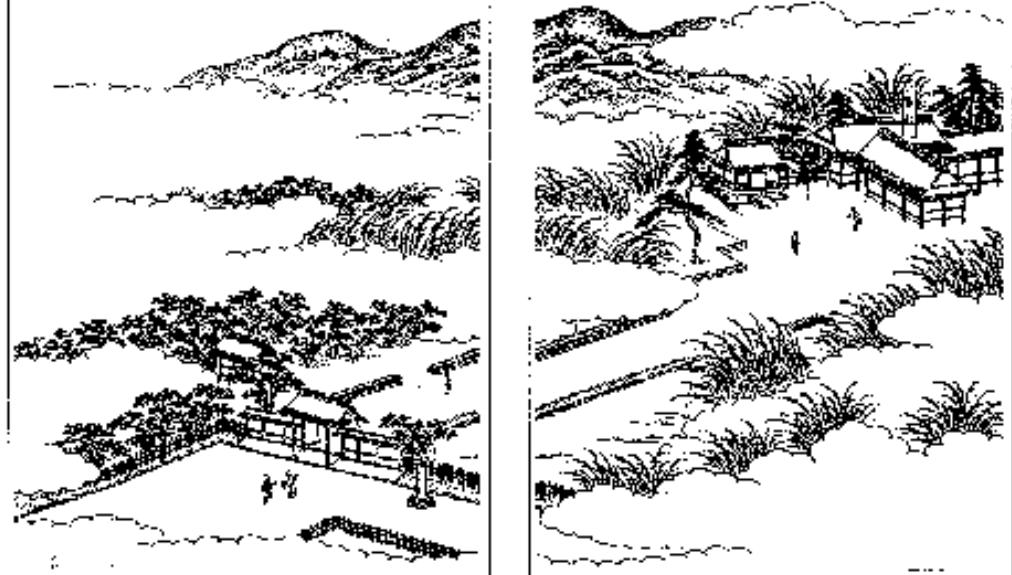
亥方凡三町許り、初め北原氏真寺院の領主たりし時居城なり、永禄七年甲子十一月十七日松齡公此城に居住し給ふ、本丸、二之丸、三之丸共に山城にて掘浚アカスリく嶮にして要害の地なりしと見えたり

幻生寺 原田村にあり、地頭板屋の亥方凡三

町許り、曹洞宗長善寺の末にして開山常室アキラシ梵庸和尚慈光子本尊文殊菩薩アムラクタ涼山幻生大

禪定門慈希公御子傳承本山

の菩提寺なり



之宮香取神社

イチノミヤカトリノヤシ

今西村に鎮座、地頭仮屋を

新主命例祭
一三初卯九

距ること申方武拾武町余、祭神一坐新主命例祭
一三初卯九
勧請の來由詳かならず、社説云、人皇
三十九代天智帝曰鳳七年丁卯二月、大織冠
兼足公の命によりて勧請といい、松齡公崇
敬し給ひしとみえたり

峯八幡ミキハチヤン 原田村に鎮座、地頭仮屋より辰方凡

拾四里余、島津大太郎久林加久藤惣満城を

去て落ゆき給ひしに、この所にて落馬し曰

殺の地なるゆへ靈を崇め祭るといひつたふ

春日山不動寺愛染院

カスカサンフドウジヤイセンナン 原田村にあり、地頭仮

屋の子方拾町余、真言宗大乘院の末にして

開山頼源法印義化空月 本尊不動明王立像 開基來

山伝ハラス

兜卒山長善寺

トヅウラシヤウセンドウ

原田村にあり、地頭板屋の寅
方七町余、曹洞宗能州諸嶽山總持寺の末に

して実峯派の小本寺なり、開山明慈妙光和

尚

尚(道寺の丁口如前、圓門義教の附記有り)本
年六月二十日不対、行持とて歸せしものあるゆへニニモ無

尊弥勒菩薩

坐像

當寺初め真幸院領三北原周

防守範

兼出水觀音

に参詣して上江村を通り

ける時、六部市に庵室を給ひ住居せし僧明

窓に立寄て対面あり、歌に

明慈と名乗らすともの善知識身を吹にこ

そ人ハ秋風

明慈の返歌

西東南の風にはなされて北原はかりたの

む明慈

といひし、其因縁によて師檀の誓約をなし
明慈を招請し、七堂伽藍を創建し長善寺と





号し、田舎町を附す、即ち永二年丙子の歲なり、是よりして門風甚だ降に道徳口に増し門末の寺院も五拾余箇寺に及び、總持禪寺輪住寺の其一なり、又當寺も總持の定規にならひ開山寔の如く示寂以後南天派(シナム)、中天派(チヂム)、北天派(ヒツヂム)の田山派(ヒタヤマム)、義芳派(ヨウヲハセイジム)、璣舜派(スケンスンハセイジム)、人鏡派(ヒンキョクハセイジム)、大鏡派(オウキョクハセイジム)、五派の門下より一回輪番の寺たりしに、永禄中北原(ヒタチハラ)じひて後、時に隨ひ寺も廃にかたふきしを、松齡公田百石を寄附して再興し給ふ、其後細川幽斎殿(ヒカルガタヒラシ)の命を奉して、蘆岡日三州の寺社領を數破せらる、此時に及ひて寺額乏しくなりて独住と定め、文祿元年壬辰十月(キヨシノモンノク)宣雲(カツクニ)和尚もて住持となす、又宣永以来總持の輪番を飫肥(カドチ)長持寺(ロウジ)に譲るといふ(眞宗寺社高麗(カムギ)記)。

の末なり。慶長十七年壬子九月十九日、又元禄三年庚午十月六日^のの夜火災ありて寺屋什物共に灰燼となり、旧記も失ふといへり、門脇に月照山宗江院^{クシヤウサンジヤウイエン}あり、開山梵芳永紹和尚^{バンボウヨウショハサウ}、初め竜口院といふ、湖月宗江大禪定門^{コクツクムツカイドウジンモン}の靈牌を安するによて院号を改む。

白鳥山権現^{シラトリヤマノミコト} 末永村^{スエナガル} 王原村^{ウエハラ} 木曾^{キソ}に鎮座、地頭坂屋の牛方武里拾九町余、祭神一^{日本天皇}、座^{月夜西御前}、十一月十九日^ノ當社縁起を按するに积の性空霧島山の靈窟を巡視するに大なる池あり、池の側に居して法華經を読誦す、忽然として老翁來り、我はこれ日本武尊なり、白鳥と化して久しく此峯に住む、諦経の声に応して現するといふといへり、性空此山縁にて社を創建し白鳥権現と勧請し正觀音をもて本

地とす、満足寺^{ミンスクリ}を建營し護持の精舍となす。桂等二公鑑賞下^ニ是作の大觀音を安置す。土^ト池の名も大觀音池とぞづく。また御名ともいふ。接するに大觀音ハ桂月山大所持現本地なるべし。日本武尊廟^{カツミ}、御事の國祖裏身^{カツミ}に拂り奉り奉^リては、尊白丸に化し^リ是日^ヒ取^リて是御事^ミに奉ま^リ、また是日^ヒ河内國に至りて日本國に宿ま^リ始^ヒるによる上^二番に至るをの後を遡りて白鳥の體とぞす。それより是日^ヒ高^{タカ}く^ヘ上^ヘに躍り飛^リ天^{アメ}と日本書紀^{ヒムカシキ}に見へたり。拝殿に日本武尊の四字額を掲ぐ^{タケモヒタツ}。當社ハ軍神なるゆへ、いにしへより人の崇敬余社に異にして、松輪公本昌におはします時、軍を出し給ふことしはし、常に此神に祈り給ふゆへに太刀、鎧其外寄進の兵器多し、又慶長五年正月廿一日慈限公田壹百四拾余石を寄附して神領となし、承世丁役を除かしめ給ふ、これ前年日州庄内の役に公の誓願あるによつてなり、慶長六年土木の功を起し官殿を再興し、同十年十一月功畢るといふ、

来山寛文七年十二月住僧覺仁^{カクジン}記す所の縁起

白鳥兼院
満足寺



にくわしきゆへこに略す

白鳥山金剛乗院満足寺

白鳥神社武町許り下

にあり、真言宗大乘院の末にして開山性を上人、本尊弥勒菩薩^{ヨリクハツサク}、白鳥權境を勅請するに及びて創建す、初め天台の梵刹^{ボンザツ}なり、星霜を経て荒廢し、神社はかりありしゆへ、応永中阿闍梨光尊^{ヨウジクハツフン}（応永十五年成子）^{トリニヨウノシテ}寺を重建し、真言密宗となす、其後大乘院の末となる、當社死穢を深く忌むゆへに阿梨耶山彥山寺をもて菩提寺となし^{彦山寺ハ古寺の末也、}（河内縣川北にあり）^{アリ}當寺を現在寺といふ

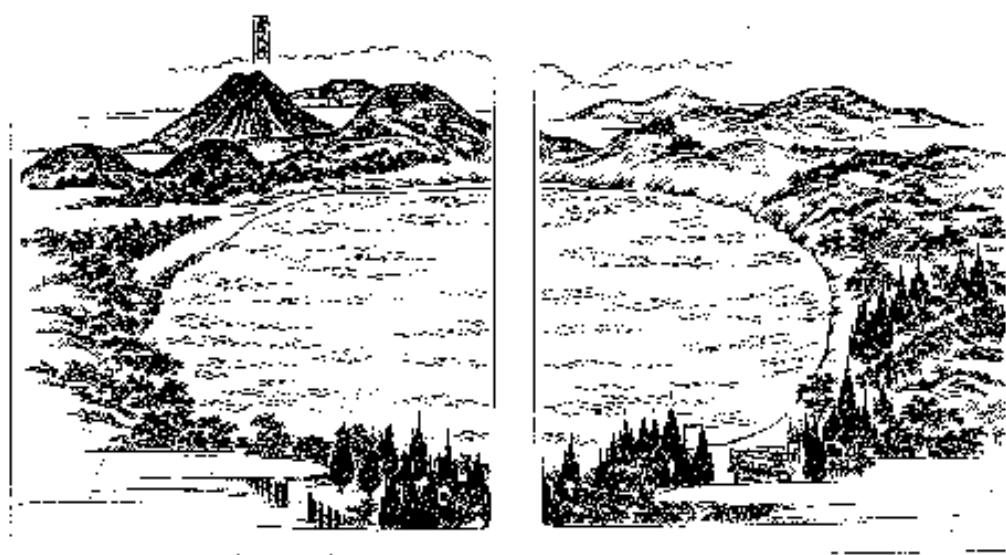
白鳥靈湯 シラトリヒツウ 寺を距ること五六町、湯勢多く明
礬に硫黄氣を兼たり、積氣チキを去り瘡毒ソウドクを除
き功驗著るしけれども、浴室なく人家遠く
便利ならざるゆへ入浴のもの少し

源兼利

跡たれし神の誓ひに出る湯の煙も鶯と峯
のまつか枝

六觀音池 ロクケンオンチ 白鳥權現社の巳午方一里三拾町ハ
かりにあり、周廻一里余、これまた霧島權
現御手洗四十八池の一箇なり、いにしへ积
性空この池のほとりにして法華經を誦詠し
けるに奇瑞ありければ、手つから六觀音の
像を彫刻してここに安置せりとそ今池邊に小山閣
ありて六觀音の
像を安置、是を
の遺跡といふこれによて六觀音池と呼びつたふ

六觀音池



出水觀音 チミツノクハノイ 来水村にあり、地頭仮屋より牛方

一里半余、その地清泉流れ出故に土人出水

をもて地名に呼び伝ふ、水辺に仏閣あり、

正觀音 吉作坐像一尺三寸
作者不詳 を安置す、里俗伝へい

ふ、往古伊東氏尊信の菩薩にしてここに勧請ありしと、其年曆詳かならず、応永中北

原範兼出水觀音によつてたることみえ侍れハ、安置のひそしきを見るに足れり

出水觀音



大戸諫方社

大明司村に鎮座、地頭仮屋の西

方凡武拾町余、祭神前に同し例祭十月廿七日 慈眼公

大明司村にて誕生し給ひしゆへ産土神と崇

敬し給ひ、祭田を寄進し例祭にハ公の社參

あり、流鏑馬を張行せられ」といふ、神主

黒木阿波、代官司井尻神力坊なりけるよし

旧記に見へたり、今ハ黒木某祭祀を司どる、

別當守新城山大明寺延壽院真言宗大乘院の
末にして開山盛憲法印、永祿七年松齡公建
立し給ひしに、慶長四年慈限公の命によて
鹿児島大乘院坊中に寺を移す

稻荷山西方寺保壽院

原川村にあり、地頭仮

屋の末方二町許り、真言宗大乘院の末にし

て開山真照法印花作刀、本尊阿弥陀如來松齡元

和年中開基にして本尊弥陀の像ハ松齡公前

夫人米澤相良氏の女、俗に御用御前といふ 形代となして安置し給ひ、

田武拾七石を寄附して香花の用にそなふと

いふ

木崎原

池島村にあり、いにしへ往還にて今

に旧路存す、飯野古城趾を距ること申方毫

里余、元龜三年夏五月四日曉天、伊東新次

郎祐信、同氏加賀守守軍兵を備して諸将を

引率して飯野桶ヶ平に陣し、松齡公の加久

藤城を襲ふ、城兵樺山常陸坊淨慶父子防き

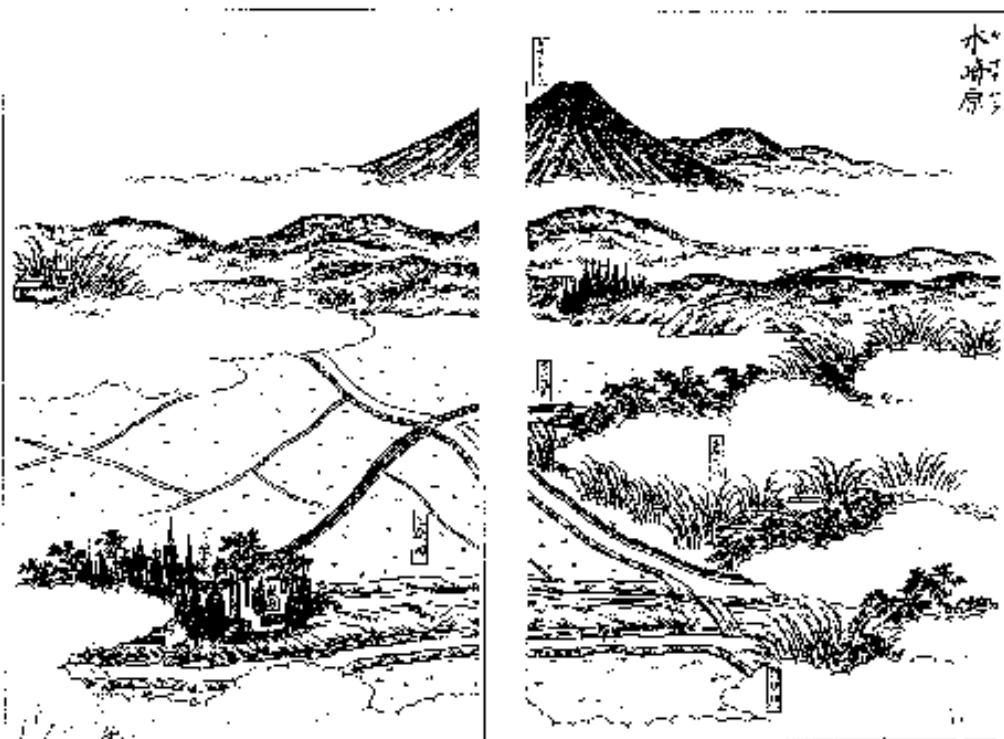
戦ひ共に死す、公急に飯野城を發して加久

藤城に至らんとす、一八坂に至り給ふ時に

伊東氏軍兵を率ひてこの原に屯す、公諸軍

に下知しこに会し伊東氏を撃、伊東敗亡

に及へり、木崎原の地形今多ハ田地となれ
り、其時の頃塚、加賀守床机の場など今に



残りあり

三角田 ミスミダ 木崎原にあり、田の形三角なるゆへ名つくと見へたり、松齡公元角の戦ひ敵の大将伊東新次郎祐信と鎧を合せ、祐信を突伏給ふ所なり、三角田西方拾間許りに一箇の自然石あり、公祐信を託給ひし後この石に腰を懸、休ミ給ひしといふ、側に六地蔵塔あり

太刀洗川

タチアノヒカワ 三角田の東脇に流る小溝なり、本嶋原の合戦終りし後、軍兵との太刀を此水にて洗ひしとなりゆへに名となれり、平日水なし、夏四五月流水あり

二八坂

ニハザクラ 大明司村にあり、飯野城の申西方拾九町加久藤城に通ふ路にして僅なる小坂をいふ、松齡公此所に出馬し給ひ木崎原の方

伊東勢の屯を見給ひし所なり

田原陣 タルノアシ 末永村にあり、飯野城の牛方屯^{ウガ}町余、伊東加賀守以下の陣所補ヶ原といふも同所なり、今に其遺蹟存す

狗留孫三所權現

大河平村山中に鎮座、地頭

仮屋を距ること丑寅方三里余、肥後州求摩

境なり、祭神三坐

吉田三所權現、鬼子靈山松嶽、相國寺利
神を祭り三所とせらるかと、本山現靈が著せる事社に見へたり、神代卷

一書云、葛山是日甚、は云鬼形也々々、人の拂厄社を見るに跡院、米良、

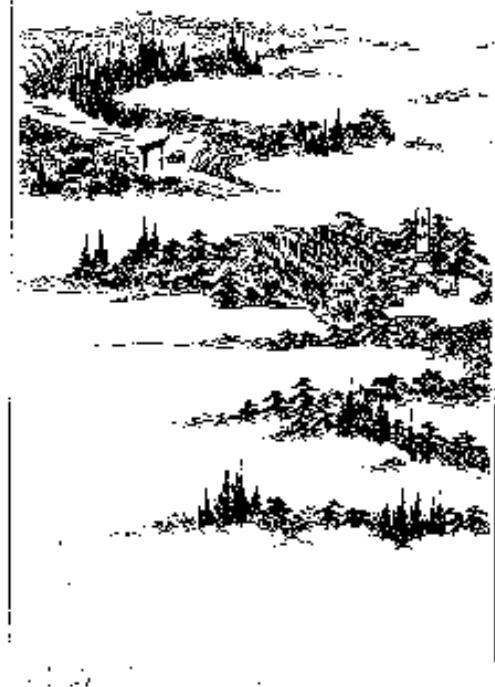
新井の後を玄覺、これ本尊と見へたり、又社頭に鷲山大日那を賣來取
白、音十回半參來、二五上町三五海井越進一方日那と云ぞ、御祭二月

酉日、九月
十九日 御前年月詳かならず、當山ハ大河平

村の人震を距ること三里許り、山路嶮峻にして登攀するもの、或ハ匍匐し、或ハ岩根

をふミ樹枝にすかりて巔に陟ること二里ばかり、はじめて鳥居のもとに至る、是より谷にくたること十余町溪水の流れあり、猶

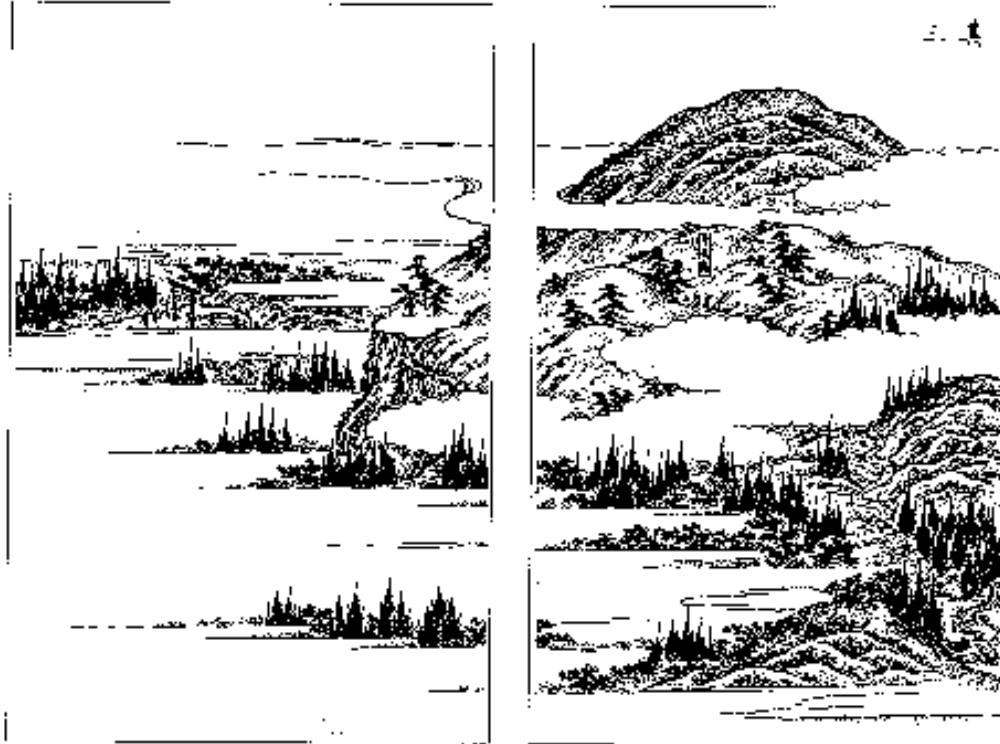
佐茂林山孫智物



木橋をわたりてまた嶺にのほること初のこととくにして寺見峠ミタケといふにいたる、此所より權現社及び別當寺遙に見ゆる、また坂をくたり谿を涉ること幾はくそや、山静かに谿深くして一鳥も鳴ず、仙斧の櫛稀にして実に塵外の淨境なり、社頭に至りて東方町余に自然の一長石あり、深谷中より屹立して空中に聳ゆ、号して卒都婆石スルガイといふ有高さ十五丈余、重七八十石、本都婆石と呼ぶ、一石古き一尋余にして、西へ北へ御前し、故古に呼ぶ、般若に曰く石名都婆羅是古猶留聲仏頂土の諸に因て纏絰へるなり、故に曰く都婆羅と名づく、傳に「光國城上賀」、(後西入宋記)、土古に於て都婆羅土の皆小を疊ひて堆積め後此山に名づ、石卒都婆石を折し山の間に、社を造立して其本校院を勧請せり、其處のこの「日出門」の前の無事の手鏡を御神體に祀りて御の事を清す、これによつて、(後西入宋記)、大聖釋迦の所たれと云ふ、表するに古社の御神體と工芸品を表すと林野にいるところと謂へり、しきみをや、皆都婆石に主體本尊の正年中と掛る釋迦の跡を見よ、川にあれハ、さあをたしかなし、神社の左方より卒都婆石のもとに至り、右の方に廻り出る、是を御腰廻りといふ、社參の僧侶必すここに至る



をもて詮とす、道程三四町ばかり不動の石窟
狹狭抜石觀音石誕生、岩屋釜の奥通などい
へる幽窟に躊躇危崖に踏し、樹枝を攀ち
藤蘿に紺りて通る難所なり、社司を出石某
といふ、社頭より西凡壱町はかり、山上に
精刹あり、狗留孫山多宝院端山寺といふ、
真言宗大乘院の末にして權現の別當寺なり、
開山千光國師センコクジまこと能正傳承、寺中分山圓寧之廟、實房氏なり、
口不穀コブク本尊弥陀、藥師、觀音開基年曆詳か
ならず、據するに開山寺の寺ハ龜日根の寺也より出たる寺トニシテ、卷
に崎山の子を詠まり尼ひそらんか、足メミるへなれす



ラムヤシロ

狗留孫權現社の巳午方八町余、面

上にあり、世に天狗の宮といふ、鳥居あり、

距ること二町ばかりにして杜頭に至る、樹

木戸茂巖右側たてり、申刻を過て參詣の人

を禁す、また女人參詣を禁す

「おとでり中は尋入」の事に至りて体らむるに、「人の老病よりて信せし対し医師の深因なるを更しむる極要を指して曰く、別者の悪運を一めん上へかして其の學に接身接觸を極め、良醫を致すあるべし。衆を念す。我が三むれ給ひそ、われは長慶院立院のものなりと云ふて去りぬ。惟正義其の名をもつて」此と云ふにしたるか極端を詮説し、書をもせ立てて之の所に金井新社を建られたといふ。

加久藤

加久藤古城

坂屋 〔町村〕 より子方三町許り、久藤城と名つ

小田村（りやまむら）にあり、地頭

く、永禄中松齶公ここに在城し給ひ、元龟

三年三月五日妙見水天荒神の三座を勧請し

て城の守護神となす

て城の守護神となす。一月十八日加久麻の「名を守る神」を奉り、公久麻城における御神事である。



あり、相馬守義文邦村慈眼公此城中にして誕生し給ひし時寿を祝して栽る所といへり、社の後子方小鎬掛口ガキタカヒといふ所あり、檢にして通融かたし、元亀三年五月四日伊東新次郎祐信、同氏加賀守以下軍勢を率ひ鎬掛口に來りて襲はんとす、城兵櫛山常陸坊淨慶父子出て防ぎ戦ひ遂に死す、敵兵退ひて飯野木崎原に屯す

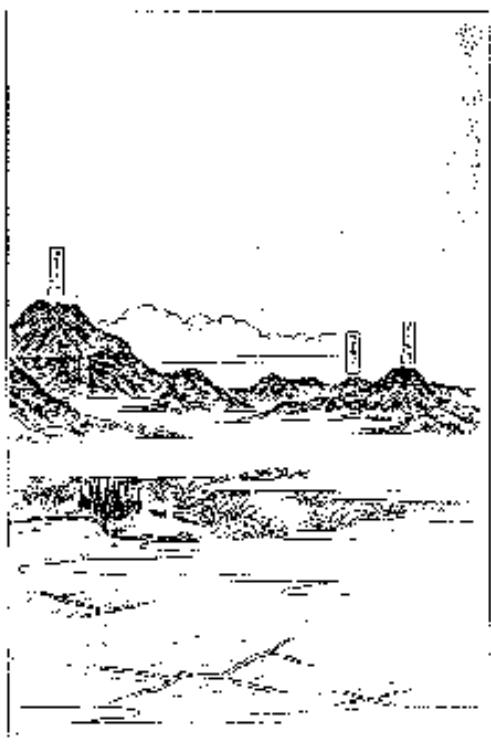
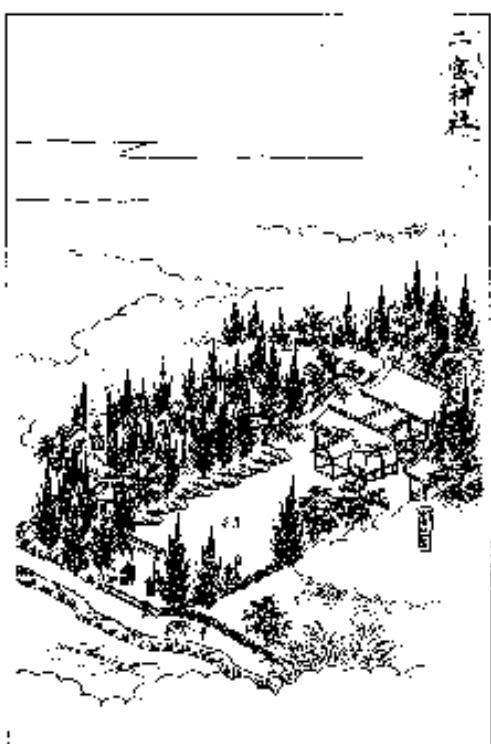
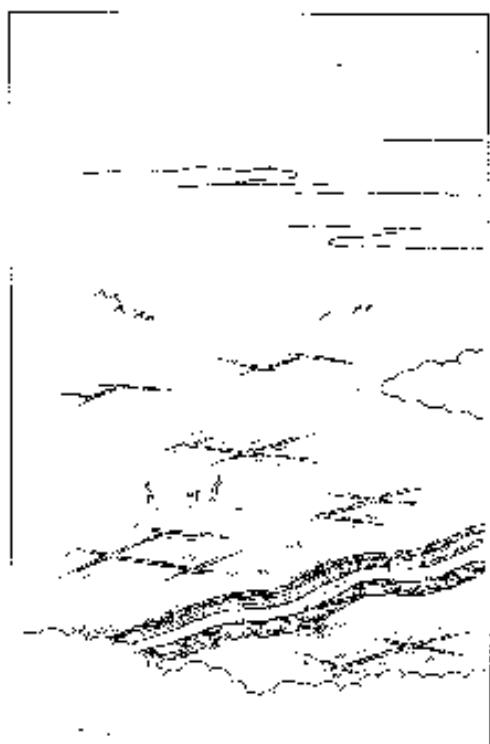
光林山吉祥院不動寺 小田村にあり、地頭仮屋の牛方巻町余、真言宗大乘院の末にして開山光林法印法化院長本尊不動明王立像・脇侍・天王等、いが開基年月詳かならず、初め北原氏の祈願寺にて徳満城トヨマツシロにありしを今の地に移すといふ、松齡公の御子涼山幻生大禪定門の靈骨を安す

瑞龜山徳泉寺 小田村にあり、地頭仮屋より西方凡三町、掲手口なり、曹洞宗飯野長善寺の末にして開山機舜和尚本尊正觀音開基年月伝ハラス、初め北原氏の菩提寺にて徳満城中にありしに、北原没落して後今地に移すといふ

二之宮神社 栗上村に鎮座、地頭仮屋より末

方丸武拾武町、祭祀一坐仲義・美喜・勅請年紀詳

かならず、初め二之宮現王二ノミヤノミコトといふ小社なりしに、慈眼公加久藤城に誕生し給ひ、生土神なるゆへ松齡公崇敬厚大殿若経且十六普神の画を寄附し給ふ、慈眼公の時に至りて尊崇いといよ厚く、二之宮大明神と号す、慶長七年十二月廿四日神領二拾石を寄附し、同十四年九月四日社殿を造営して社殿三日



に倍す、黒木源兵衛なるものをもて祠官となす、本山の惣鎮守なり

高蓮山福性院二之宮寺

象頭町追正三上山御内は甚て高きをもつてて、毎
歲暮紀念の今に來りて、其事にひかるといふ 松齡公飯野城に
おはしましける時尊崇し給ひ、正祭にハ鑄
流馬を張行せらる、万治年中火災に罹り出
緒記を失して詳かならず、本邑の惣鎮守な
り

花京山宮樂寺威德院 大滿宮の右脇にあり、

真言宗大乘院の末にして開山光蓮法印<sub>延化年
月はハ</sub>

本尊十一面觀音_{坐像}開基詳ならず

東福城趾 川北村にあり、池頭仮屋の後なり、

魚之城、鶴か城、多福城などて二ツの曲輪

あり、北原右衛門督の居城なりしといふ

玉城山大円寺 川北村にあり、威德院の右な

り、地頭仮屋より亥方凡四町、曹洞宗飯野

長善寺の末にして開山大鏡光鑑和尚<sub>昌黎方世
昌黎方世</sub>

乙酉九月丁未尊釈迦如米_{坐像}開基年月山來詳かな
ニ旨詔

大圓寺



らす、馬関田石衛門督の菩提寺なるにや、
石塔及び位牌を安す、珊瑚玄珊大禪定門と
記す

高牟禮六社權現 タカムラクシロクサノクニンゲン 裏村に鎮座、浦頭坂屋の未

方式拾町余、祭神四座天原御根命、玉祖太祖、鹿島主正祭九月十日社

記曰、人皇三十九代天智天皇御宇七年、大
中臣氏鎌足大織冠の命を蒙り勧請し、三之

宮四社大明神と号す云々、真幸院一之宮は
奈生主命の垂跡下総国香取大明神を飯野に崇

め、二之宮ハ武甕槌命の垂跡常陸国鹿島大

明神を加久藤に崇む、三之宮天兒屋根命の

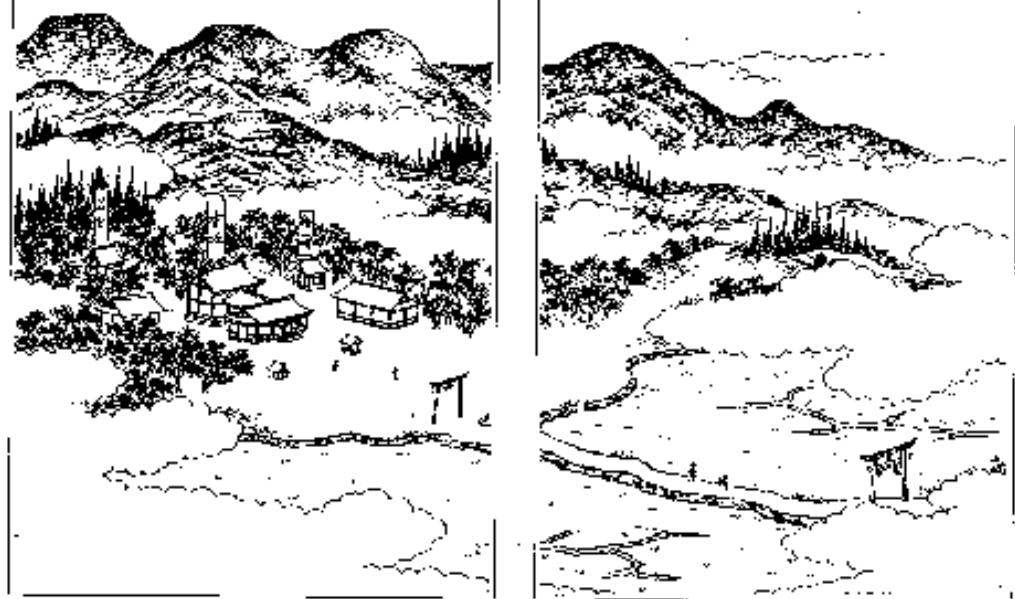
垂跡大和国春日大明神を馬関田に崇むと見

へたり、當社の本地を正觀音とす、銘に宝

徳三年七月初八日大願主選岩叟と記す、後

世仏像を加へ祭りて高牟禮六社權現と改号

天満宮



せしにや、高牟禮ハ地名と見へたり、社司

黒木某

沢原野池 裏村にあり、飯盛嶽山名の裾にして沢原野といふ、牧野中なり、地頭仮屋より午方毫里拾八町、泡の廻り毫里にハ足らす、冬水なし夏多^{シテ}、霧島敷地四十八池の其一なりといへり

吉田

天満宮 水流村水川村を里番に鎮座、地頭仮屋南郷村にを距ることと寅卯方拾町余、祭神北野に同し翌二月廿日、社地裏六町、勅詔年紀詳かならず、初

吉田
南方山福智院觀音寺 吕明寺村にあり、地頭仮屋より亥子方六町許り、貞言宗大乘院の末にして開山光恩法印圓化院本尊十一面觀音坐像寛永九年創建して天満宮の別當職となす

寶涌山昌明寺 昌明寺村にあり、地頭仮屋より亥子方八町余、曹洞宗飯野文善寺の末にして開山義芳光訓和尚喜善寺本尊阿弥陀如來

齋公厚く崇敬し給ひ、天正十年五月廿五日
開基年月詳かならず

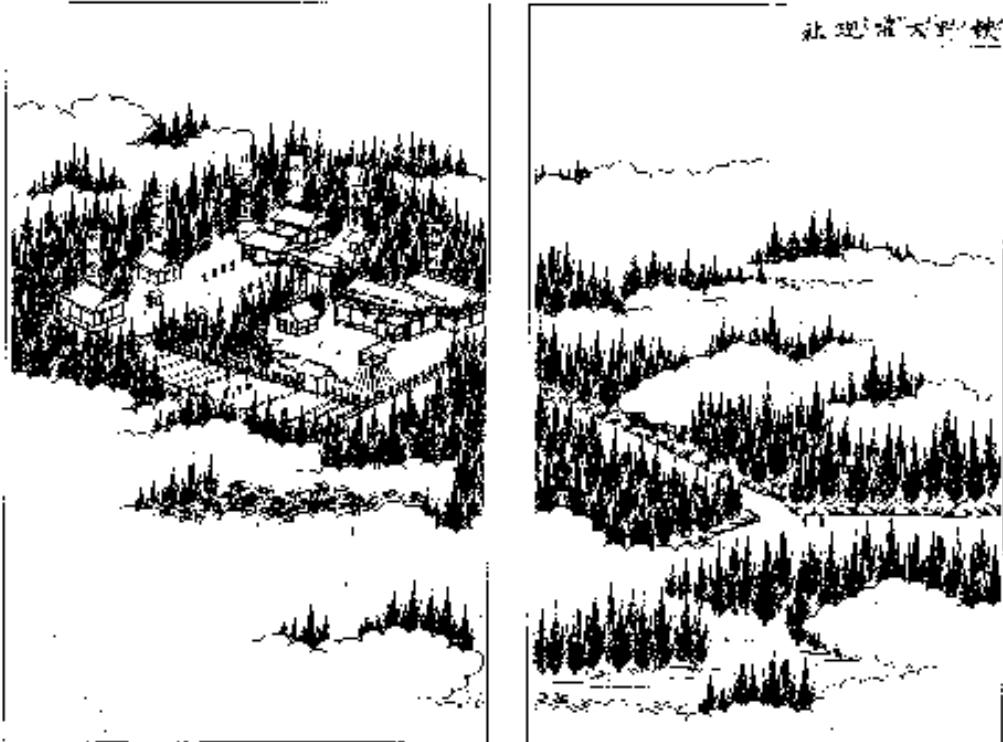
貫明公和歌十首を詠して宝殿に納め給ふ、

また寛永十六年二月廿五日寛陽公連歌を興行して奉納し給ふ、元禄十三年二月三日社頭炎上の時、旧記を失ひ由来委からず、吉田の惣鎮守にて社司を押領司某、別當を観音寺といへり

吉田温泉 吕明寺村にあり、地頭仮屋の手方
拾七町許り、山下山の麓に湧出す、其年月
伝ハラス、湯勢強く夏冬増減なし、味は鹹
く渋味を帶び明礬の氣を兼たり、浴する時
は功能多し、第一疵を癒し脚氣を治す、五
積を去り、其外諸疾に益ある事神の如し

高原

サノダイゴンシゲン
狹野大権現
カニタタケル
蒲牟田村 狹野に鎮座、地頭仮屋



生れ給へるに因て、幼字を狭野尊と称し奉られり、神代卷一書曰、先生彦五瀬命、次稱飯命、次三毛入野命、次狭野尊、亦号神日木磐音彦尊、所称狹野者、是年少時号也云々、今本社の左にありて、別に天皇の神靈を祭れり、社説に云、初め當社の祭神ハ地神第三代天津彦々火瓊々杵尊一座にして、後に五座の神靈を会祭し、又神武天皇の神靈を祭れり、人皇第五代孝昭帝の時勅請といふ、又三十代欽明帝の時慶胤上人といへるありて、霧島山の神社を建立すともいふ、三代史録云、天安二年冬十月二十二日己酉授日向國從五位上霧島神從四位下云々、延喜式神名帳に日向國諸縣郡坐霧島神と載られたる是ならんか、其はしめ一坐といひ、

また鎮座の久しきをもて見つへし 按するに崇聖
ノ御元太皇孫を の也それが、初め天皇の御子を祭靈らるるならんか、しかももと謂のいふところ天皇の神靈ハ後に祭れるに見へたり、今又天皇を本丸に祭らず、久社の左にあらず社を別どするにゆへあるや、それ貴社の創喩ある久し、止上古後之英ありて既に其等移する久矣、嘗て年中に至りて社に復して、今御地に御子すといへども、後又しハしたる祭と極りて御三皇の御靈三命坐も々坐すなれば、御山號すかにしかなし、そのかく無性空音寺にあらず、神社坐すを日建せし時いかがりけん、其御靈靈入去、被移り表れハ、其さかなること好へからず、今本社の左ニ瓦松同上トシ、上古御社のあらず起なりとてあり、土俗を 大皇狹野 大皇狹野に降誕ましまし、十

五歳にして太子に立給ひ、後日向國宮崎に都し給ふ 今吉備郡の次、其方付近の都の通称など 御年四十五歳の時西の宮より起て東征し給ひ、長髓彦か乱を平らげ天下を治めて大和國糧原に都し給ふといふ

西の社 經序子爵・武藏守命を
祭る、本社の右にあり、四所宮本丸の西面にあり、白日山
本地堂 此題意の右にあり、
下子親音の處を安置 社司押領司某、別當寺を神德院といふ

霧島山仏花林寺神徳院

（ノウカリンジシントケイ） 権現社鳥居の左にあ

り、天台宗武州東叡山の末寺にして狹野大

權現の別當職なり、開山性空上人、中興開

山者淳法印、本尊不動明王、阿彌陀如來、

當寺開基の年曆詳かならず、村上帝の時、

性空上人當寺を建立して權現社の別當寺となすといふ、しかれども山上震火の災あり

霧島山



て、神社寺宇ことごとく焼亡し、什宝旧記等皆亡なひて、しハシハ転移しけるに、慶長年中に至り、昔日のことく狹野の地に神社建立ありて、當寺も再興ありしといふ

霧島東御在所權現

（ヒガシゴザイショコンゲン） 蒲原田村に鎮座、地頭仮

屋を距ること巳午方一里三町余、祭神二座

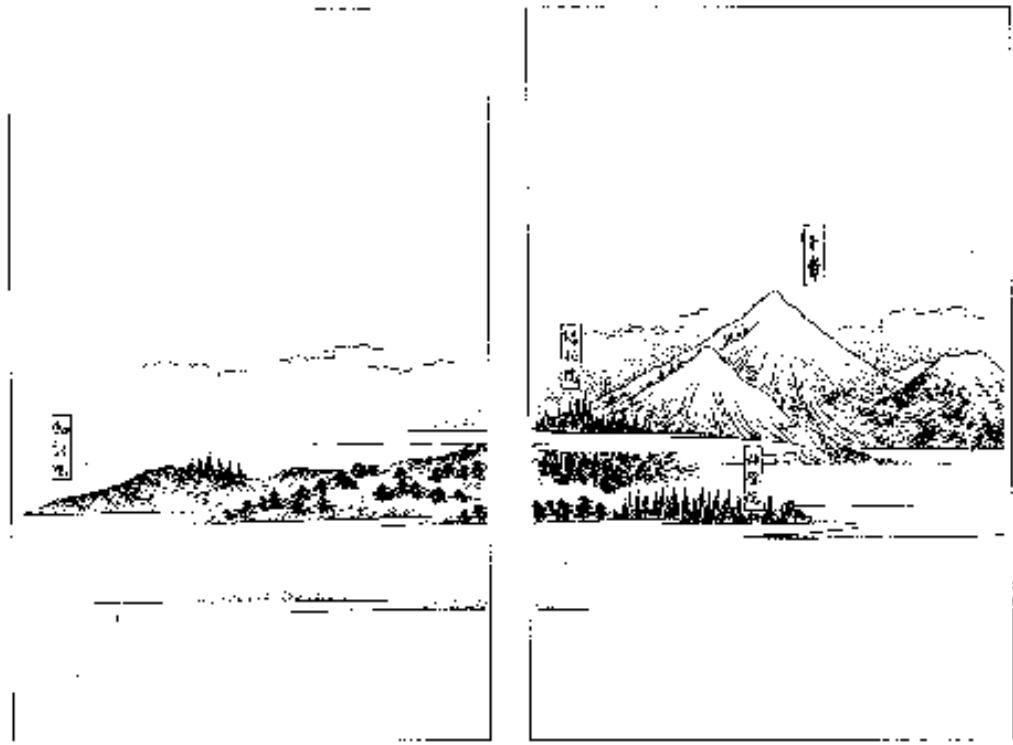
（伊集院御、伊集院御、但參） 勸請年曆詳かならず、是を

（音元日、十一月初四日） 東霧島の奥の宮といひ伝ふ、此所神代の旧跡二神

（伊集院御） 現座の靈地なるにより勸請あり

しとそ（今相賤に入郷入社、名禮は、禮々作草、火火出見草、草入たり、又本社の左石に西子を空也、左の白山神社、右の社ハ性空十人の侍子乙若の、夢を照れりといふ、されハ又空再興の時より今のことくじハなりたるならん、以前のこととおこなひたじまニ、日向ハ神代伊集院尊の旧跡空也ハ、今日も御之城、高城などいふ地名残りてあり、是の白なりと、又曰、神代高天原といへるハ今の高見なりと、該するに日向ハ御代の日高なることを幾のを遺すにいたらず、何も御之城、高城等の地名の如に聞らんや、而て西側の城壁を見ると既身高半丈にて御門堂たり、東に御城を北、南に有千切の峰に立て、西北は小林野原に接続き、其餘の則昌谷林林、ことこゝに御城のうち進きり水をさかに上りて、坂上の空

（音元日、十一月初四日） またこと、名代の旧跡といふ事なり、されハ高城を神天原の崎端にして



その神止まり處すといへる。このわたりなるべし、身詫松岡は本もとの氣
少ひかず、京畿に近大坂山とて天をいふ、此處のことを名をといへり。元
昔世を帶て齋するなり、既へ齋生らなし、其跡にれを遺していへり。しる
本とも古來傳にして有記數亡しめられ、その詳なる事とぞしりかたし
いにしへより半葉躰取ともおほしといへども、

山上震火の災ありしによりて震火の事略實在新修現
のトにあらかなり

ことごとく其伝を失なへり、社司押領司某、
別當守を錫杖院といふ

祓川

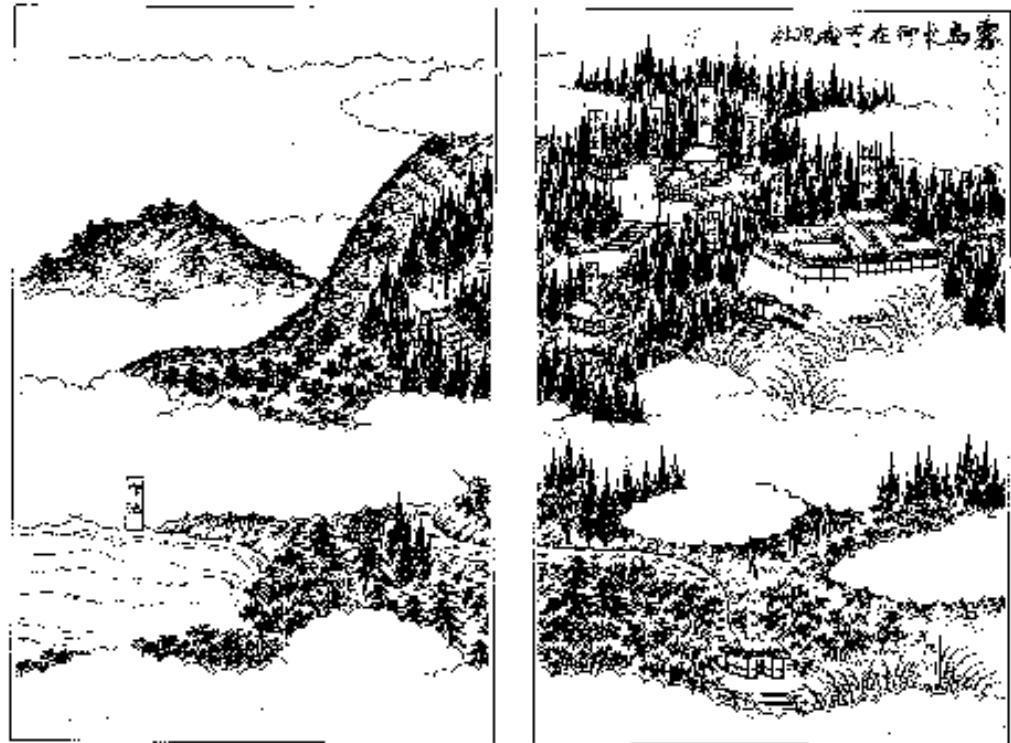
本社の外方八町はかり、二ノ門の外數
十歩にあり、いにしへ一神天降給ふ時、八
百万の神等この川に集て、御祓し給ふとい
ひ伝ふ、今に參詣のもの此川水にて垢離を

とるといふ

霧島山華林寺錫杖院

權現社の左にあり、真言宗大乘院の末寺にして東御在所權現の別

當藏なり、開山性空上人、中興開山圓政法印、本尊千手觀音坐像長二丈余、大
其頭金銀塗作當寺ハ村上帝



康保二年積性空創建する所にして天台宗なりしに、震火の災に罹りて寺屋廬に及ぶも

の数々歳 山野は云ふ、正月御神事の御宇天水二年壬辰(延喜)、八一六代四條院の神宇文摩元年甲子(ノ年六日)、森田出處入ひに免りて神社を歸。ことごとく免じて云々 文明十八年内年の歳に至り、

邦君圓空公の時密宗の徒、圓政法印をして當寺を中興せしめ、寺勢を命ぜられしより

眞言宗となり、今ハ大乗院の本寺となれり

大黒天 本寺の西數十歩に安置す、靈仙^{りやせん} 上門堂

二王門 本寺より卯方八町許りにあり、東霧

鳥山四字の額を掲ぐ
（鳥山四字の額を掲ぐ）左右金剛力士

立派な人間の像を安ず
者呼べならず

關伽井 本寺の戌亥方にあり、往古性空上人

の加持水カヂスイなりといひ伝ふ、この水もし女人の影を徒す時ハ水かならず涸ヒラフ竭す、よりて

女人の近づく」とを禁す、或ハ疫疾を患ふるもの井水を掬してこれを嘗れハ忽まち験を得るといふ

御池

権現社を距ること辰巳方八町許りにあり、周廻一里余碧水湛々として深き」と測るへからず、四方の岸壁のことくにして、七ツの湊あり、松湊、帆船湊、王子湊、劍崎湊、刈茅湊、柳湊、渡摩櫛といふ。御池權ハ源作牛中田山也等十人以上を雇ひて、右邊に以て御庭を修むる、是に九頭の神ハ能無惑と云ふ者ハレ類の主神を鑿け来て上人修業の功に報謝す、土人の口、これが是方地居處にて本地の眞身にあらずと、紫綬より上緒し、しゃらくにして手天然の妙相を取す、上人又手札にて神事の衆生を救へることを願ひ、因て彼は終じて入悲の像を安置す、神體の發光して宝珠をハ御庭に盛り石函に於て藏せの事より右寶中に被めたりて、其後度次奉りける時、件の宝珠ハ池中に投入されどなし、今度夏に手するば六村民この辺に詰て日向を耕るに内駄あるあること、」これ霧島権現御手洗四十八池の第一なりとぞ、又相距ること十余町許り、西方都之城の地にあり小池と唱ふ、是又御手洗四



十八池の一なり、往古ハ陽池陰池といひしに、今俗に小池御池と呼び伝

馬權現カヌミヨシマツル

後川内村に鎮座、祭神詳かならず、

本地は馬頭觀音なりといふ、地頭仮屋の卯方一里ハかりの岡にして叢祠ヤシヨロなし、自然の巖石を挙して權現と崇む、勧請の年曆伝ハラス、馬を畜ふものこの出石を挙すれハ冥助ありとて參詣するもの多し、岩縫に小蛇あり、參詣の者かの蛇を見るときハ神慮に叶へりとて殊に悦ぶといふ此處はいふ處權現の事に五色の正事を點るに人として之に連へり、ようて五色の蛇との名也へしならんか

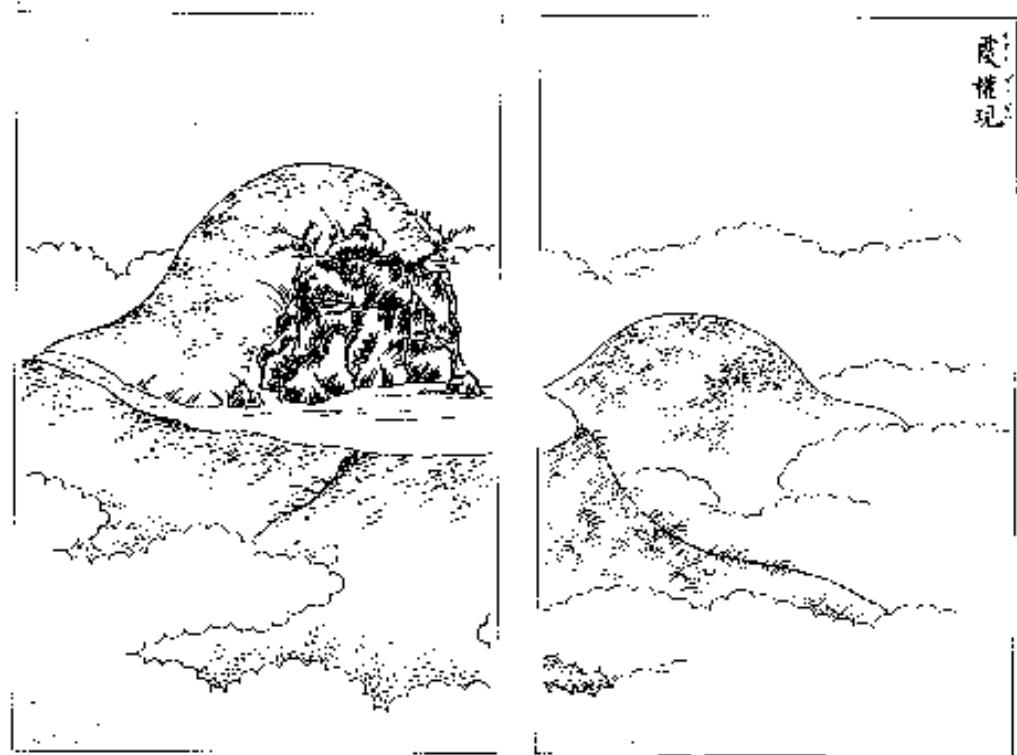
高城タカヒコ

霧島六所權現キリシマロウシヨウジン

東霧島村に鎮座、地頭仮屋役

高城タカヒコもあり、吉敷村の舊請坊村の枝なり、を距ること成方武里武拾町余、祭神六座祭事無同し、勧請の年曆詳かならず、例

馬權現



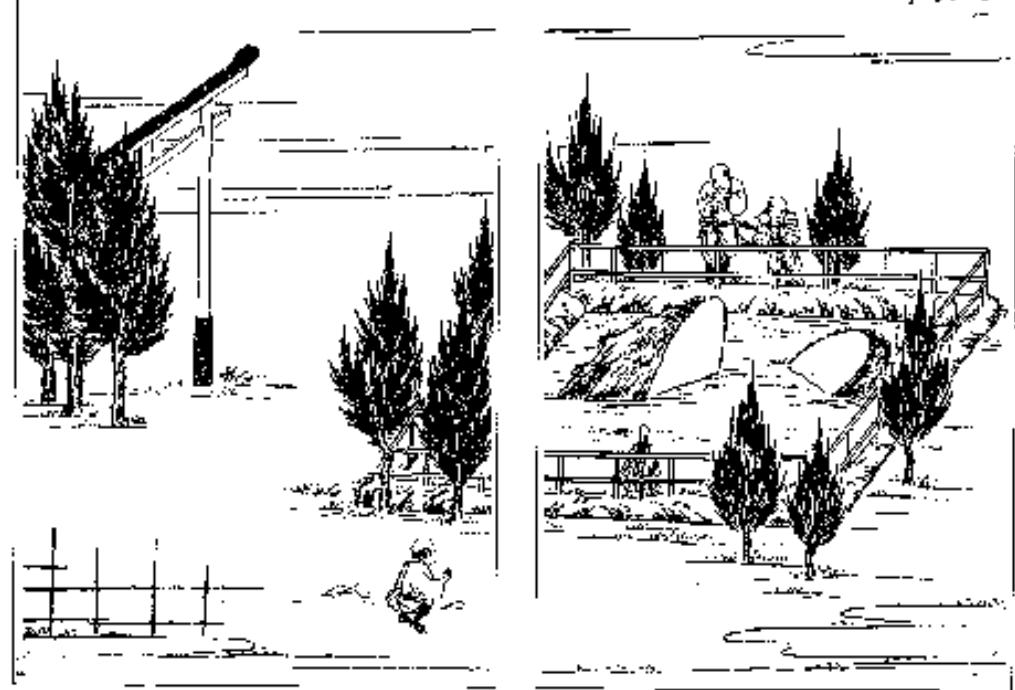
祭二月の廿日九月二十日出社ハ高千穂峯を距ること
東数里にあり、因て東霧島と号し、是をつ
まきりしまと唱ふ、これ東の字あつまと訓
より略してつまと呼ふといふ、本社の左に
乙若の社佐土入の社也すとい、かわらの社也すとい、御藍石古方には青色の石なりと云ふ
あり、右に白山の社あり、社頭より石階を
下るに左右善神あり、又一万社十万社あり
共に祭事無
石階を町許にして鳥居あり、右に神
石あり利石の事
後に記す本社より南九町余にして八幡
宮安鎮の所あり、權現の旅所なり、正祭に
ハ神輿を護て神幸の儀をなし、此所に至る

十握劍ハ、靈氣御物、後人の者也。神代伊弉諾尊の帝給
へる御劍にして、當社神祕の靈寶なり、深
く本社之内に鎮め奉る、當社の正体ハこの



霊劍にして後に六座の神靈を勧請し崇め祭
 れるならむ。社中に入、那社を丹鼎し守護を創建すとい
て是の時より初めて合上山より奇瑞靈験多しとい
 ふ、しかれども山上靈火。火の下に宿す所あり
 て、しハしハ火災に罹りて、其詳かなるこ
 と伝ハラス、社司古松某、別當寺を勅詔
 院院といふ、神石ハ本社の辰巳方數十歩丈余
 小池中に奇石あり、俗に魔石と呼び、又裂
 璧イともいふ伝へ称す、此石いにしへ魔魅に
 してしハしハ害をなせり、是に因て番島の
 神十握の劍を把て斬て三段となす、時にそ
 の一段ハ雷となりて飛去ぬ、二段ハこの所
 に留まりをのをの神となるといふ、神代卷
 一書曰、伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智為三段、
 其一段是為雷神、一段是為大山祇神、一段

石神剣



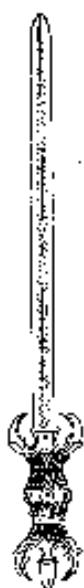
是為高、又曰、斬軻遇突智時、其血激越染
於天八十河中所在五百箇磐石、而因化成神
号曰磐裂神云々、今此神石てふものを見る
に高四尺餘の円石斬て三段となすの跡あり、

其一段ハ見え得らず日輪院にて上宮幡那の内にあらうとい
ふ。かがれとも所在定ならず。別書
也語源在御靈臺法印の半世紀前神石の事と云ひてある。云東保之主大西
の太白山の事也。崇禪國の行者崇禪の答説ノハもその事也。かの行
者崇禪云。出雲國神門が上河原里に一奇石あり丈大的底に。かくも廣野
の多羅山より飛來る石なりといへり。其石を見けるに大を主に磐裂た

る一神石なるかと
く歸へたりと云々 神明の良能にあらすんハ豈斯
のこときの妙用あらむや、今里俗の伝ふる
ところ神書の説と符合するかこときものあ
り、因て併せしるすといふ

スマキリシワツンカウフンザクテミシタウキン
東霧島山金剛仏作寺勅詔院 権現社の辰巳凡

壹甲許りにあり、村上帝応和二年癸亥の歲、
性空上人當寺を開基して東霧島神社の別當
寺となす、初め大台宗にして金剛仏作寺の
号ハ、九拾四代花園帝の勅号なり勅号の題にその
して仕へらず、今ニ玉門に金
利佐生さといふ稱を拂たり 延長五年真言宗光明院
及諦法印をして當寺の住職となしけるより
改宗して大乘院の末寺となれり



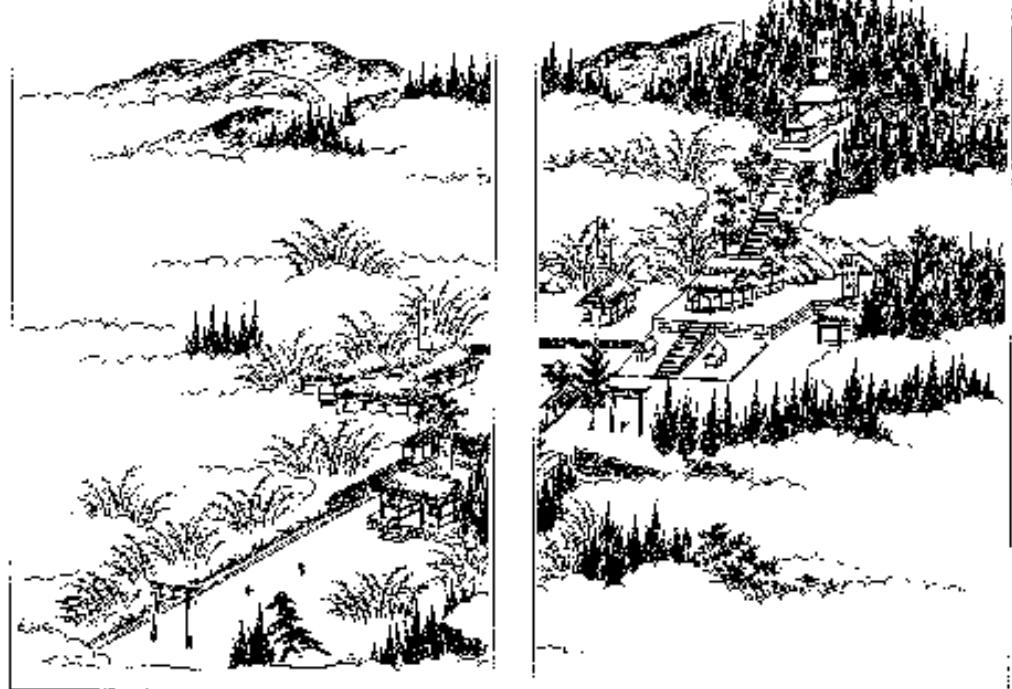
十種銘
御朝紫銅鑄鍔後人ノ寄進
さしよ見タリ姓名不傳

時刻名傳
或曰七國之御者後世所奉傳
神代之真物者深秘而不外傳
〔松葉〕

春日大明神 大井手村に鎮座、地頭飯屋をさ
ること卯方十二町余、祭神四座天照大御命、照武
大御命、否取大御命、火之御子 當社は人皇六十二代
創始、延喜元年、本像を安_{〔名古屋〕} 大御命、否取大御
命、火之御子、刀八丁 當社は人皇六十二代

村上天皇の御宇天德二年月州三侯院高城村
東山の麓に勧請し給ふ、初め垂跡の地なる
によつてなり以上を司馬文正氏記載する神社考云、春日社は
瓊々杵尊、高千穗嶽降臨の時五部の神第一
也、三侯院庄内高城に宮柱を立て神籬を保
ち守護し給ふ、此所垂跡根元の地なるへし
と云々、是によれば天德二年神託ありて勧
請せしならん、末山は高千穗峯の東にあり
て、凡五里行陸七五高千穗峯に對して東山とい
へるが、今ハ春日山といふ、大杉おほくあ
りしか、安永七年戊戌七月十日大風してこ
とことく倒木となりて大樹は纔に十余株存
す、同殿に仏像四躰を安置して本地とす
崇禪、通鑑、御書、文獻なり、國宝十事を御するに及て仏像を安置したる
のが其年三月からず、初め祭祀の係もありしに久遠當國に、向あ
り「兵」、「口」、「赤江」の在にてては詔め奉りて春日大明神スルバツノミコト
を勅請する事、明治二年二月廿日の旧社に見へたり、社司末原直

春日神社



記、別當を春日山、リクマナイン二摩地院、東龍寺トウリョウジ

トウリョウジといふ、開基年曆詳かならず、開山伝燈

アヅカリシノムサヒ阿闍梨俊賀アヅカリシノムサヒ初め天台宗なりし

といひ伝ふ、改宗の事詳かならず、客殿に

掛る所鐘銘至徳元年甲子十一月廿七日施入
日向國三侯院北方春日社、鑄治壱口、大檀
那沙弥正覺、大願主金剛仙子宥存云々、宥

存ハ當寺の住僧なるや古簿を失し、世代を
語かにせず、ゆへに考かたし

龜石山石山寺 石山村にあり、地頭仮屋を距

ること申酉方凡式卑、曹洞宗にして福昌寺

宋なり、開山實庵融參和尚フツアンイシルン

清興院第十一祖山源公初め実庵和尚此地

一五三三 本尊觀音如米ヒヨウ初め実庵和尚此地
に來り山の半腹に庵を給ふ、石山の樵夫出

て是を問ふ、僧答曰、我無情迦葉門を修す、
汝怪むことなかれといふ、樵夫為に草庵を

常なミ、ここに居らしむ、龜石山福聚寺と

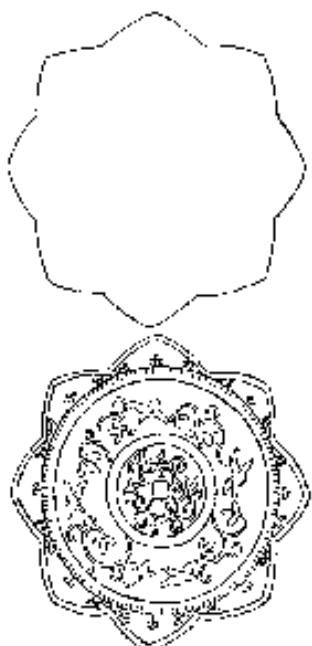
号す、即應永六己卯年なり、千手觀音の立

像を安置し當寺の本尊とす、日羅の作なり、

祈るに應驗ありて常に諸人絶す、邦君琴月

公、寛陽公、泰清公參詣し給ひしことあり

といへり、安永四年住持光龍宣カツリョウジンに詣て石山



春日松



寺と改号す。光記云、創め石臼寺といふ寺ありてには寺裏裏マ高雲寺にて、中承十宗院社主王興、之を聚ひて改名と云々。明治七年失住。惣神の正、総家守ハ塔水六代建立。開山実應不々、今祖道の記に従ふ。口中に龜有あり、最に龜をもて山母とす。接するに月山本神れならん。又石川村なるにて石山をもぞ。
寺かどかるか、寺群あることを「寺子」
高松山功德院高称寺 碩滿坊村にあり、地頭

坂屋を距ること戌方武町許り、時衆宗相州

藤沢山の末にして開山彌阿弥陀仏、本尊阿

弥陀如来、立像高三寸、木像也。二十二年正月人火前

部太輔開基にして年月を伝へず、初め松峯

山高称寺といふ、中興覚阿弥といふ

瑞雲山吉祥寺 穂満坊村にあり、地頭坂屋よ

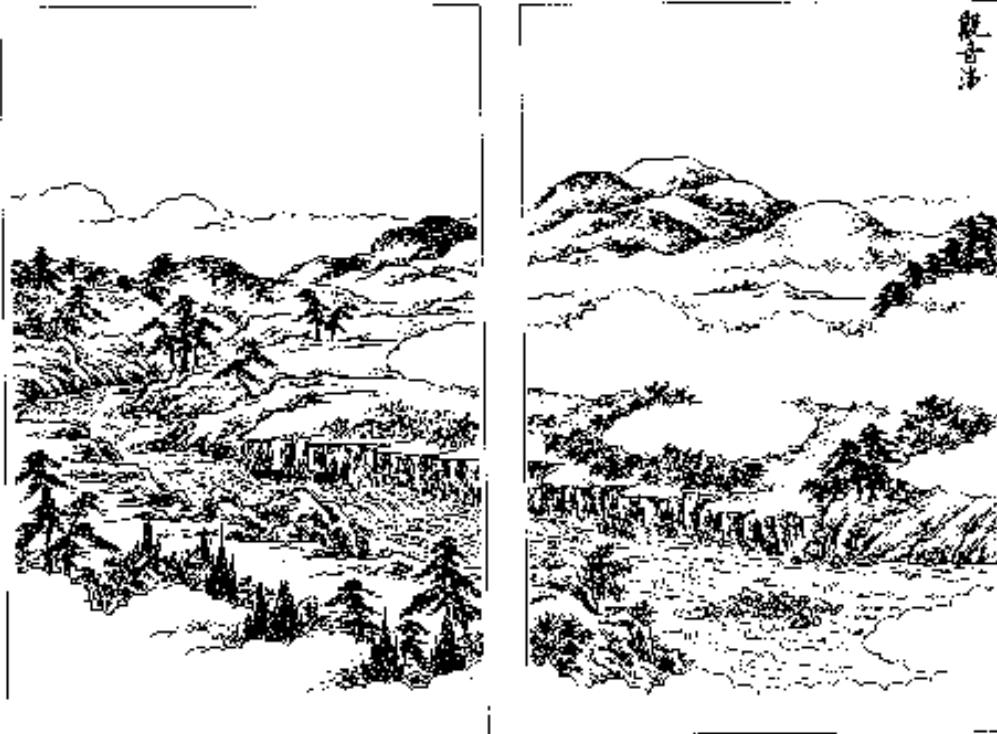
り西方式町余、臨濟宗志布志大慈寺の末に

して開山入路和尚、延化十九年本尊正觀音、開基

年月詳かならず、中興月桂和尚といふ

河添森 有水村にあり、地頭坂屋を距ること

戌方武里武拾三町余、都城川々の流れ合ひ



にして、日向去川の頭なり、此所流四拾間
余、横せばく水勢強く両岸大石量々として
滑なり、其景尤清麗の地なり、里民かうす
いの轟といふ

高崎タカサカ

ウガダイミヤウジン
宇賀大明神 前田村に鎮座、地頭仮屋前田村上を

距ること申方武町、祭神一座有相樂、財榮、五月二十日勧請

年月許かならず、是より先高原郷の内五箇

村前田村、朝日村、新田村、今田村を分ちて新に外城となし

高崎前田村之内と呼ぶ、貞享二年丑十一月六日

當社をもて本山の總鎮守となす、社司押領

司氏

ノウコサノミヤウフカシカウジュオ
龍虎山明王寺幸樹院

前田村にあり、地頭仮

屋の東隣なり、真言宗大乘院の末にして開

山盛住法印高原寺共院住持、延喜年間を住へす。本尊不動明王立像初

め曹洞宗の寺なりしを高崎郷を置に及ひて
密宗となし本邑の祈願寺とす

朝倉山海藏寺 前田村にあり、地頭仮屋の末
方武町はかり、曹洞宗飯野長善寺の末寺に
して、開基年月詳かならず、開山耕山慈舜
農化年月詳
かみます和尚立派本尊阿弥陀如来立派本邑の菩提寺
なり

薩藩名勝志

卷之十九

薩藩名勝志卷之十九目録

諸縣郡

栗野神社

龍福寺

去川

本永寺

法華巖

腰掛松

木鶴

車返

守佐八幡宮

天正寺

悟性寺

郡山寺

川口番所

法音寺

西光寺

仏像寺

絹光寺

伝徳寺

諸縣郡

栗野寺

高福寺

香積寺

善哉坊

身投嶺

式部谷

愛染川

人日寺

栗野神社

高濱村

に鎮座、地頭仮屋

内山

を距

ること辰巳方月拾八町、祭神八座
主事東命、从神高麗國主、少彦名命、百濟太祖命、
筑井神社御名主神、祭六日廿七日、十月初十日、勅請年月詳か

ならず

応永中義天公穆佐高城におハしませし時崇
敬ありて、穆佐院三百町の崇廟と崇め神領

七町を寄附し給ふ

古瀬村ハ穆佐院の地にして、延喜五年木邑

文政九年寺も義天公トリバ
落の時宿舎を改せらる

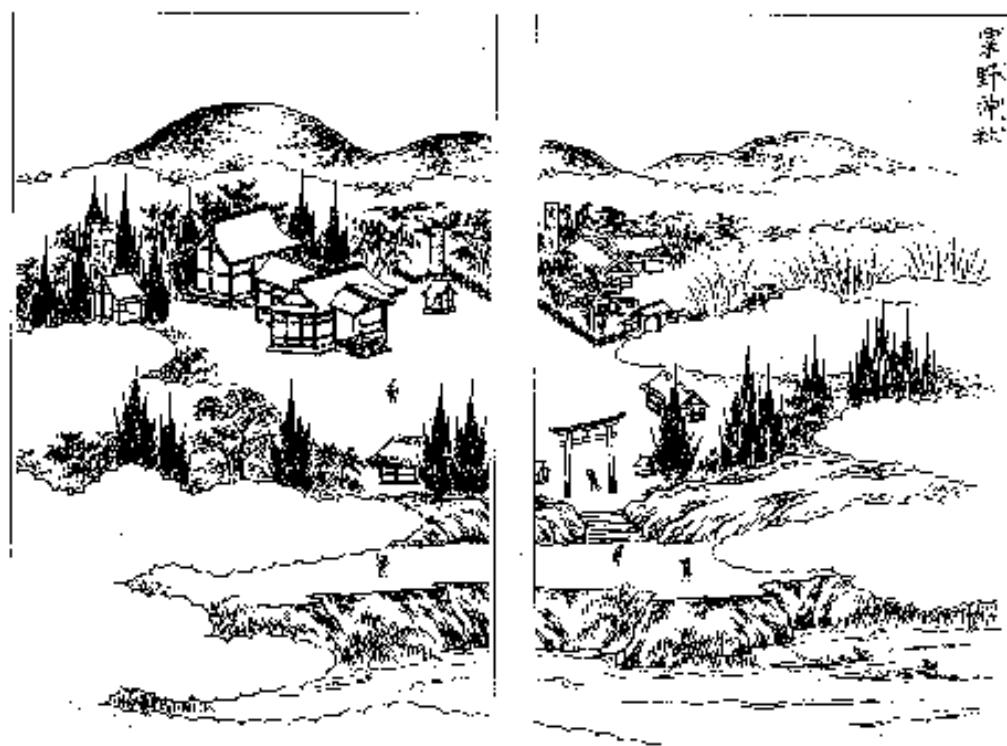
奉表に栗野大明神五字の額を

塔頭寺の由来とかならず、むろに栗の池の地にて此川に流れ油井川を
源開したるゆへ作成のやといふと甘えいかく、神代系団体を被する
に少名命ハ高丘正靈尊の御子にて不吉の氣と力を効んをにして天下を
治めの神なり、後世に至りて栗野に祀られたは、實もうて當世の鄉にありよ

（まことに云々、されば甚社の祭禮少祭也と大に貴重御子六舟をなせりて
て六舟とす、栗田の守へて朝市にて初るなんらん口ぞきみづへし。六月
廿七日祓祭には神輿を守り下り、川舟にして
延岡領上野町（舊社主さる）に演下り、数艘の船
を浮へ先を争ひをのをの囃子をなし上野町
へ着船あり、神樂を奏し御酒を備ふ、宮帰
りにハ上野町の民家神戸に數尋の綱を付、
強力の綱と名付、神船を引上る、白地領の
老若群集して見物す、又十月初午の祭にハ
鏑流馬などあり、社司を外山某といふ

神留山文殊院栗野寺

（シルワリンモンシナシアハク）栗野神社の別當寺にして
社の左にあり、真言宗高福寺の末なり、
開山快誉法印、本尊正觀音、開基年月詳か
ならず



高岳山龍福寺

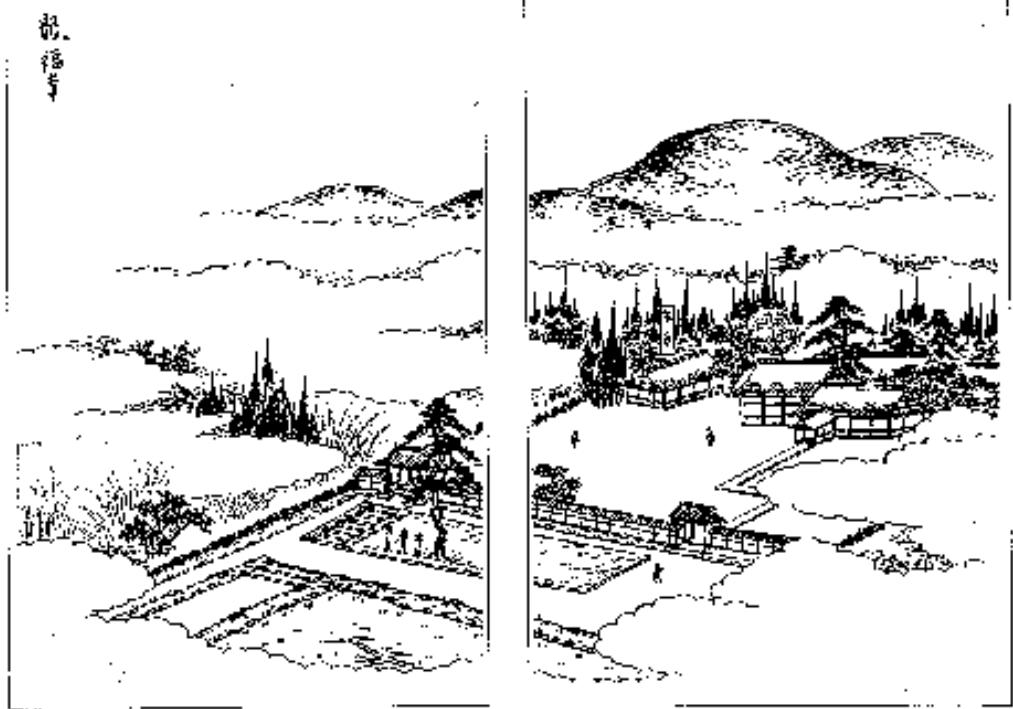
内山村にあり、地頭仮屋の中

西方三町余、曹洞宗福昌寺の末にして開山
天室懸和尚^{通昌寺大法師}本尊正觀音^{坐像}當寺は慶
長五年高岡外城を置に及ひて、貫明公命し
給ひ創建す、故に御名の龍字と福昌の福字
をもて寺号となすといふ、日隅薩三州に
寺つゝ公の建て給ひし三寺の其一なり

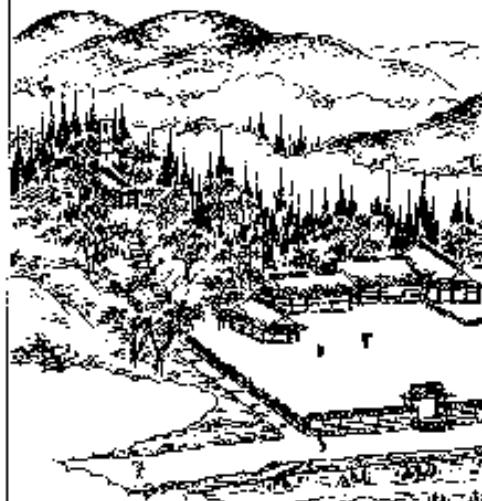
寶珠山威德院高福寺

内山村にあり、地頭仮

屋より升寅方三町許り、真言宗大乘院の末
にして開山賴永法印<sup>伊東源氏傳
寺の住持</sup>本尊藥師如來^{立像}克
慶長五年本邑外城となるに及ひて、貫明公
の命により創建す、初め長福寺といふ、後
今の寺号に改む



高福寺



去川サカワ 去川村にあり、其源は木吉穂キヨシホケ原中津瀬ナカツセ川にして遠く流れ、末は赤江アカエの海に注ぐ、

當村に番所を置て往来を改む、川は船渡しなり

去川

佐中將源光久

仰瞻雲外有人家アヤマツチノカタヒトミツコト日、上丹霞染水涯迢遞去川
來湛々、年々流出洞中花

建福

治れる代ともさつ男かしらぬひのこころつ
くしに閑をもるとハ

建福ハ竹村雄也タケムラヨウヤてふ人なり、寛政中行脚
して父に來りしを番人來、文を改めとと
めける時よミたりしと人のかたりき

鷹見錦桃

山深き闇の真昼やほとときす

梅樹山香積寺

高濱村にあり、地頭飯屋より

辰巳方拾三町余、青洞宗龍福寺の末にして

開山明庵和尚

本尊藥師如來

開基年月詳からず、初め小庵にて梅

樹ありしといひ伝ふ、客殿の前に大なる梅

あり、万治三年庚子二月七日泰清公此梅を

遊観し給ひ、寺地壹段式畝八歩を賜ふて梅

樹の為となす、其後延宝元年癸丑五月廿二

日寛陽公當寺に光臨し名を月知梅とよひ、

尊詩を染筆して住僧芳伝に賜ふ、今に伝へ

て寺寶となる、又天玄公、淨國公も照覽し

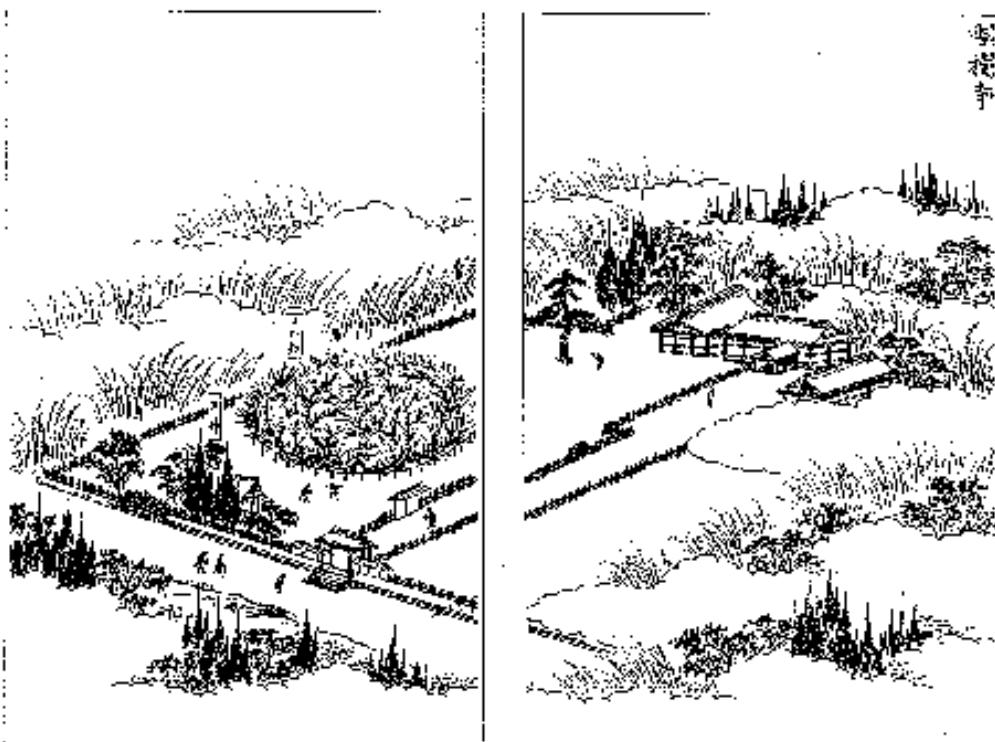
給ひ、又明和五年六月二日前中將公照覽ありて、月知梅の三字を書して住持大賢に賜

ふ

月知梅

芭蕉手前有体二十回餘年不老也

子代左衛門、金田道之、名以知者也



老龍盤屈歲寒枝 遠出人間托仏祠
移植春風今歷幾 嘗初唯有月明知

佐中將源光久

梅樹惣高さ一丈九尺六寸余、枝の榮一十
間四方、惣廻り三十二間余、柄柱八十六
本、初め一株の木なりしに、其枝垂て八
方に根つき数株に分れたり、本株ハ何れ
の歳に枯たるや、明和年中までハ枯朽た
る株根残りてありしに、ついに朽すきり
ぬれハ今その跡に垣ゆひてしるしとす

野雀

夜るは猶晝も照り葉や月の梅



松尾山本永寺

浦之名村

にあり、地頭仮屋の

西方式里余、法華宗富士門派房州妙本寺末

にして開山日朝貞安六年八月日興化本尊日蓮上人半身山来

記を接するに當寺ハ日目上人の弟子日郷上

人西國表ヤマニカ派の開基にて、建武年中日州佐

土原に下り居住せしに、貞和四年房州妙本寺の住職となりて房州にゆきける時、学頭職を弟子日朝に譲る、ここにをひて日朝本

永寺を建立して学頭職を勤むゆへに代々の学頭職にして一派の寺ハ皆支配し異見を加ふる寺といふ、天文二年佐土原を去りて高

岡今の大法華宗顕本寺の地に移る、拾式坊舎を建て寺領千五百石の大地なりしに、九世

日成上人の時、故ありて去川村の川上四ヶ村に四ヶ村は諸縣都四ヶ村は諸縣都隠れ地高城の内なりをトし、今の浦之名村



に寺を再建す、また天明六年邦君厄歳の時十八世の住僧日立公の千秋万歳の福を日進に捧る、よて私錢若干をもて本尊二躯の像を彩色し東西に惣門を造立し、内外の分を巖にすといへり、重寶に口蓮上人以下代々の上人白筆の名号及び白筆の翰蹟等致通寺に藏む

金剛密山勝福寺妙光院善哉坊 深年村にあり、修驗宗當山派の寺にして本尊神變大菩薩半蔭開基作月詳かならず、鐘樓に寛喜三年鑄ところの古鐘を掛く、門内に熊野三所権現を安す、勧請履歴伝ハラス、天正六年正月貢明公命して面高良蓮坊頼俊（第五年四月ふじゅん）を此寺の住職となし中興とす、是より以来連綿して口州西院の惣職先達職なり（西院ハ鶴谷院・新潟縣をひやか口書す）

（へし、強姦者等に付するを、慶長二年伊東氏邦人柳家直吉草上郡伊丹郡道連亂を企て、城、本庄寺の上民石馬と云なるもの以ト算十人謀反に參りて加害を乞ひ、相愛之を許容す、才は近江の難を逃れしとなり、故に本庄の田地四百七十畝を口馬を永世寺に賜附して、古忍主祖す、右馬之元ハ寺に入て執事に仕へ、其恩情を報すといき、子孫今にあり、いにしへ十八の坊舎ありしに今ハ坊（正林坊、要木坊、西谷坊）廃して本坊を合せ十二坊（小坂本坊、萬葉坊、中野坊、佐久坊、高禪坊、高學坊、松木坊、山本坊、才上坊、承生坊）存す

法華獄 深年村にあり、地頭仮屋を趾ること亥子方凡二里拾八町、獄の半腹に寺あり、法華獄寺といふ、曹洞宗福昌寺の末なり、初め養老二年建立ありて金峯山長喜院と号し、积迦如来、藥師如來の両像を安置す、其後延暦二十四年伝教大師九州の靈地を巡礼し、遂に今の地を開き、貞金山法華獄寺と名け、藥師如來の尊像を遷して供養せり

（法華此山に至りて法華一方部諸國のものあるゆへ法華獄寺とぞといへりもかし上東門院の女



房和泉式部、本門院に入門六十六年、修院の口占なり、和泉式部大師の持す、大学入式源貢。身に重き病を蒙り、六郎の持す、身ひき落とし、身ひき落としに附。或夜の夢に身の病を除かんと思へ、越後の米山、参河の鳳来寺、日向の法華歎寺、三所の薬師に参籠すへしと清水觀音より示現を蒙り、よつ越後、参河の兩薬師に参籠して丹誠を抽て祈りけれども其驗なし、最



後當寺の薬師堂に參籠して昼夜勤行をした
らす、千度も、たひ祈りける、されとも是
もまたその驗し見へさりけれハ、最早此世
の縁は是までなれハ身を投んと思案を定め
辭世に

南無薬師諸病悉除の願たて、みより仏の
名こそおしけれ

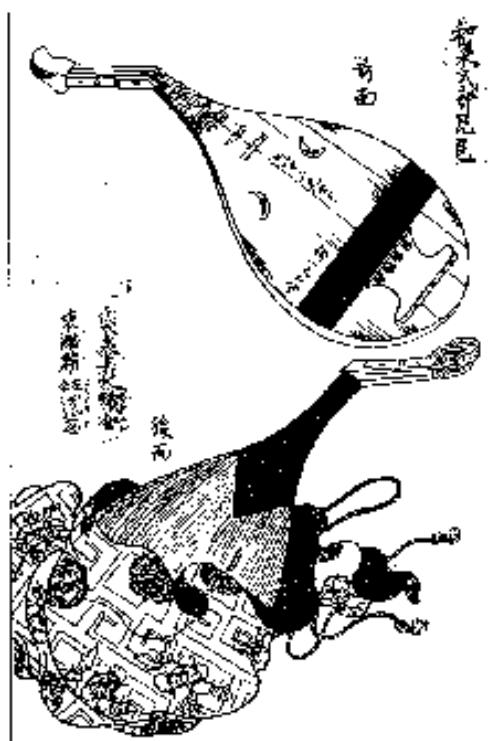
と詠し、すでに合掌閉目してみつから殺す
る千尋の星の冥きに入らんと思へば、薬師
如来の歌に

村雨はた、ひと、きのものそかし」か簞
笠そこにぬきをけ

と詠し給ふ、たへなる御声のうちより俄に
心地いさきよく数年の病ひ忽ち愈て瓊なき
玉の容となりしとそ、詳かなることハ天明
八年山本正誼住僧胤充ヨウシマに代りて記す所の法
華嶽寺記にあり、よてこゝに略しぬ、式部
御礼歌とて旧記にあり、胤充か記にハ見へ
す

法華嶽の松のあらしに夢さめてこゝろす、
しくなるぞ嬉しき

身を捨て菩提を願ふ我なれハむまれ都に



かへりこそすれ

扱堂内に式部の琵琶とて一面を納む、今世

あり、式部身を投んとせし所なり、南ヶ嶽
ともいへり

の琵琶にあらず、天正九年六月二十三日貢
明公福昌寺代賢和尚に命して法華嶽寺ハ靈
山たりといへとも住持なし此才支那のゆ
看守と見えたる福昌派
の寺となすへしと、よて八月十八日代賢當
山に登り開山となり、僧年室サシツをして一世の
住持とす、文禄三年三月卒京師に赴き給ふ、
路次薬師如来に詣て給ひて

旅たちし行衛をたのむ御仏堂なひく

るに身をやまかせん

ちらぬほと花に南の風もかな

野雀

鶯や雪の法華嶽垢離か谷

木も草も瑠璃の光や露の土
ミノクタケ 身投嶽 法華嶽寺八町坂をのほれハ左の方に

式部腰掛松 身投嶽にあり、和泉式部腰掛し
松ともいふ、年久しく経て枯たり、今の松

は廻り三尺余にして、いつの比にか好事の
者これを植て腰掛松の古跡を伝へしといふ

式部谷 一王門の右四町許り下る谷なり、垢
離谷ともいへり、式部薬師堂に參籠の時に
日々此溪水にて垢離をかかりし所といふ

庚午
鼠六

寿命を授るて児童に与へたるより伝へりて今に至るといふ

愛染川 法華嶽寺卯辰方凡九拾八町許りに流る瀬川なり、一之瀬ともいふ、渡りの上に愛染權現を安置す、伝教大師建立の社なり、和泉式部疾ひ半癒の後、此川に出て身そきのつみて側に社のありけるをいかなる神そと尋しに、卑人宿世結ひの權境といひければ、一首

日向なる愛染川の辺りにそ宿世結ふの神
はまします

此歌ハ有邦公の時、山沢禪枝法華嶽寺に参詣して、寺の旧記に見たりとたしかに語りしを數聞たり善するに傳承舊寺にゆきると、はまことに四十歳なりとるると、六年月わすれたり

車返 北俣村にあり、兜湯郡佐土原より法華嶽寺に通ふ坂路なり、和泉式部法華嶽參籠の時休息して車を返したる所と伝へたり、坂下に阿弥陀堂あり、いにしへより此坂にて落馬し、又歩行にて躓きけれハ、必らずおもき病をうくるといふ説あり、駒濯坂又小町坂ともいへり、西の方拾七八町許り、南俣村に杖取坂あり、式部に杖を備ひらせし所といへり、甲民是を牛之宮ともいふ、またすきし比、郡官曾木実好佐土原にゆきける時聞しハ、式部の塚佐上原鹿野田村氷室山の腰にあると、ひむろの里に潮妙見社あり、華表の前に湧出て満十する井あり、東の海辺式里余も距て西の山手なり、社の西南五町許りに日暮の城趾あり、野城にし

て島となる、水室山子方拾五町許り幸納の

島中に一字あり、地蔵を安して式部形式と

いふ、堂の丑方三町許りに森あり、式部茶

毘所といふと良好語りたり、今鹿野川村幸

納の原田勝右衛門篠城の式部由来記を閲に、

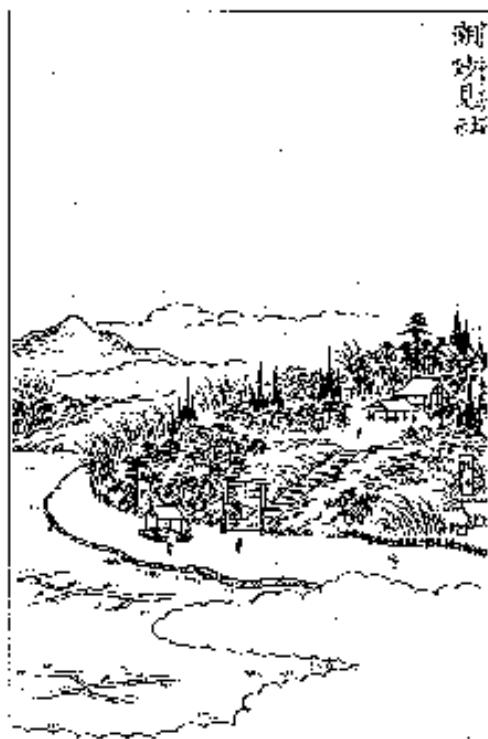
和泉式部ハ十月五日法華懺に参籠し、明年

正月十六日都にのほり、其後また日向に下



水室山

御
寺
跡





たり故に、或人に水室の里妙見社式部塚茶
毘の森などの圖を請ひ得てこゝに附し、式
部の事蹟を伝ふ

和泉式部

日か暮やひむろの里を詠れハうしほの煙
うもたへせぬ

行臘山壽徳院大日寺

内山村にあり、地頭仮
屋の寅卯方四町許り、真言宗高福寺の木に

りし時、鹿野田村にて俄に病ひに臥し、三
月三日四十三歳にて身まかりしを幸納と云
所にて荼毘し、桜樹を植てしるしとし、一
宇を建、地蔵を安置して式部のかたしろと
す、遺骨ハひむろのさとに葬ると云々^{以上其事を記す}ささに実好の聞しと符号す、是に拠
れハ式部ハ口向に下りて死したりしと見へ

行臘山壽徳院大日寺 内山村にあり、地頭仮
屋の寅卯方四町許り、真言宗高福寺の木に
して開基年月詳かならず、中興開山賴慶法
印、本尊大日如來^{坐像}當寺ハ二國一寺の大
日寺にて、延宝四年丙辰十月勢州松平和泉
寺奉納の法華一部あり、寺廢に及ひて今大
口堂のみ存す

穆佐

宇佐八幡宮

小山田村に鎮座、地頭仮屋

同上

をさること戊方拾壹町許り、祭神農前宇佐八幡に同し例祭十一月 初午日勅請來由詳かならず、本

邑の惣鎮守なり、社司を野田某といふ

穆佐城趾

小山田村にあり、地頭仮屋の後に

して高城カマツチと号す、日州の三高城の其一なり

新羅高城ニンノロコウジ、舊作高城、櫛作高城、或作高城、世主

同上

の二高城といふ

太平記にハシ等と記す

島山治部太輔の

居城にて菊池肥後守武光八千余騎を引率し

城を囲む、島山戦ひ利なくして退去す、又

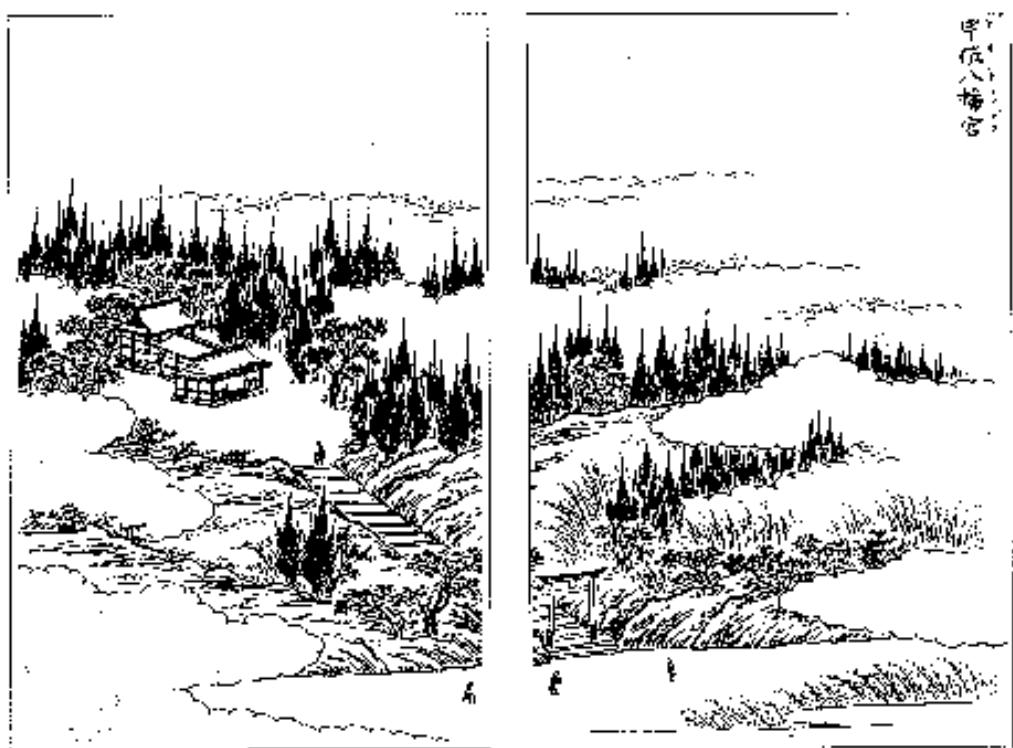
応永の初年義天公日州の宰となりて、爰に

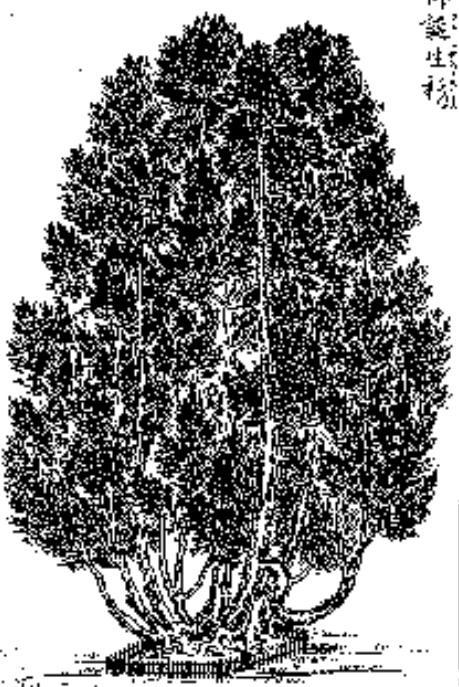
在城し給ひ、世子大岳公此城にをひて誕生

し給ふ、今其遺趾に大なる杉樹式株を植て

邑人御歳くらへの杉といふ、城中に稻荷社

あり、義天公勅請し給ふよしをいひ伝ふ





鳥若宮八幡祭九月九日
二月一日、應永中義天公勸請し
給ひて、大岳公生土神アフヌチへ神領三町を寄附
し給ふと旧記に見へたり、長祿四年庚辰九
月九日大岳公再興し給ひ、また慶長二年丁
酉十二月十五日松齡公再興し給ふといへり、

真言宗法泉坊カクセンボウこれをまもる

洗心山悟性寺

小山田村にあり、地頭仮屋の

亥方八町許り、曹洞宗福圓寺の末にして開

山喜冠龍慶和尚正昌寺
十八世本尊藥師如來坐像
高足

當寺往古天台宗の伽藍なりしに延慶に及び
しを、伊東氏穆佐を領知するの時、永徳中
竺嚴長僧和尚重興して臨濟宗となす、此時
樹る所の古鐘今に存す、天正初年伊東没落
して後、曹洞宗喜冠をもて勅請開山となし
福圓寺の末となる

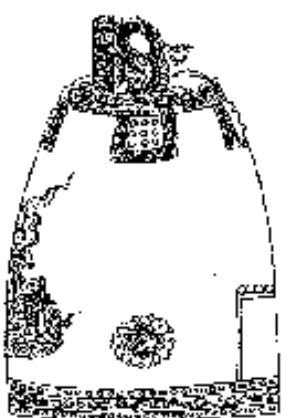
龍虎山弥勒院天正寺 小山田村にあり、地頭
仮屋の寅方六町許り、真言宗大乘院の末に
して開山快光法印延化年月不
らがならず本尊勝軍地藏坐像
高足

行善作惡永中義天公創建の寺なりといひ伝ふ、
火災兩度ありて今記録伝へらす

若富八幡宮 下倉水村葛水村を上に分て里番下
倉水村下倉水村と號す ト鎮座、
地頭仮屋より寅卯方拾五町許り、本社鹿児



悟社寺像



圖えます

倉岡

図師大明神

高岡花見村に鎮座花見村の金剛地ににて
高岡花見村に鎮座する

地頭坂原高岡花見村の坂原をさること

をさること」と木中方拾五町

許り、祭神一座木中坂原の祭神勧誦來山詳かなら

す

常樂山醫王院郡山寺

系原村にあり

地頭坂

屋の辰巳方武町許り、貞吉宗大乗院の末に

龍泉寺



川口
善勝院



して開山僧及び開基年月詳かならず、本尊

薬師如来

立像

池王山龍泉寺

チワシリンリウゼンジ

糸原村にあり、地頭仮屋の子

丑方拾町餘、曹洞宗高岡龍福寺の末にして

開山秀翁和尚

聖化元年正月上本尊馬頭観音

坐像

開基詳

かならず、初め天台宗の寺なり」といへり、

改宗の年紀是また詳かならず、今本邑の苦

提寺とす

川口番所

カハタガシヨコロ

倉岡の地にして去川の末流、綾川

の流合の所にあり、このところ船梓通融し

両流の分れ口なるによて番所を置、往来の

船を改め非常をいましむといふ

三宮神社

サンノミヤノヤシロ

南俣村ミナヒタマチ 西方村を里名にに鎮座、地頭仮屋

たすけにあり、今を距ること西方七町余、祭神三

峰北櫛木と呼ぶ

當社ハ社司宮水直記、十

座

足守郡大原、氣良社祭事

當社ハ社司宮水直記、十

一世の祖宮永神祇太夫実益なるもの勧請し

て二宮大明神と号す、年月伝ハらず

実益ハ寺跡

馬耳八幡宮の權現子駕なり、か、本邑をより後に廢りて後二祀を廢むとい

ふ、本社八幡宮八人母三十三瓦神社大主、天保八年正月吉日遷宮より上源に

此舉りて坐主といえ、本庄村の急務にして社司西永民

別當神寺キトイム

ふに安置せしを、天和元年辛酉の春改あり

て今の地に遷宮し、旧社地には小祠を安し

て旧宮といへり、綾郷の惣鎮守とす

龍智山無量壽院法音寺

リツチザンムジフウジョウイエンホウオンジ

南俣村にあり、地頭

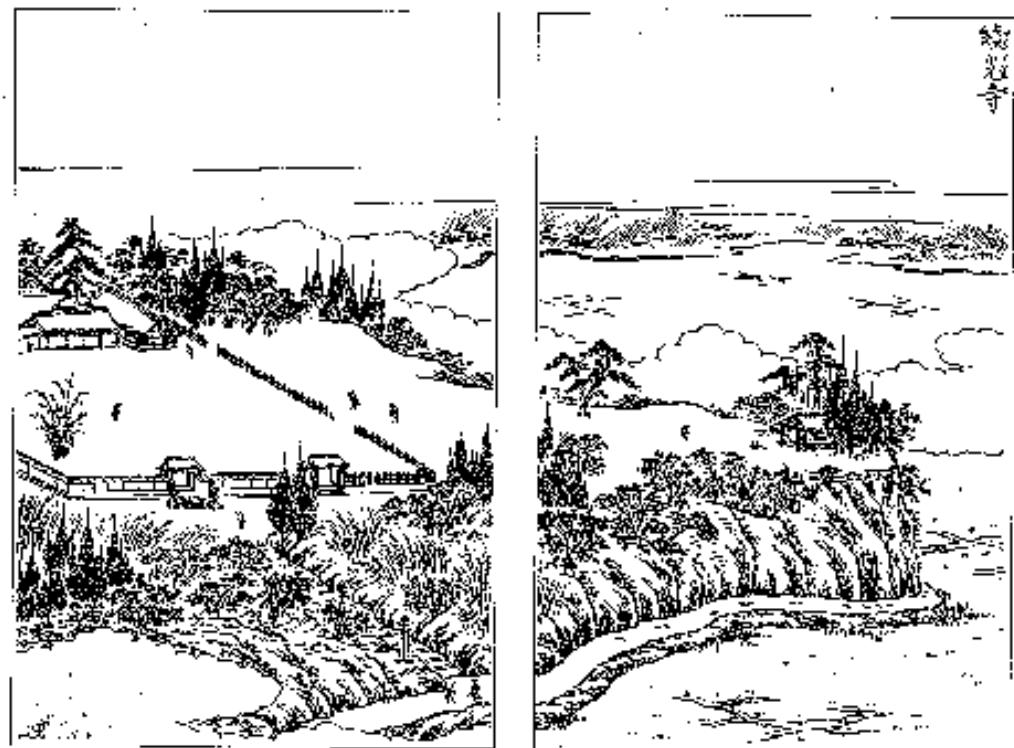
仮屋の牛方七町余、真言宗大乘院の末にして

開基の僧名伝ハらず、本尊阿弥陀如来

本邑の祈願寺とす

綾

綾光寺



巖王山綾光寺

傳徳寺



寺地に再建して曹洞宗の寺となす、本尊阿弥陀如来の像は法華巌の薬師の像と同しき椿樹にて、養老元年作る所といへり、里俗川中嶽寺とよへり

芝原山安養院伝徳寺

南俣村にあり、地頭坂
屋の牛方七町余、時衆宗藤沢山清淨光寺の末にして開山覺阿上人_{（延喜五年七月）}本尊阿弥陀如來_{（延喜五年七月）}開基年月詳かならず、初め同村芝原といふ所にありしといひ伝ふ

望南山竹林院仏像寺

南俣村にあり、地頭坂
屋の牛方拾八町余、時衆宗藤沢山清淨光寺の末にして開山覺阿上人_{（延喜五年七月）}本尊阿弥陀如來、開基年月詳かならず

既刊史料集一覧

集	史 料 名	執筆者
1	宣藩貢表錄	桃國忠真・五味克夫
2	丁子日誌(上)	村野守次
	・(下)	芳 邦正
3	薩摩國新田裡社文書	五味克夫
4	一向宗禁制關係史料	桃國忠真
5	薩摩國山田文書	五味克夫・郡山良光
6	諸家大帳・別本諸家大帳・職掌新稿・御家譜	桃國忠真
7	薩摩國阿多郡史料・庄原坐采白記	五味克夫・郡山良光
8	街巷御直中日帳劄下向・列朝制度	原口虎雄
9	明治元年支那戰役關係史料	村野守次
10	伊能忠義の鹿児島測量關係資料並江碑記	増村 宗
11	官寄圖考・毛利雜記錄	五味克夫
12	川上忠憲・流家譜	五味克夫・桑波山房
13	本藩人物誌	桃國忠真
14	紫陽道大帳	宮下清郎
15	備忘抄・家久公御妻子仰頬一件	五味克夫
16	鹿児島縣地誌(上)	桐野利彦
17	・(下)	桐野利彦
18	幕藩佐士文章	五味克夫・桑波山房
19	宣藩先公實錄(乾)	五味克夫・桑波山房
20	・(坤)	五味克夫・桑波山房
21	小松帶刀傳・瀬浦小松帶刀覆抄・小松公之記事	芳 邦正
22	小松帶刀日記	芳 邦正
23	新修舊鹿児島藩領圖・郡・郷・村・浦・町附(上)	原口虎雄
24	・(下)	原口虎雄
25	三州御手仕委覽	宮下清郎・桑波山房
26	達久武日記	村野守次
27	明藤記	宮下清郎
28	要用集(上)	芳 邦正
29	・(下)	芳 邦正
30	松久武日記	村野守次
31	本藩地租割造集上(佐摩國)	桐野利彦
32	・下(大隅國・詔縣國)	宮下清郎
33	江戸十郎關係文書(上・下)	山田尚二
34	示現流關係史料	宮下清郎
35	桜山玄佐白記並續丁未元年・桜山忠刻白記	吉 哲哉
36	島津世禄記	山田尚二
37	烏津世家	山田 尚二
38	薩司取引録・幕末又長保史料	宮下清郎
39	薩摩藩天保改革關係史料	尾口英男
40	薩摩學事・鹿兒島縣師範學校史料	宮下清郎
41	薩摩學事・薩摩學事三	畠中 伸
42	薩藩名勝志(その 1)	古元正泰
43	薩藩名勝志(その 2)	古元正泰

薩藩名勝志(その三)

(明治三十一年版 第四十四巻)

平成十七年一月

発行 應児郡原山料瓦行会

鹿児島市城山町七一

電話 〇九九一二二四四九五

FAX 〇九九一二二四一五八五四

印刷 かわち印刷有限会社

鹿児島市中央町一十七一十六

電話 〇九九一二五四一五〇五四